

# 持続的環境・建造物群継承地区＜千年村＞運動体

## 2014年度利根川流域疾走調査報告書

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース  
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

早稲田大学創造理工学部 社会環境工学科  
建設工学専攻 景観・デザイン研究 佐々木葉研究室

石川初

元永二郎

高橋大樹

2015年2月



## 目次

第一章 調査および報告書の目的	1
1-1. 調査の目的	
1-2. 本報告書の目的、概要	
第二章 千年村プロジェクトとは	3
2-1. 千年村プロジェクトとは	
2-2. 千年村プロジェクトの背景	
2-3. 千年村プロジェクトの目的	
2-4. 千年村プロジェクトの手法	
2-5. 千年村運動体メンバー	
第三章 基礎研究編	5
3-1. 和名類聚抄を用いた地名比定地の利用と、その限界と展望	
3-2. 千年村 Web サイトについて	
3-3. 水系とその流域を単位とした調査対象地の決定方法について	
第四章 疾走調査 各村の報告	11
第五章 考察	108
5-1. 千年村の理解に関する基礎的認識の整理	
5-2. 利根川流域における抄郷比定地、環境と生産からの考察	
5-3. <千年村>利根川流域疾走調査「集落構造」の考察	
5-4. 「農耕の解像度」―土地利用の多様性と集落の持続力に関する仮説	
5-5. 千年村評価方法について	
第六章 付記	131
6-1. 参加者	
6-2. 今後の予定	
6-3. 謝辞	
6-4. 巻末資料	



# 第1章 調査および報告書の目的

## 1-1. 調査および報告書の目的

千年村運動体は、2014年8月2日～6日にかけて本調査—利根川流域疾走調査—を行った。報告書はその結果をまとめたものである。本調査は、2014年度文部科学省科学研究費助成基盤研究(B)「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」(26289224)の研究活動のひとつとして行ったものである。

本研究は今後の集落地域の存続のための評価手法の開発を目的としている。そのために、研究対象を千年を超えて生産と生活が存続する地域〈千年村〉とし、その発見および存続要因に関する調査を行なう。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法の開発が必要であると考えられる。そのため、以下3つの段階を達成していく。

- (1) 平安期文献『和名類聚抄』に記載される「郷」の比定地をベースとした全国の〈千年村〉データベースの作成および公開
- (2) 〈千年村〉を「環境」「集落構造」「コミュニティ」の視点から捉え、それらの関係および存続要因を解明
- (3) 各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の評価基準と存続手法の開発

また本報告書では、流域単位で利根川沿いの千年村を調査報告した。これは水利や水運、治水をめぐる各地の関連性や文化圏としての同一性、帯域内の千年村の比較のしやすさ等の利点があるためである。以下その概要を述べる。

- (1) 利根川は山地・丘陵地・台地・低地にまたがって流れており、流域に位置す

る千年村に多様な地形立地が見られる。

- (2) 上流・中流・下流の各区域に分割することで千年村の特徴的な立地特性を読み取ることができる。

- (3) 流域面積が大きく、流域に位置する千年村の数が多い。

以上を仮説的前提として、利根川流域に位置する千年村を悉皆的に確認し

- (1) 関東地方の千年村の特徴を明らかにすること

- (2) そこで得た成果を整理し、さらなる詳細調査への展開に寄与すること

の以上2点を本調査の目的とした。詳しくは第3章にて述べた。

## 1-2. 本報告書の概要

本報告書の執筆担当は以下である。

第二章は、千年村プロジェクトの概要について、堀井隆秀（早稲田大学中谷研究室 大学院生）、小林千尋（早稲田大学中谷研究室 大学院生）がまとめ、報告した。

第三章は、今までの基礎研究として、「和名類聚抄を用いた地名比定地の利用と、その限界と展望」を堀井隆秀および小林千尋、「千年村 Web サイトについて」を元永二郎（ソフトウェア技術者）、「水系とその流域を単位とした調査対象地の決定方法について」を梶尾智美（千葉大学大学院木下研究室 大学院生）が報告した。

第四章は、調査実施者らによる利根川流域48村<sup>1</sup>についての調査成果を、調査実施者のうち、早稲田大学・千葉大学の学生た

(1) 千年村比定地は49村だが1村実見できていない

ちでまとめたものを報告した。

第五章は、「千年村の理解に関する基礎的認識の整理」を佐々木葉（早稲田大学教授）、「利根川流域における抄郷比定地、環境と生産からの考察」を木下剛（千葉大学大学院准教授）、「＜千年村＞利根川流域疾走調査「集落構造」の考察」を福島加津也（東京都市大学教授）、「「農耕の解像度」—土地利用の多様性と集落の持続力に関する仮説」を石川初（東京大学空間情報科学研究センター協力研究員）および高橋大樹（ランドスケープアーキテクト）、「千年村評価方法について」を中谷礼仁（早稲田大学教授）が報告した。

## 第2章 千年村プロジェクトとは

### 2-1. 千年村プロジェクトとは

〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。建築史学、建築デザイン、社会環境工学、造園学、景観デザイン、民俗学、歴史地理学、ウェブデザインに携わる研究者・実務者らの自発的意志によって結成された千年村運動体によって運営されている。

### 2-2. 千年村プロジェクトの背景

様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長い存続の歴史を持ちつづけてきた場所には、生産性や防災性や経済的交流の基盤などが考慮され、持続的な土地固有のシステムがすでに育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落をまもる鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くはそのような性格を具備してきた。しかし、そのような性格は突出した文化財的評価の対象としてではなく、むしろ健全な日常的国土をささえていた。このプロジェクトは、そのようなたくましく柔軟に生きてきた環境・集落構造・共同体の三位一体に対して、いくばくかの自信を持っていただくことと今後の千年をめざした地域づくりの一助になることを目標としている。

### 2-3. 千年村プロジェクトの目的

同プロジェクトの目的は以下4つ。

- ・ 〈千年村〉をみつける…全国の〈千年村〉の発見、認定、情報の収集と公開

- ・ 〈千年村〉からまなぶ…千年村から今後の集落・地域の存続のための手法や地域評価の方法をまなぶ
- ・ 〈千年村〉をつづける…各地域の〈千年村〉の連携や交流、〈千年村〉運動体による〈千年村〉持続のための地域づくりへの参画
- ・ 〈千年村〉をたたえる…地域の〈千年村〉としてのアイデンティティ付与、各〈千年村〉相互の交流

### 2-4. 千年村プロジェクトの手法

「みつける」は主にウェブサイトを通じておこなう。「まなぶ」、「つづける」、「たたえる」は各〈千年村〉との実地なかかわりによって構築される。これらの具体的な活動は以下の4段階を構想している。

- ・ (1) ウェブサイトにて平安期文献(『和名類聚抄』)に記載された郷名の現在地比定をベースとした全国の〈千年村〉データベースの作成と公開をおこなった(2014年4月2日)。このデータベース=〈千年村〉のすべてではない。このデータベースが呼び水となって、さらなる〈千年村〉の発見や報告がもたらされることを期待している。
- ・ (2) 上記データベースと新たにもたらされた知見をもとに〈千年村〉と同定されうる地域に赴く。「環境」「集落構造」「共同体」の観点から、その持続要因を分析する。
- ・ (3) さらに現状の課題点をみだし、それらについても客観的立場から提示、解決策を提案する。
- ・ (4) 全国の〈千年村〉が私たち運動体の活動を越え、相互に交流、知識の交換を行うためのプラットフォームを徐々に確立していく。

## 2-5. 千年村運動体メンバー

- 石川初 登録ランドスケープアーキテクト／東京大学空間情報科学研究センター協力研究員 景観並びに植生に関する特性分析／GIS技術提供
- 上杉和央 景観・歴史地理学／京都府立大学准教授 歴史地理学分野からの調査・分析／古地図等から地域環境の変容分析
- 菊地暁 民俗学／京都大学人文科学研究所助教 民俗学分野からの聞き取り／コミュニティ調査・分析
- 木下剛 造園・ランドスケープ／千葉大学大学院准教授 ランドスケープ分野からの調査・分析
- 佐々木葉 景観・土木史／早稲田大学教授 土木・景観デザイン分野からの環境分析／地域景観計画への専門的知識提供
- 清水重敦 建築・都市史／京都工芸繊維大学准教授 景観・文化財分野における専門的知識提供
- 中谷礼仁 建築史／早稲田大学教授 建築史分野からの実測調査・分析
- 林憲吾 建築・都市史／総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 建築・都市史分野からの地域環境調査／地域環境文化資源の専門的分析技術の提供
- 福島加津也 建築家／福島加津也＋富永祥子建築設計事務所 建築分野からの実測調査・分析／建築計画における専門的知識提供
- 御船達雄 民家史／和歌山県教育委員会 民家及び集落史分野からの実測調査・分析／地域文化財における専門的知識の提供
- 元永二郎 ソフトウェア技術者 データベースの設計と構築／デジタルマップのプログラミング・デザイン

## 第3章 基礎研究編

### 3-1. 和名類聚抄を用いた地名比定地の利用と、その限界と展望

〈千年村〉を全国からひろく収集するために、平安期文献『和名類聚抄』(註1)に記載される古代地名とそれら古代地名を現在地名へと比定した既往成果を用いている。その主参考資料が『角川日本地名大辞典』である。これら資料が平安期、すなわち今から千年前の地域名の状態を網羅的に知ることができる文献である。しかしながら『和名類聚抄』の郷名比定地=すべての〈千年村〉ではない。このデータベースが呼び水になって、新たな資料や情報が蓄積され、さらに精緻な千年村マップができあがることを期待している。

『角川日本地名大辞典』(註2)には、『和名類聚抄』記載の古代地名の現在比定地に関する先行研究がまとめられている。この記述を全国的に見てみると、古代地名に比定される現在地が、以下の7つに分類されることがわかる。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域など複数の市域にまたがる範囲に比定される
5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

千年村運動体が公開しているウェブサイト「千年村プロジェクト」(註3)では、上記の分類のうち、1と2、一現在の行政区画・大字に比定されるものをデータベースとして地図上に表示している。その数は『和名類聚抄』記載の郷名数3986中の1977件であり、約半数となっている(図3-1-1)。現在においても比定できていない地域も多くある。データベースのマップ表示に関しては、可視化を第一の目的としたもので、この表示が示す領域やその中心に大きな意味はなく、めやすと考えて頂ければ幸いである。

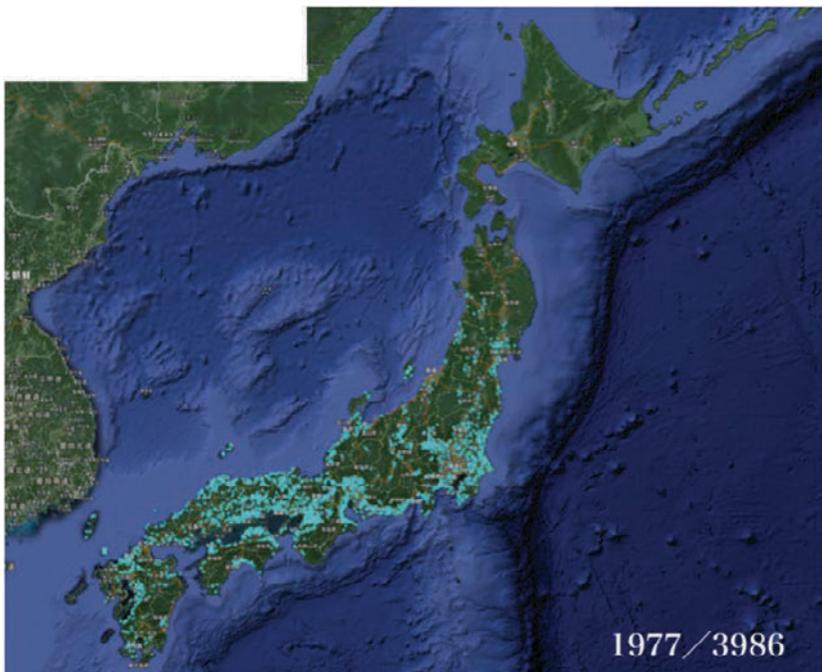


図3-1-1 千年村の分布図

(1) 平安期文献『和名類聚抄』、源順著、931-938成立か。『和名類聚抄』は、古代律令国家が各地を国・郡・郷で管理していた時代の地名を記載する。  
(2) 『角川日本地名大辞典』は、日本全国の地名、その由来・沿革とその地の歴史を、都道府県ごとにまとめた辞書。全49巻、別冊2巻で、1978-1990年にかけて出版された。  
(3) 千年村プロジェクト URL: [mille-vill.org](http://mille-vill.org)

### 3-2. 千年村 Web サイトについて

千年村プロジェクトでは、プロジェクトによる調査などの成果をいち早く社会に公開し、またその公開を呼び水として新たな情報を一般から寄せてもらうためのプラットフォームを目指してウェブサイトの構築を2013年より始め、2014年4月から一般公開している<sup>1</sup>。



図 3-2-1 千年村 Web サイト画像

#### <コンテンツ管理システム>

千年村ウェブサイト(以下千年村WEB)では、コンテンツの管理にWikiを採用している。ブログシステムをはじめ多くのコンテンツ管理システム(CMS)では、カテゴリーなどによる分類を主としてサイトの全体構造を決定し、その全体像に従って必要なコンテンツの投入をおこなう。しかし千年村プロジェクトにおいては、プロジェクトの

全体像自体が構築途上にあるため、コンテンツの分類がウェブサイトの全体構造を静的に拘束するような枠組みは、基盤として適していないと考えた。そこで千年村WEBでは、情報や資料をあるものからまずは投入でき、カテゴリーなどの分類がサイトの全体構造を規定しすぎず、見せ方の構造を臨機応変に組み替えることが容易なシステムとして、Wikiを採用した。

またWikiを用いることで、新たな情報の追加や既存の情報の編集、修正などを複数人の共同作業としておこないやすい環境を提供している。将来的には、千年村に関する情報提供を一般から募るプラットフォームとして運用することも想定している。

WikiエンジンにはMediaWiki<sup>2</sup>を利用している。MediaWikiはWikipediaのエンジンとして開発がスタートし、長年にわたって活発に開発が継続されているWikiエンジンである。このMediaWikiに拡張機能としてSemantic MediaWiki<sup>3</sup>をインストールしたものを核として、さらにいくつかの拡張機能を追加して使用している。Semantic MediaWikiはMediaWikiのページに様々な任意の属性を与えることができるが、千年村WEBでは主に集落の位置情報(緯度経度)を管理するために用いている。

#### <地図機能>

千年村WEBでは前記位置情報を使用して集落の地図上へのプロットを行っている<sup>4</sup>。背景となる地図は複数を切り替えての表示が可能である。各地図からはそれぞれ以

1 <http://mille-vill.org/>  
2 <http://www.mediawiki.org/wiki/MediaWiki>  
3 <http://www.semantic-mediawiki.org/>  
4 <http://mille-vill.org/>『和名類聚抄』の郷名からみつける

下のような情報を読み取る、または推測することができる。

- 地図：現在のおおまかな位置、状況
- 航空写真：現在の状況と環境
- 地質図：立地周辺の地質的特徴
- 迅速測図(関東の一部のみ)：明治初期における状況と環境 地理院地図：現在の地形的特徴 川だけ地図：集落の水利や水運のポテンシャル
- 植生図：現在の集落周辺の自然環境



図 3-2-2 現在の地図表現例

#### <集落の表示>

2014年10月現在、地図上に表示されている集落の位置は、千年村プロジェクト2013年の成果である「和名類聚抄に記載された郷名の現在地比定(論文参照?)」により求められた、千年村候補地の代表点の緯度経度をあらわしたものである。実際には面的な拡がりを持ち、かつその拡がりの範囲についてはいまだ不明な点も多いため、この集落の位置を地図上でどのようにあらわすか、プロジェクト内で試行錯誤と議論を重ねた結果、ピンポイントではなく大まかな位置を示す現在の表現となっている。

これら集落のプロットを前記の複数の背景地図に重ね合わせ、切り替えながら見ることで、千年村の立地の特徴をさぐることができる。

現地調査の前にこうした地図による分析

を行うことで、現地に赴いた際に確認すべきポイントや、特定された集落以外にも調査すべき地域が周辺にないか、事前にある程度洗い出しておくことが可能になる。

また、この地図には閲覧している端末の現在地を表示する機能を持たせ、現地調査の際にもスマートフォンやタブレット端末を用いて周辺環境などの確認が可能である。



図 3-2-3 地図上に現在地を表示

#### <今後の千年村 WEB >

研究成果の一般公開に加えて、前記のフィールドワークの道具としての使い勝手を高めることにより、千年村運動の一般への拡がり支援するプラットフォームとしてのウェブサイト構築してゆくことが今後の課題である。

### 3-3. 水系とその流域を単位とした調査対象地の決定方法について

#### <はじめに>

ここでは水系を用いて疾走調査の対象地を選定することの妥当性とその方法についてまとめる。

#### <関東地方の特徴を捉えた帯域としての水系とその流域>

2012年度に実施した千葉県内の千年村の疾走調査では、河川や湖沼に近接して千年村が立地する傾向が仮説された。そのため、水系とその流域を調査単位として設定し、その単位毎に調査を行った。その結果、千年村の立地には生産や生存の条件を満たす水系との関係性が認められた。<sup>(1)</sup>

集落地理学や歴史地理学では一般的に、「自然形式の集落は集落立地に際して自然条件に適した土地を選んでおり、そのような場所は居住の基本条件としての飲料水の採取に便利であり、日当たりがよく風邪を防いだり、洪水の難を避けたりするのに都合がよい場所」とされている。<sup>(2)</sup> 従って、千年村においても同様の傾向を推定することができる。

それに加え、河川流域は、山村、農村、漁村など様々な歴史的集落地域を含む環境単位であり、水利や水運、治水を巡る関連性や文化圏としての同一性も認めることができる。さらに、同流域範囲内の千年村を比較しやすいという利点もある。従って、疾走調査の設定範囲として客観的に設定可能かつ全体的な傾向把握という調査目的とも合致するため、今回の疾走調査にあっても水系とその流域を調査の単位として設定することとした。ただし、疾走調査とはいえ、関東地方の河川は数多く、すべての

流域を調査することは不可能と思われた。そこで、関東地方の典型的な地形立地を示す千年村が含まれる河川流域を調査対象として選ぶ必要があった。以下に、調査対象とした河川流域の選定方法について述べる。

#### <関東地方の特徴を捉えた水系としての利根川水系>

河川には一級河川と二級河川がある。河川法において「一級河川」とは、国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したものに係る河川（で国土交通大臣が指定したものをいう。また、同法において、「二級河川」とは、前条第一項の政令で指定された水系以外の水系で公共の利害に重要な関係があるものに係る河川で都道府県知事が指定したものをいう。疾走調査の目的の一つとして千年村の全体的な傾向把握があげられる。そのため、疾走調査の範囲として複数の千年村が含まれる帯域を参照する必要がある。また、千年村の立地において、災害と関係があることも示唆される。<sup>(1)</sup> 従って、客観的に設定可能で多くの千年村を確認することができ、国土保全と関係のある一級河川を対象とした。

関東地方の一級河川として久慈川、那珂川、利根川、荒川、多摩川、鶴見川、相模川、の7つが指定されている。

関東地方の特徴を捉えるにあたって、その自然基盤に着目した。関東地方の自然基盤は、その大半を占める関東平野とその周縁に位置する山地に大きく分けることができる。その2つを広範に渡って集水域としてもつ水系として利根川水系をあげることができる。

(1) 梶尾智美 (2012) 千葉県における千年村の地形立地と水系の関係  
平成 24 年度 千葉大学園芸学部卒業論文

(2) 矢嶋仁吉 (1956) 集落地理学 東京、古今書院

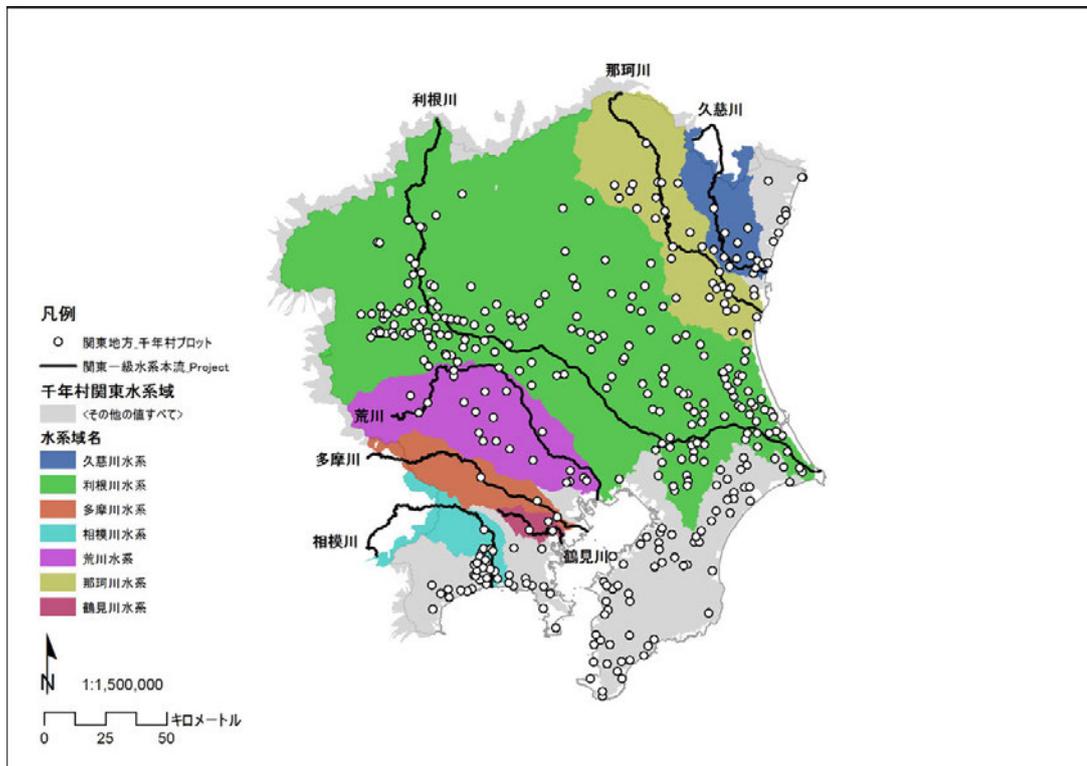


図 3-3-1 各一級河川の分布と関東地方

利根川は関東地方を横断するように流れているため、その流域を調査対象地に選定することにより、関東地方の自然基盤である関東平野と周縁に位置する山地を連続的に調査することが可能であるといえる。

関東地方には全部で366郷の千年村が存在するが、そのうち利根川流域に位置する千年村は180郷である。これは全体の半数を占める。

表 3-3-1 からわかるように、利根川流

域に属する千年村の数は他の水系と比べて多く存在していることがわかる。(図 3-3-2) 流域内の山地・丘陵地にも千年村が分布しているのは利根川、那珂川、荒川のみであり、他の4河川においては分布が見られなかった。また、境界域の立地に関しても利根川が17、那珂川が11の千年村の分布が見られるのに対し、他の河川ではほとんど分布していなかった。

更に詳細に見ていくと、(図 3-3-2) か

表 3-3-1 各一級水系の中地形における千年村分布数

河川名称	山地・丘陵地	台地	低地	境界域	合計
利根川	4	65	84	17	180
久慈川	0	6	3	1	10
那珂川	5	15	2	11	33
多摩川	0	5	3	0	8
荒川	2	12	1	1	16
相模川	0	7	3	1	11
鶴見川	0	2	0	1	3

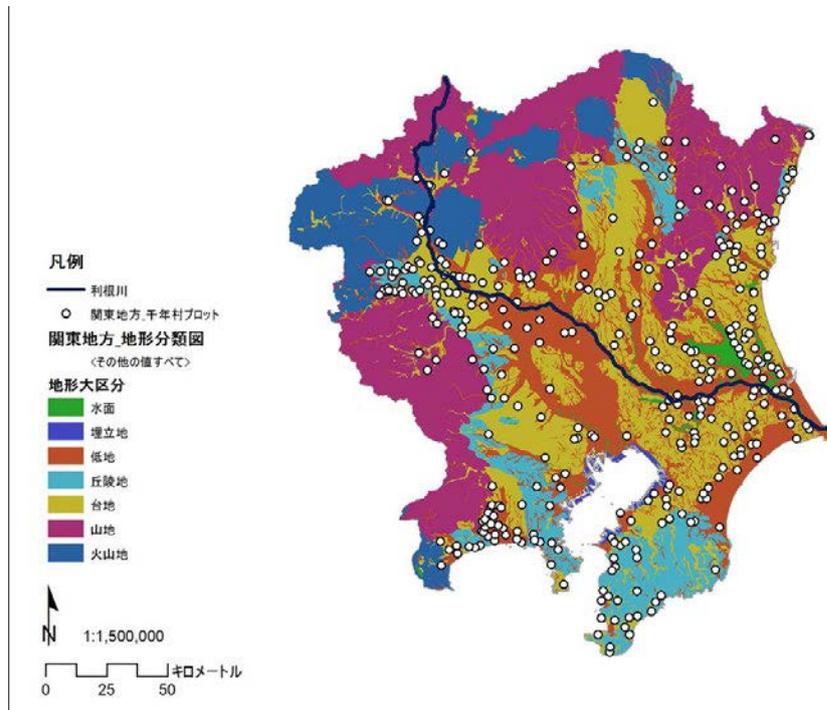


図 3-3-2 利根川と千年村の位置及び土地分類図

らも利根川は山地・丘陵地・台地・低地にまたがって流れており、多様な地形立地を確認することができ、水系に近接して千年村が立地していることを確認できる。

従って、

- ①流域面積が大きく、流域に位置する千年村の数が多い。
- ②山地・丘陵地・台地・低地にまたがって流れており、多様な地形立地を示す千年村を調査対象とすることができる。
- ③上流・中流・下流の区間によって異なる地形立地を示す千年村を調査対象とすることができる。

以上の理由により、利根川流域を調査を行う帯域として設定した。

ただし、利根川流域に存在する千年村は180と数多く、すべてを調査することは不可能と思われた。上述のように、千年村の立地は水系への近接性や生産や生存の条件

を満たす明らかな関係性が示唆できるため、利根川流域内の千年村からさらに水系に近接している49ヶ所の千年村を調査対象地として設定した。



# 1 利根郡呉桃郷／群馬県みなかみ町月夜野

担当：小林千尋



図 4-1-1 比定大字の領域 GoogleMap (航空写真)より

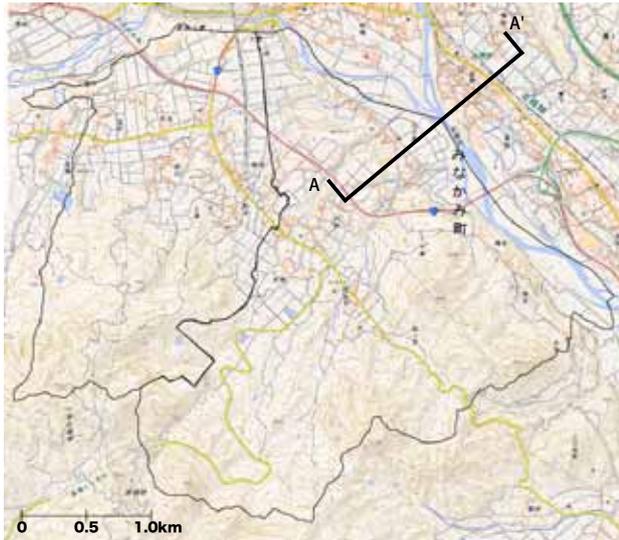


図 4-1-2 地形図 (筆者加筆) 国土地理院地図より



図 4-1-3 小川島東側写真。半鐘から撮影 撮影＝小林千尋



図 4-1-4 道路毎にレベル差が異なるだんだんの集落構造 撮影＝小林千尋

## 1) 歴史的物事の情報

利根郡呉桃郷は、新巻、羽場、上津、下津など複数の地名に比定されているが、谷川が利根川と合流する地点、月夜野町上津に名胡桃の名が残っており、この付近の平坦地を中心とする一帯と推定されている。そのため、比定地のなかからみなかみ郡上津、下津を調査地とした。

歴史的な事象としては鎌倉時代に村主八幡神社が存在し、創立年が不明なものとして月夜野神社（江戸時代に再建）、若宮八幡宮（明治2年再建）がある。また、赤谷川南部の名胡桃城は、沼田城の支城として室町時代に築かれたものである。

## 2) 実見した際の概要

上越線後閑駅の周辺の実見したのち、車で利根川・赤谷川をわたり、対岸に立地する小川島周辺の地域を実見した。小川島は北東に水田、南東に名胡桃城址をかまえ、河岸段丘上に家屋が立地している。家屋は大きく立派なものが多く、茅葺きにトタンを重ねたものが多かった。また、家屋が立地している範囲のなかでも段差が見られる。家屋、畑、水田すべてが石垣で高さを調整されていて、きめ細やかな造成がなされている様子が印象的であった。

小川島は歌舞伎舞台が有名であり、石碑にその状況が記されていた。歌舞伎舞台は図 4-1-1 中 A の付近にあり、集落の中心に立地している。歌舞伎舞台の手前は開けており、広場のような性質がみられることから、立地・機能ともに集落の中心的な場所であることが推測された。歌舞伎舞台から南東の湾曲した通り（集落の中心の通りに見られた）沿いには、3つの倉が連続して立地しており、通りに面していることから郷倉＝（集落共有の倉）である可能性が考えられた。この通りからは奥に戸神山が象徴的に見え、近景の舞台、倉、遠景の山々が集落の世界観を表しているように感じられた。

## 3) 比定大字領域内の分析

呉桃の字が残り比定地の中心とされる上津・下津を対象に大字領域内の土地利用をみていく。両者ともに南半分は山地であり、河岸段丘上または自然堤防上に居住部、

1 呉桃郷について（『角川日本地名大辞典』より）

「地名辞書」は「川田村、桃野村、湯之原村、久賀村等」に、「日本地理志料」は「塚原、呉桃、上津、下津、大平、河田、屋形原、若本、羽場、新巻、相俣」一帯に比定するとある。このなかで大字として地名が発見できる新巻、羽場、上津、下津を図 4-1-1 で表示している。

2 小川島内の石碑によると「舞台がみたけりや小川島へ行け」と云うことでこの舞台で踊りたさに婿にきた人もいたと云う。創立年は不明だが慶応元年に焼失し明治二年に再建された。廻り舞台の機構が逆独楽型式で床、屋根ともに高く、間口5間、奥行4間あり瓦葺き四注造りであり、建築史上も興味があり貴重なものである」とされている。



図 4-1-5 連続する倉と曲がりくねった道、遠景の戸神山 撮影=高橋大樹



図 4-1-6 航空写真（左が 1999 年、右が 1948 年のもの）



図 4-1-7 後閑ハザードマップ（みなかみ町 HP より）



図 4-1-8 A-A' 断面ダイアグラム

河川付近は水田として利用されている。とくに下津は谷戸に分け入るように家屋が立地しているが、本調査では実見していない。どちらも低地に生産地、微高地上に居住地、その背後に山地といった土地利用が見られ、地質・地形に適した土地利用を行っていることが伺えた。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年と1999年の航空写真を比較した。利根川左岸の後閑周辺の宅地化が著しい。この周辺は上越線後閑駅が中心にあり、他地域や都心圏との交通、流通が発展と関係があるものと考えられる。小川島も住宅数は増加しているものの、生産地が宅地化されることはなく、従来の土地利用を維持しているといえるだろう。また赤谷川沿いの低地の水田は圃場整備を行っている様子が伺える。河川の流路が微妙に変化しており、圃場整備の際に治水事業が行われた可能性があるか。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

赤谷川沿いの低地が開けた水田であるが、面積は決して多くはない。河岸段丘上の居住域の付近にも棚田のように小さな水田が数多く見られた。最上位の段丘面では畑や果樹園（りんご）もみられた。地形に応じた多様な生産の土地利用を行っており、現在もその姿を維持していることから、環境からの視点では今後も存続していく妥当性があるといえる。

##### ・集落構造

1948-1999年次に宅地化された後閑、利根川沿いの低地のエリア（図 4-1-6 中 B で示された箇所）は、土砂災害特別警戒区域に指定されており、0.5m～2.0mの浸水の可能性があるエリアでもある。

一方で 1948年次から居住域を拡大していない小川島は危険区域とは重なっておらず、地区の中心に立地している公民館は災害時の避難場所に指定されている。

居住域の災害危険性が利根川を挟んで対比的な結果となった。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていないが、小川島の3つの倉は郷倉として使用されていた（されている）可能性が考えられ、検討項目として挙げるべきだろう。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／「みなかみ町ハザードマップ」（小川島）（後閑）みなかみ町 web サイト (<http://www.town.minakami.gunma.jp/>) より。

## 2 利根郡渭田郷／群馬県沼田市街地

担当：岸本太幹

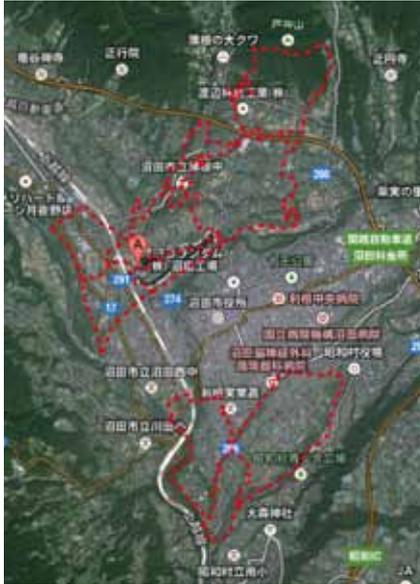


図 4-2-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-2-2 土地分類図（筆者加筆）5 万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-2-3 植生図（筆者加筆）自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

利根郡利根郡渭田郷は下沼田、白岩、恩田、硯田、沼須、戸鹿野、新町、久屋、善桂寺、町田、戸神に比定される。歴史的物事として比定領域から外れるが比定地域に挟まれる段丘上に中世・沼田城がある。

### 2) 実見した際の概要

渭田郷の比定領域は沼田城のある上位段丘を避けるように飛び地に広がっている。北部の比定領域は西部の利根川と東西に流れる薄根川に沿って北東の武尊山へ向かって広がっている。JR 上越線、国道 17 号は利根川に沿って下位段丘を通り、関越自動車道は平行に丘の上を通っている。南部の比定領域は利根川と片品川に沿って広がっている。本調査では中心街に近い北部地域の硯見、白岩、下沼田を集中して分析した。

比定領域外である市の中心街の広がる上位段丘から南へ下るように集落を実見した。上位段丘は市役所、学校、駅など公共施設・文化施設等が集中しており活気に満ちていた。

段丘を下り、薄根川を渡り比定地区に入ると水田が多く残されていた。住居は小さな段丘の際に立地しており、養蚕業特有の屋根形状の民家が点在していた。1948 年の航空写真において確認できる段丘の際に民家と同じ民家であると推察できる。

これら独特の形をした民家の間には新しい宅地が隙間を埋めるように建てられていた。水田の周辺にも宅地を数カ所見ることができた。上越線と国道 17 号線の間にも 1948 年にはみられなかった住宅や商店、材木屋が見受けられたが上位段丘ほどの活気はなかった。また、武尊神社の参道は上越線によって分断されていたが境内・社殿ともによく手入れされていた。

沼田城址のある下部段丘沿いは土砂崩れ危険指定地区であるため住宅は見受けられなかった。なお、ここに集落がなかったことは 1948 年の航空写真のときから確認することができる。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は水田、住宅地である。比定地域は二分されるが両地区とも生産地を含んでおり、比定地外である沼田城のある上位段丘は全て市街地化されている。

公共施設、駅などは主に上位段丘に集中している。このような使い分けは中世、沼田城ができたときからと同様ではないかと推察できる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較



図4-2-4 段丘の際に散らばって立地している住居 撮影＝梶尾智美



図4-2-5 武尊神社 撮影＝梶尾智美



図4-2-6 航空写真（1948年）



図4-2-7 航空写真（1999年）

1948年の航空写真では現在国道と上越線周辺にある住宅地はなく、ほとんどが生産地である。下沼田の小段丘沿いには住居が点在している様子がうかがえる。沼田城址の段丘上は全く開発されておらず生産地であることが確認できる。

1970年代になると段丘上の開発が顕著になり、段丘下もわずかではあるが国道・上越線沿いに住居が見受けられた。1999年から現在は段丘上、段丘下とも家々の間を埋めるように住居が増えていく様子が確認できる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

国道・線路沿いの宅地化などが見受けられるが段丘上を中心市街地にし、生産地を残している様子が伺えた。

#### ・集落構造

小段丘の際に点在する形態は古くからのものであると推察できる。また、土砂崩れの恐れがある場所に住居がない点、段丘上中心の宅地等も評価できるのではないだろうか。

#### ・共同体

本疾走調査では共同体についての検討までは至れていない。北部と南部の飛び地の地域にどのような関係があるかを検討したい。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年



図4-2-8  
A-A' 断面ダイアグラム

### 3 吾妻郡伊勢郷／群馬県中之条町伊勢町

担当：犬伏順一



図 4-3-1 比定大字の領域 GoogleMap より

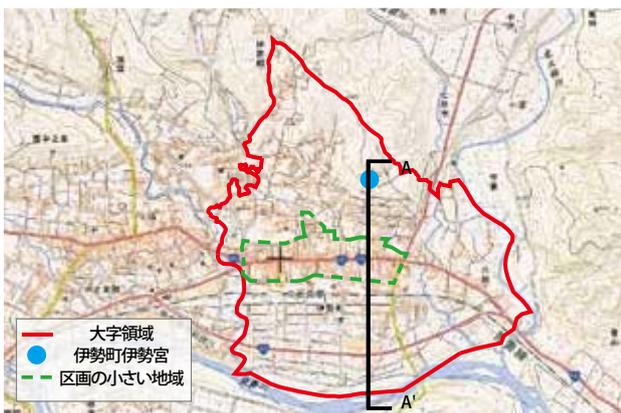


図 4-3-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

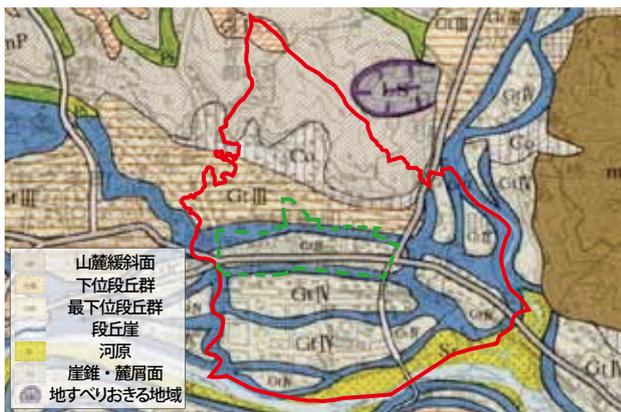


図 4-3-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-3-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

#### 1) 歴史的物事の情報

吾妻郡伊勢郷は中之条町伊勢町に比定されている。

伊勢町には、登り窯跡と推定される遺跡などがあり、古墳数基や須恵器等が出土している。中世の館跡、戦国期の和利宮城・小城の遺構も存在する。和利宮城跡地に現在の伊勢町伊勢宮（年代不明）が創建されている。

#### 2) 実見した際の概要

伊勢町は、南に利根川水系の吾妻川が流れており、その北岸の河岸段丘上に位置している。吾妻川へ合流する胡桃沢川・名久田川が、それぞれ大字領域の西・東の端を流れている。河岸段丘に加え、伊勢町の地形は北に山麓緩斜面、南に河原をもつ。集落中央を東西に長野街道が横断し、街道沿いは建物が密集している。集落内を走る吾妻線以南には多くの水田が広がり、大型店舗と新たな住居が少し建てられている。街道以北より山の際部にかけては水田・畑、住居らがまばらに配置している。

河岸段丘の南側から街道沿いを行き、伊勢町伊勢宮に向って山麓へ北上するように集落を実見した。吾妻川付近から吾妻線までは水田が多く見られた。所々いびつな形の水田があり、きれいなグリッド状の圃場整備とは少し違った印象であった。生産地ばかりの南側だが、国道 353 号線が 1975 年に開通した影響で、大型店舗や住居が少し散らばっていた。段丘崖があるため、河原に向って水田は段々に下がっていくようであった。

線路から街道沿いへ行くにつれ、高低差が一段と増していた。街道沿いは店舗が多く並ぶが、シャッターの閉じた店舗がだいぶあり、街の中心地として機能していないように見られた。ただ、その周囲には税務署や教育機関等の公共機関が集まり、それに伴って住居も多かった。街道沿い一帯は大変密集し、集落内の他と比較すると、区画が小さいようであった。

街道部分を過ぎて山麓へ向うと、再び段々と高低差が増していた。家、水田、畑が散らばった配置であり、山に沿って湾曲した細い道々で繋がっていた。流量のある水路が多く見られ、水田や畑は手入れが行き届いていた。また段々状の土地利用から、かつては街道の人々が山麓に棚田を所有し、その一部を売り払った結果、今の景観になったのではないかとと思われる。

#### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は水田、住宅地、街道である。住宅地は最下位・下位段丘および崖面上に、水田(南部)は最下位段丘上に、街道や道路は段丘崖を避けて位置し

1 web サイト「和利宮城」 [http://www.geocities.jp/y\\_ujoh/kojousi.warinomiya.htm](http://www.geocities.jp/y_ujoh/kojousi.warinomiya.htm) 2014.10.8 時点



図 4-3-5 伊勢町伊勢宮入口から集落を一望 撮影=犬伏順一



図 4-3-6 街道沿いの様子 撮影=高橋大樹



図 4-3-7 航空写真 (1947 年)



図 4-3-8 航空写真 (1975 年)

ている事が、土地分類図と植生図の比較よりうかがえる。

また、集落の中心施設は街道のある市街地の周りに位置している。植生図から、近辺に緑の多い住宅地を伴っていることが分かる。これら一帯は最下位段丘よりは微高地の下位段丘上にあるため、集落にとっては水害等の脅威を避け、持続していくための一要素ではないかと考えられる。

地すべりのおきる地域が北東にあるが、比定大字領域内には及んでいない。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

国道 353 号線が 1975 年に開通したことで、南側の生産地には大型店舗や新しい住居の進出が促されたと考えられる。

街道沿い建物の密集具合を編年的に見ると、規模は拡大しているように思われる。さらに、集落北側の空地もしくは生産地等であったはずの場所が、1947 年から 1975 年にかけて、新しく住居群を形成している。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産について、集落南部に関して言えば、地形を読み込んだ明快な土地利用が見られた。また、全体としては耕作放棄地等あまり見られず、現在も継続的に手が加えられている様子が見られた。

##### ・集落構造

恐らく街道によって栄え、維持して来た集落構造であると思うが、その後の変容の仕方についての検討までは、本疾走調査においてはいたれなかった。

少し高い段丘上に、段々状で集落構造を持つ事は妥当であると思われる。しかし現在、街道沿いは機能していない部分が多い。街道の他に、集落の核となりうる部分について、今後検討を要する。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後検討を要する。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年

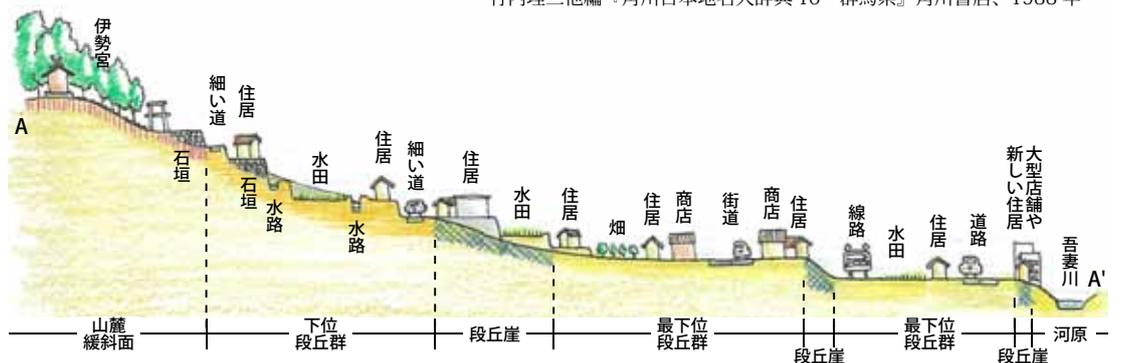


図 4-3-9 A-A' 断面ダイアグラム

## 4 群馬郡利苧郷／群馬県渋川市北牧・金井付近

担当：佐藤勝



図4-4-1 比定大字の領域 GoogleMapより

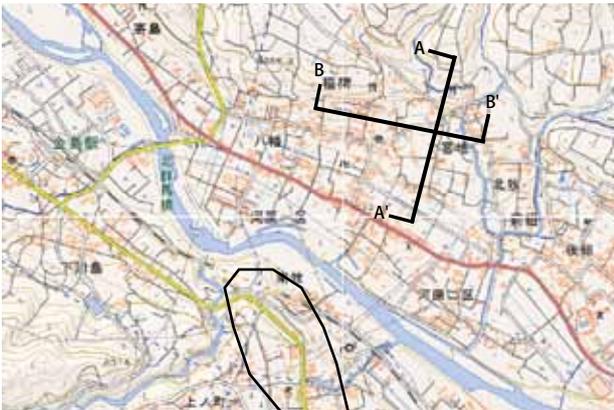


図4-4-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図4-4-3 土地分類図 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より

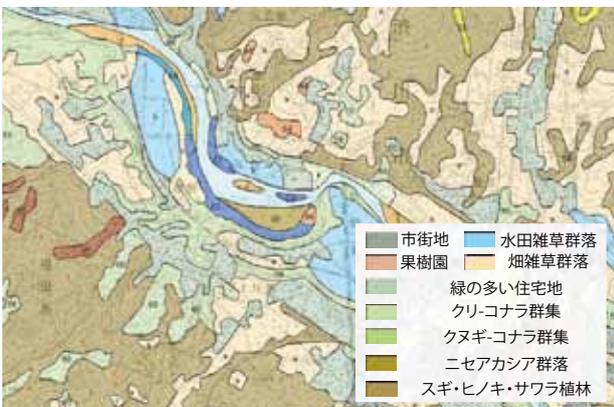


図4-4-4 植生図 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

群馬郡利苧郷は北牧、金井付近とされているが、吾妻川の北岸、南岸に南牧があり、この辺りを利苧牧とすれば、当郷もこれを含む一体と考えられる。現在の県道35号を基準としてその周辺に家々が並ぶ。そこが通称「日陰道」であり、かつての三国街道の宿場通りであったとされている。川は氾濫し、移動した経緯があることから川周辺の住宅は比較的新しいものだと考えられる。

### 2) 実見した際の概要

利苧郷は南北に位置する二つの台地に挟まれた平野部に位置しており、平野部に鉄道や車道が集積した地域となっている。郷の中心には吾妻川が流れており、それに沿う様に日向道、県道35号、JR吾妻線があり、川付近には水田が広がり、台地へ行くにつれて住宅が配置されている。

北部に位置する台地と平野の際部を中心に吾妻川の上流から下流の方向へと実見した。図4-4-2に加筆した部分は住宅が短冊状に配置しており、集落構造を伺うことができた。子持ち神社が台地上にあり、登ると集落と水田、川の配置の様子が伺うことができた。（図4-4-5参照）子持ち神社の南東には台地への抜け道があり、抜け道沿いには土壁の住宅があり、他の住宅と比べやや敷地が広い様に思えた。また、屋敷林が多く確認することができた。

南部では用水路が張り巡らされており、図4-4-2に加筆した部分はフィッシュボーンの様子に住宅が配置されており、集落構造を伺うことができた。また、一般斜面と最下位断面丘群の境界には境界線を沿うようにグリーンベルトが存在している。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。北部は川を中心に住宅、水田、住宅というような層をなして配置されているのに対し、南部は川を中心に水田、住宅という層になっており、北部と南部では集落の配置の仕方が異なるという特徴が見られる。しかしながら、それらの特徴が土地条件との強い関係性を見つけることはできなかった。



図 4-4-5 子持神社からの景観 撮影=梶尾智美

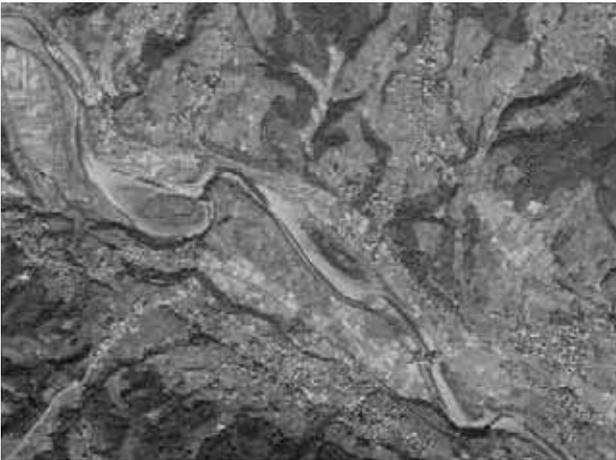


図 4-4-6 航空写真 (1964 年)



図 4-4-7 航空写真 (1974~1978 年)

過去の記録から吾妻川が氾濫したことがわかっているの  
で川の氾濫に対応できるような土地条件にあった住宅の  
配置を考える必要性を感じた。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1967年の航空写真を見たときに、ある程度の緑地が  
一般斜面に残っているようにうかがえるが、1974年～  
1978年の写真を見てみると図4-4-2に加筆した箇所が新し  
く住宅地として開発されているのがわかる。また、川を  
中心として、北部の住宅地がより川に接近して配置され  
るようになっていたことがうかがえる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については時間の経過と共に縮退しているよう  
にうかがえる。また、緑地に関しても生産と同じような事  
が言える。

##### ・集落構造

三国街道の宿場通りに位置する集落は昔からのものであ  
ると考えられる。しかしながら、図4-4-2に加筆したのフィッ  
シュボーンの方に配置された住宅地は新しいものである。  
また、川の近くに建てられた住宅は川の氾濫に巻き込まれ  
る危険性が十分に考えられるので、不適切であると考えられ  
る。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討までは  
いたれていない。今後要検討。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／

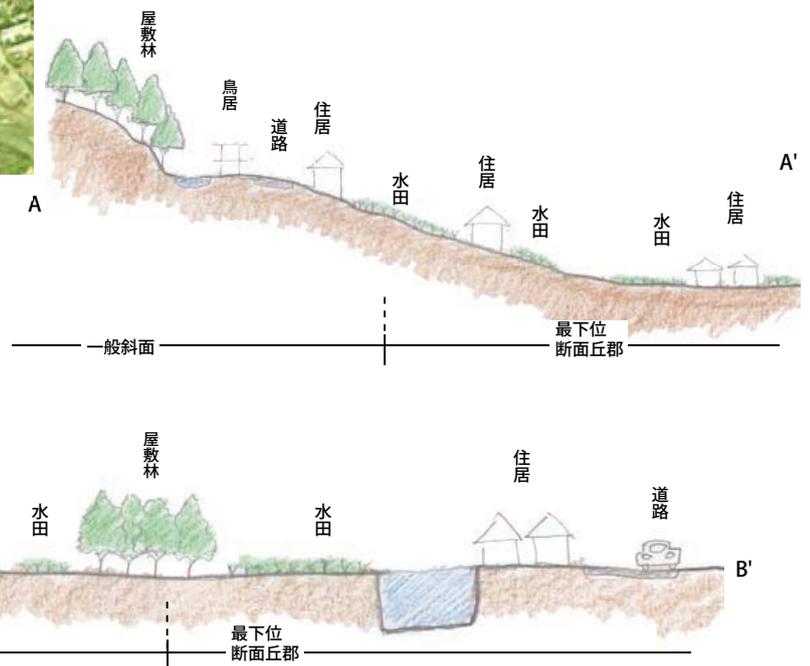


図 4-4-8 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム

図 4-4-9 (下)  
B-B' 断面ダイアグラム

## 5 群馬郡白衣郷／群馬県渋川市白井・吹屋・中郷・赤木町付近

担当：梶尾智美



図 4-5-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-5-2 比定大字の領域 GoogleMap より

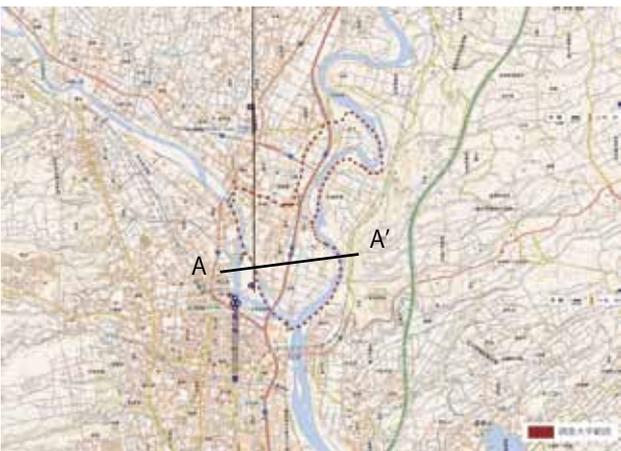


図 4-5-3 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

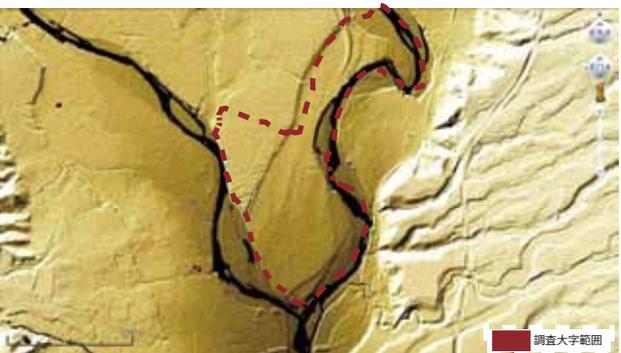


図 4-5-4 地形段彩図（筆者加筆） GoogleEarth より

### 1) 歴史的物事の情報

群馬郡白衣郷は渋川市白井に比定されている。白井についての歴史的物事については室町時代から江戸時代初期に栄えた白井城趾があり、土蔵造りの町並みや町割りが残されている。また、町の中心井は悪水処理の排水路があり、この水路にそって古くから利用されてきた井戸の跡が残されている。

### 2) 実見した際の概要

白井は、利根川と吾妻川の合流点にある河岸段丘上に発達した集落である。集落の南北にバイパスが通っており、その東側に城趾があり集落の中心となっている。

吹屋のあたりから城趾を通り、そこから低地へ抜けるようにして集落を実見した。

地形を見ると、河岸段丘が数段あり、各段ごとに土地利用が異なっている。高い部分には集落があり、その下の河川に近い部分は生産地となっている。更に細かく見て行くと、一番高い部分には城趾がありその横に寺や神社があった。中段には町人町と思われる土蔵造りの町並みがあり、バイパスを挟んだ低地部分には生産地を見ることができた。それぞれの段は各5~10メートルほどの高さがあり、実見の際にも急峻な坂が多く見られた。

吹屋の集落の真ん中には寺の参道と思われる道路がまっすぐに伸びており、その道路に面するように家が建ち並んでいた。家と家の間の道は細く入り組んでいるように見えた。また、道の途中にはいくつかの道標や庚申塔があった。家はブロック塀で仕切られていた。

中宿のあたりは、土蔵造りの町並みが残っており、町の中心を水路が走っていた。また、その周りには井戸のあとのようなものが点在していた。

さらにそこから東に向かって進んで行くと大きなバイパスが通っており、更にその先には数メートル低いところに生産地が広がっていた。

### 3) 比定大字領域内の分析

当千年村に比定されている大字範囲は広範囲にわたっている。今回の調査では、史跡が多く見られた白衣郷を中心として調査を行った。しかし、他の大字に関しては未確認であり、今後は比定される大字が複数あり、広範囲に広がる千年村について調査方法、評価方法を検討する必要があると思われる。

集落を構成する要素は水田、と住宅地となっている。当千年村は発達した河岸段丘上に位置してお



図4-5-5 段丘上の町並みと道標 撮影=梶尾智美

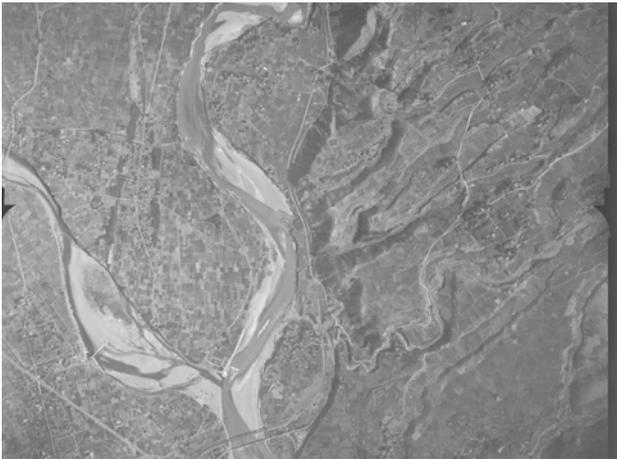


図4-5-6 航空写真 (1948年)



図4-5-7 航空写真 (1975年)

り、河岸段丘が3段になっている。一番上段と中段に集落があり、一番下の部分に水田が広がっている。

4) 空撮写真を主体とした編年比較

過去の航空写真を確認すると、集落のある場所と生産地の場所に大きな変化はなく、以前から同じ場所に立地していることがわかる。1975年になると生産地と集落の段丘の間にバイパスが通っているのがわかるが、そのような変化にあっても、変動していないと思われる。

集落内の水路は整備されているが、昔からのものがそのまま残っている訳ではなく、近代に入って整備されたものだと考えられる。そのため、変遷の過程について検討する必要があるだろう。

5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

・環境

生産については地形を読み込んだ明快な土地利用が見られた。河岸段丘を利用して土地利用をしており、合理的だと思われる。

・集落構造

段丘上に密に立ち並ぶ集落構造であり、特に中宿の辺りは土蔵造りの町並みが残されていた。集落の立地している場所は段丘上の高い位置にあり、合理的だと思われる。

・共同体参考文献

本疾走調査においては共同体についての検討までは至っていない。今後検討する必要がある。

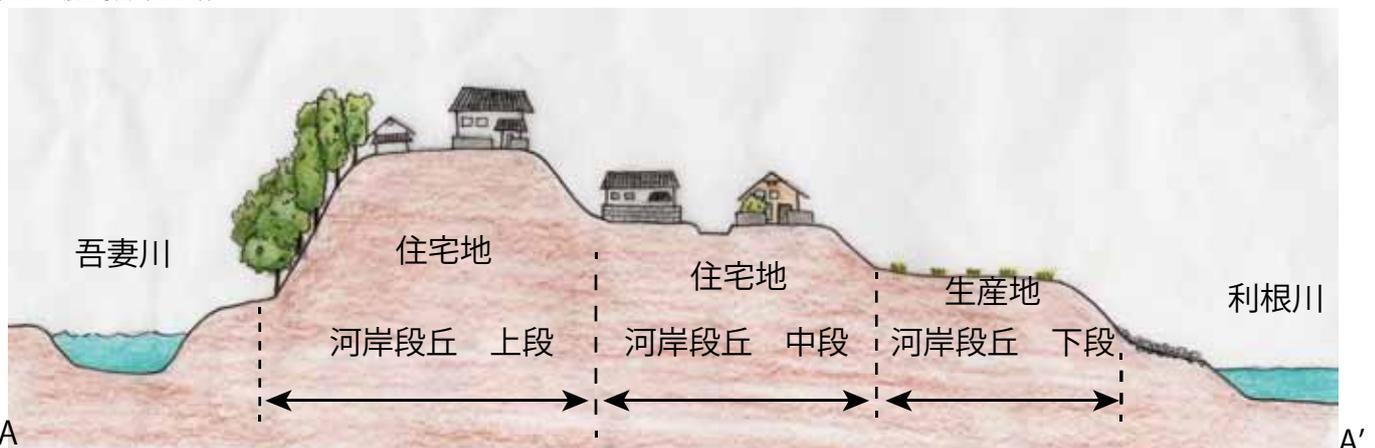


図4-5-8 A-A' 断面ダイアグラム

## 6 群馬郡有馬郷／群馬県渋川市有馬・八木原・行幸田・中村付近

担当：小林千尋



図 4-6-1 比定大字の領域。表示可能なものを示した。GoogleMap より



図 4-6-2 地形図（筆者加筆） シームレス地質図より  
 約 700 万年前～現在に形成された岩屑なだれの堆積物  
 約 15 万年前～現在に爆発的噴火により高速で流れ下った軽石や火山灰（火砕流）  
 約 1 万 8000 年前～現在までに形成された最も新しい時代の地層



図 4-6-3 鳥瞰写真（A 方向）。神宮寺から西を臨む。撮影＝小林千尋



図 4-6-4 鳥瞰写真（B 方向）。神宮寺から北を臨む。撮影＝小林千尋



図 4-6-5 鳥瞰写真（C 方向）。神宮寺から南を臨む。撮影＝小林千尋

### 1) 歴史的物事の情報

群馬郡有馬郷は上野田、八木原、湯上、中村、石原、渋川、阿久津など複数の大字に比定され範囲が広域であるため、本稿では遺称地である渋川市有馬を調査対象地とする（図 4-6-1 中、赤で囲った範囲が有馬）。

古代条里制（有馬条里遺跡）の残る地域であり、榛名山山麓に形成された小規模な扇状地の扇端部付近に位置する。

八木原字堰上・堰下の遺跡のある地点を含め、扇状地上では条里制による地割が広範囲に認められ、地元では有馬田圃と呼ばれていた<sup>1</sup>。

### 2) 実見した際の概要

有馬は西に榛名山、東に利根川があり、両者の間に位置する。地質は町字の西半分が岩屑なだれの堆積物、東半分が火砕流によって形成された地質と最も新しい時代の堆積層から構成されている。町字内に関越自動車道、上越新幹線が走っており、北部には水田が多く残るが、宅地化やショッピングセンターなどにも変化している。

神宮寺（図 4-6-2 中ピンの位置）に車を止め、ドローンを飛行させ鳥瞰写真を撮影した（図

4-6-3,4-6-4,4-6-5）。西（A 方向）の町字域にかかる部分は近景に宅地と水田、遠景に榛名山を臨む。北（B 方向）には水田が多くみられるが、南（C 方向）は宅地化が進行し、まとまった生産地はみられない。撮影ののち、神宮寺から南に向けて歩き、地区内を通る小川までのエリアを実見した。屋根が大きく立派な家が多い。宅地化されていない部分は小規模の畑として利用されていた。地区の方の話によると、有馬の人は古くから水田を生業としており、北部のまとまった水田もこの地区の人の所有のものという。ただし現在は水田をやっている人は少ないとのことであった。最終的に今回の調査において条里の痕跡を確認することができなかった。鳥瞰写真のグリッドは昭和 30 年代に行われた圃場整備によるものであり、調査中に尋ねた地区の方も条里の位置などは知っていなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

町字領域内は、扇状地、低地（水田、宅地）から構成されている。扇状地から山地にかけての谷地も水田となっており、宅地に比べ生産地の割合は多い。

町字東側は北部と南部のコントラストが印象的である。北部は水田面積が多いが圃場整備が行われており計画的なグリッド形状の敷地割となっている。また、ホー

1 竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年



図 4-6-6 地域内を東西に走る小川 撮影=小林千尋



図 4-6-7 工事中の家屋。有馬小川近辺は古く大きな家が多い 撮影=小林千尋



図 4-6-8 集落内に点在する畑 撮影=小林千尋

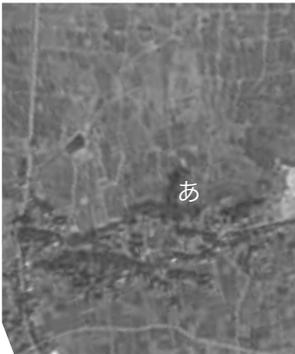


図 4-6-9 航空写真 (1948年)



図 4-6-10 航空写真 (1975年)



図 4-6-11 現在の航空写真

ムセンターや大型衣類店などが立地している。いっぽうで南部は道が不整形であるが、宅地が多く、生産地は小規模な畑を残のみとなっている。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年の航空写真では有馬内の小川を中心に集落が形成されている様子が分かる(図 4-6-9 中、あ)。いっぽうで 1975年の航空写真(図 4-6-10)では住居が集落の中心以外にも建てられ、水田から宅地への土地利用の変化が始まっているようすが伺える。現在の航空写真(図 4-6-11)では水田の宅地化がさらに顕著となり、同図「い」のエリアはホームセンターや店舗、野球場など中・大規模の建築物が立ち並ぶ開発がなされている。

#### 5) 断面ダイアグラム

神宮寺が微高地の際部に位置していることが判明した。また、低地と備高地では地質が異なっており、低地は水田だが 1948年以降の宅地化がさかんになされている。微高地は畑地と住居が中心だが、こちらは大きく変化していない(図版参照)。

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

前述した図 4-6-11「い」を中心とした低地の水田が、聞き取りの通り有馬地区の居住者の所有のものであるとするならば、現在は生産活動のための水田が大幅に減少しているとみることができる。土地を売った(貸した)ことにより得られる資本と、水田による資本。今後、環境・社会が変化することを考慮すると、多様な資本源がある方がより持続的と考えられる。つまり、「生産地をどこまで残していれば持続的なのか」が主要なテーマになるのではないかと。

##### ・集落構造

今回の調査においては家屋の配置など詳細な調査には至っていないため不明な点も多い。しかしながら微高地の際部に寺が立地し、小川を囲むように形成されている集落の構造は現在もそのまま残っているため、集落構造の持続としては妥当といえよう。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／

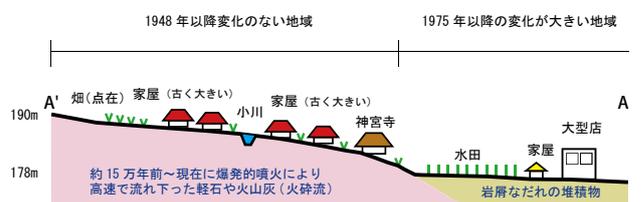


図 4-6-12 断面ダイアグラム (筆者撮影)

## 7 勢多郡真壁郷／群馬県渋川市北橋町真壁

担当：堀井隆秀



図 4-7-1 比定大字の領域 GoogleMap より

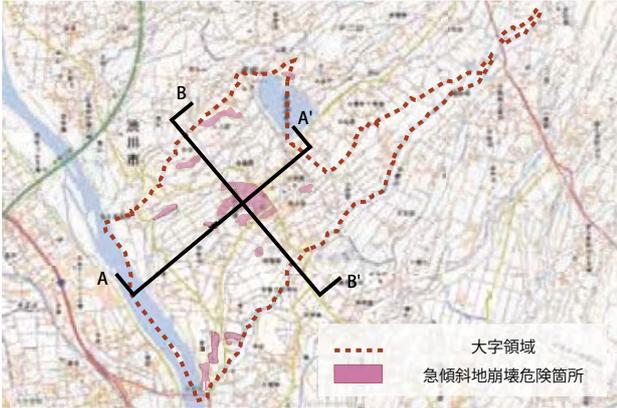


図 4-7-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-7-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より

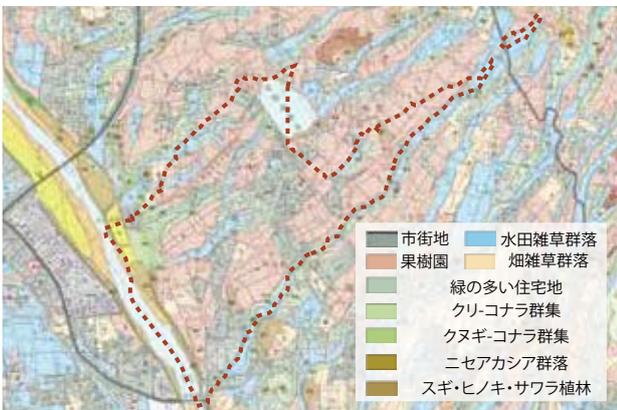


図 4-7-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

勢多郡真壁郷は北橋町真壁に比定されている。

真壁についての歴史的物事については、縄文時代の遺跡が7ヶ所、古墳時代の遺跡が1ヶ所、また古墳が44ヶ所確認されている。また中世・真壁城の存在も確認されている。

### 2) 実見した際の概要

真壁は西に利根川、東に赤城山があり、両者の間に位置する。赤城山の火砕流による地質上に立地しており、大部分がゆるやかな斜面状の地形である。利根川を挟んだ対岸には JR 上越線や関越自動車道が走っている。大字領域内は大部分を畑が占め、わずかな平野に水田がみられる。

利根川を渡って赤城山をのぼっていくように集落を実見した。利根川付近から集落の中央部分までは段丘が続き、住居や桑畑などがみられた。住居は、散居村のように、各段丘上にちりぢりになって立地していた。これは1948年の時点でも確認でき、昔からの住まい方だと推察できる。段丘が形成されていたのは傾斜部分であった。ゆるやかな傾斜が、幾筋か、利根川にむかって下り、その傾斜と傾斜の間にできた、せまい平野で水田が営まれていた。

中央部分に近づくとつれ、段丘はみられなくなり、斜面がならされた町並みとなった。中央部分は小学校や市役所などの公共施設が多く見られた。また、周囲と比べ、新しいであろう建物が多く、少し違った雰囲気をもっていた。

中央部分を過ぎると、再び段丘が続いていた。そのまま集落の際部までのぼると、お墓があった。一直線に並び、集落を見守るかのように集落の方向をむいていた。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。畑地・宅地は火山性の斜面部分に、水田は谷底平野に位置していることが土地分類図と植生図との比較よりわかる（図 4-7-3,4-7-4）。明快な土地利用の様子がうかがえる。

また土砂災害警戒区域である、急傾斜地崩壊危険箇所が真壁内にはある（図 4-7-2）。植生図と照合すると "

1 北橋村誌編集委員会編『北橋村誌』（北橋村役場、1975）参照。今回の調査では住所までは特定出来ず、地図上にマッピングし空間把握を行なうまでは至っていない。

2 後期更新世の火山岩類で、約15万年前～約1万8000年前に爆発的噴火により高速で流れ下った軽石や火山灰。

3 web サイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域指定箇所」参照 URL: pref.gunma.jp 2014.09.17 時点。



図4-7-5 段丘上に散らばって立地している住居 撮影=梶尾智美

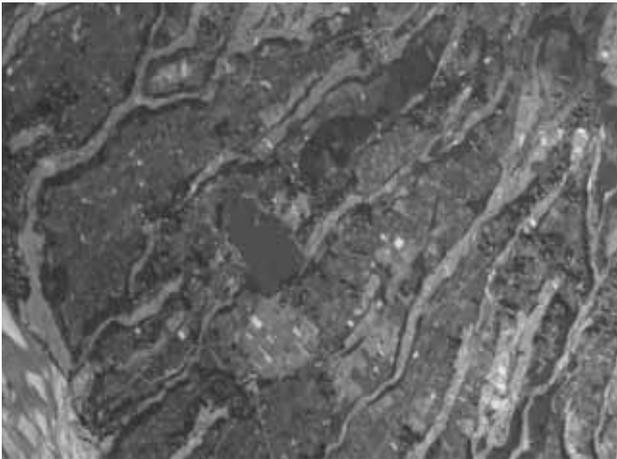


図4-7-6 航空写真(1948年)



図4-7-7 航空写真(1999年)

緑の多い住宅地"部分と合致することがわかる。町の中心施設の多い場所でもあることから、今後の土地利用のあり方を検討する必要があるのではないかと。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年の航空写真では生産地が多く、住居がちりぢりに立地している様子がうかがえる。1999年の航空写真では調整池南方に密に建物が建ちならぶようになっている。ここは現在学校や市役所、住宅などが密に立地し中心的な機能を担っていると思われる場所である。急傾斜地崩壊危険箇所への開発は1948年から1999年の間に進められたと思われる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

##### ・集落構造

段丘上にちりぢりに住居を構える集落構造は、真壁において古くからのものである。

それに対して中央部分の建物が密に建ち並ぶ集落構造は、1900年代後半に近代的技術によって成立したものである。この集落構造の立地は土砂災害警戒区域にあたるものであり、適用としては不適切だと考えられる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典10 群馬県』角川書店、1988年／北橋村誌編集委員会編『北橋村誌』北橋村役場、1975年／webサイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域指定箇所」(pref.gunma.jp)

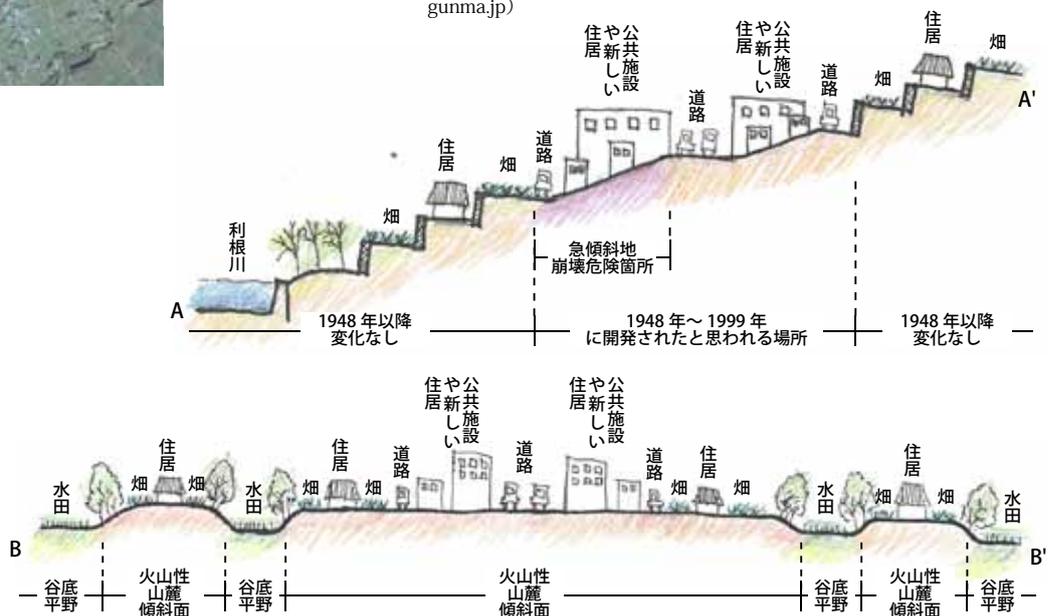


図4-7-8 (上) A-A'断面ダイアグラム

図4-7-9 (下) B-B'断面ダイアグラム

## 8 緑野郡升茂郷／群馬県藤岡市上栗須・中栗須・下栗須・岡ノ郷・新田

担当：堀井隆秀



図 4-8-1 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

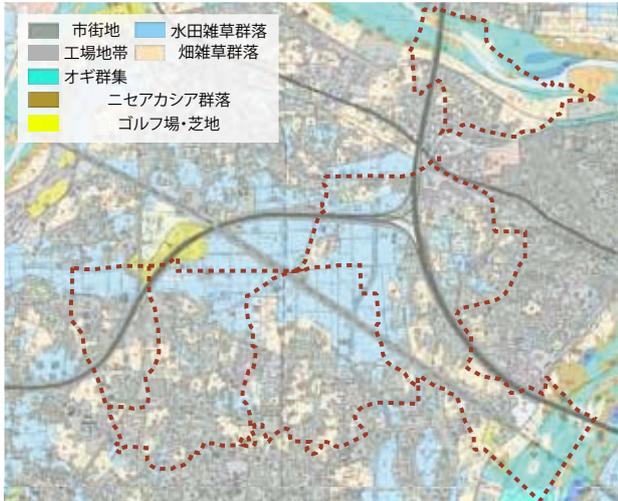


図 4-8-2 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より



図 4-8-3 集落内部にみられた小規模な畑 撮影＝福島加津也



図 4-8-4 集落内部の養蚕農家 撮影＝佐々木葉

### 1) 歴史的物事の情報

緑野郡升茂郷は藤岡市の上栗須・中栗須・下栗須・岡ノ郷・新田に比定されている。

比定地一帯の歴史的物事については、縄文時代の遺跡、弥生時代の遺跡、古墳時代の溝墓、鎌倉時代の城跡などが確認されている<sup>1</sup>。

### 2) 実見した際の概要

比定地一帯は利根川・烏川の南に位置している。後期更新世の低位段丘堆積物の地質上に立地し、大部分が平坦な地形である。

本疾走調査では主に上栗須を実見した。集落中央に走る国道 174 号線が集落内で最も高い位置にあたり、174 号線を境に、南北両方向にゆるやかに下っていく。

174 号線から少し北にいくと赤城神社があった。174 号線とおなじ高さに位置し、神社より北に進むと、ゆるやかな下り坂となり、住宅地が広がっていた。

住宅地部分は、わずかな高低差ではあるが、段々の地形で、北にむかって下っていく。住宅地の内部には小規模な畑がいくつか見られた。現在でも手入れがされ作物が生産されている様子がうかがえた。またその付近には養蚕農家が見られたが、現在も養蚕がなされているかは不明である。住宅地を北にぬけると、水路をはさみ、大字領域際まで、水田が広がっていた。

### 3) 比定大字領域内の分析

上栗須は大きく、北部の水田と住宅地に分かれる。地形分類図<sup>3</sup>を参照すると、谷底平野部分に生産地としての水田が、藤岡扇状地の台地上に住宅地が広がり、明快な土地利用がうかがえる。また谷底平野＝水田部分は明治前期の低湿地<sup>4</sup>に相当しており、住宅地の開発は見られない。これらは地質・地形を読みこんだ環境・集落構造の展開といえよう。上栗須以外の比定地については、中栗須・下栗須では上栗須同様、谷底平野に水田、藤岡扇状地に住宅地という土地利用がなされている。岡ノ郷・新田については、自然堤防上に住宅地、谷底平野に水田がある。谷底平野部分が明治前期の低湿地に相当することは、上栗須と同様である。

1 『藤岡市史 通史編 原始・古代 中世』（藤岡市,2000）参照。

2 川沿いの低地に分布している約 7 万年前～1 万 8000 年前に形成された段丘層。

3 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査参照。

4 明治 13 年～23 年に作成された地図から、当時の低湿地の分布を抽出したもので、ここで言う「低湿地」は、河川や湿地、水田・葦の群生地など「土地の液状化」との関連が深いものとされる。

web サイト「国土交通省国土地理院 明治前期の低湿地データ」参照 URL: [http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/lc\\_meiji.html](http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/lc_meiji.html) 2014.10.03 時点。



図 4-8-5 迅速測図 (筆者加筆)

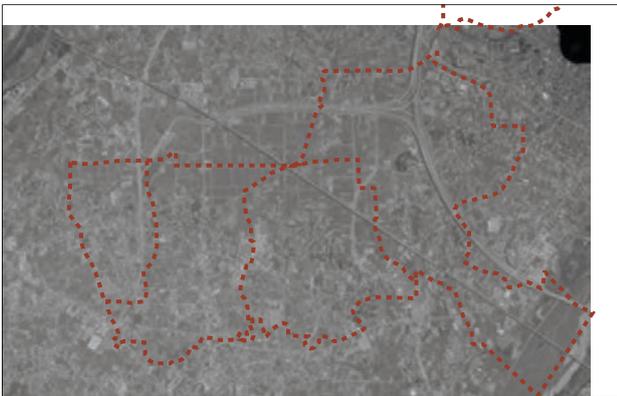


図 4-8-6 航空写真\_1987年 (筆者加筆)



図 4-8-7 航空写真\_2000年 (筆者加筆)

以上より比定地一帯は、液状化などの危険性のある低湿地については生産のための水田として利用し、そういった危険の見られない場所を住宅地として利用するというルールが共通して存在すると考えられる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図 (図 4-8-5) の上栗須集落部分を確認すると、現在の 174 号線にあたる場所に、先行する道がみられる。この道の両隣には畑がみられ、それらから少し距離をおいて居住部分がある。畑があるのは図 4-8-2 で桑畑となっている場所である。1947 年、1970 年の航空写真では迅速測図と大きな違いは見られない。

1987 年の航空写真 (図 4-8-6) をみると、台地部分に居住部分が拡大している様子がうかがえる。これは上栗須に限らず、その他の比定地においても共通である。居住部分の拡大は、迅速測図でみられた居住部分を中心にしてなされたと思われる。わずかな高低差の段々に対して、どのように住まっていたのか、要検討。

2000 年の航空写真では、現在見られるような姿となっている。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

水田部分の土地利用については明快であり現在でも継続的な利用がなされている。一方桑などの蚕糸業にまつわる生産がどういった変遷をたどったかは今後検討が必要である。

##### ・集落構造

居住については明治前期の低湿地を避けるルールが継続的に守られている。また住宅地の拡大にともない、段々の地形にどう適応されたか検討を要する。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／『藤岡市史 通史編 原始・古代 中世』藤岡市、2000 年

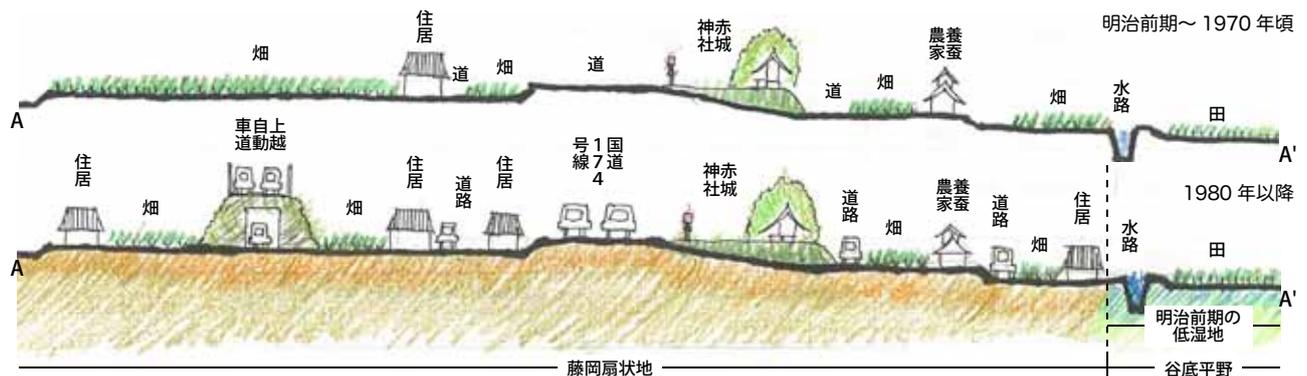


図 4-8-8 A-A' 断面ダイアグラム

## 9 多胡郷山宇郷／群馬県高崎市山名町

担当：梶尾智美



図 4-9-1 比定大字の領域 GoogleMap より

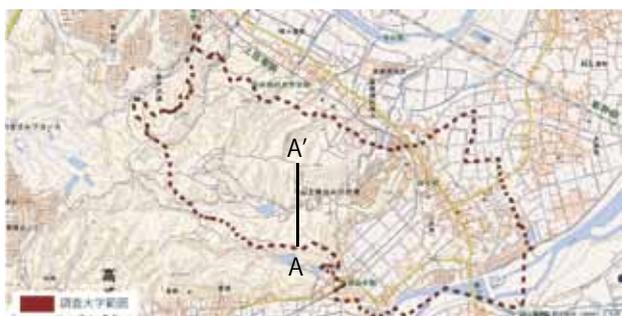


図 4-9-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

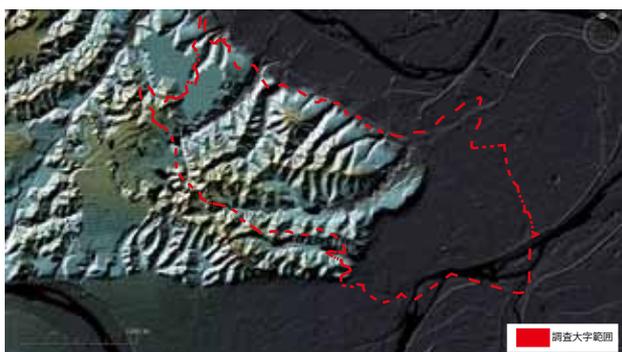


図 4-9-3 地形段彩図（筆者加筆） Googleearth より



図 4-9-4 突き当たりのため池 撮影＝梶尾智美

### 1) 歴史的物事の情報

多胡郷山宇郷は群馬県高崎市山名町に比定される。山名町の歴史的物事に関しては、山上碑および古墳が比定大字内に存在する。山上碑は、681年に立てられた日本最古級の石碑であり、碑に隣接する山上古墳は、直径約15メートルの円墳で、精緻な切石積みの石室を持ち7世紀中頃の築造と考えられている。<sup>(1)</sup>

### 2) 実見した際の概要

山名町の北には烏川、南には鏑川が流れており2つの河川に挟まれた山地部分に位置している。更に詳細に見ると、山間谷底平野に立地している集落である。山地の東部には県道30号が通っており、南部には鉄道が通っている。

比定大字の範囲内には山地と低地が含まれており、低地部分には集落と生産地が、山地部分のわずかな平場に集落が見られる。

県道30号を北上し、山間谷底平野を東西に走る道路を通って集落を実見した。集落の突き当たりにはため池があり、その水を低地部分の生産地に流していた。その水路と道路が集落集落の中心を成しており、その両脇に民家が立地していた。住居は密になって立地しているものの、一軒の敷地はやや広くとられているように思われる。上流の、ため池近くの民家は廃屋になっているものもあり、生活が廃れかけているように思われた。しかし、そのような家屋を直している、この集落に生活している大工の方がいた。そのため、この場所で修理をしつつ生活が営まれているのではないかと考えられる。

比定大字の範囲内には上信鉄道の山名駅あたりの集落と、近年にかけて開発したと思われる、山地と低地の際部分に位置する集落など、千年村と考えられる部分以外の集落も見られた。生産地の大部分は低地部分に位置しており、山間谷底平野においては生産地はほぼ見られなかった。

山間集落の中ほど、山を少し登った辺りのところには山上碑と古墳があった。古墳は石がつまれており、その中に入れるようになっていた。中には馬頭観音が祀られていた。

1 高崎市ホームページ  
<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121600132>



図4-9-5 集落の骨格となる道路と水路と、その脇に立地する民家 撮影＝梶尾智美



図4-9-6 航空写真 (1947年)



図4-9-7 航空写真 (1974年)

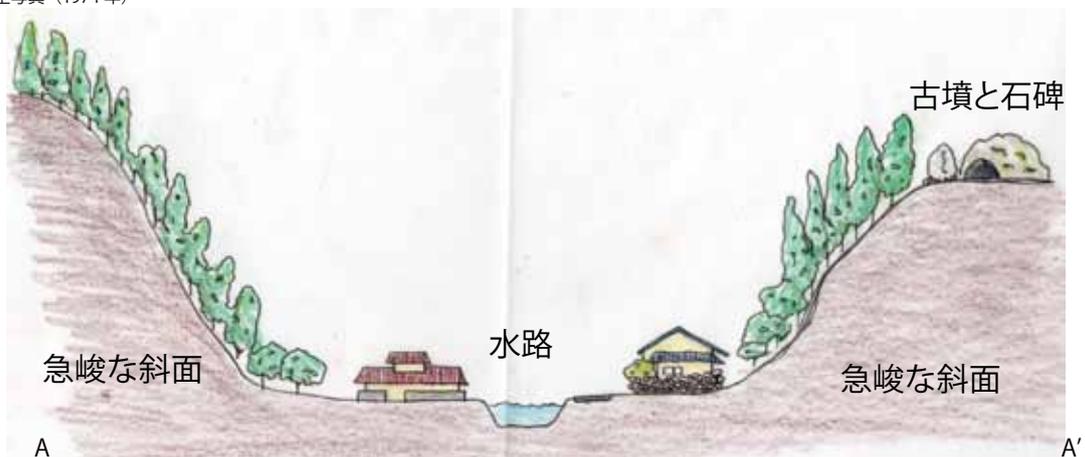


図4-9-8  
A-A' 断面ダイアグラム

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する要素はそのほとんどは住宅地であり、生産地は見られなかった。また、集落の中心部に道路と水路が通っており、それが集落の骨格となるように民家が配置されていた。

比定大字内に、性格の異なるいくつかの集落がそれぞれまとまりをもって立地しているのも一つの特徴だと言える。範囲内には生産地があるが、今回実見した山間谷底平野に位置する集落で管理している水田ではなかった。そのため、当集落の生産手段がなにによるものなのか検討する必要があると考えられる

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947年と1974年の航空写真と現在の航空写真を比較しても、集落の立地や生産地の様子などは大きく変遷は見られない。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

今回実見した集落はほとんど生産地は見られなかった。生産手段について今後検討する必要がある。

#### ・集落構造

水路と道路が集落の中心を走っており、それを骨格として兩岸に水路と道路に面して民家が立地していた。集落構造はシンプルだと思われる。

#### ・共同体

本疾走調査においては共同体についての検討までは至っていない。今後検討する必要がある。

## 10 群馬郡小野郷／高崎市上佐野・下佐野・倉賀野

担当：堀井隆秀



図 4-10-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-10-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-10-3 鳥瞰写真（A の方向）飛行・撮影＝石川初



図 4-10-4 鳥瞰写真（B の方向）飛行・撮影＝石川初



図 4-10-5 住宅地のなかに立地する大鶴巻古墳 撮影＝元永二郎

### 1) 歴史的物事の情報

群馬県小野郷は、現在の高崎市上佐野、下佐野、倉賀野付近に比定され、倉賀野は小野院の存在から出た名称との推定もある。そのため倉賀野を中心に調査を行った。

倉賀野についての歴史的物事については古墳に着目したい。浅間山古墳は古墳時代中期（5世紀前半）の東国屈指の大規模なあり、付近の大鶴巻古墳、小鶴巻古墳はともに浅間山古墳の相似形であるとされ、それぞれ浅間山古墳を3分の2、2分の1に縮小したかたちをしている。

### 2) 実見した際の概要

倉賀野は、南に烏川が流れ、北に中山道が通っており、町字はそれらに囲まれてできている。町の中心部は住宅地と商業地だが、周囲を工業団地に囲まれている。江戸時代には中山道が通じ、この付近に倉賀野宿が置かれた。

光雲寺付近の空き地からドローンを飛ばして鳥瞰写真を撮影した。図 4-10-2A の方向には手前から崖線がみえ、一段下がったところに大鶴巻古墳が確認できる（図 4-10-3）。B の方向は手前に畑、空地が開け、奥に浅間山古墳が確認できる。小鶴巻古墳と合わせて、古墳に囲われた場所といえよう。A の方向に車で移動し、大鶴巻古墳に車を停めた。道は細く車が通るのが難しいほど入り組んでいる。古い家屋のなかに新しい家屋もいくつかみられ、RC 造のアパートも複数確認することができた。

大鶴巻古墳は後円の部分に樹木が密集しており、住宅地のなかに盛り上がった林が突然と現れたような奇妙な光景が見られる（図 4-10-5）。古墳の表面は転用されており、一段目が水田、二段目が畑というように細分化された土地利用がなされていた。「土地利用の解像度と転用」による古墳の形態の持続のプロセスは本報告書、石川報告に詳しい。この付近は小規模のネギ畑やこんにゃく畑が見られたが、水田は倉賀野字内には確認できない。

### 3) 比定大字領域内の分析

ここでは倉賀野の大字領域を対象とする。倉賀野の北東部は工業団地となっているが、これは明治 26 年以降に形成されたものである。字内にひらけた水田はみられず、畑は数は多いもののみ小規模である。農業から商業、工業への変遷は次項にて詳しく記述する。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1976 年と 1999 年の航空写真を比較すると、農地が宅地に変化しているが、その変化は小さいものである。

むしろこの「変化がなかったこと」は、商業・工業

1.2 ともに 竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／



図 4-10-6 大鶴巻古墳から撮影した北西部のようす 撮影＝元永二郎



図 4-10-7 航空写真 (1976 年)



図 4-10-8 航空写真 (1999 年)



図 4-10-9 木曾街道六拾九次 倉賀野 (溪斎英泉画) 出典：wikicommons より



図 4-10-10 A-A' 断面ダイアグラム (筆者作成)

地を東側に集中させたゆえの結果として、肯定的に捉えられるのではないだろうか。倉賀野は、中山道六十九次のうち江戸から数えて 12 番目の宿場町として栄え、烏川を利用した舟運搬の河岸 (図 4-10-9) を有していた。倉賀野河岸は明治 35 年に閉場するも、明治 26 年以降、東部の工業団地化が進み、昭和 30 年には商業・鉱業人口が農業人口を大幅に上回る。昭和 57 年には町の北部に倉賀野バイパスが完成し、「江戸時代以来の中山道倉賀野宿の街並みはもとの静けさを取り戻した」とされる。このように、倉賀野は明治以降の近代化・工業化・モータリゼーションによる変容を町の東部のまとまった農地に集約させることで、住環境を維持した事例として見る事ができる可能性があるだろう。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

生産に対する土地利用として、水田面積は少なく畑も小規模であるが、古墳の生産地への転用をはじめ、限られた土地をうまく活用している。

#### ・集落構造

農村から近世の宿場町、近代の工業団地へと二段階の変化を経ているが、4) で触れたように、工業団地の集落北東部の水田地帯に集約させたことで、住環境を維持したと考えると、発展の仕方に妥当性があるといえるだろう。

#### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／北橋村誌編集委員会編『北橋村誌』北橋村役場、1975 年／web サイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域指定箇所」(pref.gunma.jp)

## 11 片岡郡佐没郷／群馬県高崎市根小屋町

担当：堀井隆秀



図 4-11-1 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-11-2 地形分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-11-3 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より



図 4-11-4 細道の北西端に位置する白髭神社 撮影＝梶尾智美



図 4-11-5 白髭神社脇からみた細道の様子 撮影＝佐々木葉

### 1) 歴史的物事の情報

片岡郡佐没郷は高崎市根小屋町に比定されている。

根小屋町内での歴史的物事は、中世の根小屋城址が確認されている<sup>1</sup>。

### 2) 実見した際の概要

大字・根小屋町は、北は烏川、南はゆるやかな丘陵にはさまれた場所に位置し、丘陵の際部に集落が立地しており、異なる2つの地質の際部にあたる<sup>2</sup>。集落内部には上信鉄道と国道30号線が、大字領域のすぐ外の北部には上越新幹線が走っている。

30号線を南から北に進み、根小屋町集落にはいった。30号線と並行して走る南側の細道は、両側を住宅と畑に挟まれていた。畑ではねぎなどの野菜や桑の生産がみられた。また細道の北の端には白髭神社があった。参道は細道から少し逸れてあり、神社の場所は細道より高く位置していた。建立年代は不明であるが、とても古い雰囲気をもった神社であり、現在も手入れがされている様子がかがえた。また、丘陵の上にも、鹿島神社があるが本疾走調査では訪問していない。

30号線の北東には水田が広がっており生産地として土地利用がなされていた。

### 3) 比定大字領域内の分析

根小屋町は主にスギなどの植林・居住部・水田から構成されている（図4-11-3）。それらは、丘陵・小扇状地・谷底平野の地形上で展開されている（図4-11-2）。また大字・根小屋町内には明治前期の低湿地<sup>3</sup>が見られるが、この場所は現在水田として利用されている場所に相当しており、住宅地などの開発はなされていない。これらはこれらは地質・地形を読みこんだ環境・集落構造の展開といえよう。

また、大字領域内には土砂災害警戒区域がある<sup>4</sup>（図4-11-1）。住宅が固まって立地している箇所であり、今後の土地利用の仕方を検討する必要がある箇所であると考える。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1 『新編 高崎市史 通史編2 中世』（高崎市,2000）参照。

2 中-後期中新世の堆積岩類（約1500万年前～700万年前に形成された地層）と後期更新世-完新世の堆積岩類（約1万8000年前～現在までに形成された最も新しい時代の地層）の際部に位置する。

3 明治13年～23年に作成された地図から、当時の低湿地の分布を抽出したもので、ここで言う「低湿地」は、河川や湿地、水田・葦の群生地など「土地の液状化」との関連が深いものとされる。

webサイト「国土交通省国土地理院 明治前期の低湿地データ」参照 URL: [http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/lc\\_meiji.html](http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/lc_meiji.html) 2014.10.03時点。

4 webサイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域指定箇所」参照 URL: [pref.gunma.jp](http://pref.gunma.jp) 2014.10.03時点。



図 4-11-6 丘陵の際から北東に位置する水田をながめる 撮影=梶尾智美



図 4-11-7 迅速測図 (筆者加筆)

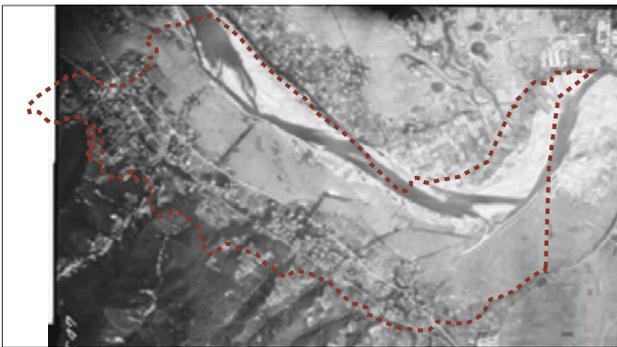


図 4-11-8 航空写真\_1947年 (筆者加筆)

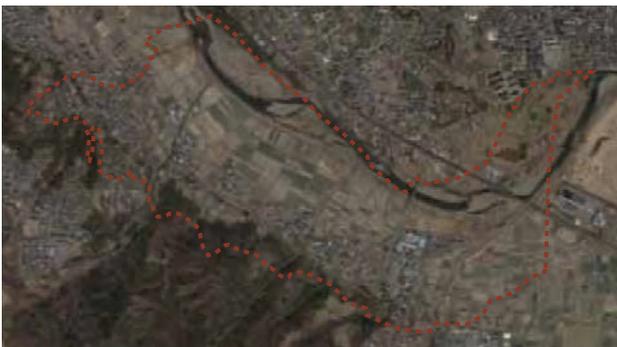


図 4-11-9 航空写真\_2014年 (筆者加筆)

迅速測図を確認すると (図 4-11-7)、国道 30 号線の南の細道の両側に居住部が展開されていることが見て取れる。居住部分は小規模であり、2ヶ所ある土砂災害警戒区域の内、1ヶ所はまだ居住は見られない。

1947 年の航空写真 (図 4-11-8) では、国道 30 号線が走り、居住部分に拡大がみられる。主には国道 30 号線と南に位置する細道の間に拡大の様子が見られる。

その後、1964 年、1978 年、1987 年と徐々に住居の数はふえるが、生産地や丘陵部分に大きな変化はなく、2014 年現在にいたる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

地質・地形に対応した明快な土地利用がみられ、それが継続的になされていると考えられる。

#### ・集落構造

丘陵と谷底平野の間の台地部分に居住すること、明治前期の低湿地を避けること、二つのルールが継続的に守られている。一方、土砂災害警戒区域に居住地が該当している。これは、昔から継続的に住まわれた場所と新しく居住地に適応された場所と二種類あり、継続性／適応性の上で不適切な可能性がある。

#### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。白髭神社や今回訪問していない鹿島神社を中心に聞き取りなどを行なうことが有効と思われる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／『新編 高崎市史 通史編 2 中世』高崎市、2000 年

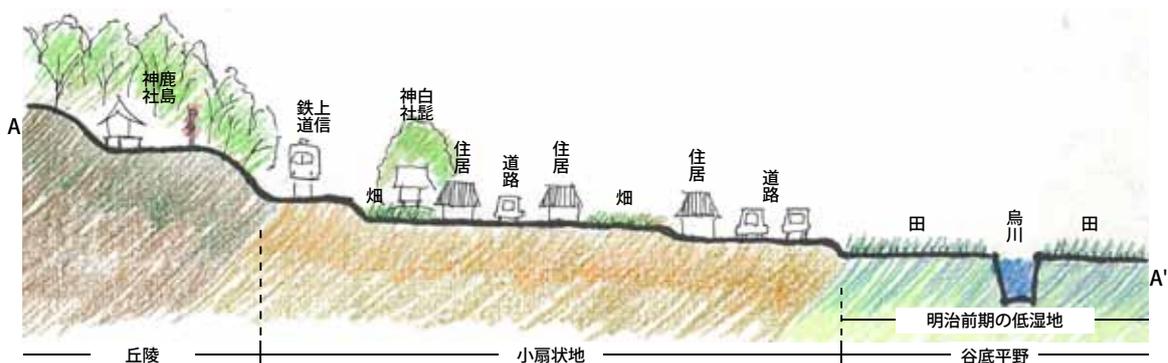


図 4-11-10 A-A' 断面ダイアグラム

## 12 片岡郡長野郷／群馬県高崎市上豊岡町・中豊岡町・下豊岡町・石原町・乗附町

担当：犬伏順一



図 4-12-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-12-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-12-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-12-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

片岡郡長野郷は上・中・下豊岡町、石原町、乗附町に比定されている。

古墳がかつて石原町に 42 基、乗附町に 137 基あった。現在も残っている古墳は数基のみである。豊岡町の北部台地上には、昭和 53 年に発掘された引間遺跡があり、縄文時代に既に人が定住した形跡が見られる。

### 2) 実見した際の概要

豊岡町の 3 町は、北は烏川、南は碓氷川に挟まれ、隣接している。南部へ石原町、乗附町が、観音山丘陵の東麓から烏川中流域の右岸まで広がる。北部は榛名山からの火砕流による地質上に立地し、南部は観音山丘陵で緩斜面多く、東部は河川に向って谷底平野が広がっている。平野は住居が多いが、大規模な水田もある。地形問わず、整備された新興住宅や工場が所々見られる。

今回は中豊岡町を中心とし、若宮八幡宮を始めに、八幡宮前の群馬県道 26 号沿い、北上して段丘上の集落の様子を実見した。若宮八幡宮は承永 6 年 (1051) に建立されたといわれる。屋敷林が非常に大きく、立地や建物の状態などを見ても、大変立派なものであった。住人によって維持されていると思われた。

北上し、中豊岡町の中心となる常安寺付近を実見した。常安寺は 16 世紀終わり頃からあるもので、隣接する墓地はやや微高地であった。墓地は集落の中心にあり、規模やその様子から、住人の共同的な活動によって維持されていると感じた。寺の周囲には手入れのされている水田が多く、畑もあった。畑地は水田より一段高いレベルにあった。JR 信越本線がこの畑や住居間を横断しているが規模は小さく、交通量や騒音等による集落への悪影響は少ないように思われた。

段丘上は起伏のある地形であったが、地形を理解し、上手く利用して住居群が形成されていた。道は細く湾曲しており、集落をうまく徘徊できるようになっていた。また防風・防水のためと思われるふんだんな石垣、生垣、屋敷林がどの住居にも見られた。段丘からは谷底平野が一望でき、純粋に千年続いていける村という印象を受けた。ただ北部の国道沿いに新興住宅が少しできており、集落への影響が少し懸念される。

### 3) 比定大字領域内の分析

今回は長野郷の中でも、豊岡町を中心にしか実見できなかったため、大字領域南東部については分析しかねる。

実見した範囲で言えば、集落を構成するのは大半が新

1 竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』（角川書店、1988 年）の各町に関する記述の内、「上毛古墳総覧」からの記述による。



図 4-12-5 段丘上の集落の道の様子 撮影=犬伏順一



図 4-12-6 段丘上の集落から谷底平野、観音山丘陵を見渡す 撮影=犬伏順一



図 4-12-7 航空写真 (1947 年)



図 4-12-8 航空写真 (1999 年)

旧間わず住居、続いて水田・畑、工場である。植生図と土地分類図から、工場と大規模な水田が谷底平野にあるのが明快であった。その他の土地利用はあまり明快ではなかった。

豊岡町近辺については、生産地と住居の規模や立地の関係から、大字領域の比定は妥当であると思われる。しかし、氾濫源になりうる谷底平野を集落の中心地として選んだ理由、また今までの土地利用についての検討に比重をおいて、考える必要があると思われる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年の航空写真から、群馬県道 26 号沿いに集落の様子がみられる。北部にこまごまとした生産地があり、東西に広い生産地や空地が広がる。南の国道 18 号沿いにも少し住居が見られる。1999 年の航空写真では、飛躍的に周囲へ住居群が広がっている。こまごまとした生産地は、さらに小規模な田畑となり、住居群の一部に残っている。

1947 年と比べ、広い生産地や空地には工場が散在するようになった事が分かる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

過去の生産地の様子に関しては、生産性において不足なく、南北を川に挟まれて豊富な水資源を有する事からも、妥当であると思われる。しかし、現在の土地利用は生産地に対して住居数が明らかに多い。近代にできた工場による生産性なども考慮し、今後検討が必要である。

##### ・集落構造

氾濫源なりうる場所に住居の大半が立地するため、河川氾濫時の水害リスクを考慮する必要がある。かつての集落が県道 26 号・住居・生産地のセットを形成し、ある程度昔から続いているため、変容の仕方について以後検討を要する。北部の段丘上の集落立地は妥当性があるといえる。

##### ・共同体

立派に維持されている八幡宮や、中豊岡町の中心に位置する墓の様子から、共同体による持続の現れがあるように思われるが、検討を有する。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年

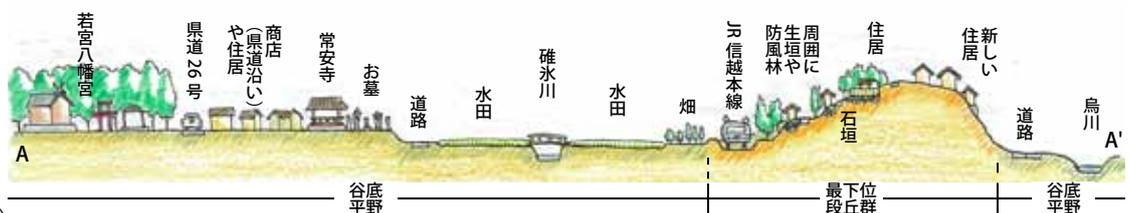


図 4-12-9 A-A' 断面ダイアグラム

## 13 片岡郡若田郷／群馬県高崎市若田町

担当：梶尾智美



図 4-13-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-13-2 地形図（筆者加筆）地理院地図より



図 4-13-3 地形段彩図（筆者加筆）Googleearth より



図 4-13-4 集落の南部を流れる水路と生垣 撮影＝梶尾智美

### 1) 歴史的物事の情報

片岡郡若田郷は高崎市若田町に位置している。当千年村の周囲には複数の古墳があり、古代から生活が営まれていた土地だと言える。その古墳の中で代表的なものは観音塚古墳であり、東日本最大規模の横穴式石室をもっている。<sup>(1)</sup>

### 2) 実見した際の概要

若田町の北には烏川、南には碓氷川が流れており2つの河川に挟まれた台地部分に位置している。集落の北部には国道406号が通っており、東部にはバイパスが通っている。

比定大字は河岸段丘上に位置しており、段丘上に住宅地と生産地が立地している。さらに、集落の中心部には八幡霊園という大きな墓地がある。その東には浄水施設がある。

バイパスを北上し、途中で西に向かって集落を実見した。住居は密集して立地しており、生け垣で区切られている様子を見ることができた。さらに、集落内部にも生産地が入り込んでいた。生産地では水田やトウモロコシ、桃や梨など様々なものが栽培されており、ある家では牛を飼っていた。生産の手段が複数あるのがこの千年村の特徴と言えるだろう。

集落内部の道は細く入り組んでいるところもあった。家屋の敷地内部に祠を持っている家が何軒か見られた。当集落で話を伺った方によると、家神様とのことだった。

水舟があり、集落の共同井戸としての役割を果たしていたと思われるものがあつた。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する要素はそのほとんどは住宅地と生産地である。集落内部に生産地が入り込んでいるため、明快な集落構造を読み取ることは難しかった。

比定大字の範囲の大部分は河岸段丘上に位置しており、水害の危険と隣り合わせにあるものの、生存基盤としては妥当な立地であると考えられる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947年航空写真では、現在集落のある場所はほとんどが生産地であったことを読み取れる。現地の方の話によると、当集落は台地上にあるため水に恵

1 高崎市ホームページ  
<http://www.city.takasaki.gunma.jp/kankou/history/kannonzuka.html>



図4-13-5 集落内部の水舟 撮影=梶尾智美

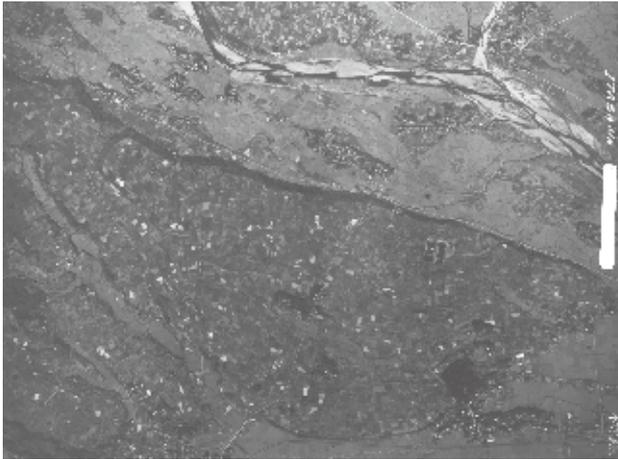


図4-13-6 航空写真 (1947年)

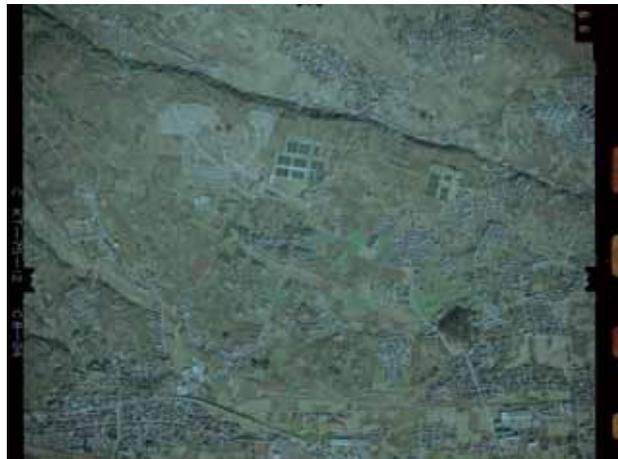


図4-13-7 航空写真 (1974年)



図4-13-8  
A-A' 断面ダイアグラム

まれた土地ではなかったとのことだった。そのため、1947年時点では桑を生産していたとのことだった。1974年になると、現在も存在する八幡霊園と浄水施設ができているのを確認することができる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

以前は桑を生産していたが、現在は米や野菜、果樹、畜産など多岐に渡る生産を行っている。環境の変化に適応して生産の形態も変わってきたのではないかと考えられる。変遷の仕方としては妥当だと思われる。

#### ・集落構造

集落の内部に生産地があったりと、集落の明確な構造を確認することは難しかった。しかし、集落の南部を水路が通っていたり、生け垣が発達していたりと、集落を構成する要素は多様であった。

#### ・共同体

本疾走調査においては共同体についての検討までは至っていない。今後検討する必要がある。

## 14 碓氷群石井郷／安中市岩井

担当：小林千尋



図 4-14-1 航空写真と町字境界（筆者加筆） google map より



図 4-14-2 地形図と町字境界（筆者加筆） google map より



図 4-14-3 DJI Phantom + GoPro で撮影した鳥瞰写真 A 方向 撮影＝元永二郎



図 4-14-4 DJI Phantom + GoPro で撮影した鳥瞰写真 B 方向 撮影＝元永二郎



図 4-14-5 地区内を流れ、岩井川に流ぐ小川

### 1) 歴史的物事の情報

碓氷郡石井郷は現在の安中市岩井に比定される。岩井についての歴史的物事については、碓氷川右岸段丘上に 5 世紀代の竪穴式古墳や、丘陵上には 7 世紀代の後期群衆墳が分布しているほか、平安期の住居跡も発見されている。

### 2) 実見した際の概要

岩井は町字北部を西から東に流れる碓氷川の右岸に位置する。中心部には南西から北東に岩井川が流れ、碓氷川に合流する。集落の中心には岩井川に合流する小川も流れている（図 4-14-5）。岩井川右岸は崖線になっており、東部の標高は西部に比べ 5 ～ 10m の標高差がある。この崖線を上空から撮影したものが図 4-14-3 の鳥瞰写真であり、右側が岩井中心部である。集落が傾斜地の林に囲われている様子が分かる。

常楽寺に車を止め、西に移動しつつ集落を実見した。ゆるい斜面地が大半であり、石垣を積んで敷地を造成した家屋が多く見られた（図 4-14-6）。岩井は川沿いの低地に分布している約 7 万年前～ 1 万 8000 年前に形成された段丘層<sup>2</sup>に立地しているが、河川の作用と思われる丸石が規則的に丁寧に積まれていた。

（図 4-14-2 「あ」）の付近で大きな共同の養蚕小屋を発見した。現在は工務店の倉庫として使用されている<sup>3</sup>そうだ。安中市誌などを閲覧した限りでは詳細は不明だが、この地域で養蚕が行われていた可能性がある。

白山比咩神社（図 4-14-2 「い」）からドローンと GoPro を用いて鳥瞰映像を撮影した。図 4-14-4 は北西方向を撮影したものだが、信越本線の線路を境に水田と宅地の土地利用が明快に分かれており、またその手前にはゆるい崖線がある様子が明快に見て取れる。

家屋の配置、構成などから、また 1948 年時の航空写真では段丘下に家屋が少ないことをふまえると、東側の段丘上の集落がもっとも古くからあるものと考えられる。なお迅速測図のエリアからは外れている。

### 3) 比定大字領域内の分析

町字内を構成する要素は、最も標高が高い南東の畑から順に、斜面林、家屋（図 4-14-1 α）、家屋（図 4-14-1 β）、施設（図 4-14-1 θ）、水田である。β のエリアは小学校等の公共施設をはじめ、ガソリンスタンド、コンビニエンスストアなどの新しい施設が集中している。大字領域

1 標高データは google earth を参照した。

2 地質情報に関しては 20 万分の 1 シームレス地質図 (<https://gbank.gsj.jp/seamless/>, 2014.10.8 付) を参照した。

3 「日本すま漫遊記」(2014.10.8 確認) [http://www.sukima.com/31\\_usui08/01nakaiwai.html](http://www.sukima.com/31_usui08/01nakaiwai.html) を参照した。



図4-14-6 岩井の中心に位置する家屋とその石垣 撮影=小林千尋



図4-14-7 共同養蚕飼育小屋。現在は倉庫として機能。撮影=小林千尋



図4-14-8 航空写真（1996年）国土変遷アーカイブより



図4-14-9 航空写真（1948年）国土変遷アーカイブより



図4-14-10 岩井地区ハザードマップ 国土交通省ハザードマップポータルサイト

内の土地利用は、地形を読み込んだものということができるだろう。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年の航空写真と1996年の航空写真を比較した。最も大きな変化は低地の生産地の土地利用である。碓氷川右岸の低地 $\theta$ は1948年は家屋はなかったが、1996年次は家屋が増加している。これとハザードマップ(図4-14-10)を比較すると、このエリアは2-3mの浸水域と重なっていることが分かる。いっぽう、新しい家屋ガソリンスタンドやコンビニエンスストアが立地する $\alpha$ のエリアは一段下がった場所であり、新たに建物が建てられたことが航空写真の比較から伺えるが、巨視的に見れば段丘の際に立地しており、ハザードマップの浸水区域とは重なっていない。また、岩井の古くからある居住域 $\theta$ は危険区域との重なりはみられない。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については低地に水田、段丘上に畑と、地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。最も古い地域と思われる $\theta$ あたりの家屋は密集しておらず、間の土地はそれぞれの家の畑として利用されている。

##### ・集落構造

$\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\theta$ の順で標高が高く、 $\beta$ 、 $\theta$ は1948年以降に形成されたものである。 $\beta$ は微高地上にあり浸水域から逃れており地形上は発展の妥当性があるといえるが、 $\theta$ は浸水域と重なっており、妥当性があるとはいえない。 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\theta$ の相互関係については現時点においては不明である。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。しかしながら共同養蚕小屋の存在は、共同体で養蚕業を行っていた可能性があり、検討項目として挙げられるだろう。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／



図4-14-11 a-a' 断面ダイアグラム

## 15 碓井郡駅家郷／群馬県安中市上野尻（安中市安中）

担当：犬伏順一



図 4-15-1 比定大字の領域 GoogleMap より

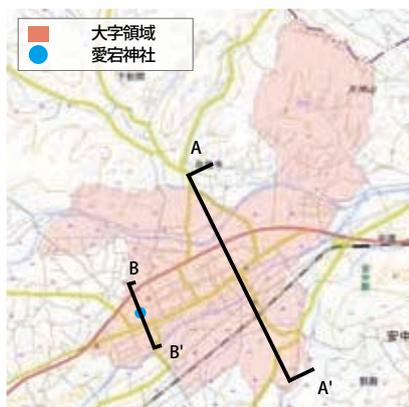
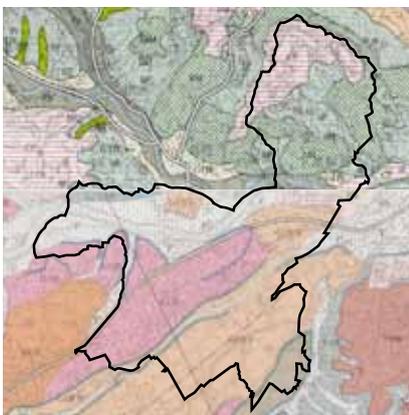
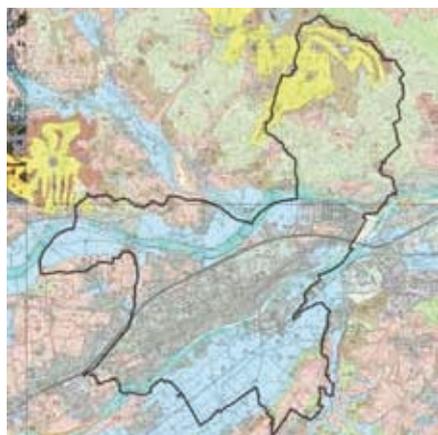


図 4-15-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



- 一般斜面
- 山麓緩斜面
- 最下位段丘群
- 人口改変地
- 下位段丘
- 最下位段丘
- 谷底平野

図 4-15-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



- ゴルフ場・芝地
- スギ・ヒノキ・サウラ榎林
- クリ・コナラ群集
- 果樹園
- オギ群集
- 水田雑草群落
- 市街地
- クヌギ・コナラ群集

図 4-15-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

碓井郡駅家郷は安中市安中に比定されている。

安中には、戦国期から江戸期にかけて安中城が存在していた。現在はかつての本丸付近に土塁と堀を残すのみである。武家屋敷が多く、その時代の遺産は多くあるも、古代、中世まで遡れる歴史的物事は少ないと思われる。

### 2) 実見した際の概要

上野尻の領域は北東部に天神山があり、残りが九十九川（北側）、碓氷川（南側）によって、南北に 3 つに分断している。その地形は北側から順に谷底平野、下位段丘、最下位段丘と続く。2 つの河川に挟まれた舌状台地上に市街地があり、九十九川以北と碓氷川以南は水田がその大部分を占めている。また碓氷川以南には JR 信越本線が通り、中央の台地上には 2 つの大きい道路（北から国道 18 号線、群馬県道 125 号線）が走っている。

中央の舌状台地上を群馬県道 125 号線に沿って見る上で、台地を北側へ上り、南側へ下るように実見した。まず県道沿いの市街地は、所々開発が進んでおり、残存する歴史的物事が少ないように思われた。ただ地形に関して、北側が高く、下がっていく南側との高低差が非常に大きかった。北進すると武家屋敷が多く見られ、南下してみると南側は商業施設が多い印象を受けた。北から南にかけてヒエラルキーがあり、意図的に住み分けられて来たようである。また、北側には公共施設が多いように思われる。

中央台地から河川を挟んで外側を見ると、広大な生産地が見られる。市街地の所々で畑は小規模に設けられており、大規模な水田が集落の周縁に存在していた。大規模な水田群は南北ともに、市街地より低い高度にあった。集落内を JR 信越本線が通るが、集落構造とその持続性に対し、悪い影響はなかったと思われる。

また南西の愛宕神社付近を実見したところ、石垣を使って神社の敷地を上げていた。用いられる大小様々の丸石は、河川から持ってきたものようである。河川との関わり、集落・家屋構造に顕在化していた。<sup>1</sup>

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は水田、住宅地であった。水田は谷底平野、最下位段丘上に位置しており、住宅地は下位段丘上に位置していたことが土地分類図と植生図の比較より分かった。下位段丘の中でも、おおそ武家屋敷、市街地、商業施設や一般住宅地の順に、土地の高さが下がっていた。集落の南北の際部、武家屋敷の北側の一部には、果樹園が見られる。他はおおよそ土地利用が明快

<sup>1</sup> 利根川水系の本疾走調査全般に同様であった。



図 4-15-5 高低差の大きい台地上斜面 撮影=岸本太幹



図 4-15-6 水田地域と周辺の山々 撮影=岸本太幹



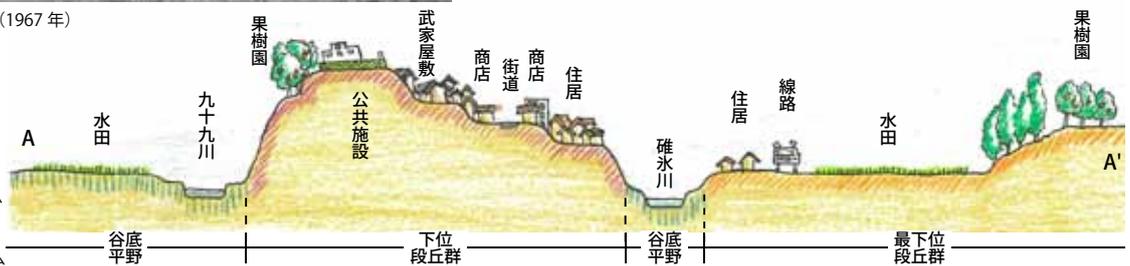
図 4-15-7 航空写真 (1948年)



図 4-15-8 航空写真 (1967年)

図 4-15-9 (上)  
B-B' 断面ダイアグラム

図 4-15-10 (下)  
A-A' 断面ダイアグラム



であった事がうかがえる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年と1967年の航空写真との比較はもちろん、現在の航空写真と比較しても、住居や生産地の位置、規模などにはほとんど変化がなかったように思われる。集落の端において、新たに工場がいくつかできているくらいに留まっている。航空写真から変容が少ないように見られるのは、現比定大字領域が千年村として持続する上で、妥当であった可能性が考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

航空写真による偏年的な分析を見ると、環境において大きな変化が起きた様子は見られない。生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。

##### ・集落構造

武家屋敷と商業施設の明快な土地利用は、地形を理解した上で、さらにヒエラルキーを意識し、意図的にこの集落構造を形成していたことがうかがえる。しかしその明確な理由については不明なので、今後要検討である。

生産地と居住地とを極端に分けてもつのは、地質学的根拠によるものであり、妥当と言える。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。特にヒエラルキーの問題は、集落構造にまで顕在化しているため、比重を置いて今後検討する必要があると考える。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

## 16 碓氷郡野後郷 / 安中市古屋

担当：岸本太幹

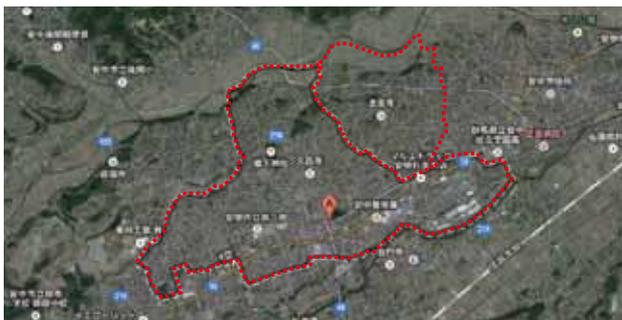


図 4-16-1 比定大字の領域 GoogleMap より

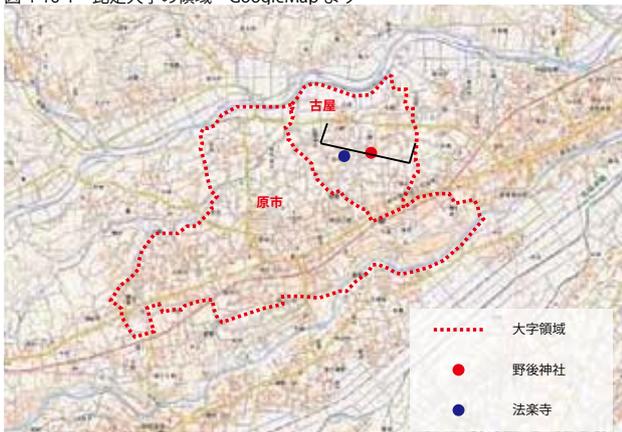


図 4-16-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

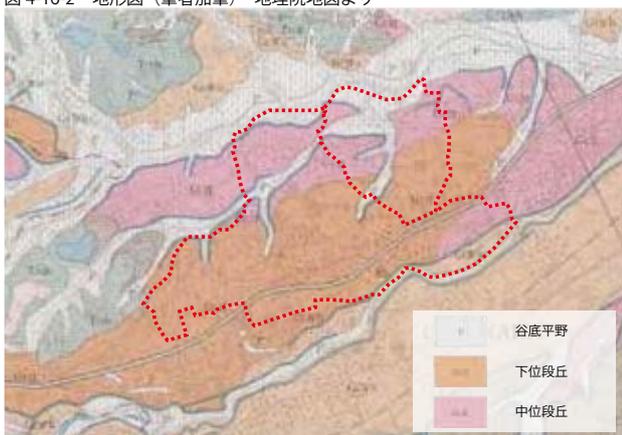


図 4-16-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

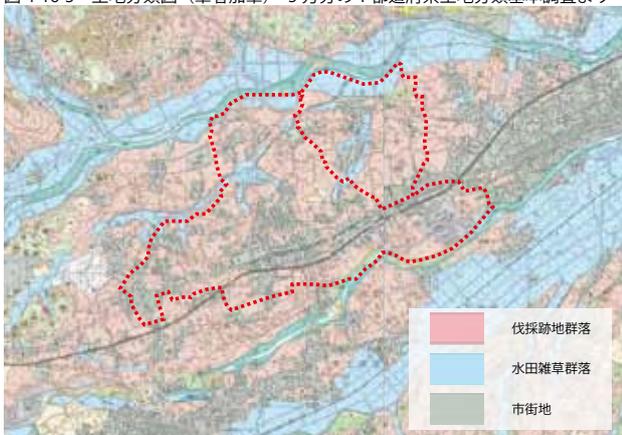


図 4-16-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

碓氷郡野後郷は安中市原市町、古屋に比定されている。歴史的物事として創立 1884 年以前の古屋、高別当を氏子とする野後神社があげられる。

### 2) 実見した際の概要

野後郷は南方向に碓氷川、北部に九十九川（碓氷川支流）が流れ、段丘を形成している。本調査では野後神社のある安中市古屋を中心に調査を行った。

北部の九十九川周辺には水田が残っていた。また、入り組んだ谷底平野部にも地形に合わせた水田がみられた。段丘上には宅地、畑などがあった。

九十九川から法楽寺方向へ谷底平野の坂を上がっていくように実見した。段丘の際には雑木林（屋敷林ではなく自然林かと考えられるが詳細は不明）が茂り、段丘上には住居がクラスター状になっているのがみられた。このような段丘際の雑木林と住居群のセットは 6 つほど確認することができた。法楽寺、野後神社はそれぞれの小段丘の頂上にあり、その背後を住居と同じく雑木林が囲んでいた。この段丘際の住居・雑木林の集落構成は 1948 年時点においても確認することができる。

ドローンで比定地域を上空から撮影したところ法楽寺と野後神社の間にある谷間の地形に合わせた水田を確認することができた。段丘の上の際にはネギなどの畑や休耕地、また数家族分の墓石などがあった。

また、段丘上の中心部には 1978 年の航空写真にはみられなかった宅地が多くあることを確認することができた。

野後神社と法楽寺の間の谷底の水田から九十九川を向くとゆるやかな谷の地形に沿った段々の水田の向こうに山々の重なりが見えた。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は水田、畑地、住宅地である。野後神社と法楽寺の間を通る水田のように谷底平野を水田とし、段丘上と畑地、宅地とした明快な土地の利用がうかがえる。

小学校、市役所、病院等の公共施設は段丘最上部に位置する国道 18 号線沿いに集中して立地している。ドラッグストア、集合住宅なども同じく国道沿いに立地している。



図 4-16-5 段丘際に立地している住居 撮影=梶尾智美



図 4-16-6 谷間の地形に合わせた水田 ファントム撮影

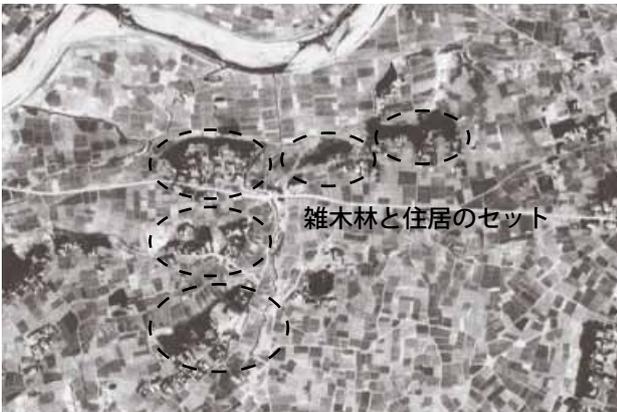


図 4-16-7 航空写真 (1948年)



図 4-16-8 航空写真 (1999年)



図 4-16-9 断面ダイアグラム

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年の航空写真では生産地が多く、住居が段丘の際に散らばっている様子がうかがえる。1978年の航空写真では南端に接する国48号線沿いに住居が増えていることが確認できる。1999年の航空写真で水田を囲むように住居が点在していたり、旧家の間の家々がより密に増えている様子がうかがえた。

全体を通してみると鉄道が比定地域内を走っていないためか大型開発や生産地の多くが失われるといったことがないことがわかる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

水田は谷底平野や川沿いに残っている。宅地開発されている場所が多く見受けられるが畑地は段丘上であった。

以上のように生産地については地形を読み込んだ土地利用がみられた。また、地形の複雑さゆえか水田の形はあまり変わっていない。

##### ・集落構造

段丘の際に雑木林とセットになった住居群は野後において古くからの集落構造であろう。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。野後神社を中心とした検討が今後必要である。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

## 17 碓氷郡礪部郷 / 安中市東上礪部付近

担当：岸本太幹

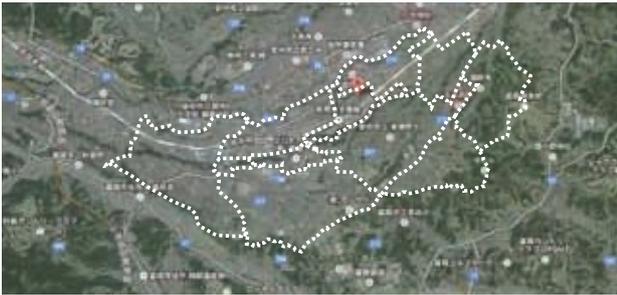


図 4-17-1 比定大字の領域 GoogleMap より

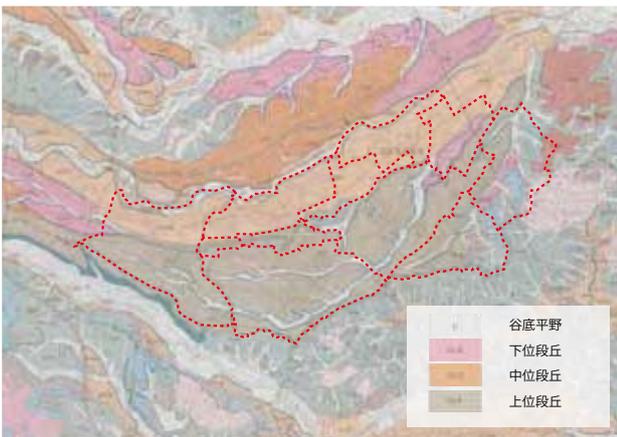
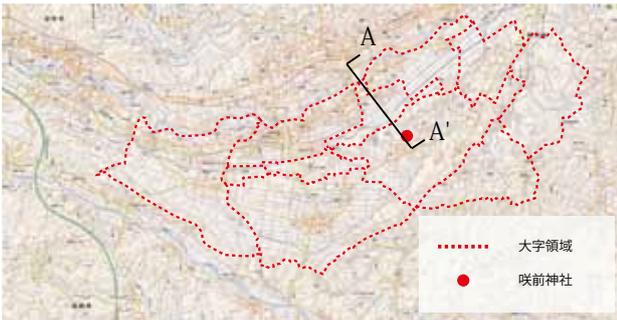


図 4-17-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より

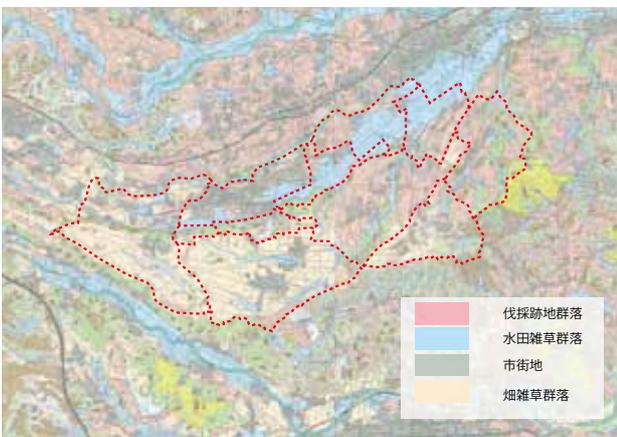


図 4-17-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

碓氷郡礪部郷は安中市東上礪部 1～4 丁目・上礪部・西上礪部・中野谷・鷺宮・上間仁田・大竹、松井田町人見一帯に比定されている。歴史的物事として 534 年創立の咲前神社がある。また、礪部周辺から弥生土器等が多数出土している。

### 2) 実見した際の概要

礪部は碓氷川の南岸に沿って広がりながら、二段の大規模な河岸段丘を形成している。上部の段丘は畑地、住宅地、下部の段丘には水田、住宅地が広がる。下部の段丘には国道、水田内には碓氷川と平行に JR 信越線が走っている。

本疾走調査では鷺宮地区の咲前神社周辺の集落を集中的に行った。上部の段丘にある咲前神社から南東に歩き集落を実見した。この咲前神社は集落の際の辻に位置しており、この辻は 1948 年の航空写真でも確認することができた。

咲前神社周辺の集落の石垣は立派な玉石を使っている民家が多くみられ、また敷地内に墓を持っている屋敷が複数見受けられた。

集落内の住民の話によると畑仕事をすると土器らしきものが頻繁に出土し、ときには貝なども出土するという。また、以前は桑などを植えていたが現在ではコンニャク畑やその他様々な野菜を植えている。（年代など詳しい情報は学習の森に保管されているという）このように咲前神社周辺の住民は段丘上の畑地を主な生産地として所有しているが、下の水田も一部所有しているという。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は上部の段丘では畑地、住宅地、下部の段丘では水田、住宅地である。下部には国道・鉄道ともに通っているため市街地化進んでいることが分かる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948 年の航空写真では段丘上、平野部ともに生産地が多く住居がちりぢりになっている様子がうかがえる。1967 年の航空写真では水田内に道路ができ、宅地開発が上部の段丘、下部の段丘ともにできていることがわかる。1996 年の航空写真では水田の整備が行われる。また、下部の段丘の市街地開発が顕著に行われる様子が伺える。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性



図 4-17-5 段丘上の畑 撮影＝岸本太幹



図 4-17-6 咲前神社 撮影＝岸本太幹

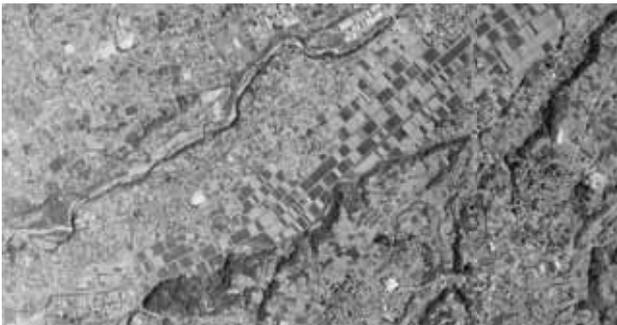


図 4-17-7 航空写真 (1948 年)



図 4-17-8 航空写真 (1999 年)

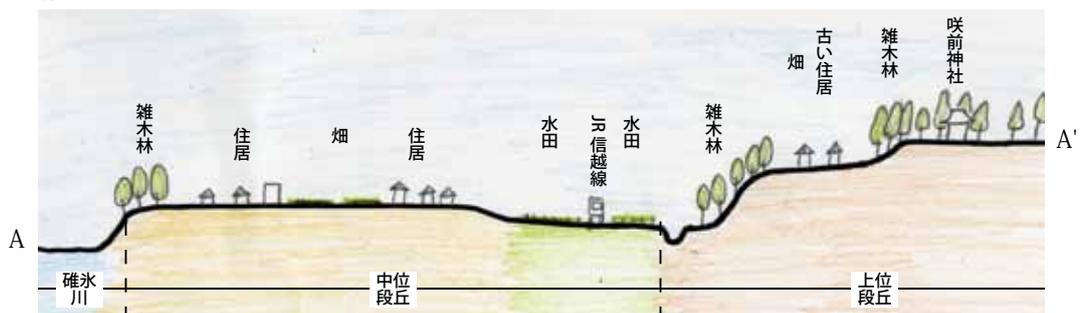


図 4-17-9 A-A' 断面ダイアグラム

・環境

信越本線周辺の水田は残されている。咲前神社のある段丘上は僅かな宅地開発がみられるが多くの生産地が確認できる。

・集落構造

集落の端に咲前神社を置く形態は磯部において古いものと推察できる。

また、碓氷川から運んだと思われる玉石によってできた石垣も古くから行われていた施行方法であろう。

・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。咲前神社を中心にどのように共同体があるか要検討。また、上部の段丘、下部の段丘の共同体にどのような関係にあるか検討する必要がある。また、磯部の比定範囲は広く複数の共同体によって成り立っていた可能性もある。

参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年

18 碓氷郡坂本郷／群馬県松井田町坂本・原・峠・入山・北野牧・西野牧・横川・五料 担当：堀井隆秀  
土塩・新井・上増田・下増田

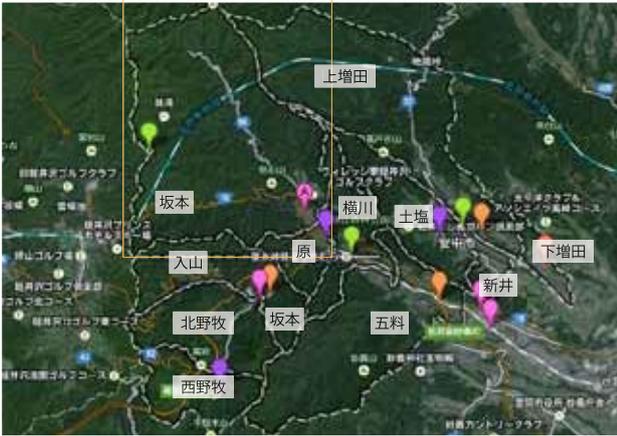


図 4-18-1 比定大字の領域（筆者加筆） google map より

1) 歴史的物事の情報

碓氷郡坂本郷は、『地名辞書』では現在の松井田町坂本・原・峠・入山・北野牧・西野牧・横川・五料に、『日本地理志料』では松井田町原・横川・入山・五料・土塩・新井・上増田・下増田に、比定されている。

比定地一帯の歴史的物事は、古代から、関東地方と信濃・北陸をつなぐ交通の要所としてしられる碓氷峠が確認されている。

2) 実見した際の概要

比定地一帯は、後期更新世の低位段丘<sup>2</sup>、中・後期更新世の堆積岩類<sup>3</sup>、前期更新世の火山岩類<sup>4</sup>の地質上にまたがっており、集落部分は主に低位段丘上に立地している。山あいの中のわずかな平地に居住している。

本疾走調査では坂本を中心に実見した。坂本は、近世より坂本宿として知られ、中山道の道中・碓氷峠の東の入り口であった。坂本は東西の二本の川にはさまれ立地している。大字領域内には、集落の中央を走る国道 18 号線を北上して入った。

集落は 18 号線をはさんで、ほぼ左右対称の、短冊状の敷地割となっていた。家屋の背後に生産地としての水田があり、水田にひかれる水路も整備されていた。家屋の間口は 3.5 間が多く、その他に 7 間や 10.5 間のものもあった。

住民の方に話をうかがうことができた。現在 18 号線の両サイドに、道と並行して、水路が走っているが、これは近年作られたものである。家屋裏の水路と違い、こちらの水路は生産などに使用しているわけではない。昔は 18 号線の真ん中の位置に水路が一本だけ走っていたようで、馬車の往来の区切りとしても働いていたようだ。また、短冊状の敷地割には、かつては、短冊の敷地同士をつなぐ道は整備されていなかったようである。

3) 比定大字領域内の分析

坂本の領域内の土地利用は、図 4-18-4 によれば、ほとんどがカラマツ植林、クリ - ミズナラ群落などの森林である。その中でわずかにみられる市街地は、下位段丘上に立地している。また森林以外の場所としては、集落の東にゴルフ場がある。

4) 空撮写真を主体とした編年比較

1806 年成立とされる『分間延絵図』には、坂本宿の

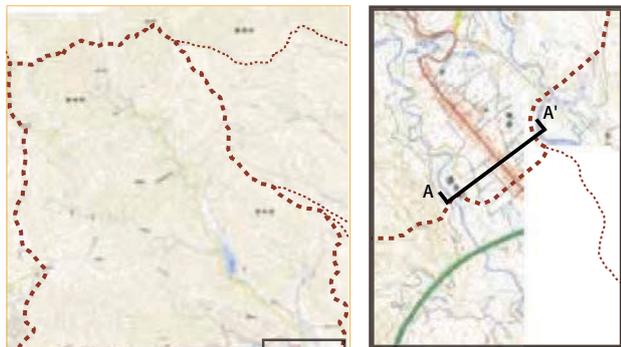


図 4-18-2 地形図\_坂本 (筆者加筆) 地理院地図より

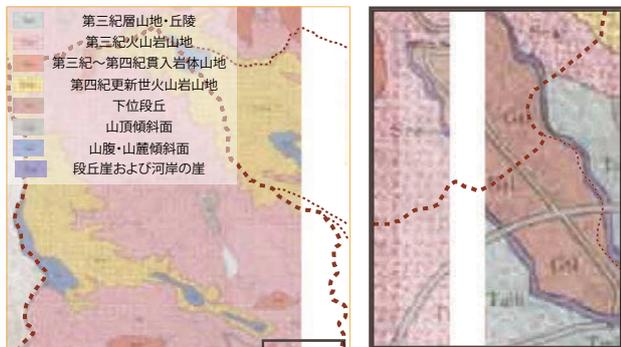


図 4-18-3 地形分類図\_坂本 (筆者加筆) 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

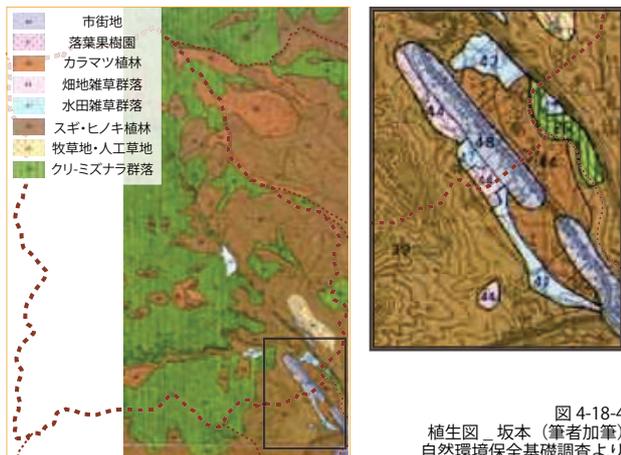


図 4-18-4 植生図\_坂本 (筆者加筆) 自然環境保全基礎調査より

- 1 『安中市史 第二巻 通史編』(2003, 安中市) 参照。
- 2 川沿いの低地に分布している約 7 万年前～1 万 8000 年前に形成された段丘層。
- 3 約 1500 万年前～700 万年前に形成された地層。
- 4 約 170 万年前～70 万年前に噴火した火山の岩石(安山岩・玄武岩類)。



図4-18-5 上空より南をむき、集落の様子をながめる 撮影=元永二郎

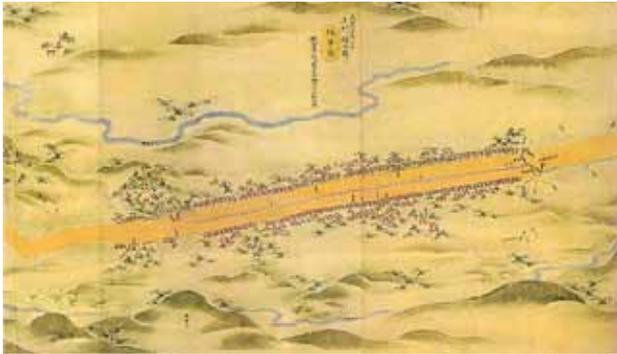


図4-18-6 坂本宿 『分間延絵図』(1806)より



図4-18-7 航空写真\_1991年

5 様子が描かれている。現在の、道を挟んで左右対称に家屋が立地している様子がすでにみられる。また聞き取りにあった、道の中央に水路が走っていた様子がうかがえる。また、この絵図では、家屋背後の生産地の様子は確認できない。1945年の航空写真では1806年の絵図とのおおきな違いは確認できない。

1991年の航空写真では現在の集落の姿とほとんど違いはないように見える。1945年からの違いは、集落の東にゴルフ場ができていること(図4-18-5の左上)、集落の南に上越自動車道ができていること(図4-18-5の右上)などがあげられる。生産地の水田については、大きな変化はないように思われる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

山間において、希少な居住可能な平地に、選択的に住まっている様子がうかがえる。生産地の水田については、継続的に手がはいるり、利用されていると思われる。

#### ・集落構造

地質・地形を読み込んだ居住部の選択、また短冊状の明快な土地利用が継続的になされていると思われる。

#### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。短冊状の敷地が守られ続けていること、水路の管理などについて調査をすべきと思われる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／『安中市史 第二巻 通史編』安中市、2003年

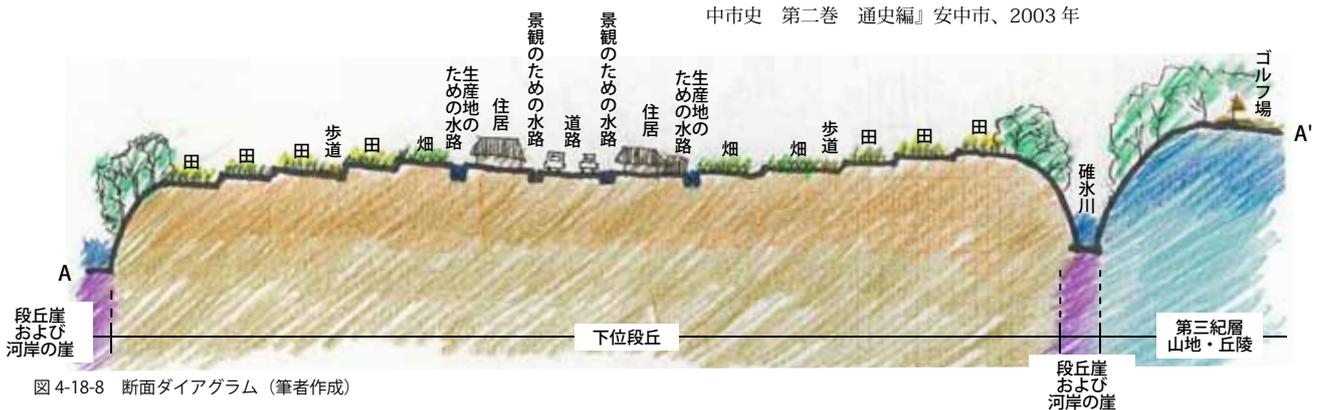


図4-18-8 断面ダイアグラム (筆者作成)

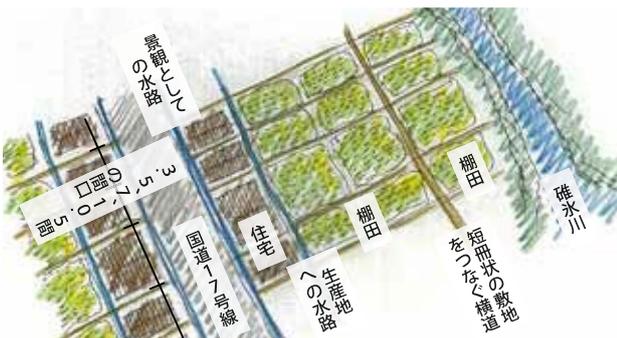


図4-18-9 平面ダイアグラム (筆者作成)

5 『分間延絵図』は五街道について、幕府の命により作られた、絵地図。現在東京国立博物館と通信博物館に所蔵。以下 web サイト参照。「東海道の地図・絵画・文学について」[http://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/02\\_tokaido/04\\_qa/index6/answer2.htm](http://www.ktr.mlit.go.jp/yokohama/tokaido/02_tokaido/04_qa/index6/answer2.htm) 2014.10.05 時点。図 18-6 の出典は以下。web サイト「わたし彩の『江戸名所図会』」<http://chuukyuu.info/otonanonurie/2007/01/3007.html>

## 19 賀美郡小島郷／埼玉県本庄市小島

担当：犬伏順一



図 4-19-1 比定大字の領域 GoogleMap より

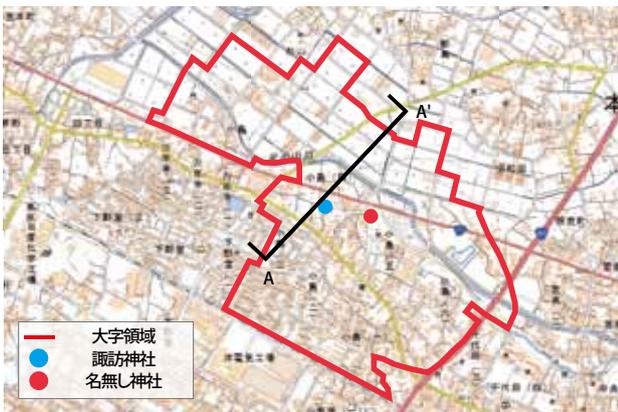


図 4-19-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

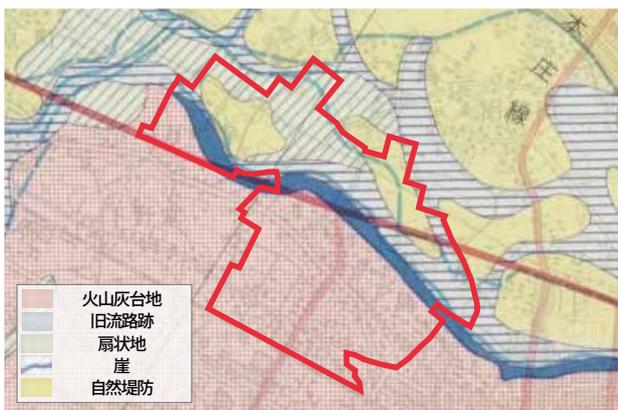


図 4-19-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-19-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

賀美郡小島郷は本庄市小島に比定されている。

小島は県重要遺跡の旭・小島古墳群が存在する。これは埼玉県の古墳群であり、本庄市と上里町にまたがる大規模なものである<sup>1</sup>。

### 2) 実見した際の概要

小島は利根川水系なる元小山川の周辺に位置し、国道17号、中山道が集落の中心を東西に横断している。中央の河川から南側は火山灰台地、北側は扇状地、自然堤防の地形を形成している。集落北側は大部分を水田が占めており、扇状地上は畑が多く、南部は住宅地である。

諏訪神社を中心に、台地、河川、扇状地と北進しながら実見した。諏訪神社の周囲は住宅が多いが、畑も多く見られた。河川沿いに古墳が多く残存しており、古代に人が住んでいたと思われる。また2つの神社が、盛り上がった土地の上に建てられている事から、古墳の跡地に建立したと考えられる。諏訪神社から少し西へ行った所にお墓があった。周囲より少し微高地にあり、普段から綺麗に手入れがされ、集落の住人が大切に護っている印象であった。

河川沿いは崖になっており、台地と元小山川との高低差は、大きい所では10mほどあった。崖には所々石垣が用いられていた。北側は水田が広がっており、河川から北に向って、段々と下がっていた。自然堤防上には畑地があり、台地上のものに比べると規模が大きいようであった。

ヒアリングによると、源氏の時代、長野から人々が小島に移り住んだと言われ、諏訪神社は長野の諏訪から移してきたものとされる。かつては河川がこの集落の主要な交通手段であり、古代は河川沿いに多くの人が住んでいたと考えられる。中山道が開通以降、陸上交通が栄えたため、現在は街道沿いに人々が住んでいるようである。河川沿いは貝殻や埴輪等が昔多く出土した<sup>3</sup>。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。住宅地は火山灰台地に、畑地は火山灰台地、自然堤防に、水田は扇状地上に位置している事が、土地分類図と植生図との比較により分かる。集落の南部に市街地、住宅地、北部に水田、その間畑地が広がり、明快な土地利用の様

1 web サイト「旭・小島古墳群」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%AD%E3%83%BB%E5%B0%8F%E5%B3%B6%E5%8F%A4%E5%A2%B3%E7%BE%A4> 2014.10.08 時点

2 諏訪神社とその近くに名称不明の神社が存在する。ともに創建年代は不明である。

3 住人からのヒアリングによる。



図 4-19-5 残存している古墳 撮影＝梶尾智美



図 4-19-6 畑のある台地と水田のある扇状地との際 撮影＝岸本太幹



図 4-19-7 航空写真（1960年）



図 4-19-8 航空写真（1980年）

子がうかがえる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1960年の航空写真から、ちりぢりに住居が点在しているが、中山道沿いに多くが密集していることが分かる。また、現在ほど宅地は広くなく、生産地が多い様子がかがえる。

1980年の航空写真では、大字比定領域外の多くの地域で開発が進んでいることが分かる。工場が多く立ち並ぶ。一方、集落内は住宅地が南側にだいぶ増えたが、その外はあまり変わっていないように見受けられる。火山灰台地上の生産地は1980年時点で残っているが、現在ほとんどがちりぢりに小規模な畑となっている。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。しかし火山灰台地上の畑地はほとんどが住宅地にとって変わり、北方の生産地に変化はないのであるが、今後の土地利用のあり方について考える必要がある。

##### ・集落構造

台地上に居住地を構える集落構造は、昔からのものと考えられる。河川、住宅地、生産地の規模や立地関係から、集落構造としては妥当である。

集落南東に増えた住宅地等、土地利用の変遷については、もう少し検討を要する。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後検討を要する。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

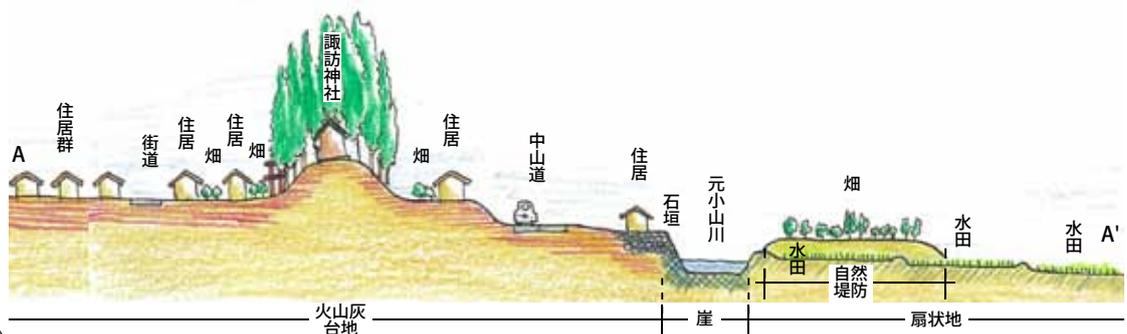


図 4-19-9 (下)  
A-A' 断面ダイアグラム

## 20 緑野郡佐味郷 / 高崎市新町

担当：岸本太幹



図 4-20-1 比定大字の領域 GoogleMap より

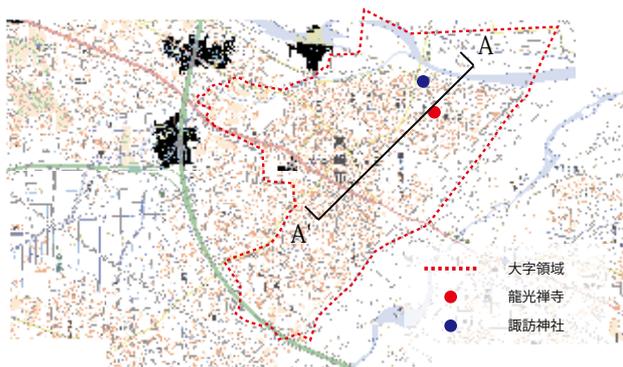


図 4-20-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

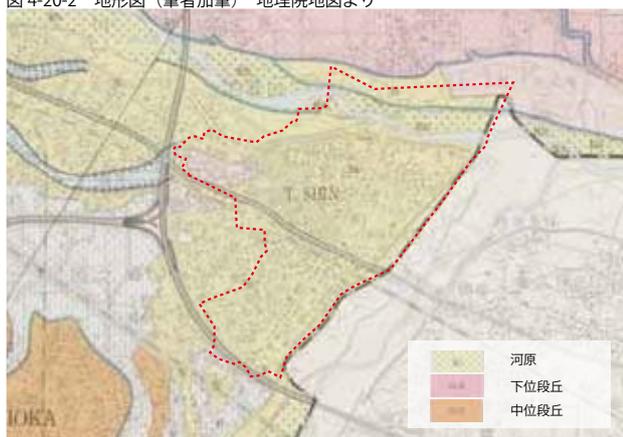


図 4-20-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

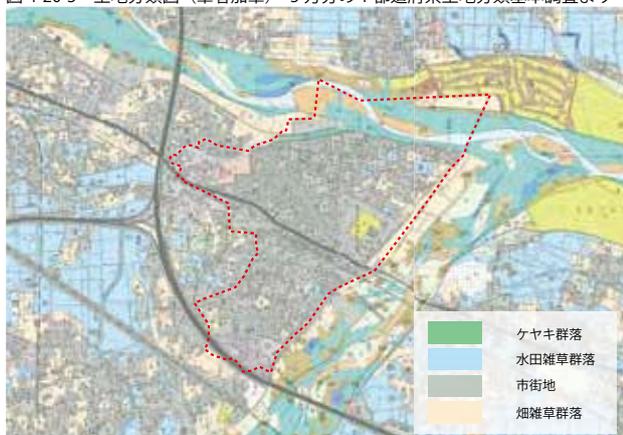


図 4-20-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

緑野郡佐味郷は高崎市新町に比定されている。龍光禅寺、八坂神社、首塚八幡宮、胴塚稲荷古墳は 15 世紀から 16 世紀に創立したとされる。烏川と神流川の合流地点にあるため、たびたび洪水に見舞われている。

### 2) 実見した際の概要

佐味郷は神流川と烏川の合流地点に位置する。比定地内には JR 高崎線、国道 12 号が通っている。

航空写真から確認できる大型施設として陸上自衛隊駐屯地、小学校、中学校などの公共施設が確認できる。

本疾走調査では神流川橋を東側から比定地区内に入り、自衛隊駐屯地付近を通過して北上し、龍光禅寺周辺と岩倉橋付近を実見した。

自衛隊駐屯地、小学校などの大きな施設は宿場町のある県道 178 号線の北側に位置しているため宿場町への影響は少ないようにみえた。

龍光禅寺の曲がりくねった道や街区は迅速即図からも確認することができ、一方、道・街区が保存されているにも関わらず住居のほとんどが建売り住宅やアパートとなっていた。

その後、岩倉橋付近を実見したが河岸整備をしていた様子が伺えた。生産地は河沿いのグラウンドの間にある畑くらいしか確認することができなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

佐味郷／新町を構成する要素のほとんどは市街地であり、河川敷の一部に畑地がある程度である。

烏川と神流川の合流地点のため過去に何度か洪水の被害がある。高崎市のハザードマップによれば龍光禅寺周辺は洪水の警戒地区であり、決して安全な場所とは言えない。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年の航空写真においてすでに高崎線（1883 年開業）を確認することができる。また、宿場町周辺だけでなく新町駅を中心とした市街地も確認できる。一方、龍光寺周辺は生産地に囲まれている様子が伺える。

1970 年代の航空写真においては駅周辺と、宿場町周辺のほとんどが市街化されている。龍光寺周辺はこの時点においても四方に生産地を残しているがその後時代が進むに従って徐々に生産地を宅地に変えていくのが確認できる。

全体を通してみると駅、宿場町周辺は開発の速度が龍光寺付近に比べて速いことがわかる。また、龍光禅寺の宅地化は実見した際に分譲地として売りに出されていた



図 4-20-5 古くから道 撮影=梶尾智美



図 4-20-6 古くからある道 撮影=梶尾智美



図 4-20-7 航空写真 (1939年)



図 4-20-8 航空写真 (1948年)

ことから今後もしばらくは続くと考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

かつては龍光禅寺周辺には生産地が多くあったがその後の開発によって消滅しており、現在は河川敷のごく一部のみになっている。一方、烏川の対岸にあるわずかな生産地の所有やその利用形態などが気になる。

#### ・集落構造

龍光禅寺周辺や宿場町の道は迅速測図をたどることができる。一方、生産地のグリッド、道等は迅速測図でもたどることが困難なほど開発されている。

#### ・共同体

本疾走調査では共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／高崎市ハザードマップ、高崎市 2014年

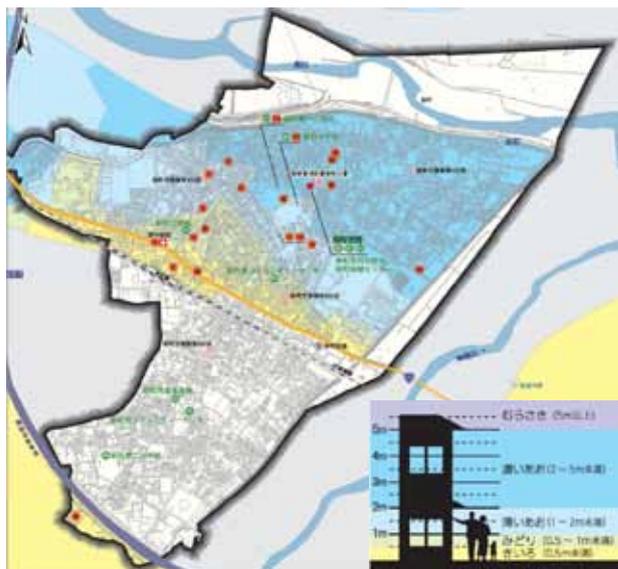


図 4-20-9 新町ハザードマップ

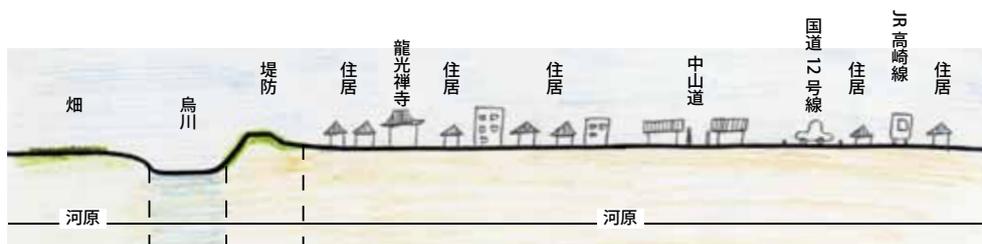


図 4-20-10 A-A' 断面ダイアグラム

## 21 群馬郡島名郷／群馬県高崎市島野

担当：佐藤勝



図4-21-1 比定大字の領域 GoogleMapより

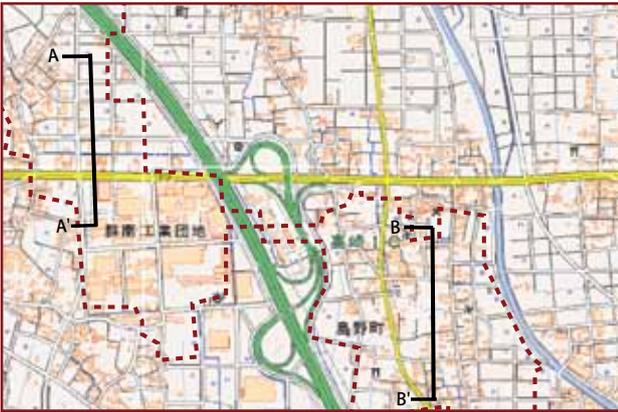


図4-21-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図4-21-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より

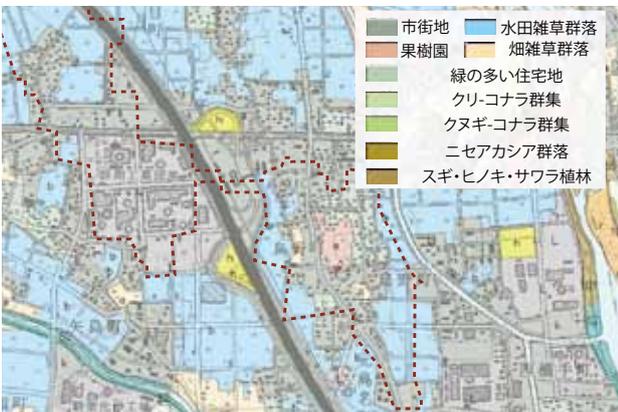


図4-21-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

群馬郡島名郷の北西部と南東部にそれぞれ位置している一ツ谷神社と相円寺の周辺はそれぞれ門前町として発展してきたとされているが町全体として昭和40年頃から工場の開発が進み、工場地帯としての性格を持っている印象を受ける。

### 2) 実見した際の概要

島名郷は東側に利根川、西川に井野川がある川に挟まれた傾斜がほぼ見られない最下位断面丘群に位置しており、(図4-21-1)から見てとれるように北西と南東に伸びている特徴的な町である。また、中心に関越自動車道のインターチェンジがある事も特徴の一つとして挙げる事ができる。

北西部に位置している一ツ谷神社の方から南東部に位置している島名神社にかけて実見した。一ツ谷神社の周辺は屋敷林が多く存在していたが、一ツ谷神社から外れると工場等が多く見受けられた。南東部は北西部に比べ古い屋敷林を見る事ができ、また微細ではあるが、地形のアップダウンが確認できた。相円寺の周辺には歴史を感じられる民家をいくつか確認する事ができ、北から南に流れる細い水路を確認する事ができた。島名神社の村社は集落の方向を向いており、神社と集落の繋がりが強いように感じられたが、歴史がある神社なのかどうかは確認する事ができなかった。

町全体として北西部よりも南東部の方が歴史の積み重ねを感じやすかったが、それは北西部に比べ南東部の方が工場開発が進んでおらず、いくつかの水田が残っている事で細い水路などの歴史の積み重ねを感じやすいものが比較的に残っていたためであると考えられる。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は工場、水田、住宅地である。地形が大きく変わるという事は無く、南東部の方に少しアップダウンがあるぐらいなためか、地形による工場、水田、住宅地の配置の違いというものは見られなかった。地形での違いは見られなかったが、北西部では工業団地があり工場が多い一方、南東部では住宅や水田が多いという方角での違いが見られた。



図 4-21-5 島名神社 撮影=梶尾智美



図 4-21-6 航空写真 (1963年)



図 4-21-7 航空写真 (1974~1978年)

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1963年の航空写真では町の全体に生産地が広がっており、ちらほらと住宅が見られるという様子だったが、1974~1978年の航空写真を見てみると町の中心に貫越自動車道が通り、インターチェンジも配置され、それに合わせるように工業団地や工場が配置され、住宅も数を増やしている事がわかる。このことから、1963年と1974~1978年の間で生産が農業から移り変わっている事がわかる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については昭和40年頃から大きく変わってきており町の全体を締めていた水田が工場に変わるなど、環境が大きく変わってきている。

##### ・集落構造

一ツ谷神社と相円寺周辺の門前町として発展してきた集落部分と工場が配置された事によって新しく増えた集落の二種類が存在するが全体として後者が多い印象を受けた。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年／

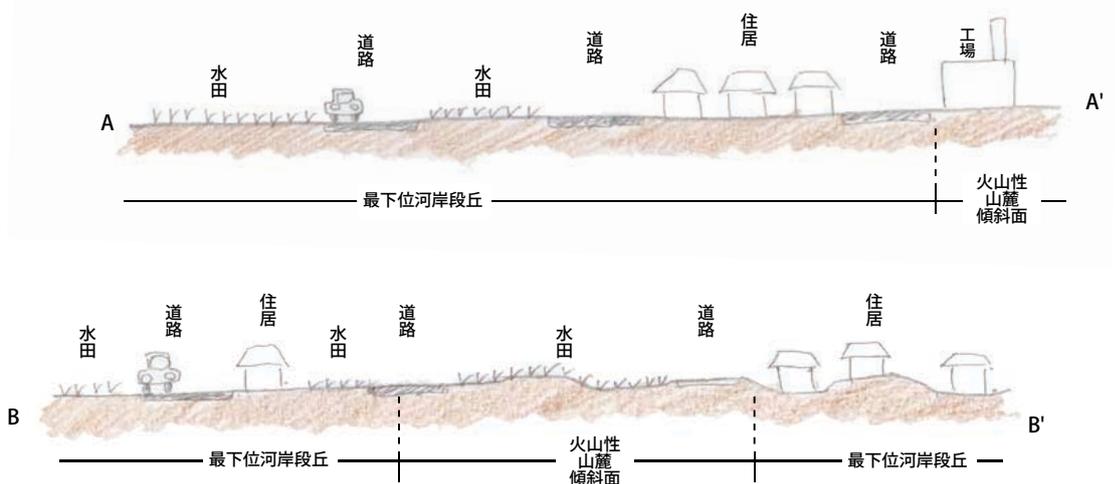


図 4-21-8 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム  
図 4-21-9 (下)  
B-B' 断面ダイアグラム

## 22 那波郡朝倉郷／群馬県前橋市朝倉町

担当：佐藤勝



図4-22-1 比定大字の領域 GoogleMapより

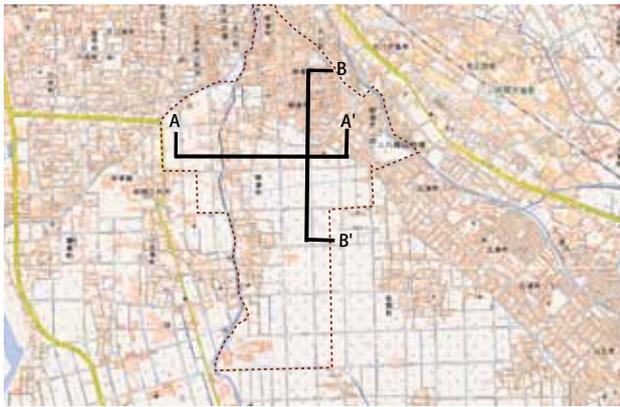


図4-22-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図4-22-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より

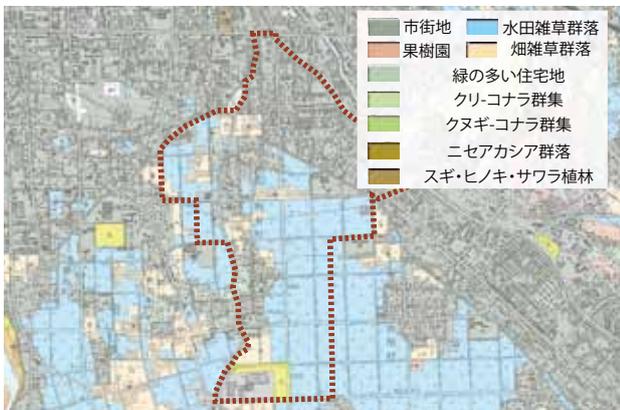


図4-22-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

那波郡朝倉郷は朝倉君の故地とされている所は前橋地域の南東部、広瀬川右岸に沿った一帯で、朝倉町という地名も残されている。

北東地域は市街化が進んでいるのに対し、南西部は市街化していない。

### 2) 実見した際の概要

朝倉郷は大きく分けて上位の岩石台地と中位の岩石台地の上に位置し、上位の岩石台地上には主に水田が僅しており、中位の岩石台地上には市街地が位置しており、地形から朝倉郷の市街としての土地利用の状態が見て取れる。また、朝倉郷には飯玉神社、石神神社、成田山恵勝寺前橋護摩堂の三つの社寺があるがどれも中位の岩石台地上に位置している。

上位の岩石台地と中位の岩石台地の境界部にそって飯玉神社から前橋八幡山古墳までを実見した。飯玉神社周辺は前橋八幡山古墳に比べ市街化が進んでいる印象を受けた。前橋八幡山古墳は東日本最大の古墳と呼ばれており、そこから朝倉町内の水田や隣町の様子を伺うことができた。また、古墳の周囲は旧河川を利用した道路が多く確認できた。

南の地域には50～60年程たっていると思わせる住宅が多く、百姓のものと思われる住宅には母屋が確認できたほか、養蚕業をやっていたような建築物も確認することができた。

春日神社という神社が朝倉町のすぐ近くにあり、140年程の歴史があるとされているが、もともとはその位置にあったものではなく、現在の位置よりも東に位置していたものが浅間山の噴火の影響により、現在の位置に遷座したとされている。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成しているのは大きく水田と住宅に二分することができ、上記の通り水田は上位の岩石台地上に、水田は中位の岩石台地上に位置していることが土地分類図と植生図を比較することでわかる(図4-22-3,4)。

土地利用が地形によって変わる例として見て取れる。



図 4-22-5 飯玉神社 撮影=佐藤



図 4-22-6 航空写真 (1947 年) 地図・空中写真閲覧サービスより



図 4-22-7 航空写真 (1970 年) 地図・空中写真閲覧サービスより

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年の航空写真では生産地が多く、住居がある程度まとまりが感じられるが、いくつかの小集落が散り散りになって立地している様子がうかがえる。1970年になると今までは生産地となっていた北部が開発され住宅地になっている。そのかわり、(図 4-22-6)に加筆した部分の住宅が撤退して、生産地に変わっていることがわかる。

先述した土地分類に合わせた土地利用の仕方は昔からのものではなく、近年になってからのものだという事も空撮写真を比較することでわかった。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

##### ・集落構造

集落構造に関しては(図 4-22-7)に加筆している古くから存在している集落①と近年になってからできた集落②の二つが存在していることがわかった。その両方が中位の岩石台地に位置し、水田が上位の岩石台地に立地しているのが土地利用の観点からみて理にかなっているものなのかは今後検討する必要があると見られる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／北橋村誌編集委員会編『北橋村誌』北橋村役場、1975 年／web サイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域指定箇所」(pref.gunma.jp)

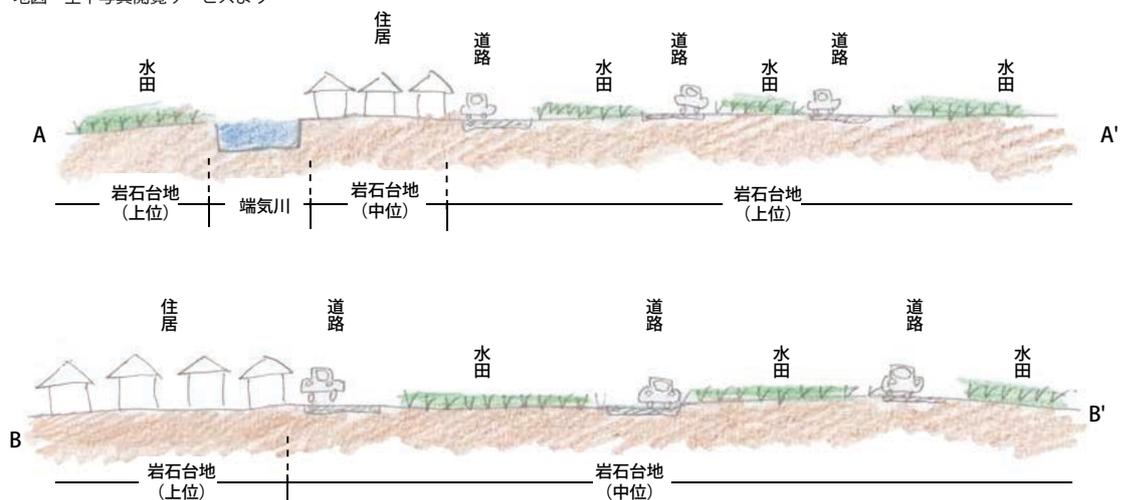


図 4-22-8 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム  
図 4-22-9 (下)  
B-B' 断面ダイアグラム

## 23 那波郡田後郷／前橋市山王町

担当：岸本太幹



図 4-23-1 比定大字の領域 GoogleMap より

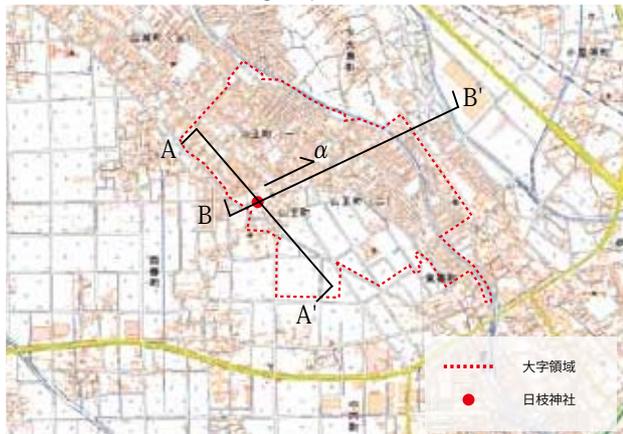


図 4-23-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

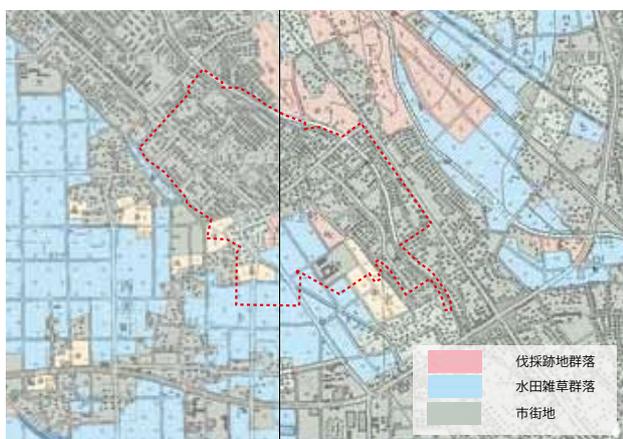


図 4-23-3 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より



図 4-23-4 日枝神社から水田へ続く水路

### 1) 歴史的物事の情報

那波郡田後郷は現在の前橋市山王町に比定されている。

歴史的物事としては日枝神社が創立 7 世紀後半とされ、群馬県最古の寺院跡とされる。朝倉古墳群に含まれる文珠山古墳、阿弥陀山古墳があるが年代は不詳。また、その他にも実見において古墳と思われるマウンドがあるが詳細は不明。

### 2) 実見した際の概要

前橋市山王町は東部の菲川に沿って広がっている。

まず、山王町の北部から日枝神社へ実見した。参道へと通じる沿いは宅地開発が進んでおり生産地は僅かにしか見受けられなかった。

日枝神社は南北の道と、東西の道の交差点に位置していた。神社から東方向への道は直線で見晴らしがよく参道のような雰囲気を持っていた。(以下参道と呼ぶ) この参道は迅速測図からも確認することができる。日枝神社はこの山王町の中でも若干高い場所に位置しており日枝神社からこの参道へと水路が流れていた。また、日枝神社から南東方向に伸びる道にも水路が流れておりこの水路はそのまま南部に残っている水田へと注いでいた。

比定地内にはいくつか古墳があり、文珠山古墳は古墳の上には木々が生い茂り周囲を墓地として利用していた。一方、阿弥陀山古墳は丁寧に芝を葺かれ公園化されていた。

山王町には上記の古墳だけでなく小さなマウンドの上に建つ墓などが見受けられたが詳細は不明であった。

### 3) 比定大字領域内の分析

山王町を構成する北部の僅かな水田以外のほとんどは宅地であることが植生図から分かる。日枝神社の参道がこの水田と宅地の境のように見える。

また、山王町付近は段丘上にあるので洪水危険区域の指定はなされていない。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図を見ると日枝神社の参道沿いに住居が並んでおり、それ以外は生産地であることが伺える。1948 年の航空写真も迅速測図からほとんど変化していないことが伺える。1975 年になると日枝神社の参道に直角に刺さるように道路が敷かれ、その道路沿いに宅地が広がっているのが確認できる。一方参道より南部の地域は生産地がほとんど残っている。

1995 年には参道より南側にも道路が敷かれ宅地が南部に広がり始めている。現在は菲川と道路沿いに宅地が



図 4-23-5 南側に残る生産地 撮影=岸本太幹



図 4-23-6 迅速測図



図 4-23-7 航空写真 (1976 年) 国土地理院

密に広がっている。

全体を通して日枝神社の参道より北部の地域と南部の地域の宅地開発のスピードに違いがあることが分かる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

比定地域の参道より北部は市街地化が進んでいるが北部の水田、水路などが残っている。

#### ・集落構造

日枝神社の参道沿いに門前町のような住居配置は迅速測図からも確認することが可能であり、山王町において古くからのものであると推察できる。また、日枝神社の参道がどのように南部と北部の開発に影響を与えたか今後検討する必要がある。

#### ・共同体

日枝神社の氏子域は広いので今後検討が必要である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年



図 4-23-8 a の方向から撮影。中心に参道が通り、左手に住宅地、右手に水田が広がる。 撮影=元永



図 4-23-9 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム



図 4-23-10 (下)  
B-B' 断面ダイアグラム

## 24 那波郡鞆田郷／群馬県高崎市下斎田町

担当：犬伏順一



図 4-24-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-24-2 地形図（筆者加筆）地理院地図より

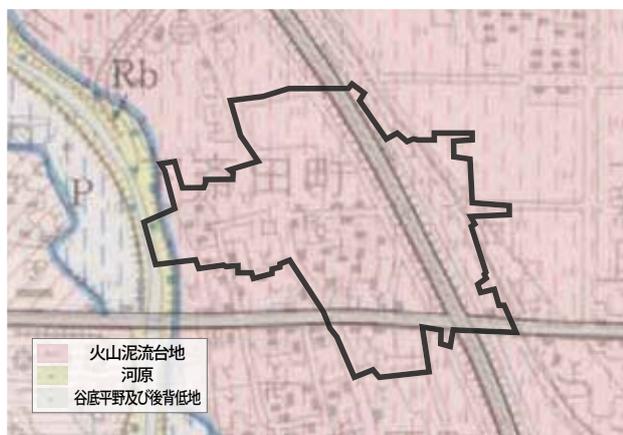


図 4-24-3 土地分類図（筆者加筆）5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-24-4 植生図（筆者加筆）自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

那波郡鞆田郷は高崎市下斎田町に比定されている。

下斎田町には、古代時代の円形の第 4 号天神山古墳が残っている。江戸時代に一番栄えた町であるため、江戸期の紙媒体の記録は多く残っている。

### 2) 実見した際の概要

那波郡鞆田郷は高崎市下斎田町に比定されている。

下斎田町は西に井野川、東に滝川があり、両河川に挟まれように位置する。火山灰台地上に立地し、井野川付近を除いて、比較的平坦な地形である。滝川に沿って関越自動車道が集落内を南北に通っている。中央に住宅地があり、周囲に田畑が広がる。

集落の中心にある諏訪神社を中心に、西側の住宅地を実見した。神社には公園が隣接しており、大きい屋敷林に公園を含めて囲われている。住宅地は敷地も規模も大きく、立派な家屋が多かった。住宅も大きい屋敷林を有している物が多かった。高窓のある家が多く、養蚕をやっていた農家が多くいたと思われる。住宅間はものすごく密集しているわけではないが、ある程度のまとまりを形成しているのが、集落構造の特徴と思われる。

東側に関越自動車道が通っているが、集落に対して直接の悪影響があまりないように思われる。10m ほどの高架であり、集落の際部分に自動車道のインターチェンジがあることが、その理由と思われる。自動車道以東は、滝川までの一面に水田が広がっている。

西側は井野川左岸にあたるが、河川に向って段が急激に下がっている。畑地は西側に多く、西の井野川を畑地に、東の滝川を水田に利用していると思われる。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。全て火山泥流台地上に位置していることが、土地分類図と植生図との比較より分かる。

平坦な台地の（つまり環境からの規制がない）ため、関越自動車道もあり、本来ならばグリッドやなにか人為的な土地利用があってもおかしくないとも思われる。もしくは無秩序に土地を選んでいった結果、今の景観になったのかもしれない。そういった意味で、土地利用の変遷の仕方について、今後検討すべきと思われる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1975 年の航空写真から、敷地の大きい立派な住宅が南に立ち並んでいる。北方には生産地が広がり、大きい屋敷林がみられる。関越自動車道の敷設に向けてと思われるが、既存の畑地に仮の道路が既にできている。



図 4-24-5 関越自動車道と水田との際 撮影=岸本太幹



図 4-24-6 立派な家屋や大きい屋敷林の様子 撮影=梶尾智美



図 4-24-7 諏訪神社 撮影=梶尾智美



図 4-24-8 航空写真 (1975 年)

1995 年の航空写真では、関越自動車道が開通している。この開通に伴ってか、付近に圃場整備が行われた様子が分かる。西側の生産地は、関越自動車道から離れているからか、あまり影響を受けた様子がなく、住宅地の規模や立地なども変化がないように思われる。

5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

・環境

火山灰台地上に位置しており、河川の氾濫といった弊害は避けられる環境である。また関越自動車道の敷設が環境面では大きな変化であるが、これによる悪影響は本疾走調査では見られなかった。

・集落構造

住宅は立派なものが多く、住宅はある程度のまとまりを持ちながら、過密していない点が集落構造の特徴と言える。本疾走調査では集落構造にあまり変化がないように思えるため、詳細の変遷について、今後検討を要する。

・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後検討を要する。

参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年



図 4-24-9 航空写真 (1995 年)

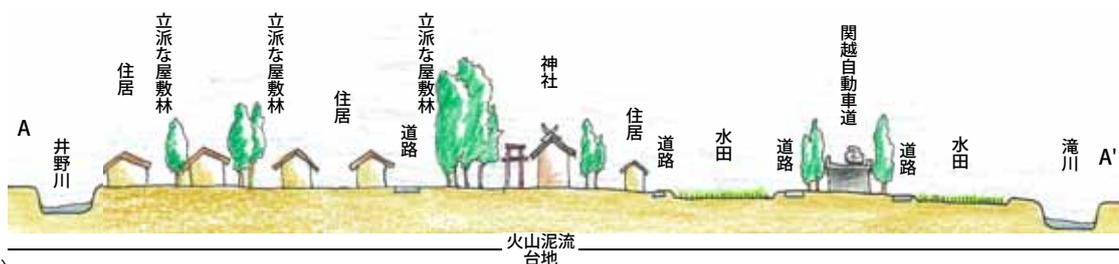


図 4-24-10 A-A' 断面ダイアグラム

25 那波郡委文郷／群馬県伊勢崎市上之宮町（現 伊勢崎市東上之宮町） 担当：相原雄太

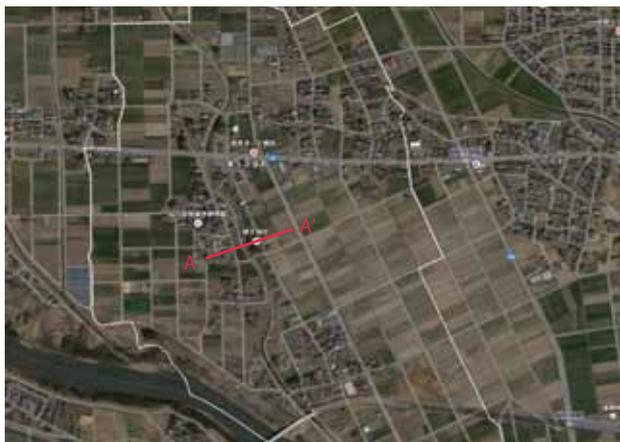


図 4-25-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-25-2 石垣に使われていた丸い石



図 4-25-3 氏神



図 4-25-4 神社と住宅地の関係（右：神社 左：住宅）

1) 歴史的物物の情報

現在は比定大字の南に利根川が流れているが、これは中世の利根川変流によるものである。現在の地名「上之宮」は倭文神社とセットで考えられ、利根川を挟んで反対側にある地名「下之宮」は火雷神社とセットで考えられている。倭文神社は機織の祖神として、または農耕、養蚕の神として尊崇されてきた。創建は創建年代第11代垂仁天皇3年とされているが、これを明らかにする証拠は見つかっていない。この倭文神社には中世期から田遊びという田植えの予祝行事が伝承されている。笹竹を持つ祭員が笹竹を振り、ご神歌を奉唱しながら鳥居と拝殿の間を三往復した後、町内を巡行する。戻ると再び鳥居に整列し、鳥居と拝殿の間を三往復する。このように田遊びは倭文神社内だけでなく、集落内全体をまきこんだものになっている。対する火雷神社は雷の神様である火雷神を祭っている。麦薪ゴジンジは(御神事)は貞観4年(862年)より火雷神社に伝わる祭りで、毎年五穀豊穡、災難除けの秘密の神事をおこなっている。

また、この辺りには古墳が多くあると現地の方からお話を伺った。

2) 実見した際の概要

那波郡委文郷は台地上に立地するものの、他の集落で見られるような集落内での起伏はあまり見られない。この地域の石垣に使われる石は丸いものが多かった(図4-25-2)。倭文神社の西側には河川(用水路?)流れている。この河川(用水路?)の両脇には盛り土がされていた。

この集落内には氏神らしきものがいくつか確認できた(図4-25-2)。

3) 比定大字内の分析

集落を構成する主要素は水田と住宅である。倭文神社が比定大字の中心に位置し、その西側に住宅が広がる。その住宅を取り囲むように水田が立地している。

比定大字内の土地は非常にフラットで、他の集落のような起伏を読み解くことはできなかった。しかし、それほどフラットな土地でも微高地は選んで倭文神社が立地しているように感じた(図4-25-3)。

倭文神社はこの集落に大きな影響を与えている。それは田遊びが集落内を巡行するものであり、中世から伝承され続けていること、氏子の存在を示すような氏神を確認できたことから言える。

このあたりには古墳が多くあることから、その古墳には有権者が埋葬されている可能性が高く、古くから有権者に支配されてきた地域である可能性がある。

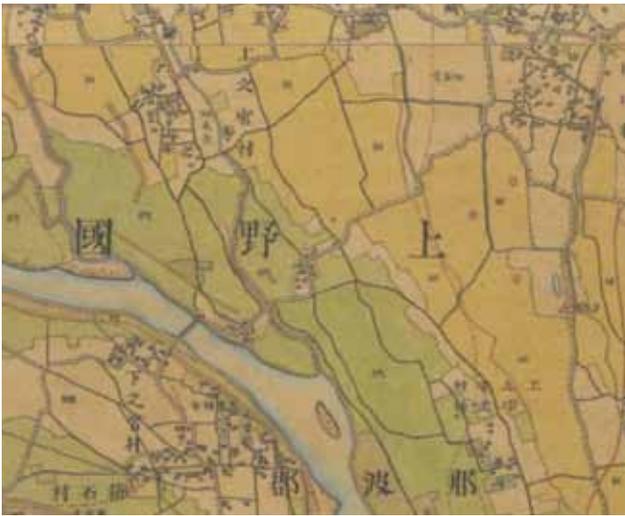


図 4-25-5 迅速測図

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図(図 4-25-5)、1975年の航空写真(図 4-25-6)、1995年の航空写真(図 4-25-7)、現在の航空写真(図 4-25-1)とを比較してみると、上之宮の集落の位置は変わらない。しかし、住宅の数が増えている。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

集落は台地上の非常にフラットな土地に立地している。しかし、よく見てみると微高地に倭文神社が立地していることがわかる。

##### ・集落構造

非常にフラットな台地上に住宅と倭文神社が立地している。そして、それらを取り囲むように水田があるような集落構造をしている。

##### ・共同体

集落内を巡行するような田遊びが伝承され続けていること、氏子の存在を示すような氏神が確認できたことから倭文神社を中心とした共同体が形成されてきた可能性がある。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1980年



図 4-25-6 航空写真 (1975年)



図 4-25-7 1995年の航空写真

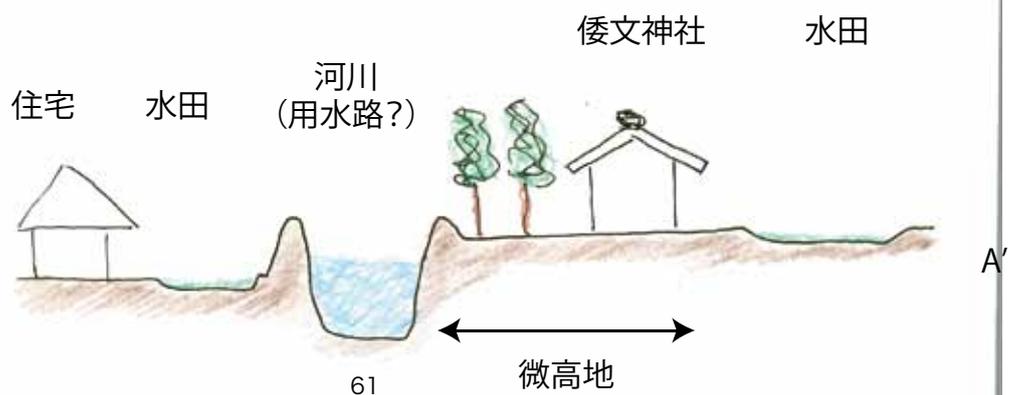


図 4-25-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 26 那波郡葦束郷／群馬県伊勢崎市葦塚

担当：諏佐遙也

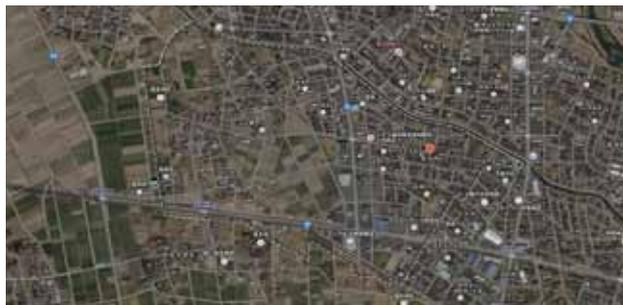


図 4-26-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-26-2 地形図（筆者加筆）地理院地図より ※透過黄色色部は明治前期の低湿地を示す



図 4-26-3 土地分類図（筆者加筆）5万分の1都道府県土地分類基本調査より



図 4-26-4 植生図（筆者加筆）自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

郷域は「地名辞書」に「委文郷の南東にして、丹良塚の名存す」とし、「日本地理志料」は葦塚村から「連取、田中島、太郎塚、田中北今井、山王堂」一帯に比定しており、現在の伊勢崎市葦塚を中心とした一帯と推定される。（和名類聚抄）

### 2) 実見した際の概要

葦塚は北に広瀬川、南に利根川が位置する谷底平野の集落である。また、県道 24 号が集落の中央、南部を東西南北に近年開通した。さらに利根川に端を発する用水路が集落の北西から南東に向けて走っており、これはやがて広瀬川に帰する。

葦塚の西側から東側へ、用水路を渡って集落を実見した。住居は区割りによってまちまちに散在しており、古くからある住居はみな防風林で敷地を囲っている。現地の住民の方の話によると、これは赤城山からの吹き下ろしから住宅を守るための役割があるという。ただし、管理の都合上や住宅の高性能化により、古くから住んでいる土地でも防風林は取り払われているものも見られる。また、住宅は敷地内で中庭を囲うような配置がなされているものが多く見られる。

中央部分に近づくと、用水路が南北に通っているためこれを通過する。幅はおよそ 3.5 メートルほどである。この西側を「葦塚の西」、東側を「葦塚の東」と呼んでいるようである。毎年 8 月の頭には、東西が連携して水神を祀る飯玉神社で祭を行う。このとき用水路の流れを穏やかにした上で灯笼流しをするという。

用水路を渡ると、植生図で云う水田雑草群落となり、このあたりは古い住宅は少ないことがわかる。北側には葦塚霊殿という共同墓地がある。

さらに東に進むと、大型の商用店舗が目につき、10 年ほど前に完成した県道が現れる。さらにもうひとつ住宅の建たない土地、葦塚の南部にも県道が完成している。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。畑地・宅地は自然堤防に、水田は谷底平野に位置していることが土地分類図と植生図との比較よりわかる（図 4-26-3,4-26-4）。明快な土地利用の様子がうかがえる。

また、谷底平野ゆえに宅地化されていなかった部分に県道が開通されたり、大幅な宅地化がされることにより土地利用が改変され、集落の人口が増加しているものと思われる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較



図 4-26-5 防風林に囲まれる住居 撮影=梶尾智美



図 4-26-6 航空写真 (1975年)



図 4-26-7 航空写真 (2006年)

1975年の航空写真では生産地が多く、住居が用水路の西側と、東側の北部に立地している様子がうかがえる。2006年の航空写真では東側に県道が完成し、また、南側に建設途上の県道が見られる。県道沿いには大きな区画が作られ、その東側はグリッド状に大規模な宅地開発がなされている。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

#### ・集落構造

用水路の西方に住居を構える集落構造は、葦塚において古くからのものであろう。

それに対して中央部分の県道沿いおよび東側に建物が建ち並ぶ集落構造は、20世紀終盤に近代的技術によって成立したものである。氾濫する危険性の少ない用水路であるため、近代における新たな土地利用であるといえる。

#### ・共同体

用水路で隔たれた東西の葦塚の住み分け(生産・住環境のちがい、飯玉神社と祭り)や、葦塚霊殿(共同墓地)の利用のされ方などから、集落の暮らしのようすが検討されうるものと思われる。とくに、明治前期に低湿地であった部分は、近年において土地利用のされ方が変わってきている。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

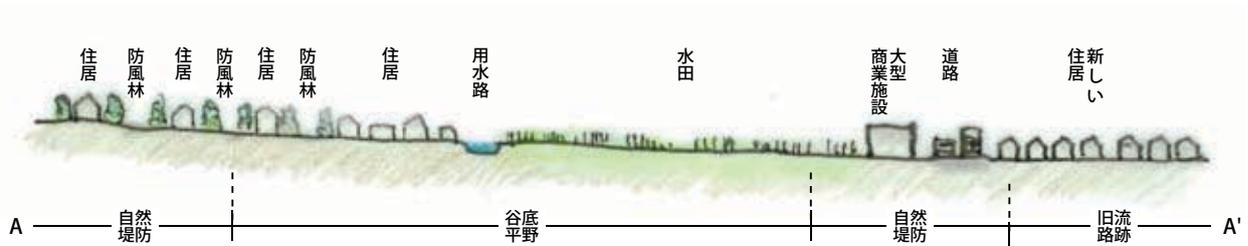


図 4-26-8 A-A' 断面ダイアグラム

## 27 佐位郡美侶郷／群馬県伊勢崎市茂呂町

担当：廣瀬翔太郎



図 4-27-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-27-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-27-3 地形分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-27-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

佐位郡美侶郷は旧茂呂村、現在の伊勢崎市東南部の一帯、すなわち広瀬川に挟まれた地帯を中心とした所と推定される。飯福神社の創建が建武年間（1334-36）年頃と考えられている。<sup>1</sup>千本木神社の創建年代は不明。

### 2) 実見した際の概要

茂呂町は広瀬川の左岸、粕川の右岸に位置し、二つの川に挟まれている。大部分が火山灰地質にあたり、平坦の地形である。広瀬川の右岸、美茂呂町が自然堤防上に位置し、広瀬川左岸の茂呂町は火山灰上に位置する。

大字領域の東側に東部伊勢崎線が、中心を県道 295 号線が中心を通っている。

1 の飯福神社とその周辺を実見した。神社は 2013 年に改修がなされており、真新しいものであった。大きな屋台庫があり、また地域住民は鳥居をくぐる際には必ずお辞儀をする様子が見られたことから、地域にとって重要な神社だと思われた。国道 295 号線に沿って住居が両側に並んでいる。生産地は見当たらなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落はほとんどが住宅地であり、生産地は見当たらなかった。大字領域外東部に水田が見られるが、茂呂町の住民の所有かどうかはわからない。「日本地理志料」で「美侶郷」は「美茂侶郷」の短縮形であるという記述があり、<sup>2</sup>また調査地の中心地が現在の「美茂呂町」付近であるため、実際はこのあたりが該当している可能性がある。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速即図では主に、県道 295 号線のもとになった道沿いに住宅地が並び、このことは県道が通された後もかわらない。ただし南部は道沿いに畑があり、1980 年の航空写真ではここにも住宅が立地するようになる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

1 「伊勢崎佐波の神社誌」「Go! 伊勢崎市」( [http://www.go-isesaki.com/shr\\_iifuku.htm](http://www.go-isesaki.com/shr_iifuku.htm) ) (2014.10.01)

2 竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年 p909



図4-27-5 2013年に完成した新社殿 web サイト「Go! 伊勢崎 飯福神社秋祭り」

生産地がほとんど見られなかった。領域内北部、広瀬川北岸には 1980 年航空写真（図 4-27-7）で水田が見られたが、現在は住宅地に変化している。迅速即図では畑が南部に見られるものの、地形の違いによって土地利用がなされているわけではない。

・集落構造

住宅地が県道 295 号線にそって住宅地が立地しているのは、迅速即図からも確認される。街道沿に発展し、現在まで存続している可能性がある。

・共同体

千本木竜頭神舞は県指定重要無形民俗文化財、茂呂の屋台囃子・伊勢崎市指定重要無形民俗文化財にそれぞれ指定されている。千本木神社と共に行う飯福神社祭りが 2010 年に 90 年ぶりに復活し、とても賑わっている様子である（図 4-27-5）。また、社殿が 2013 年に改修されていることから、神社と祭祀を中心に共同体が持続し、そのことが大きく影響していると考えられる。

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年  
Go! 伊勢崎 飯福神社秋祭り「Go! 伊勢崎市」（[http://www.go-isesaki.com/shr\\_ifuku.htm](http://www.go-isesaki.com/shr_ifuku.htm)）（2014.10.01）

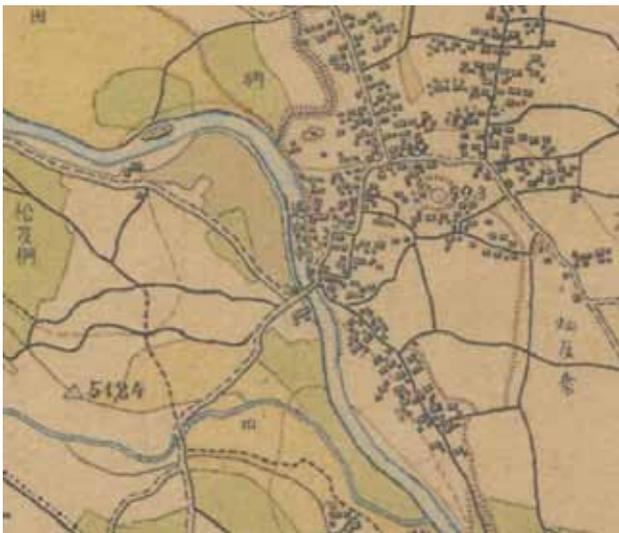


図 4-27-6 迅速測図



図 4-27-7 航空写真（1980 年）

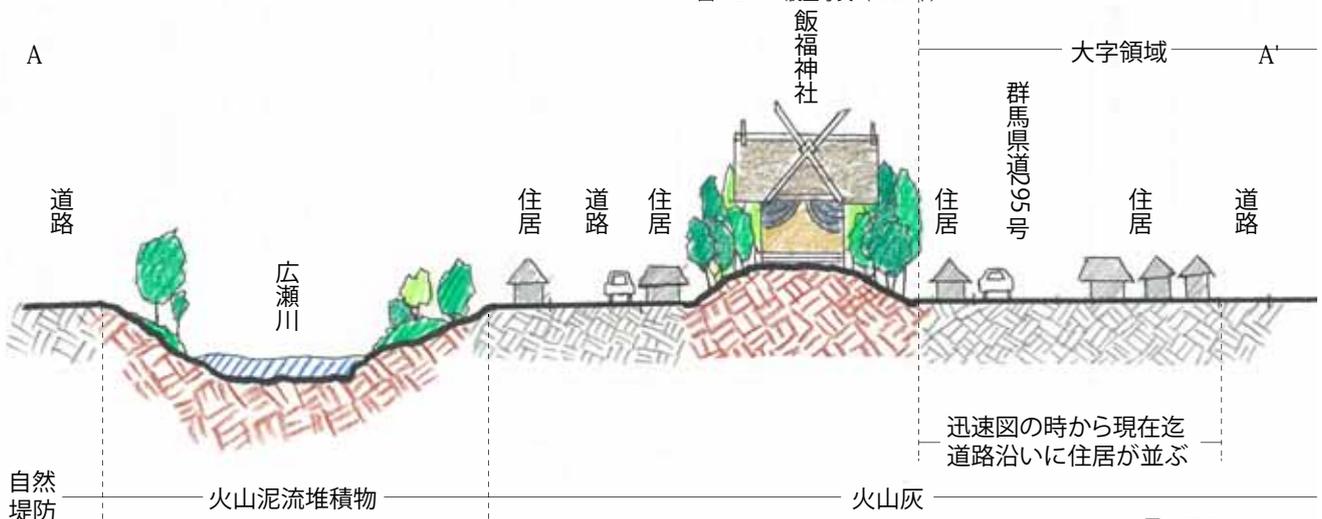


図 4-27-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 28 佐位郡淵名郷／伊勢崎市境伊与久

担当：瀬尾憲司



図 4-28-1 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-28-2 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

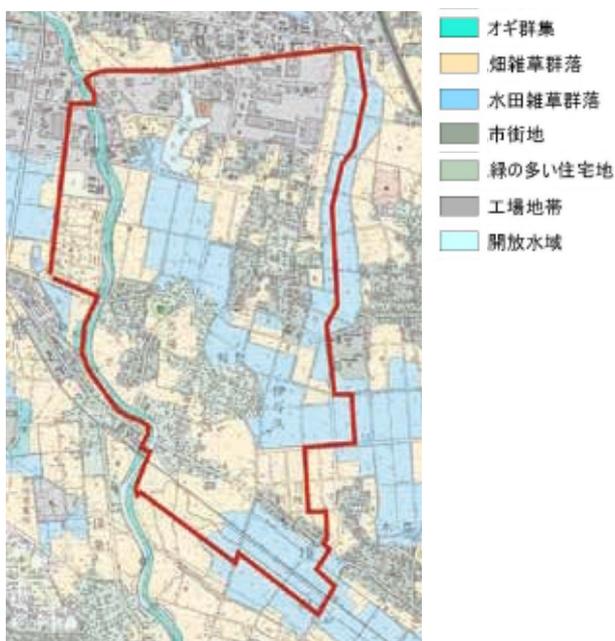


図 4-28-3 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

佐位郡淵名郷は伊勢崎市境伊与久に比定されている。平安期に見える郷名。佐位郡八郷の一つ。布知名と訓む。

### 2) 実見した際の概要

境伊与久の郷域から南に下った場所には利根川流れており、郷域東川を早川、西側を粕川という川が流れており、これが利根川に合流している。郷域内の北には伊与久沼と呼ばれる沼がある。

郷域の半分ほどは火山泥流台地という地質上に立地しており、一部が人工改変地となっている。この領域は畑や居住地として利用されており、土地分類図で人工改変地となっていた場所は植生図によると現在工場地帯として利用されていることが分かる。一方の半分は谷底低地および後背低地という土地分類上に存在し、伊与久沼から続く水気の多く低い土地性を生かした水田として利用されている。郷域南部には JR 剛志駅があり、都市との繋がりもある。

雷電神社を中心に集落を実見した。神社は旧古墳の上に建てられ、緩やかな平野が広がる郷域内では唯一小高く隆起した敷地の上に建てられている（図 4-28-4）。植生図内において、市街地に囲まれた中の緑の多い住宅地として色分けされている部分に神社は存在しており、実際に鳥瞰で撮影した写真でも神社周辺だけが鎮守の森によって囲まれていることが分かる。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地、工場地帯である。実見した際には水田と畑の入り組み方に理由を見つけられなかったが、土地分類図と植生図を比較することから、低地を水田として利用し、火山泥流台地を畑住居として利用していることがわかった（図 4-28-2,4-28-3）。明快な土地利用の様子がうかがえる。また、火山泥流台地が低地に囲まれており、その火山泥流台地の中央部分が神社として利用されていることから、この場所を中心に住居と畑、水田と広がっていく集落構成がなされていることが分かった。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1946 年の航空写真では火山泥流台地の先端の神社周辺部のみに住居があるものが 1999 年では火山泥流台地全体に住居がひろがっていることが分かる。さらに 1999 年の航空写真では郷域北部に工場地帯が確認できる。

### 5) 平・断面ダイアグラム

1 『角川地名辞典』（835）



図 4-28-4 広い平野に広がる田と住居 撮影=元永二郎

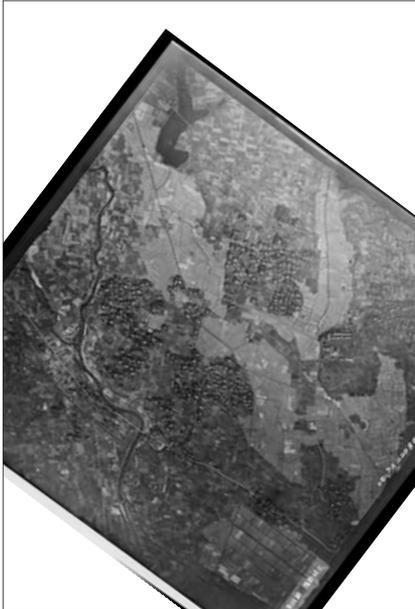


図 4-28-5 航空写真 (1946年)



図 4-28-6 航空写真 (1999年)

(図版参照)

## 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

### ・集落構造

低地に囲まれた火山泥流台地先端に神社を中心として広がる集落構造は古くから持続されていることが分かる。しかし、近年では住居が増え、北部にも住居が広がっており、郷域北部のある工場地帯とのつながりが生まれている。しかし、古くから水田があった場所は未だに水田として利用され住居が侵略していない。

### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

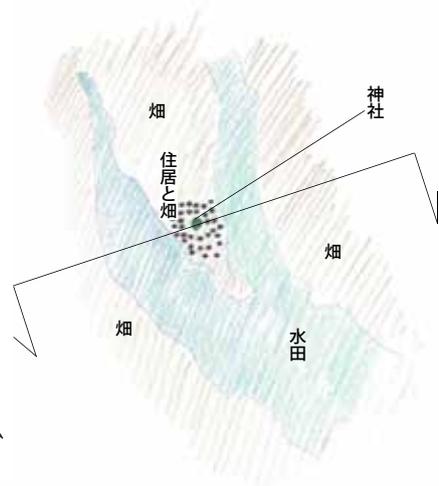
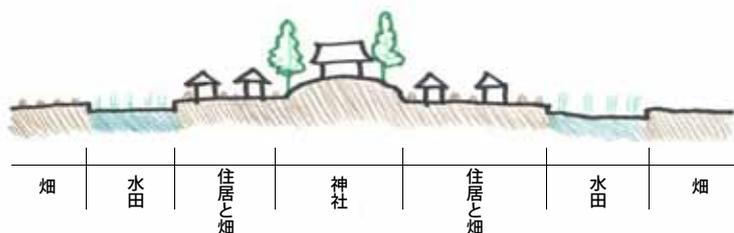


図 4-28-7  
平面ダイアグラム

図 4-28-8  
断面ダイアグラム



## 29 多胡郡矢田郷／群馬県高崎市吉井町矢田

担当：廣瀬翔太郎



図 4-29-1 比定大字の領域 GoogleMap より

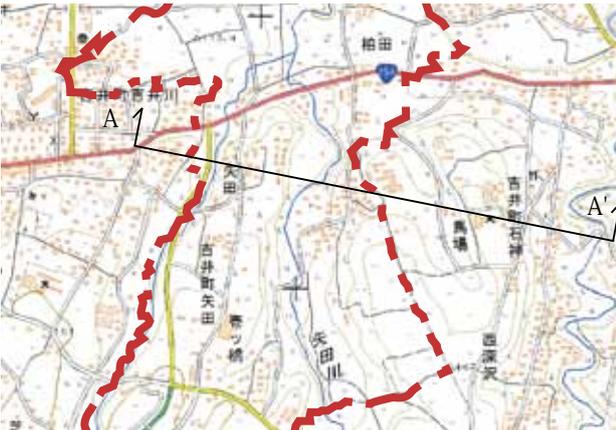


図 4-29-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

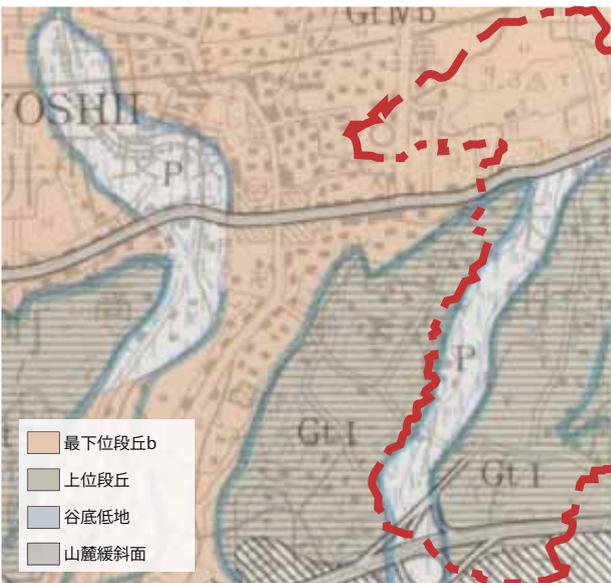


図 4-29-3 地質分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-29-4 段丘上の日枝神社とそれに向かい並ぶ住居 撮影＝廣瀬翔太郎

### 1) 歴史的物事の情報

多胡郡矢田郷は吉井町矢田に比定されている。大字域内の日枝神社、付近の大武神社、御嶽神社はそれぞれ創建年代は不明。

### 2) 実見した際の概要

矢田は北の西上州やまびこ街道と南の上信越自動車道との間に位置しており、中央を矢田川が流れている。

まず、段丘上で一番高い位置にある日枝神社の付近を実見した。迅速測図（図 4-29-7）では住居は見られず水田の表記であるが、現在では養蚕を行っていたと思われる古く、大きな住居（図 4-29-4）が立地していた。集落の間を通る道が一番高い位置にある。その住民の所有と思われる畑も見られた。段丘面から谷底にかけての斜面においても果樹栽培や畑作がなされている。

次に大字領域外であるが、迅速測図で住居が確認できる大武神社付近を南に坂を上っていくように実見した。集落には石垣が見られ、中学校も位置している。

### 3) 比定大字領域内の分析

段丘上に集落と畑、段丘と谷底の斜面には果樹栽培と畑作、北部の最下位段丘・矢田側沿の低地・県道 41 号線沿いには水田が見られ、地形に合わせた土地利用がうかがえる。しかし迅速測図から判断するに、東側の吉井町石神付近の集落が古くから立地しており、ここでは斜面部分に住宅と畑が位置している。段丘の比較的高い位置に中学校が立地し、こちらのほうが古くから集落が形成されていた。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図では吉井町石神付近と、現在の国道 254 号線沿いに集落が見られ、段丘上には水田が位置していた。1975 年の航空写真（図 4-29-6）では、ほとんど現在とかわからない土地利用になっているが、この時点で南部の上信越自動車道は開通していない。

### 5) 断面ダイアグラム

（図版参照）

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

主に低地の水田利用は大きく変化していないが、段丘上の水田は畑作や住居に代わっている。吉井町石神周辺はほとんど変化がないと思われる。

#### ・集落構造



図 4-29-5 大武神社付近の集落と石垣 撮影＝廣瀬翔太郎



図 4-29-6 日枝神社付近の畑 撮影＝廣瀬翔太郎



図 4-29-7 航空写真 (1975 年)

以前水田であった段丘面上に現在は住居が立地してしたが、養蚕を行っていたと思われる住居形態で近代に発達したと思われる。

・共同体

大武神社や日枝神社は古いものではないが、集落の中心部にどちらも位置しているため共同体が関わっている可能性が高い。詳細調査ではここを中心に調査してみる必要がある。

参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年／



図 4-29-8 迅速測図

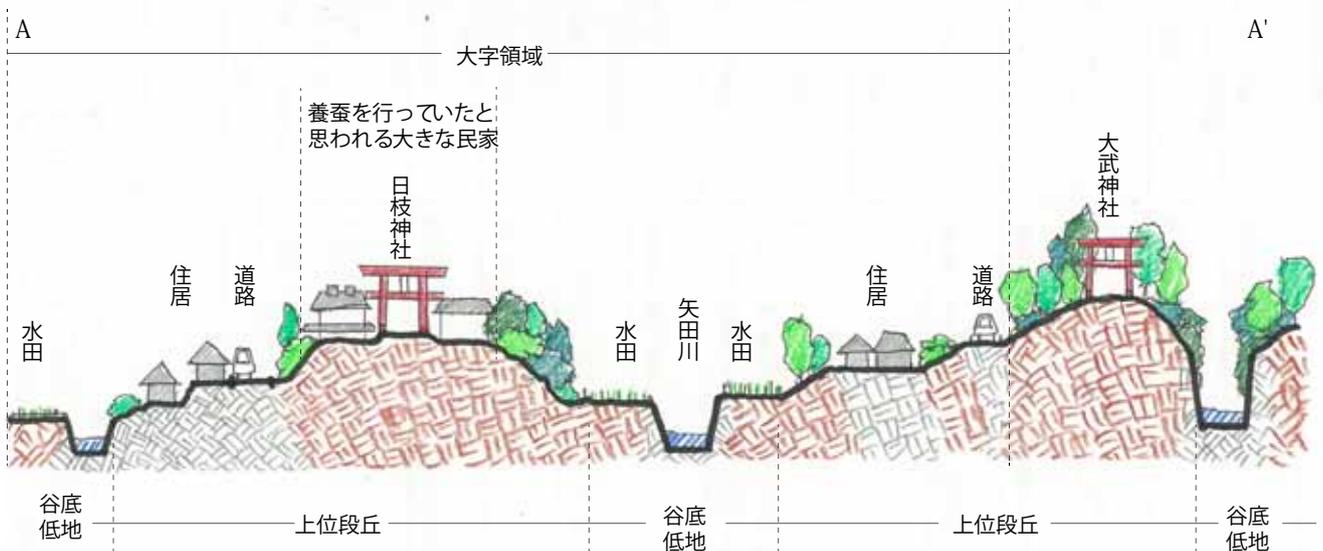


図 4-29-9 A-A' 断面ダイアグラム

### 30 多胡郡辛科郷 / 多野郡吉井町神保 (現 高崎市吉井町神保)

担当：田熊隆樹



図 4-30-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-30-2 地形図 (筆者加筆) 地理院地図より



図 4-30-3 土地分類図 (筆者加筆) 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-30-4 植生図 (筆者加筆) 自然環境保全基礎調査より

#### 1) 歴史的物事の情報

多胡郡辛科郷は多野郡吉井町神保 (現在の高崎市吉井町神保) に比定されている。

辛科神社は大宝年間 (701 ~ 703) に大陸から渡来した人々によって創建されたと伝えられている<sup>1</sup>。またこのあたりの段丘上位面には「神保古墳群」という古墳群も確認されている<sup>2</sup>。

#### 2) 実見した際の概要

吉井町神保は城山や牛伏山などの山地の北側麓に位置し、2km ほど北側に鑄川が流れている。また飛び地として城山と牛伏山との間の谷地も大字領域となっている。集落中央東には鑄川へ合流する大沢川が流れ、大きくは大沢川沿いの居住区 (下神保) と西側の辛科神社周辺の居住区 (上神保) の 2 つに分けられる。上神保にも水路が通っている。また 1993 年に上信越自動車道が通り、主な居住部分と山地部分が分断され、現在橋によって行き来ができる。

今回は上神保を実見した。辛科神社は上神保のランドマークの森として西側際に位置し、ここの狛犬は金属製で珍しい見目をしていた。辛科神社周辺の低い部分は田が広がり、そこから南へと登っていくと、傾斜地によく手入れされたネギなどの畑が広がっており、耕作放棄地はほとんど見られなかった。上信越自動車道の手前の丘状の位置には、集落を見守るように墓があった。ここが生活区域の際と思われた。墓石を見ると「奥津城」と書いてあり、神道の墓であることがわかった (下神保には仁叟寺 (1522 年創建) があるが上神保に寺はない)。

上信越自動車道は集落の中央を東西に貫いているが、居住地の中を貫いていないこともあり「集落と無関係に」走っているような印象を受けた。

下神保の大沢川と県道 71 号線の間は元々河原で、現在は畑に転用したり住居が建ったりしている。聞き取りによれば下神保は人口が増えており、さらに上・下神保は年に一度の会合をもっているという。

#### 3) 比定大字領域内の分析

集落は山麓から鑄川の方へと国道 254 号線までひだのように伸びる上位段丘と谷底平野がひだのように入り組んだ地域にあり、下神保の大沢側付近は最下位段丘となっている。さらに山麓側には緩斜面があり、さらに山地へとつながる (図 4-30-3)。その上で植生図を見ると、

1 高崎市 HP より (<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121701150/>) 2014.09.26 時点

2 公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 HP より (<http://www.gunmaibun.org/remain/guide/seimo/jinbo.html>) 2014.09.28 時点



図 4-30-5 上信越自動車道(左)と集落の際の道(右) 撮影=田熊隆樹



図 4-30-6 辛科神社真上あたりから上神保を見る(右手に墓)(ドローン撮影)

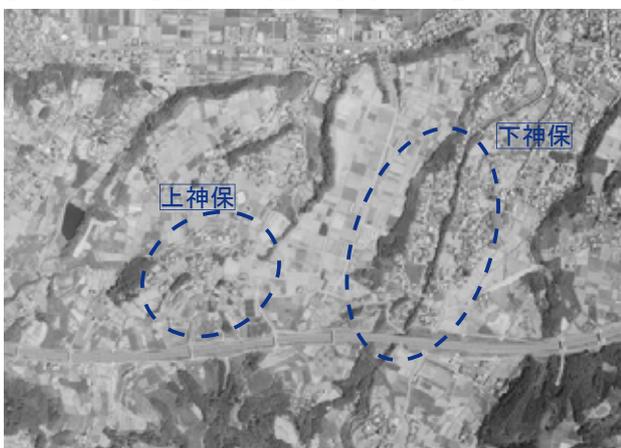


図 4-30-7 広域航空写真(1996年,国土地理院)に筆者加筆



図 4-30-8 広域航空写真(1970年代,国土地理院)に筆者加筆

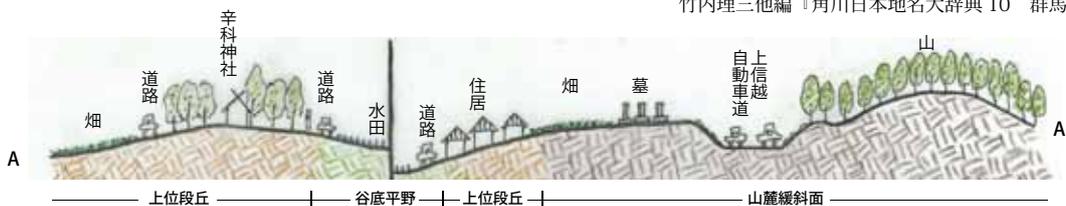


図 4-30-9  
A-A' 断面ダイアグラム

上位段丘・山麓緩斜面は畑地、最下位段丘は水田に利用されていることがわかる(図 4-30-4)。そして上神保は上位段丘(一部谷底平野)に、下神保は最下位段丘に位置している。上信越自動車道は山麓緩斜面をつなぐように走っている。

また、大沢側の西側の上位段丘と最下位段丘の間は群馬県によって急傾斜地の崩壊危険区域に指定されている<sup>3</sup>。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1961年と1996年の空撮写真からわかることは、上・下神保ともに位置・規模がほぼ変化していないことである。特に上神保では住宅地の拡大が見られない。さらに高速が出来る前にも現在の位置に墓らしきものが確認できた。これは、高速が集落の「際」の外を通ったことを意味しているのではないか。墓は集落の「際」を表していると思われる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図 4-30-9 参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

山麓にある段丘と低地のひだのように入り組んだ土地にあり、上神保・下神保で居住地の環境が違う。生産は畑地・水田のどちらも耕作放棄地はあまり見られず、よく手入れがなされていた。

##### ・集落構造

上神保では居住地より上に畑や墓を設けている。また1961年から居住地の位置、規模ともにほぼ変わっていない。下神保では近年人口が増えているらしく、北東の方へ居住地が拡大しているものの、こちらも変化が少ない。集落を避けて高速が通っている(インターチェンジなどはない)ことが、集落の変わらなさに良くも悪くも影響しているのではないか。

##### ・共同体

上神保には辛科神社(8世紀創建)があり、下神保には仁叟寺(1522年創建)がある。上神保には神道の墓もあったことから、ふたつが共同体が存在するものと思われる。年に一度会合を持っていることもこのふたつの共同体が別々であることを示していると思われる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

<sup>3</sup> webサイト「群馬県 土砂災害警戒区域及び土砂災害特別軽易火器区域指定箇所」(<http://www.pref.gunma.jp/06/h4600002.html>) 2014.09.27 時点

## 31 多胡郡織裳郷／群馬県高崎市吉井町長根

担当：諏佐遙也

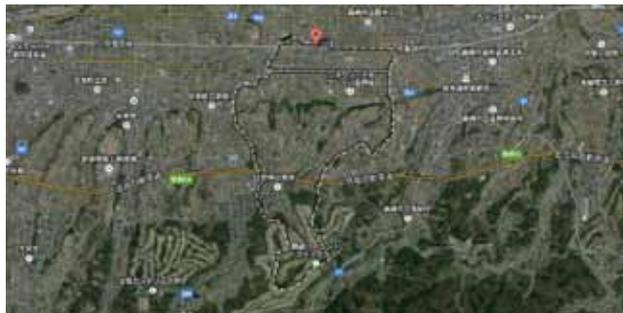


図 4-31-1 比定大字の領域 GoogleMap より

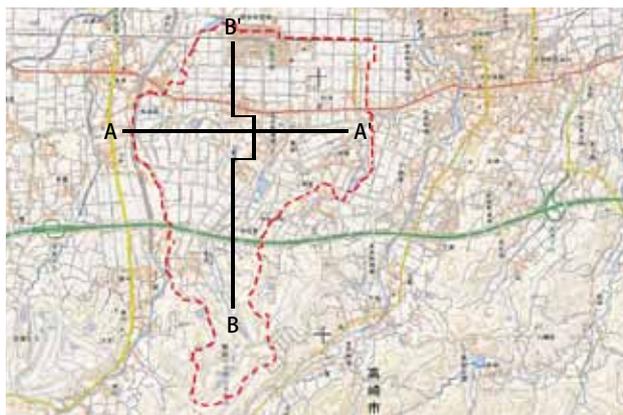


図 4-31-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-31-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

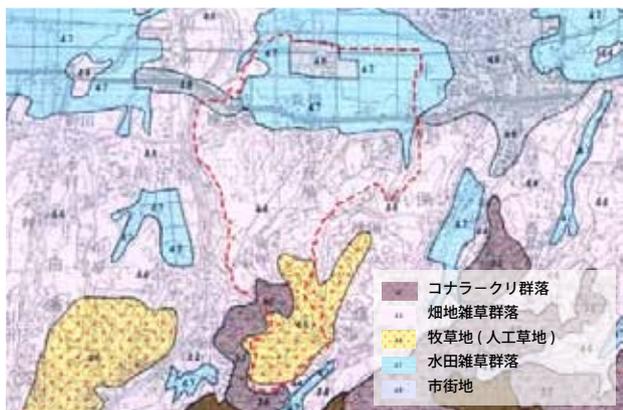


図 4-31-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

多胡郡織裳郷は吉井町長根に比定されている。

長根についての歴史的物事については、縄文・弥生・須恵・土師などの土器包蔵地が広がり、南西部台地には郡集落 44 基がある。2 基の円墳があり、ほかに中世の遺構が 10 基ある。自然壕で東西両城にわかれた一城別郭の長根城があった。

俗称長根タンボは古代における条里制の遺構と推定されている。（角川日本地名大辞典）

### 2) 実見した際の概要

長根は鑄川に注ぐ天引川右岸、長根川右岸および大沢川の左岸丘陵の尾根とに囲まれて位置する。鑄川の浸食で作られた上位と下位の河岸段丘にわたっている。

貯水池のある長根神社付近から、西上州やまびこ街道をわたり、北側に向かって集落を実見した。主に段丘の平地部分、また街道沿いと、北側の耕作地の区割りの多くに住居が見られた。1975 年の航空写真、あるいは迅速測図を見てみても、街道沿いにまばらに、または段丘の平地付近にしか住居は存在しない。1996 年の航空写真にして街道沿いの大幅な住宅増、また耕作地の宅地化現象がみられる。

段丘の高低差は大きく、20 メートルはあるかという高さであり、低地部分には迅速測図でも確認できる貯水池がみられる。これが段丘の東西方向に合わせて大小 4 つ見られる。この段丘の中途あるいは低地部に寺社が存在する。

中央部分に近づくと標高は微妙に高くなり、街道部分で最高となる。よって南側を見れば段丘の崖の緑、北側を見れば耕作地が広がる平地が見渡せる、ということとなる。街道沿いは比較的新しい建物ばかりであり、この交通量は多い部類であろう。迅速測図で見られる住宅の固まりを見るも、古くからありそうな建物は見つからず。

街道を過ぎて北側へ進むと、1 メートルばかり落ち込み、畑が広がる。最北部に小学校があり、その東西方向に宅地化された地帯が広がる。上述の貯水池から、北側のこの畑まで水が引かれていると推測される。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は住宅地、水田である。宅地は上位段丘と最下位段丘に、水田は最下位段丘に位置していることが土地分類図と植生図との比較よりわかる（図 4-31-3,4-31-4）。近年増加した宅地を除けば、土地利用の差は明瞭である。



図 4-31-5 段丘と、田のあいだの住居 撮影=



図 4-31-6 航空写真 (1948年)



図 4-31-7 航空写真 (1999年)

公共施設は北部の低地部分に位置している。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1975年の航空写真では、住居は段丘部に主に見られ、街道沿いにもわずかに見られる。1996年のものでは、段級の北側部、すなわち平地面に住宅が増え、畑も多くが宅地開発されるようになる。ここに小学校や郵便局がある。特に近年における街道沿いの住宅の増加は著しいもので、若年層が多く入ってきている様子である。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

##### ・集落構造

段丘上にちりぢりに住居を構える集落構造は、長根において古くからあるものと思われる。

低地部分の水田は古代条里制の名残と思われるが、中央部分の街道沿いに建物が密に建ち並ぶ集落構造は、20世紀後半の近代的技術によって成立したものである。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

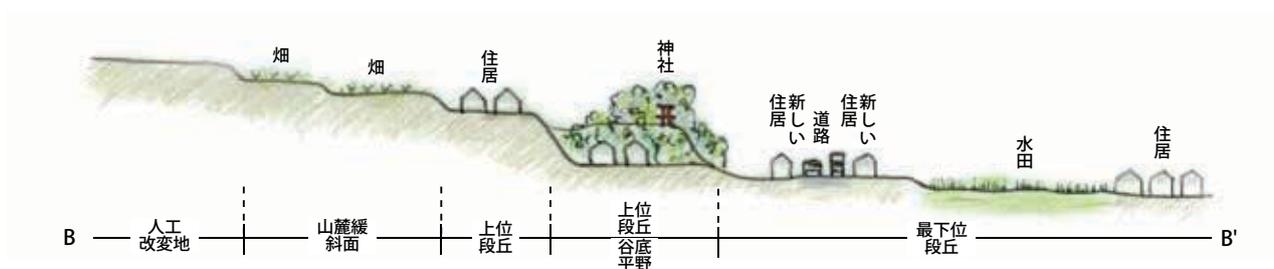


図 4-31-8 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム

図 4-31-9 (下)  
B-B' 断面ダイアグラム

## 32 甘楽郡小野郷／群馬県富岡市相野田

担当：神保洋平



図 4-32-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-32-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

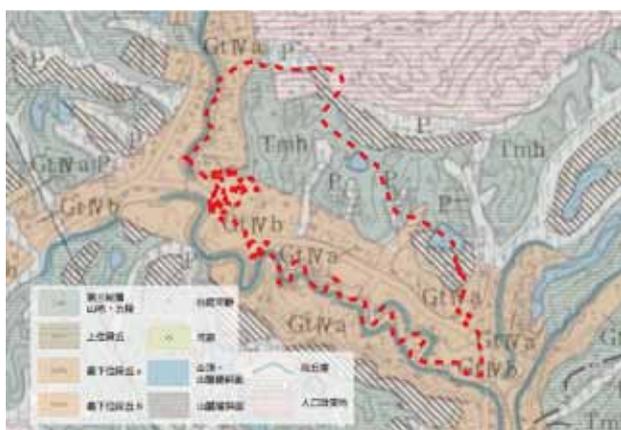


図 4-32-3 地形分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-32-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡小野郷は、富岡市相野田（旧小野村）付近に比定される。

小野郷の歴史的物事については、奈良時代初期に小野小町が旅の折に大病を患い、小庵を設け治療と仏道の日々を送った起源を持つ得成寺が存在する。

### 2) 実見した際の概要

相野田には、西と南に蛇行した利根川水系鑄川の支流が流れている。また、西には県道 10 号が走り、北東には山の名前は不明であるが、小高い山が見られる。

相野田全体とその周辺を見るために、車内調査により実見をした。鑄川から県道 197 号を通り、得成寺のみ車外調査によりこの地域の地形・生産活動・集落構造と得成寺を実見し、県道 197 号に戻り、西側の小中学校の隣を通り、相野田大字外の北側にある小野天満宮までを実見した。

得成寺は急な斜面を登ったところにあり、立派な社殿を持ち、石垣の形や大きさはばらばらであった。南を流れる鑄川の支流は細かく蛇行しており、河川の浸食作用によって土地が形づくられたと思われる。また、川と隣の水田の高低差は約 3m 程であった。相野田南側の集落構造は、南から川 - 水田 - 道 - 集落 - 山という明快な構造が保たれていた。相野田西側の集落は相野田南側より密集しておらず、小中学校もあった。相野田北側には林間を切り開いた小さい団地の区画があり、ここはきれいに区画整備がされていた。小さい川を渡り、相野田大字の比定外に出て、小野天満宮まで行くと道が細くなり行き止まりとなった。この辺りは、全くスプロールしておらず、地形をうまく利用して稲作・畑作が行なわれていることが実見により確認できた。また、谷津田状の地形に、田畑が棚田のようにしっかり管理されていた。

相野田南側・西側・相野田大字比定外の北側ともに上述のように雰囲気の違いはあったが、集落構造は明快であり、生産活動も行われていた。

### 3) 比定大字領域内の分析

相野田における集落を構成する主要素は、畑地と水田であり、相野田大字比定外の北側は人工改変地<sup>2</sup>である。田畑・集落・山地が、明快に分かれていることが地形分類図と植生図を見ることでもわかる（図 4-34-3,4-34-4）。

1 丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形である。また、そのような地形を利用した農業とそれに付随する生態系を指すこともある。(Wikipedia-「谷戸」<http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2014.10.4 時点))

2 大規模地震による地盤災害の対象となる、盛土をはじめとするもの。(『先端測量技術 No.91』(公益法人 日本測量調査技術協会,2006.04))



図 4-32-5 得成寺付近から見下ろした風景 撮影=小林千尋



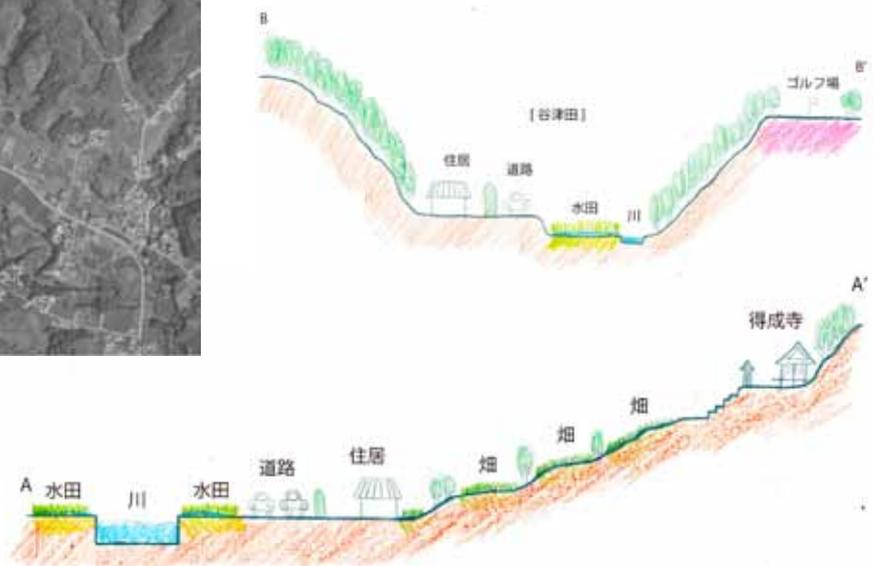
図 4-32-6 航空写真 (1948 年)



図 4-32-7 航空写真 (1987 年)

図 4-32-8 (上)  
B-B' 断面ダイアグラム

図 4-32-9 (下)  
A-A' 断面ダイアグラム



また、土砂災害警戒区域<sup>3</sup>が相野田には多くある (図 4-34-2)。傾斜の強い地形から危険区域にされていると考えられるが、集落はその区域の外にあり、土砂災害を避けるように位置している。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948 年と 1987 年の航空写真では、大きな変化はない。集落構造や生産地の位置はほとんど変化していないが、1987 年の航空写真では道路が整備され、南側に今の県道 197 号がはっきりと通っていることがわかる。更に、西側では生産地であった場所に住宅が建ち、集落の構造がわずかに変化していることがわかる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

山地・低地・川という環境をうまく利用して、集落が形成され生産が営まれてきたと思われる。現在でも環境に大きな変化はなく、継続的に生産活動が行なわれていると見られる。

##### ・集落構造

低地南側の集落は、集落構造としてうまく機能していると思われる。しかし、周辺に人工改変地があり、土砂災害警戒区域の西側では、生産の地を新たに住宅としている。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年 / web サイト「富岡市防災マップ」(URL:<http://www.city.tomioka.lg.jp>)

<sup>3</sup> web サイト「富岡市防災マップ」参照 URL:<http://www.city.tomioka.lg.jp> 2014.10.4 時点。

### 33 甘楽郡宗伎郷／群馬県富岡市曾木

担当：神保洋平



図 4-33-1 比定大字の領域 GoogleMap より

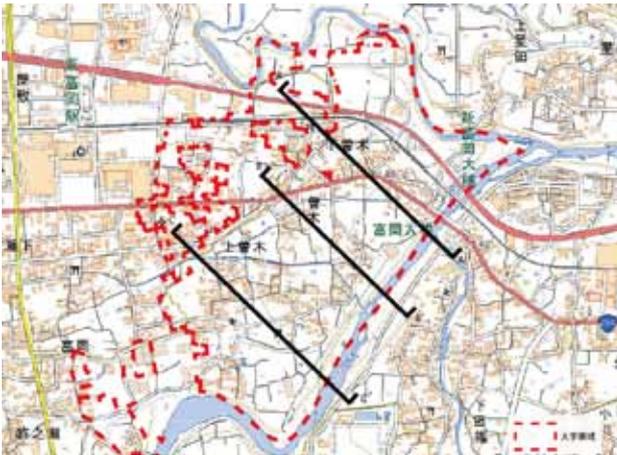


図 4-33-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

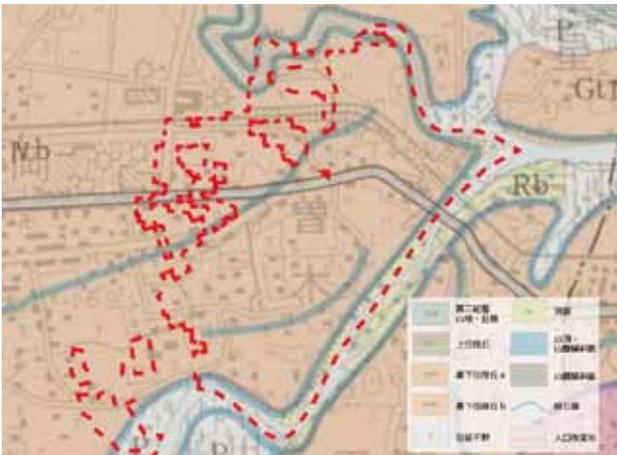


図 4-33-3 地形分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

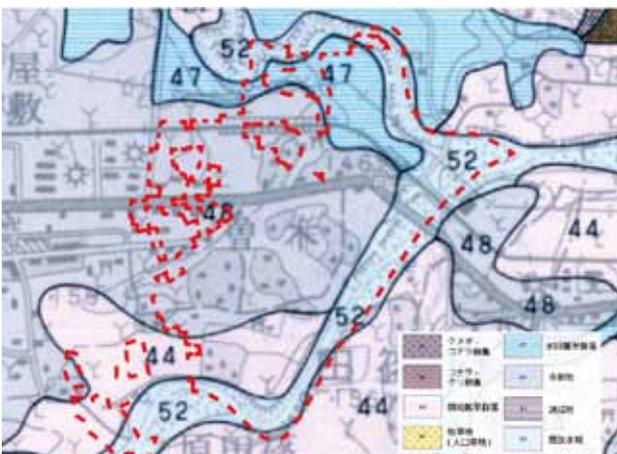


図 4-33-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

#### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡宗伎郷は、富岡市曾木に比定されている。

宗伎郷の歴史的物事については、遺跡等の存在は不明である。付近に城跡があることが確認されているが、この詳細についても現時点では不明である。

#### 2) 実見した際の概要

曾木は、北に流れる高田川と南に流れる鐮川との合流地点に位置し、中州のような形状となっている。北側には、上信電鉄線・富岡バイパス・西上州やまびこ街道が走っている。北から、下曾木・曾木・上曾木と分かれている。

下曾木にある曾木神社から、下曾木・曾木・上曾木と北から南へ下るように実見した。曾木神社脇には池があり、湧水の可能性がある。また、この3つの地域は隣り合っているが、集落構造や生産活動において雰囲気の違いを感じた。

下曾木は住居が密集しており、その周りに田んぼが囲むように見られた。集落は大変入り組んでおり、近道をする事ができない程であった。

曾木は集落・住居は分散しており、それぞれの集落・住居の周りに水田を見ることができた。立派な家も多く、特に南側には会社・新興住宅を見ることができた。北側には、高さ3～4m・幅6～7m程の丘の上にお墓が4つあるものを見ることができた。

上曾木は集落が分散しており、その周りに大きな田畑を見ることができた。南に神明宮曾木村社があり、これに沿って水路が引いてあることを確認できた。この水路は西側から続いている模様で、この先もずっと続いていると考えられる。

下曾木・曾木・上曾木は、地形の変化がほとんどない地域で、同一の集落構造と田畑などの生産活動を見ることができたが、3つの地域で上述のようにわずかに集落構造・生産活動が異なっており、それぞれは異なる集落であるように感じられた。

#### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は市街地と畑地である。北側のほとんどが市街地とされ、南側にわずかに田畑がある。下曾木・曾木、上曾木の生産と環境の違いは、地形分類図と植生図との比較からもわかる（図 4-34-3,4-34-4）。地形の変化はないが、わずかな差異がこの地域間にあると考えられる。

また、高田川と鐮川に挟まれた地域だが、危険区域

1 web サイト「富岡市防災マップ」参照 URL:<http://www.city.tomioka.lg.jp> 2014.10.4 時点。



図 4-33-5 神明宮曾木村社の鎮守の森と田畑の風景 撮影=田熊隆樹



図 4-33-6 航空写真 (1948 年)



図 4-33-7 航空写真 (1975 年)

はなく、古くから変化していない要因のひとつと考えられる (図 4-33-2)。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948 年の航空写真では、すでに北側に鉄道と道路の存在を見ることができる。1948 年と 1975 年の航空写真の間には、下曾木・曾木・上曾木の 3 つの地域のわずかな変化をみることができる。下曾木は道に沿って独自に集落を拡大したと思われる。曾木・上曾木はもとは集落としてつながっていたが、1975 年には分かれている。現在、この 3 つの地域にわずかな違いがあることは、これらのことから垣間見ることができる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

水田・畑作は行われているが、その活動は豊かに行なわれている印象はなく、北側は市街地化している。

##### ・集落構造

実見と航空写真の分析からもこの地域の集落構造はわずかに変化していると考えられ、その変化の仕方は 3 つの地域に分かれる形になっていると考えられる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年 / web サイト「富岡市防災マップ」(URL:<http://www.city.tomioka.lg.jp>)



図 4-33-8 (上)  
A-A' 断面ダイアグラム

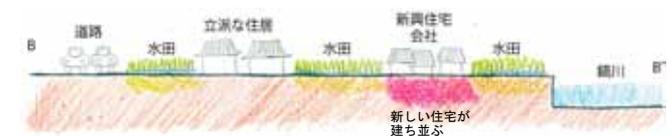


図 4-33-9 (中)  
B-B' 断面ダイアグラム



図 4-33-10 (下)  
C-C' 断面ダイアグラム

## 34 甘楽郡新屋郷／群馬県甘楽郡甘楽町

担当：神保洋平



図 4-34-1 比定大字の領域(左) 図 4-34-2 比定大字の領域(右) GoogleMap より

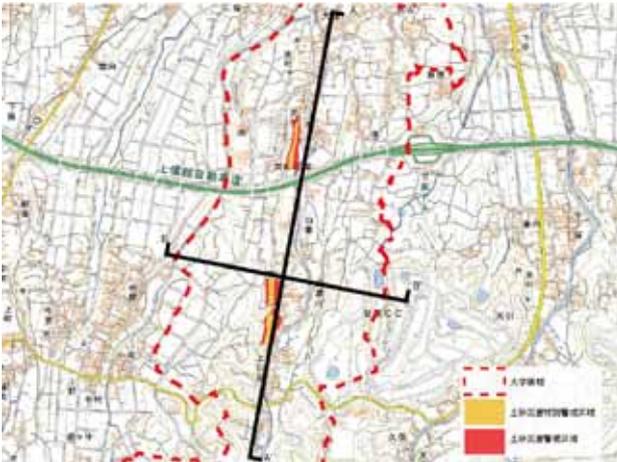


図 4-34-3 地形図(筆者加筆) 地理院地図より

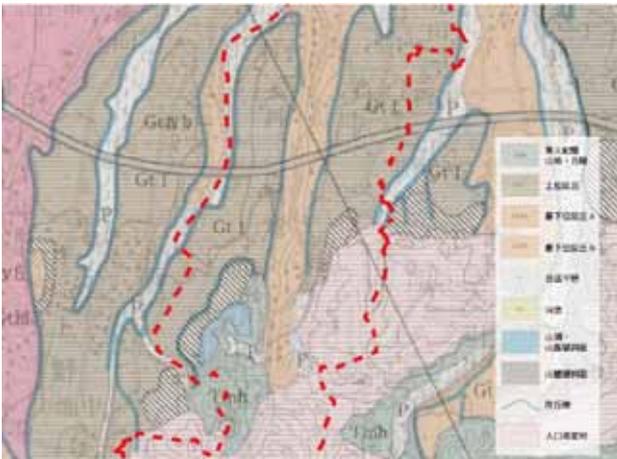


図 4-34-4 地形分類図(筆者加筆) 5万分の1都道府県土地分類基本調査より

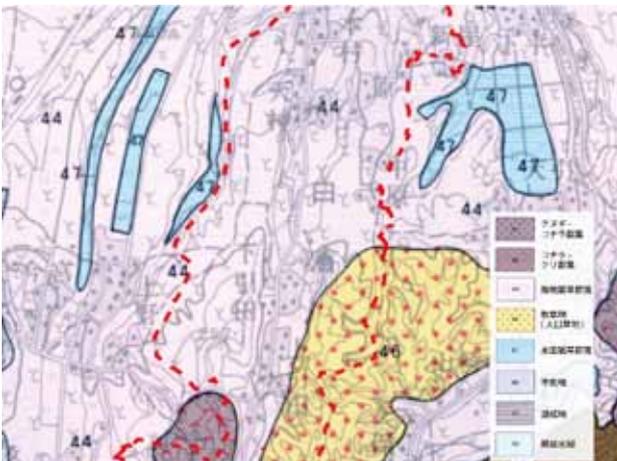


図 4-34-5 植生図(筆者加筆) 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡新屋郷は、甘楽郡甘楽町一帯に比定されている。

比定範囲が非常に広い為、今回は南北を横断し鑄川-低地-山地を見ることができる、白倉の地域を選定した。白倉地域における歴史的物事については不明である。

### 2) 実見した際の概要

甘楽町の白倉の地域は、鑄川に合流する白倉川を中心に南北を横断する長細い領域である。白倉川は山と山に囲まれ、谷地となっている。鑄川沿いを甘楽吉井バイパス・上信電鉄線・西上州やまびこ街道が走っており、さらに白倉の中央部では、東西を上信越自動車道が走っている。

白倉地域は範囲が非常に広い為、鑄川から白倉川に沿って、北から南へ下るように車内調査により実見した。

鑄川から西上州やまびこ街道までは、きれいに区画された水田が並んでいたが、このあたりを過ぎると集落に入り、大きな水田は見られなくなった。山と山の谷地に位置する白倉川に沿って、住居が建ち並んでいた。上信越自動車道より北側は、白倉神社を中心に住居が密集して建ち並んでおり、道路からは白倉川の存在を確認することが難しいほど密集していた。

しかし、上信越自動車道を通りさらに南に下ると徐々に住居が分散し、ひとつひとつの住居が大きく立派になっていった。さらに、下・中流では見られなかった畑などの生産も見られるようになる。さらに南へ下ると道が細くなり、住居はなくなり、畑だけとなり、行き止まりとなる。人間が住まう限界のような場所を見ることができた。このあたりが、ちょうど白倉川の水源地となっており、白倉川の周辺に田畑と住居を構えて、水源を守るように立地していた。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は、ほとんどが畑地である。同様の植生であるが、低地にのみ住居が構えられていることが、地形分類図と植生図との比較よりわかる(図 4-34-4, 4-34-5)。また、白倉川の水源地付近は人工改変地となっており、災害が起こりやすい地域である可能性がある。

白倉の地域には、土砂災害警戒区域<sup>2</sup>が一部地域である(図 4-34-3)。危険区域はそれほど多くなく、この区域を避けるように住居が構えられている地域もあると考

1 大規模地震による地盤災害の対象となる、盛土をはじめとするもの。(『先端測量技術 No.91』(公益法人 日本測量調査技術協会, 2006.04))

2 web サイト「甘楽町防災マップ」参照 URL: <http://www.town.kanra-gunma.jp> 2014.10.4 時点。



図 4-34-6 白倉川上流の大きく立派な住居 撮影=田熊隆樹

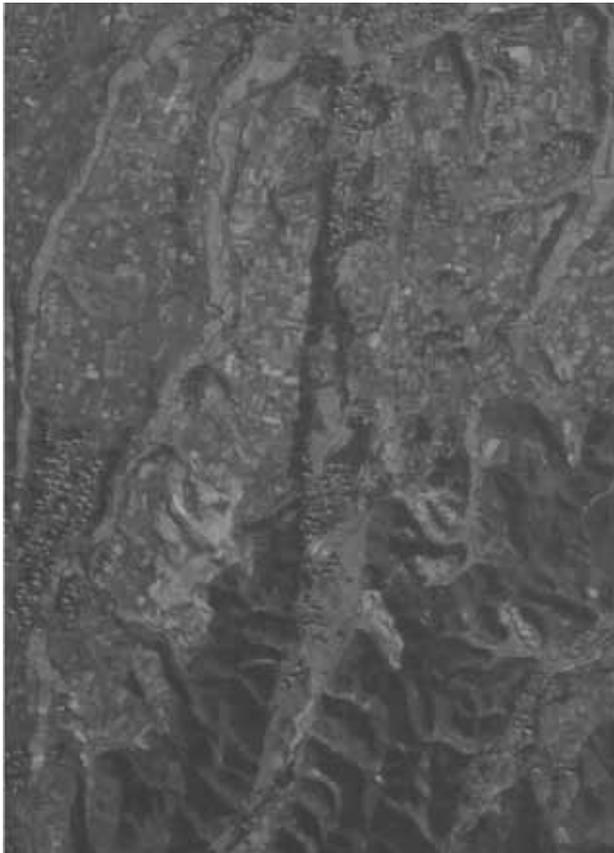


図 4-34-7 航空写真 (1948年)



図 4-34-8 航空写真 (1975年)

えられる。しかし、危険区域内にも住居があり、さらに白倉神社付近も危険区域であり、住居が密集している。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年と1975年では、集落構成に大きな変化がみられる。山が切り開かれ、住宅地となり、ゴルフ場になり、生産の場である田畑が住居などになっていると見られる。また、航空写真では見てとれないが、集落を横切る上信越自動車道の開通はこの地域に大きな影響を与えたと考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

田畑があり、生産が行なわれていたものの、生産の場と住居の場が離れており、生産と生活が同一の生活圏内で行われていないように思われる。

##### ・集落構造

集落構造は、白倉川の上流に行くにつれて、住居が密集しなくなり、大きく、立派なものになるという明快なものであった。しかし、下・中流はスプロール化が進んでおり、危険区域にも住居を構えていることは、この地域が新しい集落であることを示していると考えられる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

甘楽郡新屋郷は、非常に広い範囲に比定されている為、甘楽郡甘楽町の他の地域の可能性もあり、今後も検討していく必要があると考えられる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年 / web サイト「甘楽町防災マップ」(URL:<http://www.town.kanra.gunma.jp>)

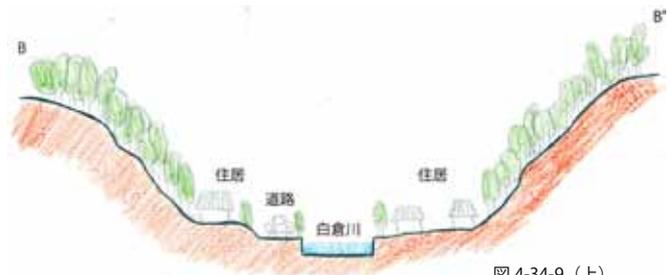


図 4-34-9 (上)  
B-B' 断面ダイアグラム



図 4-34-10 (下)  
A-A' 断面ダイアグラム

## 35 甘楽郡端上郷／群馬県富岡市中高瀬

担当：神保洋平



図 4-35-1 比定大字の領域 GoogleMap より

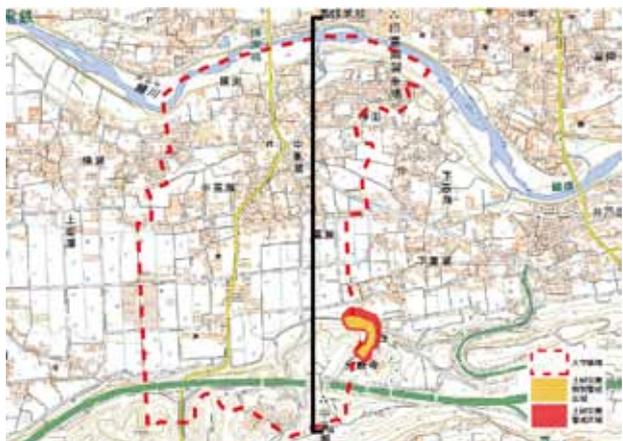


図 4-35-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

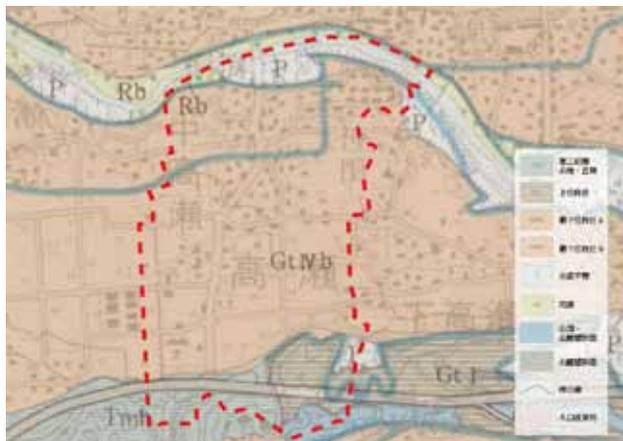


図 4-35-3 地形分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-35-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡端上郷は、富岡市上高瀬・中高瀬・下高瀬付近に比定されている。今回は、住居が最も密集しており、遺跡がある中高瀬を調査対象地とした。

端上郷の歴史的物事については、中高瀬観音山遺跡<sup>1</sup>が存在する。弥生時代の終わりの遺跡であり、上信越自動車道建設工事に伴う発掘調査によって発見された。平成6（1994）年に国指定史跡に登録されている。また、大字範囲外の北側には 富岡製糸場がある。

### 2) 実見した際の概要

中高瀬は、北の鐮川と南の上信越自動車道にちょうど挟まれた場所に位置する。鐮川の北側には、西上州やまびこ街道・上信電鉄線が走っている。下高瀬南東には、上信越自動車道の富岡 IC がある。

道と道が大きく交差した場所に位置（図 4-35-2 大字内の寺記号がある位置）する高瀬神社を中心に、中高瀬の北東の地域を実見した。

高瀬神社境内は広く、立派であることから、この神社がこの地域の中心地的な役割を担っていたことがうかがえた。さらに、この神社の目の前には大きな交差点があり、交通・流通の面からもこのあたりが中心的な役割を持ち、集落はここを中心に展開していったのではないかと考えられる。

高瀬神社の北東地域は、住宅が非常に密集して建ち並んでおり、道も狭く、とても入り組んでいた。住居の近くに田畑はなく生産を行っている印象を受けなかったが、水路が通路沿いに流れていた。

中高瀬の南側には、中高瀬観音山遺跡があり、その下を上信越自動車道が走っている。その北側には水田が確認できる。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、市街地である。地形は全体が低地であるが、市街地、水田、畑地は明快に分かれていることが、地形分類図と植生図との比較よりわかる（図 4-35-3,4-35-4）。

また、中高瀬観音山遺跡近くには土砂災害警戒区域がある（図 4-35-2<sup>2</sup>）。この地域に現在集落は密集しておらず、水田が多くあることが確認できる。古くはこの地に住んでいたが、危険な地域であることから、川に近い低地に

1 web サイト「公共財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団」参照 URL:<http://www.gunmaibun.org/index.html> 2014.10.4 時点。

web サイト「文化庁 文化遺産オンライン」参照 URL:<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do> 2014.10.4 時点。

2 web サイト「富岡市防災マップ」参照 URL:<http://www.city.tomioka.lg.jp> 2014.10.4 時点。



図 4-35-5 住宅密集地に存在する水路 撮影=田熊隆樹



図 4-35-6 航空写真 (1948 年)



図 4-35-7 航空写真 (1987 年)

移り住んだことも考えられる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948 年の航空写真では、南北に通る道が印象的で高瀬神社を中心に集落が構成されている様子がうかがえる。1948 年では、まだ遺跡の存在は確認されておらず、この周辺に人の住んでいた形跡をみることもできず、集落がないことが確認できる。

1987 年の航空写真では、住宅のスプロール化が始まっており、高瀬神社を中心に円形に広がっていることを確認することができる。しかし、高瀬神社の前に大きな交差点を確認することはできない。北から東に向かう道は、最近にできた道であると考えられる。

また、現在の地図と比較すると上信越自動車道は集落を避けるように通っており、大きな影響はなかったと思われる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

水田などの生産が行なわれていたが、集落と水田間に距離があることや集落が市街地化していることより、その関係は薄く感じた。また現在、住居付近に水路が存在することと、航空写真の比較から水田が住居に変容したとみられる。

##### ・集落構造

高瀬神社を中心に集落が展開していったことが、実見と地図の比較の両面からうかがうことができた。しかし、中高瀬観音山遺跡とは関係していないと見られ、古くから住んでいた地域と現在の集落の位置関係は異なる可能性があると考えられる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年 / web サイト「公共財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団」(URL:http://www.gunmaibun.org/index.html) / web サイト「文化庁 文化遺産オンライン」(URL:http://bunka.nii.ac.jp/Index.do) / web サイト「富岡市防災マップ」(URL:http://www.city.tomioka.lg.jp)

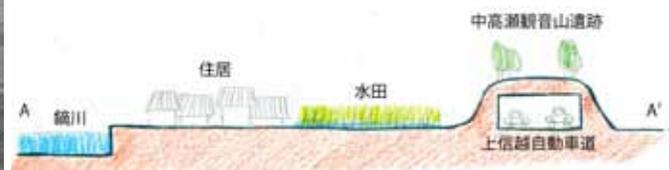


図 4-35-8 A-A' 断面ダイアグラム

## 36 甘楽郡貫前郷／群馬県富岡市一宮

担当：廣瀬翔太郎



図 4-36-1 比定大字の領域 GoogleMap より

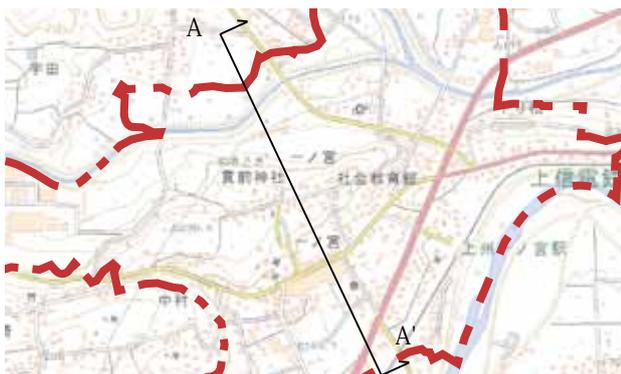


図 4-36-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-36-3 地形分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-36-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡貫前郷は貫前神とのかかわりの深い郷で、富岡市一宮の貫前神社の鎮座しているあたりを中心とした一体が郷域に比定されている。かつて抜鉾神社と貫前神社が同一とされたため、抜鉾神社を中心とする抜鉾郷と貫前郷は同一視されてきたが、近年の研究では二郷は別であるとされている<sup>1</sup>。

一宮貫前神社は 1400 年の歴史を持つとされている。社殿は寛永 12 (1635) 年に造営されており、本殿など国の重要文化財に指定されている。<sup>2</sup>一ノ宮古墳群が一ノ宮一帯に残る。最大の堂山稲荷古墳は全長 48m の前方後円墳。

### 2) 実見した際の概要

北の丹生川、南の鑄川の間には挟まれて一宮は位置している。富岡バイパスと西上州やまびこ街道が貫前神社東部で合流しており、上信電鉄線（明治 30 年開通）が領域内を通過している。

貫前神社とその周辺を実見した。境内はいったん尾根を上る形で正面参道があり、総門を通過して尾根を下る。下位河岸段丘上に社殿が鎮座している。本殿は「貫前造」と呼ばれ、本調査で同様と思われる様式の神社が数多く見られた。

また、貫前神社前を通る信州街道沿いに町屋のように住居が立地しており、これは 1948 年の航空写真（図 4-36-6）にも確認できる。

西部の畑地の中に大規模な工場が立地していた。

### 3) 比定大字領域内の分析

貫前神社と信州街道に面して集落が位置している。神社北側の段丘面上には畑があり、丹生川沿いの谷底平野には水田が見られる。大字領域面積を考えると、生産地は少ないと思われる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948 年時点では神社と街道沿いの集落が主要な要素であり、その構造は大きくは変わっていないが、徐々に南部の畑作地域に住居が増えている。

### 5) 断面ダイアグラム

1 竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年、p745

2 上野國一宮貫前神社 HP <http://nukisaki.or.jp/> (2014.10.03)

3 Wikipedia 一之宮貫前神社 (2014.10.03)



図 4-36-5 参道は尾根を登り、そこから見下ろす貫前神社 撮影=田熊隆樹



図 4-36-6 航空写真 (1948 年)



図 4-36-7 航空写真 (1967 年)

(図版参照)

## 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

### ・環境

貫前神社と広大なその鎮守の森は 1948 年から変化が無い。最下位段丘面上の畑作地は徐々にではあるが、住居に置き換わってきているものの、丹生川沿いの水田は未だに残っている。

### ・集落構造

貫前神社と信州街道沿いの集落はほとんど変化していないと思われる。畑作地に新しく住居や工場が建つなどしているものの、集落としてそれほど大きな変化ではない。

### ・共同体

貫前神社の存続は、近世近代においては養蚕業を営む人たちの商業の神様として信仰を集めたと考えられ、多額のお金が集まっていた可能性がある。現在までの神社が存続していることに、共同体が関わっているかまでは不明である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年  
上野國一宮貫前神社 HP <http://nukisaki.or.jp/> (2014.10.03)



図 4-36-8 航空写真 (1987 年)

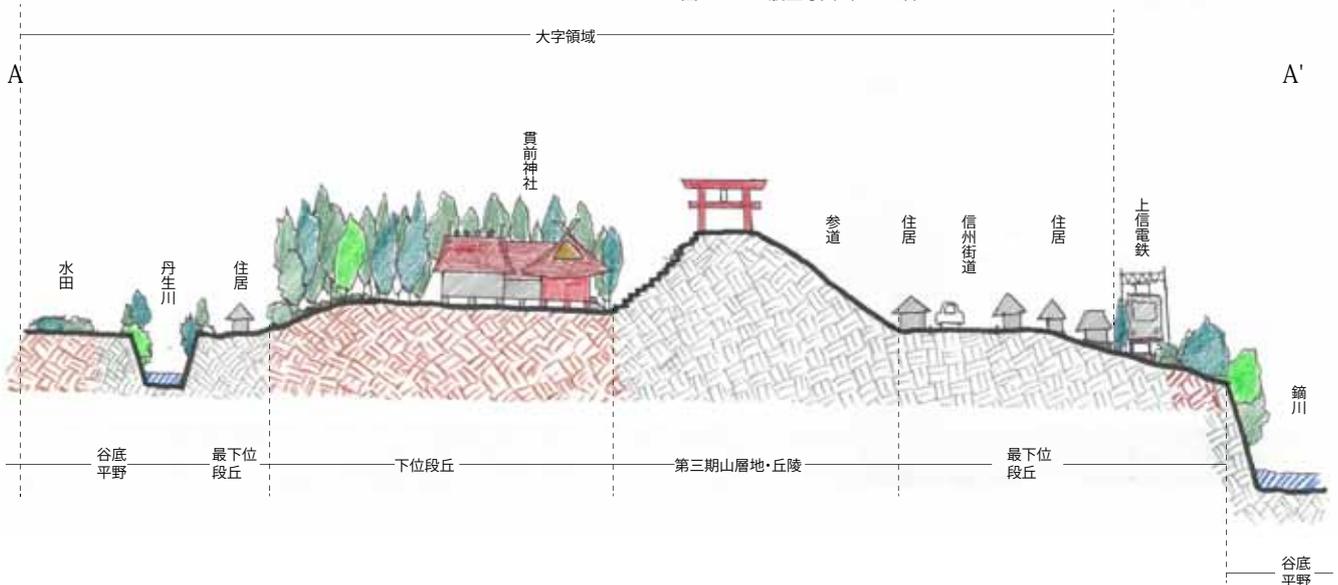


図 4-36-9 A-A' 断面ダイアグラム

## 37 甘楽郡有只郷 / 富岡市宇田

担当：瀬尾憲司

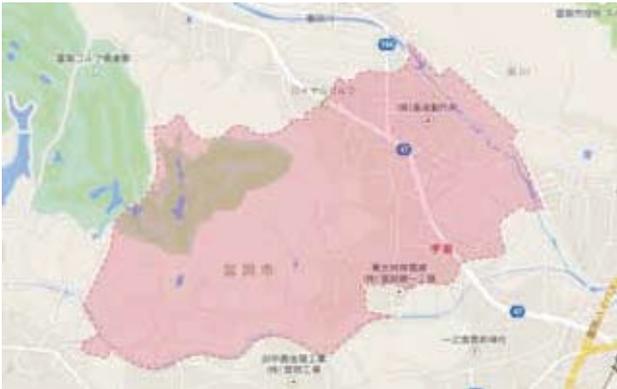


図 4-37-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-37-2 地形図（筆者加筆）地理院地図より



図 4-37-3 土地分類図（筆者加筆）5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

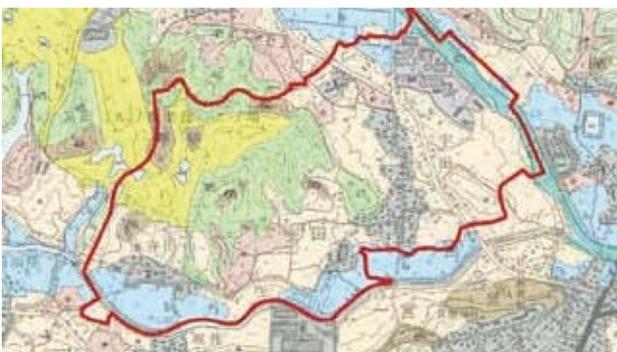


図 4-37-4 植生図（筆者加筆）自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽群有只郷は富岡市宇田に比定されている。

有只についての歴史的物事については、東方阿蘇岡遺跡には弥生時代～古墳時代、山根遺跡は縄文時代～平安期の長期にわたる遺跡がみられ、分布の範囲も広い。

### 2) 実見した際の概要

宇田は南に丹生川、北に高田川があり、両者の合流する地点に位置している。合流した二つは高田川とよばれ、それは鑄木川と合流し鑄木川になり、さらにいくつかの小川が合流し利根川となる。

大字領域内は大部分は山地・台地の平地ではない土地に分類されており、植生図からゴルフ場を西に持ち、山地と平地の境界に畑があり、市街地を挟んで水田が広がっていく様子が伺える。大字領域内を南北に走る街道のような道が存在している。しかし、街道が通っていた場所ではないことから、この道がどのような意図で作られたものかより深く調べる必要がある。1964 年の航空写真にはこの道が通っていることから、新しく加えられた道ではないと思われる。集落の住居もこの道沿いに広がっており、この集落にとって付加的なものではないことがわかる。街道沿いの宿場町的な住居配置と同時に、山地と平地の境界に住居が並び、平地を水田として利用するというスタンダードな耕作を行う集落の配置が両立されているような集落構成となっている。

この道沿いに車を止め、住居が並ぶ北側と水田へとつながる南部を実見した。住居が並ぶ部分ではこの道からさらに車一台がちょうど通れるほどの細い道が延びていた。住居部と山地の間には畑があり、水田には適さない斜面も耕作地として利用している様子が伺えた。南部の水田が広がる部分は大字の領域に含まれていないが、其の多くが大字領域内の住居の住民によって管理されているような印象を受けた。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素はゴルフ上、山麓緩斜面、畑地、水田、住宅地である。山地の上部はゴルフ場になっており、それを包むように森が広がり、山の裾野に畑地と住宅地が広がる。そこから南下した平野に水田が広がっている。

1 『角川地名辞典』（176）参照



図 4-37-5 街道のような道とそれに面して並ぶ住居 撮影=小林千尋

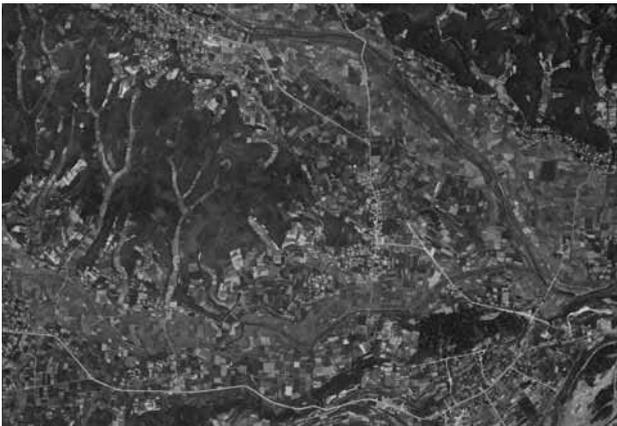


図 4-37-6 航空写真 (1964 年)



図 4-37-7 航空写真 (1991 年)

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1964 年の航空写真では山に木々が生い茂っている様子が伺えるが、1991 年の航空写真では山がゴルフ上に変更された様子が伺える。しかし、山間を実見した際には木々に囲われていることによって、山の上にゴルフ上があることは分からなかった。それ以外の開発はあまり加えられていないように感じる。

#### 5) 平・断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産については地形を読みこんだ明快な土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえた。

##### ・集落構造

地形を読み込み、土地利用上有利な位置に住宅地があることが分かる。しかし、街道のような道が細かい住宅の配置に大きく影響している。生産だけではなく、工作物の流通のための道が集落に大きく影響を与えているケースとして詳しく調べる必要がある。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年

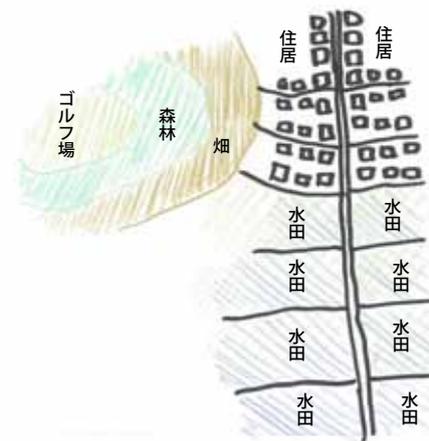
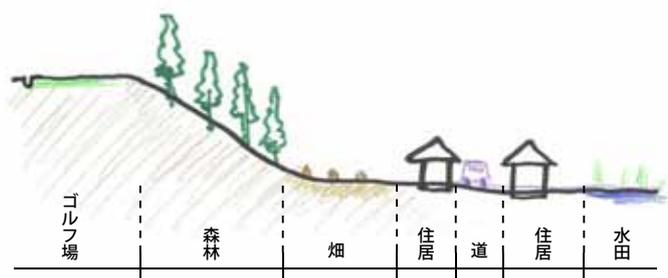


図 4-37-8  
平面ダイアグラム

図 4-37-9  
断面ダイアグラム



### 38 甘楽郡酒甘郷 / 富岡市一ノ宮

担当：田熊隆樹



図 4-38-1 現在の航空写真 (googlemap, 筆者加筆)



図 4-38-2 地形図 (筆者加筆) 地理院地図より

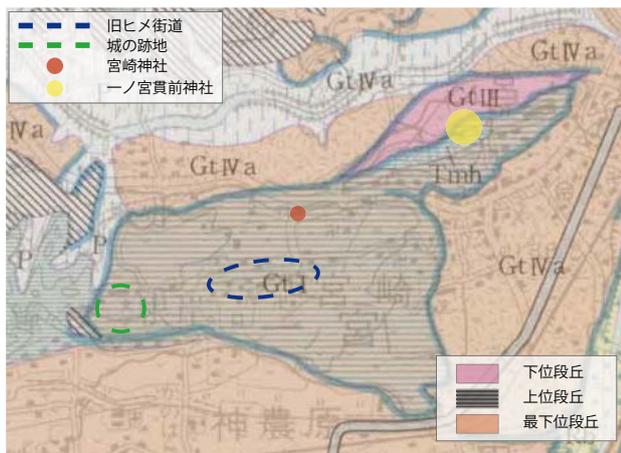


図 4-38-3 土地分類図 (筆者加筆) 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

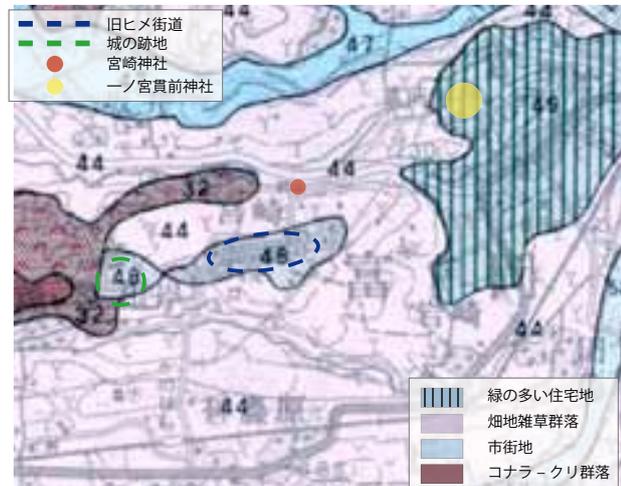


図 4-38-4 植生図 (筆者加筆) 自然環境保全基礎調査より

#### 1) 歴史的物事の情報

『角川日本地名大辞典』には「郷域は「地名辞書」は「下仁田、青倉などにあたる如し」とするが、富岡市一ノ宮の貫前神社の西方、丹生川に沿った所に坂井という地名があり、この付近に比定できようか。」とある。坂井は国道 199 号 (図 4-38-1 中央上の道路) あたりになるが、今回は貫前神社西方の宮崎神社付近 (富岡市宮崎) を実見した。宮崎神社はもとは広銚神社といい、明治 40 年に諏訪神社、白山神社とともに合祀され宮崎神社となった。境内には樹齢約 800 年の杉があり、貫前神社の藤田杉と同等かそれより古いと言われている。また寺が近接して 3 つあり、西から乗願寺、桃林寺、薬師寺 (いずれも創建不明) である。

#### 2) 実見した際の概要

図 38-2 左の中学校のあたりから宮崎神社に向けて歩いた。住民への聞き取りによるとこの中学校は江戸時代の城の跡地だという。この周囲には広大なコンニャク畑が広がっていた。さらに東側には「ヒメ街道」という街道があったという。そして城を守るために寺が置かれたのだという。

現在の旧ヒメ街道は幅広の道路で、道沿いには小さな商店や住宅地が並ぶ。街道の裏手には畑があることが多く、聞き取りによれば自分たちで食べる作物を育てているのみだという。耕作放棄地らしきも見受けられたが、比較的良好に手入れがされているようだった。防風のための屋敷林や川石を積んだ石垣なども見られた。実見した限りでは水田は見られなかった。

宮崎神社の境内は綺麗に整備されているわけではないが、樹齢 800 年の大杉は本殿奥に下る傾斜地に生えていた。宮崎神社は国道 199 号より低い位置に鎮座している点、さらに本殿奥が崖状に下っている点から一ノ宮の貫前神社と類似する。

#### 3) 比定大字領域内の分析

実見した居住地はすべて上位段丘にあった。宮崎神社の後背 (北側) には最下位段丘が控え、上位段丘との間が急な傾斜地となっている (図 4-38-2,3)。宮崎神社の大杉はこの傾斜地に生える。

宮崎から東側の一ノ宮貫前神社までの上位段丘は、このあたりで「孤島」のような存在の段丘である。その先端のあたりに貫前神社が鎮座しており、地形的に古くから特異な場所であったことは明らかである。貫前神社の後背には下位段丘があるが、立地としては宮崎神社と類似した位置にある (貫前神社本殿の後方は崖だった)。



図 4-38-5 中学校（城跡）の周囲に広がるコンニャク畑 撮影＝田熊隆樹



図 4-38-6 現在の旧ヒメ街道 撮影＝田熊隆樹



図 4-38-7 広域航空写真（1948年，国土地理院）に筆者加筆

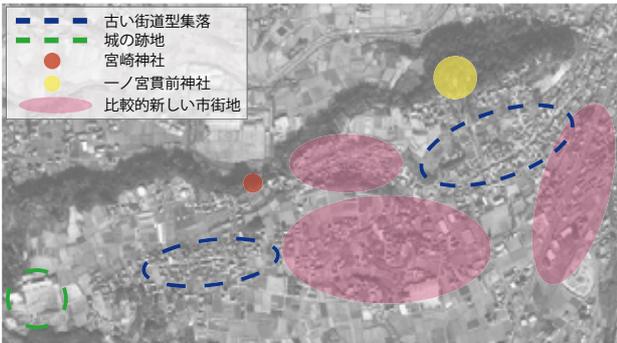


図 4-38-8 広域航空写真（2000年，国土地理院）に筆者加筆



図 4-38-9 (左) 宮崎神社の大杉 撮影＝田熊隆樹



図 4-38-10 (右) 街道型集落と裏手の畑・模式図（筆者作成）

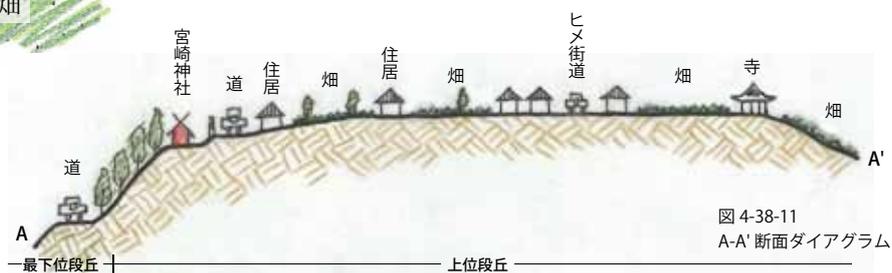


図 4-38-11 A-A' 断面ダイアグラム

植生図では宮崎は市街地と畑地雑草群落になっており、水田は存在しないことがわかる。上位段丘と最下位段丘の間の傾斜地はコナラ-クリ群落となっていることがわかる（図 4-38-4）。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1948年と2000年の広域航空写真を比較すると（図 4-38-7,8）、1948年時点でのこのあたりの主な居住地は旧ヒメ街道のあたりと貫前神社の南側にあるこれも街道のような居住地である。後者は様々な方向から道が引かれているため、この地域を中心であったと思われる（詳細は甘楽郡貫前郷を参照）。

2000年の航空写真を見ると、1948年から、ヒメ街道と貫前神社南側の居住地の間を埋めるように、かつて生産地（畑）であったところに市街地が拡大してきたことがわかる（80年代あたりからの開発）。昔からの居住地はその形態が保存されている。

#### 5) 断面ダイアグラム

（図 4-38-11 参照）

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

周囲から「孤島」のように浮かんだ上位段丘の上に、畑を主とした生産地を持った居住地が生まれた。上位段丘とその北方の最下位段丘の間は急な傾斜地となっており、その境界に貫前神社・宮崎神社が鎮座している。

##### ・集落構造

宮崎では旧城（現在中学校がある位置）へ続くヒメ街道沿いに街道型の集落が営まれた。街道の裏手は南北ともに畑が営まれ、それは現在にも残る集落構造である（図 4-38-10 参照）。この畑がどのような地割になっているかなどさらなる検討が集落の持続の検討につながるか。

##### ・共同体

宮崎神社・貫前神社ともに似たような立地をしている。貫前神社は式内社であり、それを中心に栄えた共同体が存在したと考えられるが、宮崎がその一部であったか、もしくは別の共同体であったかは不明。貫前神社には鹿占習俗など特異な行事が残っているため、共同体の考察のためには祭礼などを調べるとよいと思われる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

## 39 甘楽郡丹生郷／群馬県富岡市下丹生

担当：廣瀬翔太郎



図 4-39-1 比定大字の領域 GoogleMap より

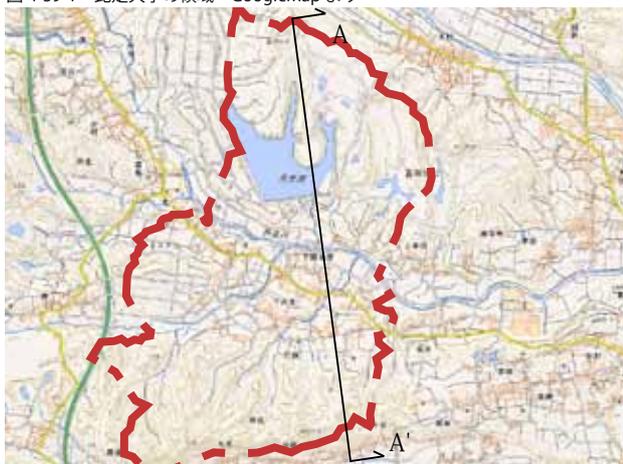


図 4-39-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-39-3 土地分類図（筆者加筆） 5万分の1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-39-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡丹生郷は旧丹生村、現在の富岡市の北西部上丹生・下丹生に比定している。

丹生神社、西林寺は創建年代不明、永隣寺は 16 世紀に創建。

### 2) 実見した際の概要

丹生は中央に丹生川とその支流の打越川が流れ、また丹生湖があるなど水源に恵まれている。また川の流れる一番低い土地と、河岸段丘、小高い山地と地形の起伏にも富んでいる。

丹生神社の鎮座する下丹生を実見した。打越川の川沿いに沿って屋敷林があり、また護岸がしっかり固められてた。下丹生やその西の山地は自然堤防の名残と思われる、主に斜面地に住居が位置していて、それぞれ小高くなっている。

また、下鍛冶屋付近は良質の粘土が取れるとの事で、水田利用が多く見られた。砂防指定地域に指定されている。

### 3) 比定大字領域内の分析

北の山地の上部がゴルフ場に、斜面地に丹生湖（丹生ダム）として利用され、そこから丹生川に注いでいる。集落はまとまってはいないが、段丘上と斜面地にほとんどが立地している。川沿いの谷底低地には水田利用がなされており、比較的明確な土地利用が見られる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

概ね、3) 比定大字領域内の分析で記した様な土地利用が 1975 年（図 4-39-6）からなされている。1975 年の時点ではゴルフ場は建設されていない。

### 5) 断面ダイアグラム

（図版参照）

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

北部の山地にゴルフ場が建設された以外には大きな環境の変化は無い。段丘上と斜面地に住居と畑、丹生川、打越川沿いの谷底平野に水田が位置し、それらは編年的にほとんどかわっていないので、環境が持続していると言える。

#### ・集落構造

段丘上と自然堤防の名残と思われる斜面地の住居の立地は古くから変わっていないと思われる。また、打越川



図 4-39-5 打越川越しに見る集落 撮影=堀井隆秀

の護岸がきちりなされて砂防地域になっていることから水害が多い地域だったのではないかと考えられる。そのためそれぞれの家屋も小高い立地となっており、微高地であることが存続の要因か。

・共同体

今回の調査で共同体の手掛かりを得られなかったが、北西部の上丹生は、少し閉じた印象を受けた。

参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年



図 4-39-6 航空写真 (1975年)

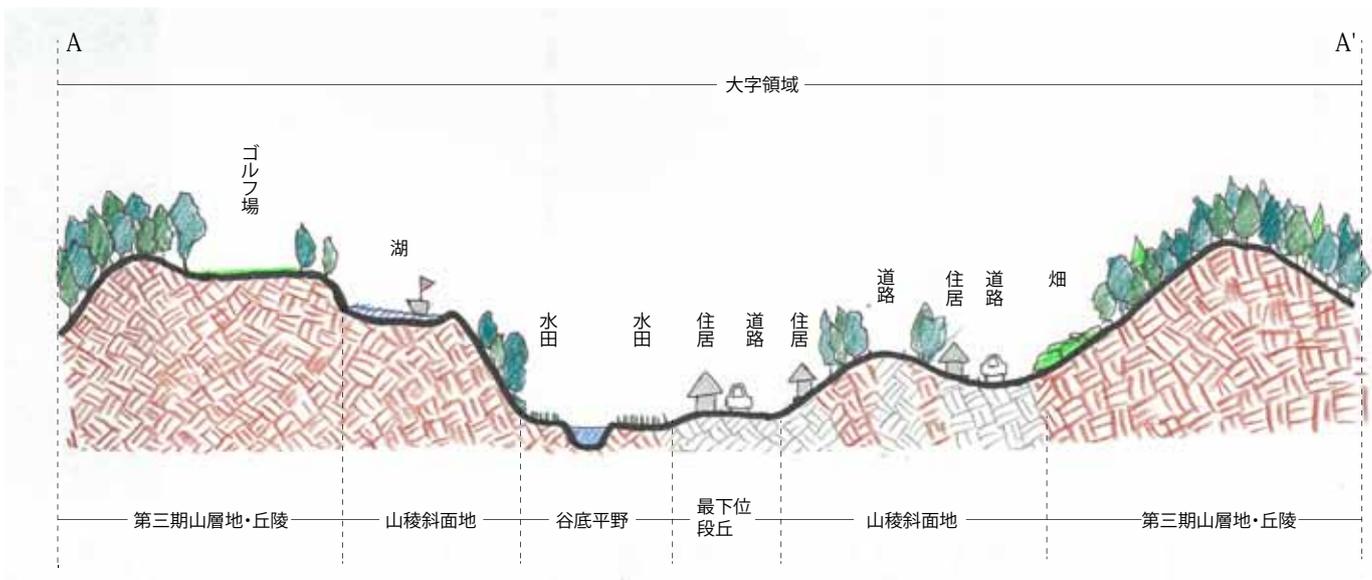


図 4-39-7  
A-A' 断面ダイアグラム

## 40 甘楽郡那射郷 / 富岡市南蛇井

担当：瀬尾憲司



図 4-40-1 比定大字の領域 GoogleMap より

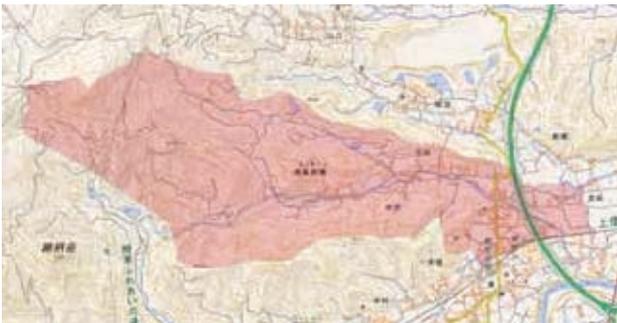


図 4-40-2 地形図（筆者加筆） 地理院地図より

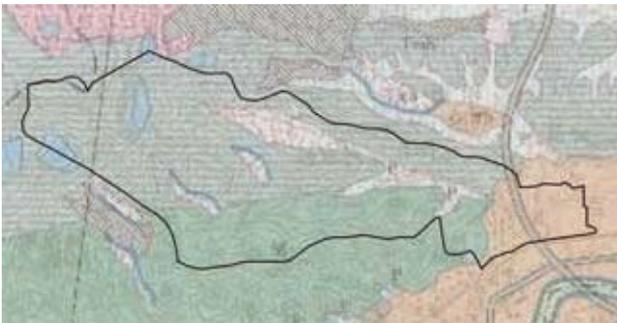


図 4-40-3 土地分類図（筆者加筆） 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より

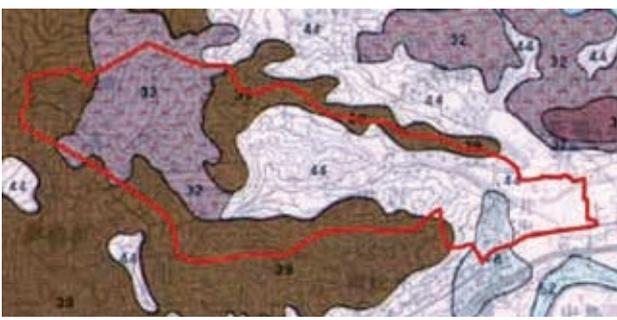


図 4-40-4 植生図（筆者加筆） 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

甘楽郡那射郷は富岡市南蛇井に比定されている。

真壁についての歴史的物事については、字中村にある曹洞宗最興寺は文亀元年に没した天倫正挺が小幡城（現甘楽町）城主平憲重より「南蛇井郷」の故地を賜り再興したと伝えられている。

那射郷は二つの尾根にまたがるようにあり、その間の谷を川がながれている。これは鑄木側が流れている。

この川をのぼっていき、山を越えるように集落を実見した。植生図では田畑などの耕作地が描かれていないが、実見した際には田んぼがあった。山から流れてくる水を利用し、田を谷部の底で営み、山の裾野では民家があった。民家はどれも大きいものが多く、そのことから養蚕が営まれていた可能性も指摘できる。植生図では桑畑が多く描かれていることからその可能性は非常に高いものと思われる。大字領域の東部には上信越自動車道が通っている。南下して鑄木側と自動車道が交わるあたりで下仁田 IC があり、そこから下りることができる。しかし、この周辺が特に栄えているといった印象はなかった。

他研究員の報告にも述べられているかもしれないが、この集落にある民家は切り妻のメインのボリュームの端に片流れの小さな小屋が加えられたような形をしていた。これは今回の調査を通して多く見られた形で群馬県の民家ならではの形なのかもしれない。しかし、詳細はよくわかっておらず、今後の詳細調査において実際に内部を見せてもらいその利用のされ方を詳しく調査する必要があるものと考えられる（図 4-40-5）。

山を登っていくと、民家は少なくなっていく、頂上付近では森林のみになった。尾根と尾根の間の谷の地形から山頂の方を見ると、木々に覆われた山の中から一つだけ飛び出した大きな岩のようなものが目についた。そこが山岳信仰の対象になっている可能性も議論された。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は桑畑、水田、住宅、スギやヒノキなどの森林である。植生図では水田、住宅地は描かれていないが、実見した際には目についた。植生図によると、桑園群落とスギ・ヒノキ群落が大字領域の大半を占めていることが分かる。このことから養蚕を中心とした生産を行っていたことが推測できる。

1 『角川地名辞典』（713）参照



図 4-40-5 山間に並ぶ大きな住居 撮影=小林千尋

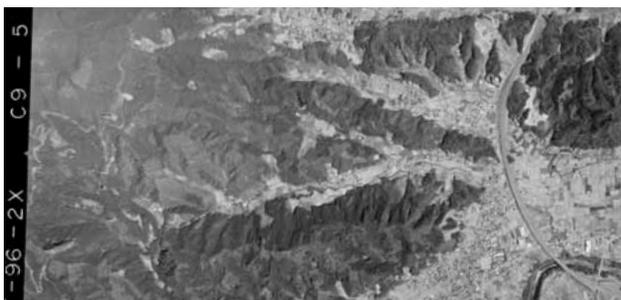


図 4-40-6 航空写真 (1966年)

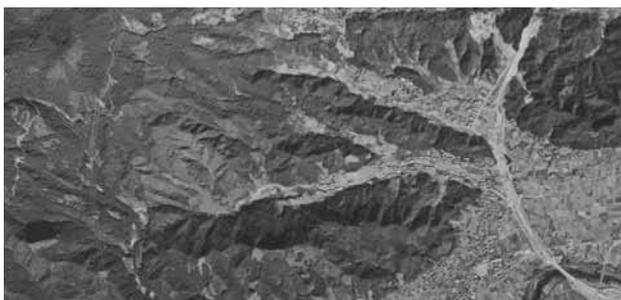


図 4-40-7 航空写真 (1991年)

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1966年と1991年では目立った変化は見られない。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

植生図によると、生産については桑畑を中心とした養蚕が行われているが、実見した際には水田を多くみた。集落全体が養蚕業から稲作に生産を変えた可能性がある。しかし、谷底に水田をおき、その両脇に民家を配置し山へとつながる配置は土地利用として明快であった。

##### ・集落構造

一つ一つの民家が大きかったことや、かつて養蚕業を営んでいたと考えられることから、集落構造としては一般的な稲作を行う集落とは少し違ったものになっているように感じた。しかし、具体的に民家の大きさが集落構造にどのような影響を与えるかまでは詳しく調査をできていない。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

##### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

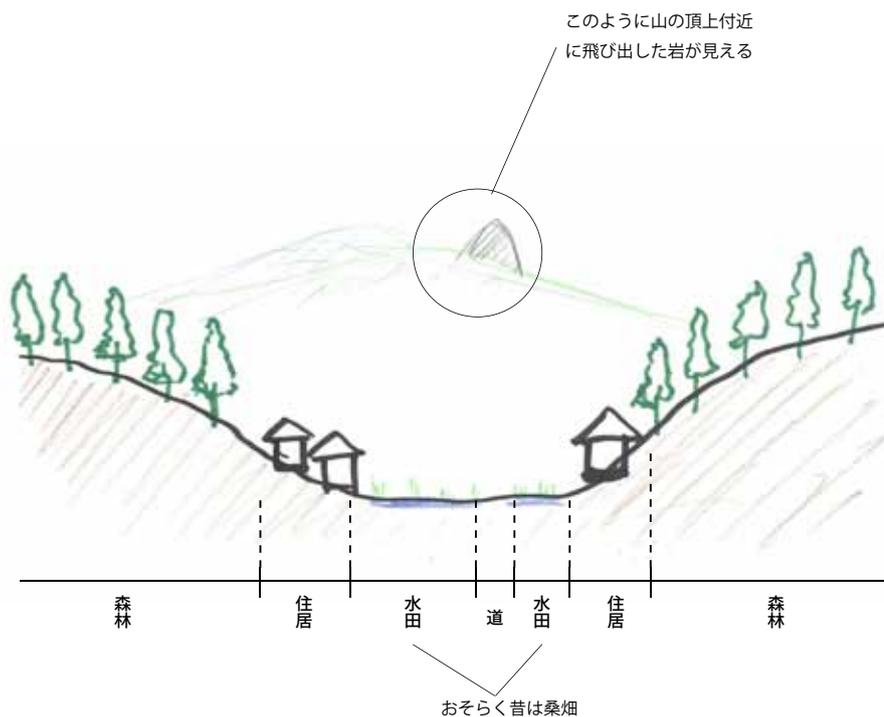


図 4-40-8 断面ダイアグラム

## 41 新田郡淡甘郷／群馬県太田市新田高尾町

担当：橋本慧



図 4-41-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-41-2 航空写真（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-41-3 治水地形分類図（筆者加筆）



図 4-41-4 航空写真（筆者加筆） 地理院地図より

### 1) 歴史的物事の情報

大字範囲より少し東側には矢抜神社がある。社殿の東にある2本の山椿があり、樹齢300～400年と推定される古木であり、天然記念物に指定されている。神社は二ツ塚古墳と呼ばれる前方後円墳で、周堀を思わせる痕跡もあり、埴輪片や土器も出土している。このあたりは中世新田氏の一族世良田氏から出た江田氏の所領で、江田郷と称していた。出典：太田市 HP9/24 閲覧

### 2) 実見した際の概要

矢抜神社から集落、西側の農地を実見していった。大字範囲内は東側に居住域、西側に農地と土地利用の違いが明確に確認できた。さらに居住域は自然堤防上の微高地に立地しており、標高による土地利用の差も確認できた。石田川と平行するように通る道路に並ぶ集落は迅速測図にも確認することができ、昔からの構造を残しているものと考えられる。石田川の東に南北に走る道から西側が低くなっており、石田川より西側が更に低くなっていることが確認できた。

家屋は比較的古いものが多く、修復や改築のされていない荒れたようなものも多く見られた。また大きな家屋の多くには西側と北側にL字の屋敷林や高垣が設けられており、関東平野に吹く空っ風を防ぐためのものも確認できた。

西側にまとまってある農地には水路が張り巡らされていたが、水をどこから引いているのかは確認できなかった。ところどころで農地も荒れているところが確認できたが、村の縮小とともに農地の数も減らしているのか、それとも単純に担い手がいないために放棄されてしまったのかはわからなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。治水地形分類図を重ねると台地や自然堤防を境界として、居住域と農地が明確に分かれていることが確認できる。このような集落の立地は迅速測図においても確認することができ、昔からの構造を残しているといえる。また、さらに広域スケールでみると、台地と低地の境界部、ちょうど浅い谷にあたるような場所で水田もしくは畑作を行っていることがわかる。



図 4-41-5 荒れた農地 (撮影=橋本慧)



図 4-41-6 家屋の西側に配置される高垣 (撮影=橋本慧)



図 4-41-7 航空写真による編年比較 (左から 1974 年, 84 年, 現在) 地理院地図より

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1974 年 -1978 年および 1984 年 -1987 年の航空写真を比較してみると集落の南部に高速道路のバイパスが通されていることがわかるが、集落拡大や大規模なスプロールは見られない。迅速測図からも昔からの居住域は大きく変化しておらず、昔のままの構造を保っていると考えられる。また 74-78 年のときには整備されていなかった農道が 84-87 年のときには車道として整備されていることも確認できる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

水の得やすい川沿いに集落を構え、自然堤防や台地上の安全な場所に住居を構える。非常にわずかな標高差であるが、浅く入り込んだ谷に水田をつくり、生産を行っている。一部放棄されているような土地も見られたが、多くは管理されていて、継続的に人の手が入っているように感じた。

##### ・集落構造

微高地にまとまって住み、生産地をまとめて確保する、利根川流域でよく見られるような構造。それぞれの家屋には冬に吹く空っ風対策の高垣や屋敷林が確認された。関東平野の利根川沿いという洪水もおおく、風も強いという厳しい環境のなかでの生存戦略をみることがができる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

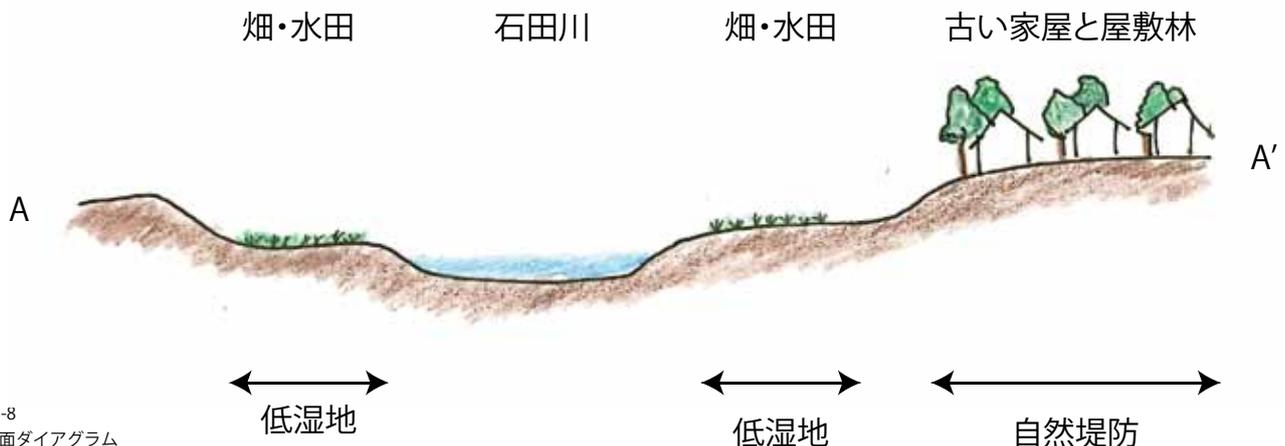


図 4-41-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 42 榛沢郡新居郷／埼玉県本庄市牧西

担当：相原雄太

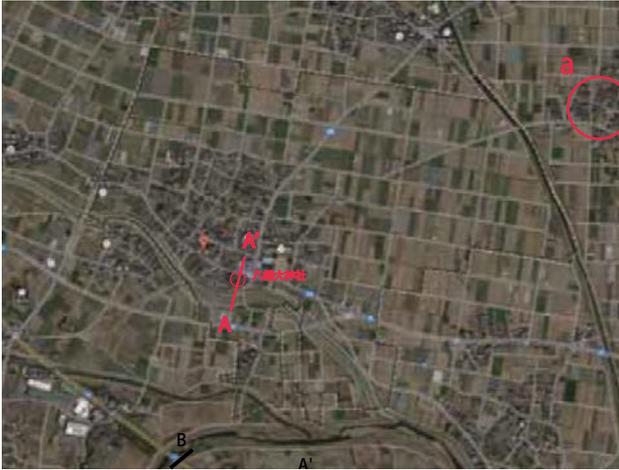


図 4-42-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-42-2 集落と小山川の間にある堤防



図 4-42-3 住宅地内の低い生垣



図 4-42-4 畑に面する高い生垣

### 1) 歴史的物事の情報

江戸時代は中山道の遊樂の宿場町として賑わい、その光景は栄泉の「木曾街道六十九次」の浮世絵にも描かれている。集落内の八幡大神社は建久年間(1195)に児玉党の一族である牧西四郎広末が武運長久の守護神・相州鎌倉の鶴岡八幡宮を奉遷して祭ったものである。また、この地域には金鑽神楽、宮崎組という神楽が伝えられている。神楽は、天照大神の岩屋のかくれ神話とその起こりとされており、神を喜ばせる舞楽(まい音楽)として各地にそれぞれのいわれをもって伝えられてきた。この地域に伝わる金鑽神楽、宮崎組の起こりについてはまだ明らかではないが、少なくとも江戸時代正徳年間(1771-1715年)以前の作であるとされている。

### 2) 実見した際の概要

利根川中流右岸の沖積低地の微高地に位置する。本庄市牧西の南に中山道が通り、集落の南には小山川が流れる。この小山川と集落のあいだには堤防(図 4-42-2)がある。集落の周りには水田が広がるが、集落内は耕作放棄地がいくつか確認できた。集落内の生垣もしくは石垣は低く、集落と集落の北に位置する水田・畑の境には大きな生垣が並んでいた(図 4-42-3)。また、集落の東に位置する道路に面する家は集落内では確認できなかった高さのブロック塀が連なっていた。この集落の南には中山道が通っており、宿場町として賑わっていたのだが、その宿場町の面影を感じることができなかった。

一方で、榛沢郡新居郷の北東に位置する集落(図 4-42-1a)は一軒一軒の庭が広いことは共通していたものの、榛沢郡新居郷の集落と違い、一軒一軒の塀が高かった。

### 3) 比定大字内の分析

集落を構成する主要素は住宅と水田である。住宅が密集して立地しており、それを取り囲むように水田が広がる。近くの他の集落と違い榛沢郡新居郷の集落は住宅地内の生垣もしくは石垣が低く、住宅地とその外部に面している塀が高くなっていることが特徴的だといえる。これは共同体内の強いつながりを感じる一方で、外部に対して閉じた意識を感じる。また、金鑽神楽、宮崎組は先ほど記述したとおり、1711-1715年以前の作であり、この地域の神楽が古くから行われてきたことを物語っていると同時に、古くから伝わってきたという共同体内の強いつながりを物語っている。



図 4-42-5 迅速測図

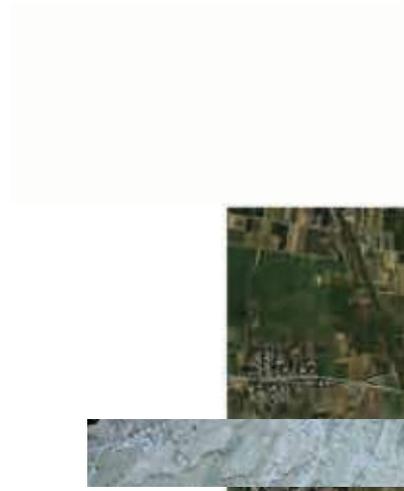


図 9-6 航空写真 (1948 年)

図 4-42-6 1984-1987 年の航空写真



図 4-42-7 住宅地と水田・畑の関係 (住宅地が手前、水田・畑が奥)

4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図(図 4-42-5)、1984-1987年の航空写真(図 4-42-6)現在の航空写真(図 4-42-1)と集落内の住宅地の位置と規模は変わらない。かつ、それを取り囲む水田もあまり変わっていない。しかし、住宅間の幅は現在に移行するにつれて狭くなっている。これは住宅地内の庭もしくは畑を住宅に転用したのだと考えられる。

5) 断面ダイアグラム (図版参照)

6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

・環境

土地を大きなスケールで分類すると沖積低地に位置するものの、そのなかでも微高地を選び住んでいる。また、集落の南に位置する小山川の洪水などに対しては堤防で対策している。以上のことから環境の側面からみて妥当だと考えられる。

・集落構造

住宅地があり、それを取り囲むように水田があるという集落構造である。住宅地と住宅地外の間には高い塀があり、外部に対して閉じた集落構造であった。以上のことから集落構造の側面からみて妥当だと考えられる。

・共同体

住宅地内の生垣が低いということは、住宅地内に自由に入ることができる。これは住民同士がお互いに強いつながりなければなしえることでない。また、金鑽神楽、宮崎組が現在まで伝承され続けているということは住民同士のつながりだけでなく、世代間の強いつながりを示している。以上のことから共同体の側面からみて妥当だといえる。

参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988 年

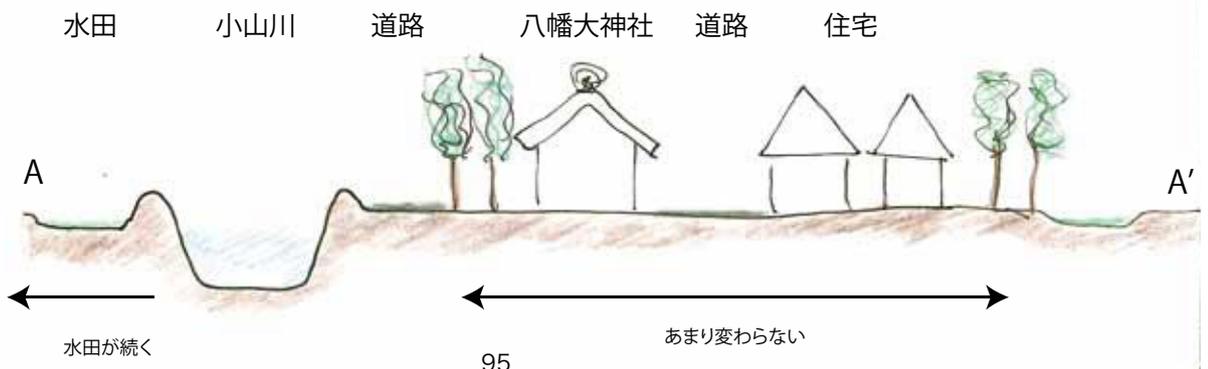


図 4-42-8 A-A' 断面ダイアグラム

## 43 幡羅郡幡羅郷／埼玉県深谷市原郷

担当：相原雄太

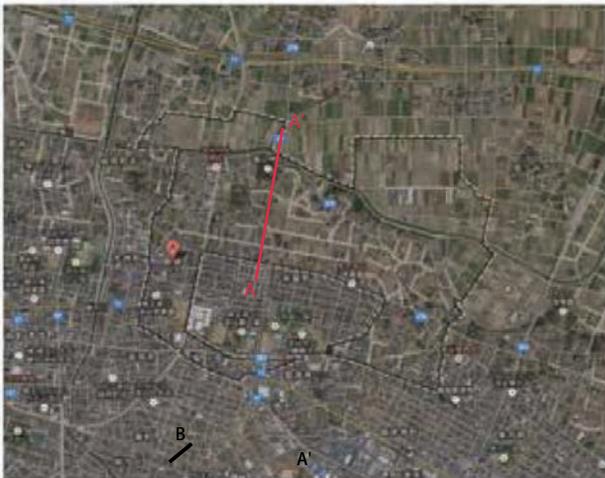


図 4-43-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-43-2 敷地内に二世帯の家を構える



図 4-43-3 氏神



図 4-43-4 神社の奥の森の様子

### 1) 歴史的物事の情報

幡羅郷は現在の深谷市原一体とする説がある。地内には古墳時代の四日市遺跡、古墳後期の木ノ本古墳群、鎌倉期の幡羅太郎館がある。幡羅郷南側には中山道が通っている。また、楡山神社は当時から幡羅郡の総鎮守、幡羅郡總社といわれ、御社名を幡羅大神ともいった。楡山神社の奥の森は、数十年前までは「里人不入の地」といわれ、誰も入ることのできない神聖な森であった。

もともとこの幡羅郷のすぐ南側には利根川が流れていた。しかし、16世紀前期の河道改変によって幡羅郷の北側に流路が変更した。

### 2) 実見した際の概要

幡羅郷は台地上に位置し、北側には福川が流れる。福川の北側は主に水田が広がり、南側は畑と住宅が広がる。楡山神社のまわりには古くて大きな家が多かった。そして、そのような家は敷地内にいくつかの家は建て、2・3世代で生活していた(図4-43-2)。そして敷地内に氏神のようなものを建てている家も多かった(図4-43-3)。楡山神社の敷地内にも天満天神社、大物主神社、手長神社、大雷神社、八坂神社、知々夫神社、招魂社、荒神社といった神社が建てられていた。楡山神社の奥の森は先ほど記述したように数十年まで誰も入ることのできない神聖な森であった。しかし、今では誰でも入れるようになり、神聖な森といえるような雰囲気は感じとれなかった(図4-43-4)。

幡羅郷の集落の南側にある中山道を挟んで反対側にある他のまちの集落は完全に新興住宅地であった。このように隣の集落が新興住宅地化したにもかかわらず、幡羅郷の集落は一切影響を受けていないように感じた。

### 3) 比定大字内の分析

集落を構成する主要素は住宅と水田と畑である。福川を境に北側は水田、南側は畑と住宅地といったように分かれていた。古墳時代(250-600末頃)の四日市遺跡が発掘されていることから、その時代から人々が住んでいたことがうかがえる。木ノ本古墳群はこの地域の有力者の墓だと思われ、この土地が当時から有力者によって支配されてきたと考えられる。この土地にとって楡山神社の存在も大きな影響を与えていると考えられる。氏神の存在は氏子の存在を意味する。つまり、この地域には今でも楡山神社を信仰する氏子が数多くいると考えられる。また、楡山神社には氏子総代会という組織が存在していることから、氏子間でなにかしらのつながりがあるように考えられる。敷地内にいくつかの家は建て、2・3世代で生活している家は、敷地内のいらなくなった畑などの現代版の利用方法もしくは新しい世代を取り込む方法の例として考えられるだろう。

また、幡羅郷の集落の南側にある住宅地はなぜこのエリアだけ新興住宅地となったのだろうか。考えられるのは中山道を挟んで、楡山神社の影響を受けない地域だったからだろうか。この理由はこれからの調査で明らかにしていく必要がある。

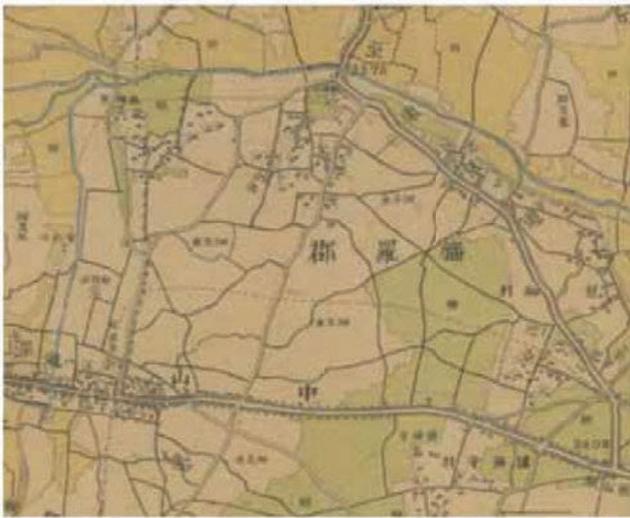


図 4-43-5 速速測図



図 4-43-6 航空写真 (1958 年)



図 4-43-7 1988-1990 年の航空写真 (1986 年)

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

速速測図(図 4-43-5)、1958年の航空写真(図 4-43-6)、1988-1990年の航空写真、現在の航空写真(図 4-43-1)とを比較してみると福川の北側の水田の位置、楡山神社周辺の住宅地の位置と規模は変わらない。しかし、幡羅郷の南側は1958-1988年の間にさきほど述べた新興住宅地に変化した。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

集落立地は選ぶように集落・畑は台地上に立地し、水田は低地に立地していた。以上のことから、環境の側面からみて妥当だといえる。

##### ・集落構造

福川を境に北側が水田、南側が神社を中心に住宅・畑が広がるといった集落構造である。

##### ・共同体

木ノ本古墳群や楡山神社の氏子の存在はこの地域が有力者によって支配されてきた地域だということがうかがえる。さらに、氏子総代会の存在は氏子同士のつながりを感じた。以上のことから、共同体の側面からみて妥当だといえる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』角川書店、1980年

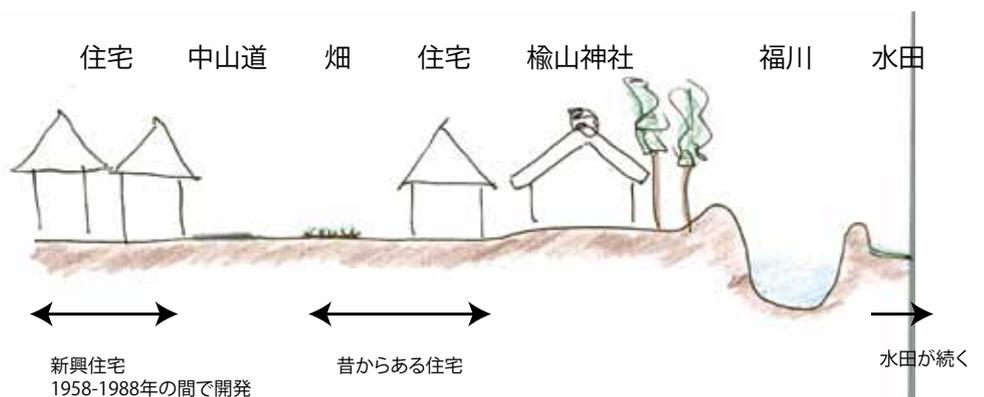


図 4-43-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 44 幡羅郡荏原郷／埼玉県深谷市江原



図 4-44-1 比定大字の領域 GoogleMap より

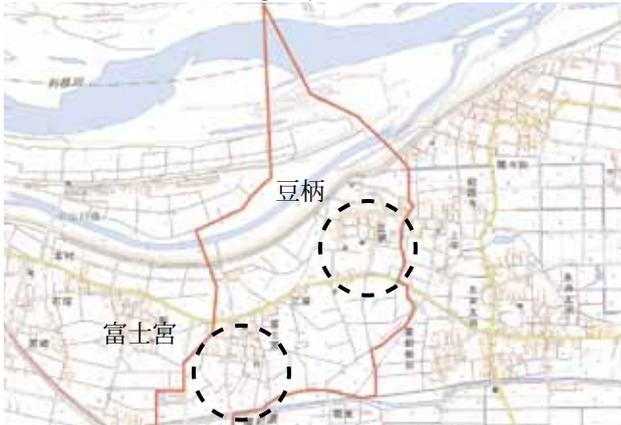


図 4-44-2 集落位置 国土基盤地図 (筆者加筆)

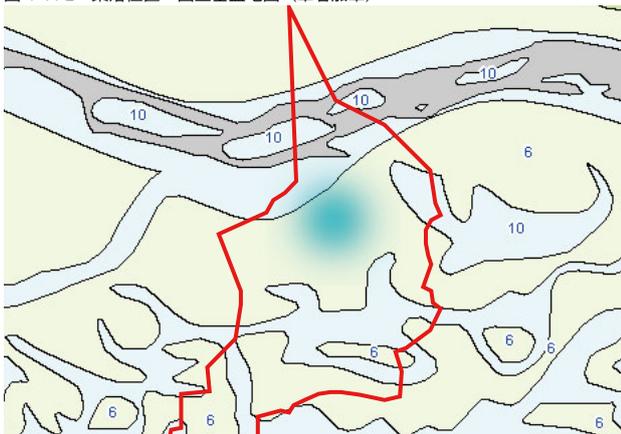


図 4-44-3 シームレス地質図 (筆者加筆)



図 4-44-4 南へ伸びる富士神社の参道 (撮影＝橋本慧)

### 1) 歴史的物事の情報

幡羅郡荏原郷は現在の埼玉県深谷市江原に比定されている。集落の中心部に位置する富士神社はかつて富士山の噴火があった際、集落にも火山灰が降ったが、森のなかに祠を立てて、神威を祭ったもの。集落内には他にも浄光寺や観音院があるが、創建年代はいずれも不明。

### 2) 実見した際の概要

荏原は北から利根川、水田があり、県道 45 号線を挟んで集落が位置する。大字内には現在、富士宮と豆柄、2つの集落があり、どちらも居住域と生産地が明確に分かれた集落である。

富士宮の中心から少し外れた位置に立地する富士神社周辺が集落内部で一番高い場所に立地している。神社の参道は南側に伸びており、集落とは逆の方向を向いていることが確認できた。富士信仰の可能性が推察される。神社の狛犬の台座は溶岩でできており、神威を祭った神社の沿革との関係も考えられる。居住域は周辺より帯状に伸びた微高地にあり、自然堤防上の立地が確認できた。

豆柄はまとまった墓が集落内にいくつか点在していた。墓は苗字が同一であったため、周辺には一族が住んでいるのかもしれないと推測し、表札を探してみたが、表札自体が見つけられなかったため確認できなかった。

集落から南に行くにつれて、標高は下っていき、低湿地上に田畑と老人ホーム、さらに南に行くと自然堤防上に居住域と畑が点在するような集落だった。ただ畑は荒れているところが多く見られ、放棄地があった。家屋も古く、活気をあまり感じなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

集落を構成する主要素は畑地、水田、住宅地である。昔からの居住域を大きく変容させず、自然堤防上を選んで住んでいることが確認できた。生産としての土地の確保も十分であり、昔からの風景を残しているように感じられた。一方で、耕作の行われていない畑や水田が幾つか確認でき、特に富士宮の集落は人影を感じることはできなかった。家屋も更新されておらず、古いまま荒れたような家屋も散見された。また富士宮には神道の墓が見られ、仏式の墓とは離れた場所に小さくまとまっているものも確認できた。



図 4-44-5 ひび割れた農地と雑草の繁茂した農地



図 4-44-6 神道の墓地



図 4-44-7 航空写真による編年比較 (左から '74年, '86年, 現在) 地理院地図

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1958年および1986年の航空写真と現在の航空写真を比較すると集落の大きさや形態に大きな変化は見られない。また迅速測図からも利根川の流路変更や道路敷設などの変化は見られるものの、居住域やその大きさに大きな変化は見られない。形態的にはかつてからの集落構造をずっと守ってきた集落であると考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

居住については自然堤防上、富士宮に関してはさらに微高地に立地しており、利根川付近ではあるものの、その付近においては最も安全な位置に立地が見られた。生産地に関しては現在は耕作放棄地が散見され、現在は積極的に手が加えられているようではなかった。

##### ・集落構造

迅速測図および1958年、1986年の航空写真の比較から古くからの集落構造を今に残していることがわかった。安全な場所に居住域をまとめて確保することで、生産域もまとめて確保することが可能であり、生産の効率化をはかったものと考えられる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

A'

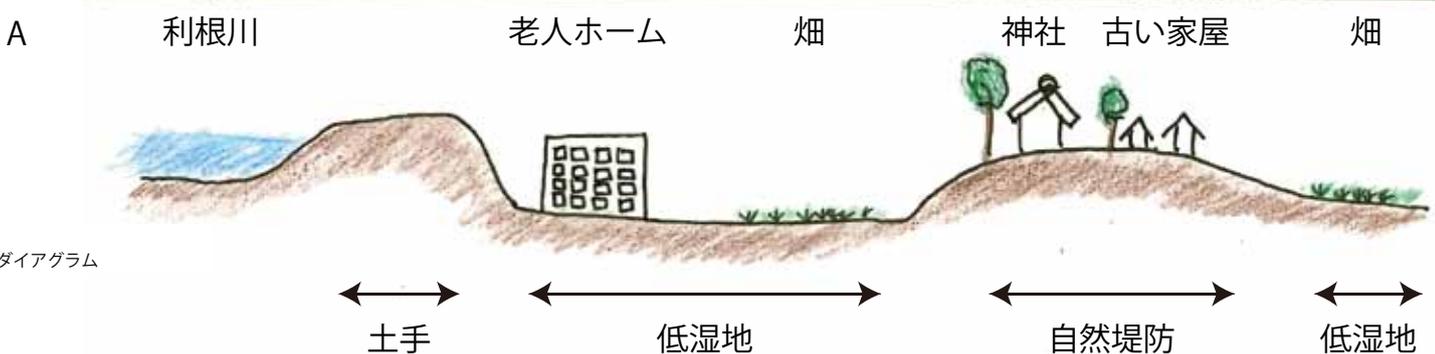


図 4-44-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 45 新田郡石西郷／群馬県太田市岩瀬川町

担当：橋本慧



図 4-45-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-45-2 比定大字と周辺工場及びインフラの関係 GoogleMap より（筆者加筆）



図 4-45-3 治水地形分類図 地理院地図より（筆者加筆）



図 4-45-4 新興住宅化した旧農地

### 1) 歴史的物事の情報

新田郡石西郷は現在の群馬県太田市岩瀬川町に比定されている。大字範囲内には浅間神社、伊佐須美神社、吉祥寺など寺社仏閣もいくつか見られるが、創建年代や詳しいことについては不明。岩瀬川町の西側には江戸時代の思想家、高山彦九郎を祀った塚がある。

### 2) 実見した際の概要

中央を東西に通る県道から浅間神社、そこから北上するように集落を実見した。多くが新興住宅化しており、昔の居住域と最近に開発された宅地の立地的な特性をつかむことはできなかった。

### 3) 比定大字領域内の分析

本郷は集落内を十字に県道が通っており、さらに集落の東側には富士重工矢島工場が立地している。もともと太田市は富士重工の企業城下町であり、市内には富士重工の工場が数多くある。そのため、市内には大型車の往来も多く、交通量が非常に多い。過去の航空写真を見ると、工場ができる前は水田や畑が広がっていたが、工場ができるとともに東西の県道が整備され、周辺との交通アクセスが向上した。それに伴い、農地の宅地化が進み、今の姿を描いているものと考えられる。かつては航空写真からも確認できるように関東平野に多く見られる、ある程度のまとまりをもって居住域を設定し、生産地を多く確保し、個々の家屋には屋敷林が設けられているという集落であった。さらに治水地形分類図と過去の航空写真を重ねてみると、やはり、かつては自然堤防上の微高地に住居を構えていたことがわかる。しかしながら、本郷は今回の疾走調査において他集落で見られた、バイパスや高速道路の建設はあったものの、対象とするスケールの差によって、大きな変容の原因にはならなかったパターンとは逆の工場とそれに伴う道路敷設によって直接的な影響を受けた集落であると考えられる。かつては居住と生産がある程度セットになった構造で存続してきた集落ではあるが、農地を宅地化し、経済活動は外部の工場に求めるようになり、居住と生産が分かれてしまった集落であると考えられる。



図 4-45-5 ロードサイド化した旧集落



図 4-45-6 迅速測図および 1948 年の航空写真



図 4-45-7 1984 年および現在の航空写真

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1970 年の航空写真にすでに富士重工の工場は確認できるが、居住域は大きくは拡大しておらず、農地も残されていることがわかる。1980 年代も少しずつ拡大は見えるものの大きな変化は見られないが、1990 年代になり、東西の道路が建設され始めると、急激に居住域が拡大し始めることがわかる。2000 年代には現在の姿とほぼ同様な形になり、この集落においては東西の県道敷設が非常に大きな影響をもっていたものと考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

かつては地形コンシャスな土地利用がなされていたことが治水地形分類図と過去の航空写真からも推測できるが、今はそのような土地利用は見られず、一様に市街化してしまっている。

##### ・集落構造

本郷においては現在のまちなみから集落構造を読み解くのは困難であり、住まい方や構造から生産性や生存性を見出すことはできない。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

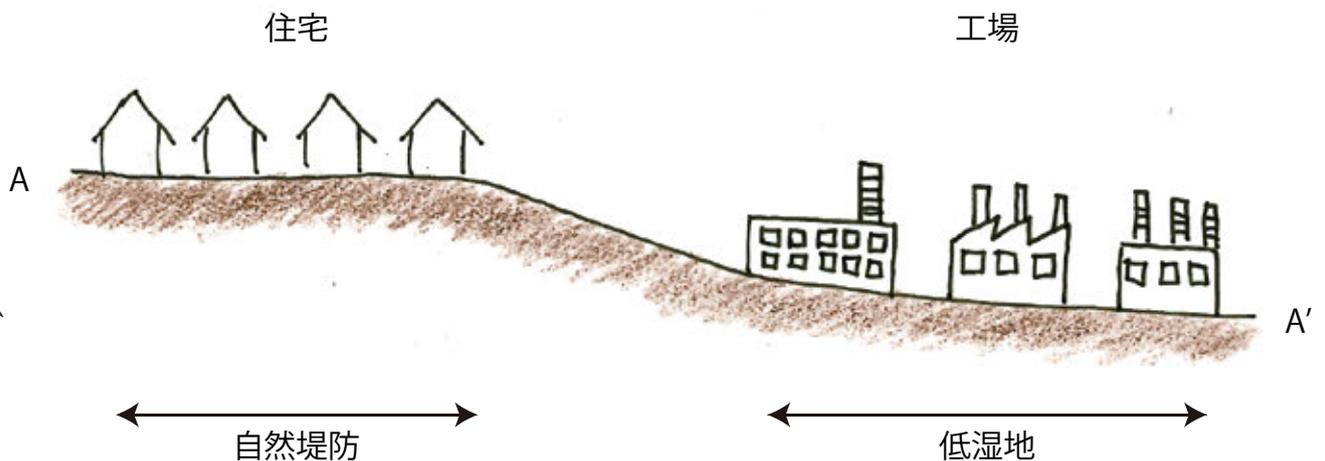


図 4-45-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 46 邑楽郡長柄郷／群馬県邑楽郡千代田町赤岩

担当：相原雄太

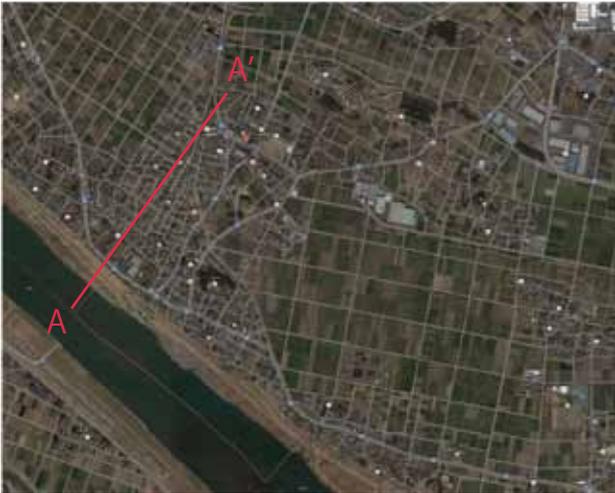


図 4-46-1 比定大字の領域 GoogleMap より



図 4-46-2 船渡場

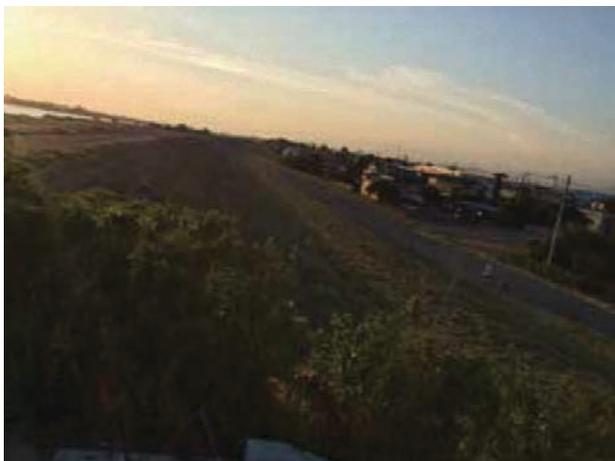


図 4-46-3 堤防



図 4-46-4 河川沿いにある新しい住宅

### 1) 歴史的物事の情報

1889年に町村制施行に伴い、邑楽郡に富永村・永楽村・長柄村が誕生。1995年に富永村・永楽村・長柄村が合併し、千代田村が発足。1982年に千代田村が町制施行して千代田村となる。比定大字内には光恩寺という約1200年前に開かれたとされる古寺が集落中心に立地する。

赤岩渡船は千代田町赤岩から利根川をはさんで向こう岸の埼玉県熊谷市を結んでいる。その歴史は古く、戦国時代の上杉謙信の文献にも登場する。その後、江戸時代には水運が発達し、利根川を利用して江戸や房総方面との交通が盛んに行われた。特に赤岩は水深もあり立地条件にも恵まれ、江戸からの大型船の終点という河川交通の要点として、坂東16渡津に数えられ繁栄した。しかし、長かった繁栄も明治時代の中頃までで、その後は鉄道等の交通機関が発達するにつれて急速に衰退し、渡船場(図4-46-2)として機能が残った。

### 2) 実見した際の概要

集落の南西には利根川が流れている。集落と利根川の間には高さ約10mほどの堤防(図4-46-3)が建てられていた。河川に近い家ほど新しいものが多い(図4-46-4)。

住宅の周りには水田が多くあった。

### 3) 比定大字内の分析

集落を構成する主要素は水田と住宅である。立地は河川沿いにあるため、洪水被害はたびたびあったものだと考えられる。ただ、河川交通の要点になることができたという立地の良さがゆえに洪水被害があったとしてもこの赤岩という場所から移住することがなかったのだろう。

河川に近い家ほど新しいものが多かったのは堤防の影響であろう。集落と利根川の間には約10mの堤防が存在する。この堤防のおかげで以前ほど洪水の被害を受けなくなったために、より川沿いに住宅が建てられるようになったのだろう。



図 4-46-5 迅速測図



図 4-46-6 航空写真 (1974 年)

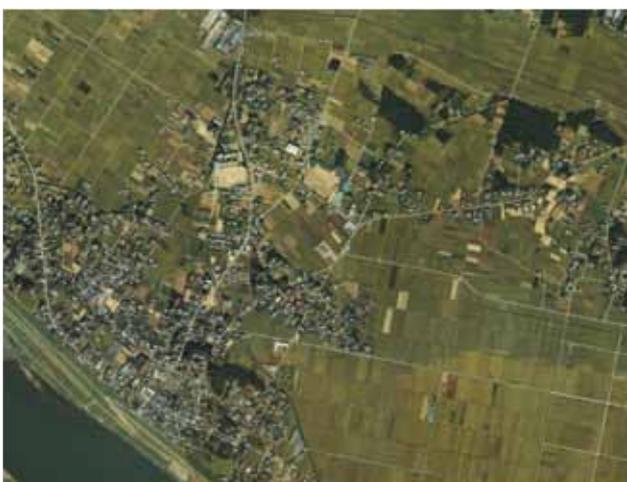


図 4-46-7 航空写真 (1986 年)

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図(図 4-46-5)、1974年の航空写真(図 4-46-6)、1984年の航空写真(図 4-46-7)、現在の航空写真(図 4-46-1)とを比較してみると、迅速測図と1974年の航空写真のあいだで集落内の住宅密度が高くなったこと、迅速測図にはない位置に新しく住宅ができていることが確認できる(写真上部)。住宅密度は現在に近づくにつれて高くなっていく。そのため河川と住宅地の間はより狭まっている。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

土地分類図をみると台地上に立地していることが確認できる。しかし、河川沿いで洪水被害が多い地域であったことを考えると妥当であるとはいえない。

##### ・集落構造

現代になって多少崩れているが、利根川、住宅、水田という順番で立地する集落構造である。

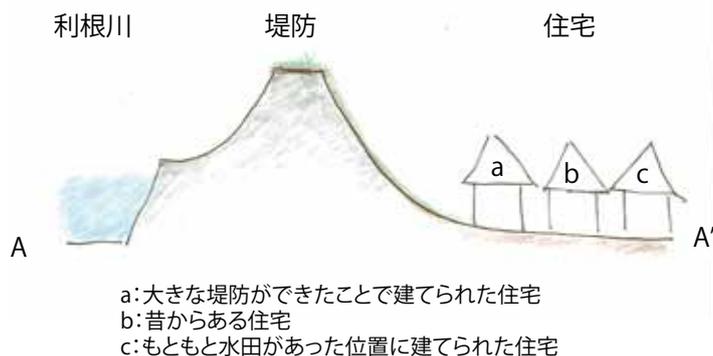
##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体については検証するまでに至れなかった。しかし、光恩寺や利根川と共同体の関係など検討が必要に感じる。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』角川書店、1980年

図 4-46-8  
A-A' 断面ダイアグラム



## 47 幡羅郡下秦郷／埼玉県熊谷市下奈良

担当：橋本慧

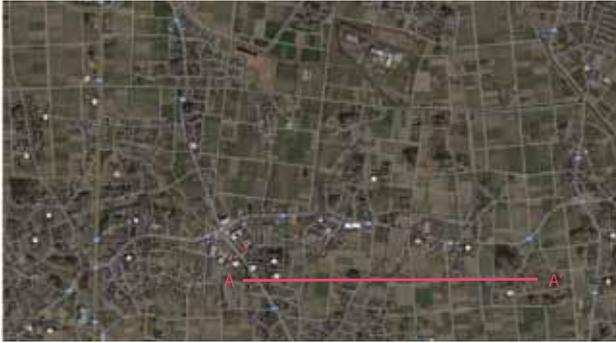


図 4-47-1 比定大字の領域 GoogleMap より

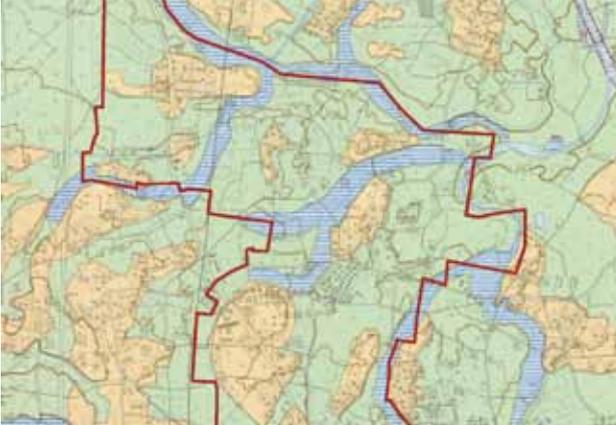


図 4-47-2 治水地形分類図（筆者加筆） 地理院地図より



図 4-47-3 迅速測図（筆者加筆）



図 4-47-4 手入れの良く行き届いた水田（撮影＝橋本慧）

### 1) 歴史的物事の情報

幡羅郡下秦郷は埼玉県熊谷市下奈良に比定されている。古墳時代後期から平安時代にかけての湧き水に対する祭祀に関連する神社であり、湯殿神社を取り囲むように幡羅遺跡や、幡羅郡衙（郡の役所）跡である西別府遺跡、西別府廃寺等、祭祀・古代寺院・郡衙の跡がそろって確認されている。

### 2) 実見した際の概要

自然堤防が細かく入り組んだような地形をしており、実見の際には旧河道と考えられる興福寺付近から北上していった。1m～2m 程度であるが、自然堤防の微高地による標高の変化を感じることができた。また、古い家屋は明らかに微高地にのみ立地しており、そこから1段下がった場所に水田が広がるような形をとっていた。

集落内にはハウスメーカーによる新興住宅地の開発が見られたが、そのような場所は周辺の古い家よりは一段低いような位置に立地しており、畑や水田が開発され、住宅になっていることが確認できた。

集落の北部にはまとまった水田地帯が確認できたが、どの田んぼもよく手入れが行き届いており、人の手を感じることができた。集落内をさらに北上するとまた居住域が現れ、古い家屋があり、やはりそこも微高地に立地していることが確認できた。

また微高地上に立地する家屋も必ずしも古いわけではなく、改修もしくは建て替えを行い、立地はそのままに建物のみ更新を行っている例もいくつか確認できた。

### 3) 比定大字領域内の分析

迅速測図と現在の治水地形分類図を重ねてみると、明らかに居住域は自然堤防のライン沿いに立地しており、微高地に好んで住んでいることが確認できる。現在においても主に居住域は自然堤防の微高地であるが、新興の住宅地はかつて畑や水田であった自然堤防より低い位置に立地していることがわかった。

現在でも多くの土地は水田に利用されているが、水田はかなり手入れがされているようで、十分な労働力や活力を感じることができた。集落内に見られる建築物も古い家屋はしっかりと手入れがなされ、建て替えのものも散見された。徐々に開発はされ始めているものの、まとまった生産力や微高地に住むなど、ハード面からみる昔からの集落構造を大きくは変化させず、活気を保っていると考えられる。



図 4-47-5 更新されたと思われる家屋 (撮影=橋本慧)



図 4-47-6 新興住宅化した農地 (撮影=橋本慧)



図 4-47-7 航空写真による編年比較 (左から現在, '84年, '74年) 地理院地図より

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1974年、1984年、現在と航空写真を比較してみると虫食い状に宅地開発が進んでいることが確認できる。

また 3) でも述べたが、迅速測図と治水地形分類図を重ねると明らかに昔は自然堤防上に立地していることがわかるが、徐々に開発されている地区は自然堤防上ではない。かつては地形や地質に従うような土地利用がなされていたが、現在はそのような土地利用はなされていないことがわかる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

##### ・環境

生産・居住ともに微地形を活かした巧みな土地利用がみられた。また耕作放棄地などはあまり見られず現在も継続的に手が加えられている様子がうかがえたが、一部農地が宅地化されている部分も確認された。

##### ・集落構造

自然堤防上にある程度のまとまりをもって住んでいる家屋はおそらく昔からの家屋であり、低湿地に見られる住宅は近年開発された新興住宅地である。しかしながらどちらにしても生産地はある程度まとまった単位で確保されており、大きな構造自体は変化しておらず、昔から継続してきたものと思われる。

##### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

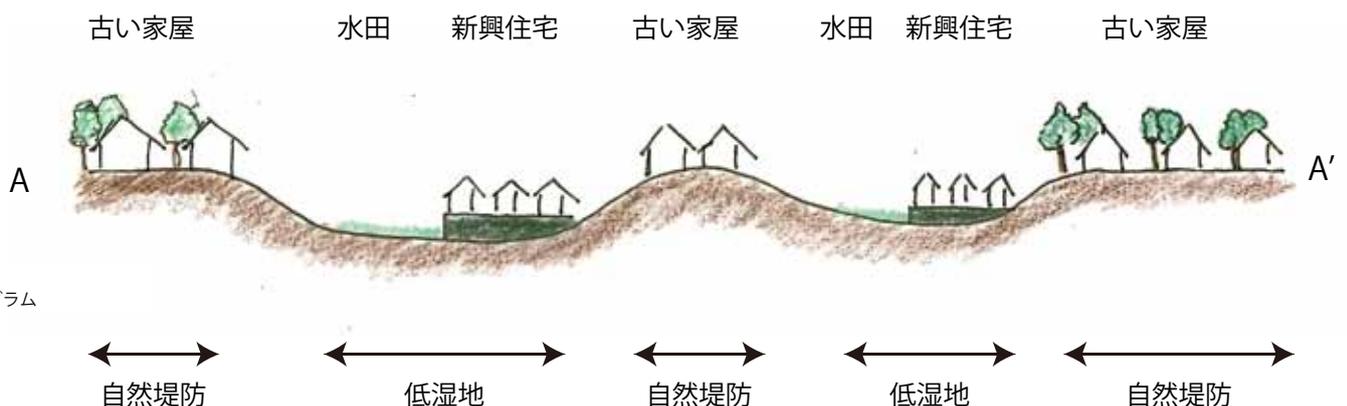


図 4-47-8  
A-A' 断面ダイアグラム

## 48 埼玉郡草原郷／羽生市須影

担当：田熊隆樹

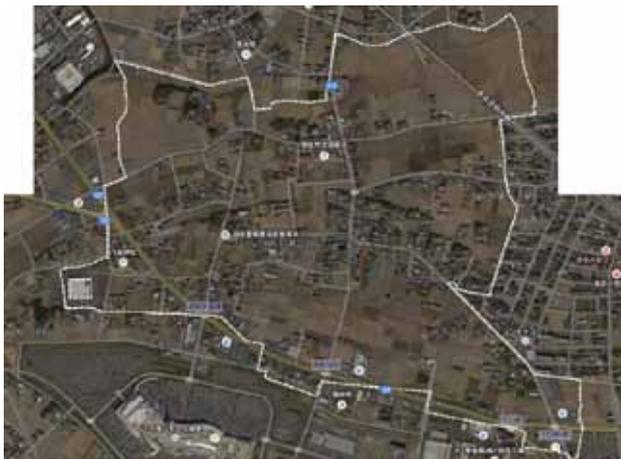


図 4-48-1 現在の航空写真 (googlemap より)



図 4-48-2 現在の地図 (筆者加筆) 地理院地図より

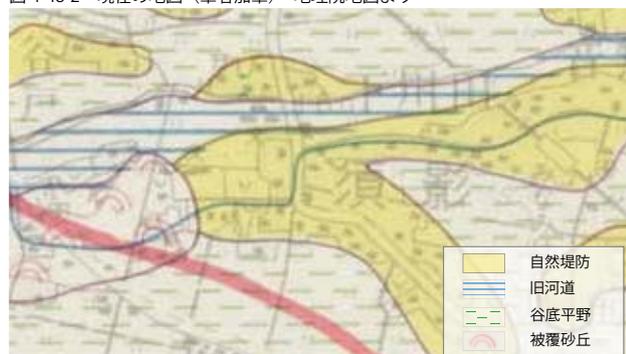


図 4-48-3 土地分類図 (筆者加筆) 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査より



図 4-48-4 植生図 (筆者加筆) 自然環境保全基礎調査より

### 1) 歴史的物事の情報

村の鎮守としての須影八幡神社 (創建不明) がある。他に諏訪神社、愛宕神社があるもいずれも創建不明。愛宕神社は砂丘を利用して土を盛った小さな社であり、古墳のようにも見えるがそうではない。

### 2) 実見した際の概要

須影八幡神社に車を止め、水量の豊富な手子堀用水路沿いに東へ歩いた。集落を南北に貫く県道 412 号線を越えたあたりから、右手に水田が広がっていた。ここがかつて風呂屋をやっていた 60 代女性と田んぼをやっている 80 代の女性に聞き取りを行った。

#### [聞き取り内容]

- ・ 須影村とは秀安・川崎・上川崎・下羽生・砂山・下川崎の 6 つの地からなる
- ・ かつて農業をやっていたところも現在ではお勤めが多く、現在水田をやっている人は 20 人くらい
- ・ 米は農協に出荷する (生産用)
- ・ 「9 軒組」という商売人たちの共同体が存在する。
- ・ 須影八幡神社が付近が最も古い居住地。付近の小磯家が古い家。→現在も広い敷地に小磯さんが住んでいた。
- ・ 手子堀用水路は利根川から水を引いている。
- ・ 県道 412 号線が通ったのは昭和 6 年。
- ・ 4/15 のオシシ様や 7/31 の輪くぐりなど八幡神社の祭礼が今も毎年続いている。

### 3) 比定大字領域内の分析

図 4-48-2 で青い点線で囲んだところが聞き取りによってわかった古くからの居住地である。土地分類図 (図 4-48-3) と照らし合わせると、ここでは自然堤防上に集落が営まれたことが明らかである。須影八幡神社も自然堤防の孤島の上に位置する。また、手子堀用水路のルートは利根川がまだ東京湾に注いでいた頃の旧河道と一致することもわかる。さらに西側は河川の堆積作用からなる被覆砂丘が広がっており、かつて河川の影響を多大に受けつつも住む場所を選択して続いてきた集落であろうことが想像される。

植生図 (図 4-48-4) から、自然堤防上は市街地となり谷底平野が水田、砂丘上が畑地になっており、住める場所は住む・住めない場所は住まない、と明快な土地利用がなされていることがわかる。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

大字領域全体が見える、1948 年と 2009 年の空撮写真を比較する。須影の範囲内だけを見ると、その約 60 年間で変わった事は、集落の南西部の端に国道 122 号



図 4-48-5 旧河道のルートに沿って引かれる手子堀用水路 撮影=廣瀬翔太郎

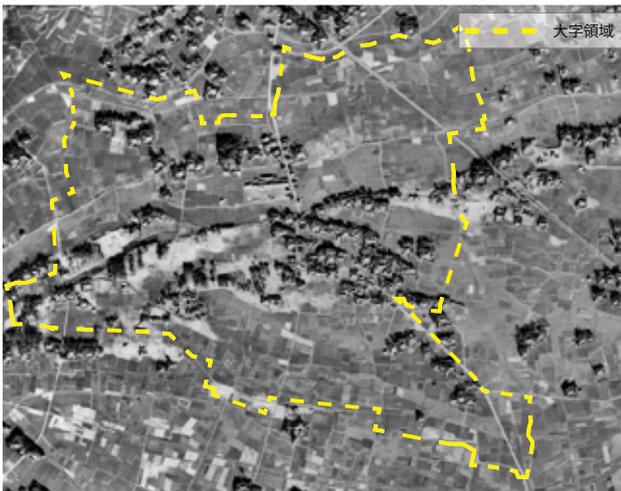


図 4-48-6 航空写真 (1948年, 国土地理院)



図 4-48-7 航空写真 (2009年, 国土地理院)

が通ったことと、家屋がいくらか増えたくらいで、あまり変わっていないことがわかる。

しかし、須影の周辺、特に東側を見ると極端に市街化が進んでいることがわかる。また南側には巨大なイオンモールが出来ている。

国土地理院の地理院地図によって調べてみるとこのように開発が広がった場所は、いずれも「明治前期の低湿地」とされる場所であった。つまり須影のように自然の土地条件によってうまい土地利用をしてきたのとは対照的に、本来は人が住まないような場所に家屋が立ち並んだり、ショッピングモールが建てられたりしていることがわかる。このような場所は液化化などの被害に遭いやすいと思われる。

古くから須影に続く「住み分け」こそが大きな持続要因の一つであろうと考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図 4-48-8 参照)

### 6) 環境・集落構造・共同体の持続性の妥当性

#### ・環境

自然堤防上に居住域をとり、土地に合わせて水田や畑、さらに旧河道を利用した用水路など、土地の「住み分け」が持続の要因であろう。特に大字領域周辺部と比べることでそれがよくわかる。

しかし生産地は残っているが後継者が不足している状況にあり、今後どうなっていくかわからない。

#### ・集落構造

基本的に古くから道に沿った家屋配置がなされていると見受けられるが、今回の調査では家の配置や屋敷林などを詳細に実見することができなかったため、今後の課題となる。

#### ・共同体

聞き取りから、古くからの祭礼や「9軒組」などの商売共同体の存在することが確認できた。さらなる追求の可能性あり。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店、1988年

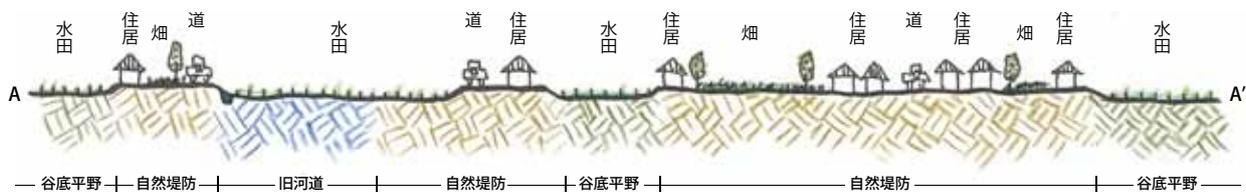


図 4-48-8 A-A' 断面ダイアグラム

# 第5章 考察編

## 5-1. 千年村の理解に関する基礎的認識の整理

### <千年村研究の目的と基本的スタンス>

千年村研究は、「環境・集落構造・共同体」が三位一体となった「継続的な土地固有のシステム」があるが故に、その集落は千年継続した、という仮説にもとづき、歴史的根拠および現況の観察から興味の対象となる地域を「千年村」と呼び、研究対象としている。

研究対象地域となる集落の「継続的な土地固有のシステム」を明らかにすることで、千年村的な持続性のある地域やまちの姿を描き出すことを目指している。なお、「その継続的な土地固有のシステム」とは、「環境・集落構造・共同体」の三要素からなることを、作業仮設としている。

### <調査における課題>

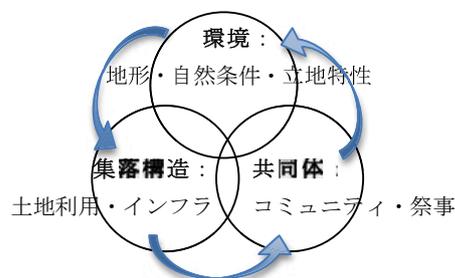
文献調査から、当該集落は千年継続していると思われる場合も、現在観察できるのは、原始千年村から何段階かの変容を来した結果として形成されてきた「継続的な土地固有のシステム」であり、それが千年継続できる力を持っているかは不明である。つまり、近世や近代初頭に形成された「継続的な土地固有のシステム」を我々は調査しているのかもしれない。

そのため、「原始千年村から時代とともに変容しつつも継続している」というプロセスに対する仮説が必要となる。このプロセス自体に、いくつかのモデルがあることは予想されるため、現地調査および文献調査で得られた結果を、「継続的な土地固有のシステム」と「システムの継続的変容プロセス」との2つの観点から読み解いていく必要がある。

しかし、過去の環境の状態を直接観察、調査することは、ごく限られた集落を除いて難しい。そこで、村落史研究などの分野から明らかにされている、日本の村落構造の変化などを参照しながら、調査対象とする千年村の位置づけをマクロな視点で想定しつつ、現在観察可能な情報から、土地固有のシステムとして今後の地域計画・デザインにとって興味深い特質を、千年村的資源として具体的に明らかにしていきたい。

### <千年村の持続的変容プロセス概念モデル題>

今後の調査によって、修正と具体化をはかるものとして、現時点での千年村の持続的変容プロセスに関する概念的なモデルを、以下に示す。このモデルは、千年村の観察観点である3つの要素が相互依存的に変化していくものととらえる。



#### 千年村の形成

- ① 環境 n1 を選ぶ
- ② 環境に手を入れて集落 n1 をつくる
- ③ 暮らしが継続されて共同体 n1 をなす
- II. 原始千年村の変容の基本メカニズム
- ① 暮らしの欲望を増大させる
- ② 集落の構造を変化させる→集落 n2
- ③ 環境を変える：拡大・大幅改変・遠隔地環境との接続（ネットワーク化）→環境 n2

図 5-1 千年村の形成

上図の仮定において、n2 の環境に立地した原始千年村が I のメカニズムによって「ある一定の環境質の範囲内で」サイクルを継続できるとき、その変容は継続的である、と考える。

**<千年村の記述モデル題>** を記述するためには、以下の項目に関する  
 図5-1で示した持続的変容プロセスを含め、現在観察可能な「土地固有のシステム」 データの収集が必要と考えられる。  
 (佐々木葉)

表 5-1 千年村記述のための項目 ver.1

	把握事項	記述媒体・データ
環境	自然環境	地形図・景観図（絵図・主題図）
	立地環境	交通ネットワーク
集落構造	領域の広がり	土地利用・地名・集水域（流域）・景観図（絵図・主題図）
	領域内構造	中心（生産中心・居住中心・コミュニティ中心） 境界（線の境界・点的境界・ランドマーク的境界）
共同体	政治構造・生産構造	土地所有制度・人口
	技術	環境改変技術・労働力投入システム
	祭事	祭事記録・施設

## 5-2. 利根川流域における抄郷比定地、 環境と生産からの考察

### <はじめに>

今回の疾走調査で訪れた千年村は、大きな地形立地からみて、①関東平野の低平地／低湿地に展開するものと、②河岸段丘に展開するものに分類しても差し支えないだろう。本節は、両者における抄郷比定地の、生産面・防災面からみた地形立地および土地利用の妥当性と、生産活動の持続可能性を支える環境要因について基礎的な検討を行うことで、詳細調査の対象を鮮明にすることを意図している。

疾走調査の結果、①については、水害の危険性を回避しながら農業生産性をいかに維持向上させてきたかということと、近代の市街化・産業化を受容しながらどのように生産システムを組み立ててきたかが重要な検討事項になると思われた。また、②については、水掛かりの悪い（大きな河川がなく地下水位も低い）段丘上での稲作の拡大、稲作（不足する生産？）を補うその他の農産、産業構造の近代的变化をどう受け止めたかなどが関心事となると考えられた。以下、具体的に検討してみたい。

### <低平地・低湿地の抄郷比定地>

起伏に富んだ千葉の里山千年村と比べて、地形立地の妥当性を説明することが難しいというのが今回の疾走調査を終えての感想。図上把握が困難な微地形・高低差を現場で目視しながら確認していく作業が不可欠だった。集落の立地は微高地・自然堤防上が原則となるが、5 mメッシュの数値標高データでも捉えきれない微妙な高低差と土地利用が対応しているケースが数多く確認された。わずかな高低差であれ、自然

堤防上のより標高の高い場所に住居がつけられ、その中でも最も標高の高い場所に神社が鎮座していることは多くの千年村比定地で確認されたことである。蛇足ながら、低平な地形ゆえ、丘陵地の神社と比べて社叢林の視認性が著しく高い。神社の管理状態も千葉県より明らかに高水準であった。また、広大な低平地において、ピンポイントで集落立地を決める手がかりとはそもそも何だったのか。土地改良前の低湿地は、農作業も困難を極める悪田とされたことをふまえると、開田可能な土地は意外と限られていたのであろうか。土地改良前の低湿地の分布や水害履歴を調べることで、立地妥当性を多少なりとも説明できるかもしれない。

広域用水路の存在も低平地に特有である。広域用水路の利用と管理は、近代以前では良くも悪くも他地域との関係を媒介しただろう。安定した水利は集落間の良好な関係によって支えられるが、争いも生んだ。このような関係は地域社会の性格形成に何らかの影響を与えたのではないか。近世埼玉低地の氾濫原にみられた伝統的な治水・利水共同体（領）が今日の地域社会の形成に与えた影響も検討に値しよう。単一の村落では維持管理が困難な堤防（いわゆる輪中）について、複数の村落共同体による広域自治体制を築き上げたことは、補完性の原理を体現する原初的な取り組みとはいえないか。前近代において、広域インフラの自治を可能とさせる空間的範囲を特定する上でも興味深い。

低平な土地はまた近代の開発（交通インフラや住宅地、大型商業施設等の建設）の圧力を受けやすかったと考えられる。千葉県の丘陵地帯の千年村で、集落中心からか

なり離れた旧入会地と思われる山林に、住宅地やゴルフ場が集落とは機能的に無関係に建設される例が散見されたのにたいして、低平地では近代の開発により、集落の価値がむしろ高められている場合があるように思われた。また、旧集落内に目を向けても、多くの千年村で2～3次産業の事業所（個人経営の工務店、製作所、食料品など、日常生活や耐久財の維持更新に必要な業種）が目につき、活力が感じられた。住居も比較的よく更新されており、更新の仕方には居住者の趣味が表出している。多少の地域差はあるものの、千葉県と比べて住居の管理状態は良いといえるだろう。

例えば葦塚町（群馬県伊勢崎市）では、多くの水田（後背湿地）が埋め立てられ、住宅やロードサイドショップに姿を変えた一方で、旧集落部分の空間的・景観的なまともりはしっかりと維持されている（それでいて住居の更新は進んでいる）。丘陵地の入会林に工場やゴルフ場ができるのと違い、ロードサイドショップは旧集落の生活利便性を向上させ、人口の維持、新住民の流入を促している印象を受けた。かつての伝統的な共同体は失われつつあるのかもしれないが、農業を基盤とした生産システムが、近代の産業化・市街化を受け入れながらも、継続的／適用的に環境を利用したり、集落構造を維持発展させてこられたか、そこに何らかの自律性が認められるかどうか今後の検討の要点となる。

<河岸段丘の抄郷比定地>

(1) 概況

河岸段丘についても、千葉県では大規模なものが見られなかったため、地形立地の妥当性をいかに説明するかが悩ましい。し

かし、広大な低平地・低湿地においてもそれなりに地形の変化はあり、それを的確にとらえた土地利用がなされていたように、広大な段丘面においても地形は起伏し、小さな河谷さえ存在する場合もある。なにより段丘面は先史時代に始まる遺跡（住居跡や古墳など）を数多くもっており、古くから人々が生活してきたことは間違いないのだが、水掛かりの悪い環境下で稲作にいかに対応してきたのか、稲作に不利な条件を補う灌漑技術や何か別の農産なり産業を発達させてきたのか、私は十分な知識を持ちあわせていない。よって、そのあたりの勉強からまずは手をつける必要がある。

河岸段丘の調査地全体を俯瞰する視点や知見を得たとはいえないが、段丘地形において大字がどのように区画されているか（大字の地形立地）については幾つかの類型がありそうである。図5-2-1は利根川水系鐮川右岸に位置する群馬県高崎市吉井町内の大字を地形陰影段彩図に落としたものである。吉井町内の地形は鐮川右岸の低位段丘（下位面と上位面）および山地によって構成

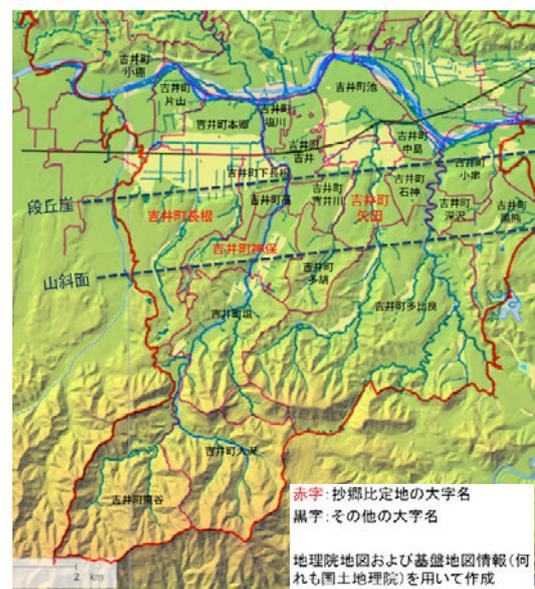


図 5-2-1 鐮川右岸の河川段丘と大字

されている。段丘下位面と段丘上位面は段丘崖によって隔てられ、段丘上位面と山地の境は急激な傾斜度の変化及び植生の変化によって明瞭である。図5-2-1より大字とそれが乗る地形(鑄川の横断面)との関係を読みとり、分類すると表5-2のようになる。

すなわち、大字の範囲が、①概ね特定の地形内で完結しているものと、②複数の地形に跨がるものと大きく分類でき、①については、段丘下位面にある大字(吉井町片山・吉井町本郷・吉井町塩川・吉井町吉井・吉井町池・吉井町中島など)、段丘上位面にある大字(吉井町高・吉井町吉井川・吉井町石神・吉井町深沢など)、吉井町南部の山間に位置する大字(吉井町塩・吉井町多比良・吉井町大沢・吉井町東谷)が該当する。②は、段丘下位面と段丘上位面に跨がる大字(吉井町長根・吉井町下長根・吉井町矢田・吉井町小串など)、段丘上位面と山地に跨がる大字(吉井町神保・吉井町多胡・吉井町黒熊)が該当する。興味深いことに、吉井町内で抄郷に比定されている大字(下線部)3件は、いずれも②に属している。千葉県千年村大字の範囲が複数の地形に跨がっているものが多かったことは(高橋・木下ほか、

2013)、ここでもあてはまる結果となった。大字内の地形の多様性とそれに対応した土地利用は、千年村の持続可能性に関わる要因の一つかもしれない。また、一般に大字の面積は、山間部ほど広くなる傾向がある。抄郷に比定される大字でもこの傾向は認められた(水系を軸とし、その流域を単位とする広域大字が多かった)。理由は既知かどうか不明。生産力や稲作との関係から説明できるのかどうか、あるいは他の理由によるのか、要確認。

その他、全般的に気がついたことを述べる。まず、利根川中流および支流の沿川や流域では放棄されたクワ畑が目についた。養蚕業はこの地域に限らず農家の重要な収入源であったが、特にこの地域で盛んだったということはいまも土地利用や景観から理解することができる。問題は、この地域で養蚕業が栄えたことに、特定の環境要因が影響しているかどうかということと、養蚕業／製糸業が衰えた後にそれに代わる生産活動を見出したのかどうか、またそれは既存の環境を継続的／適用的に利用するものだったかどうかということである。河岸段丘は水掛かりが悪い反面、水はけがよく

表5-2 群馬県高崎市吉井町の大字と地形(鑄川の横断方向)との関係 (Kinoshita, 2014)

地形類型	該当する大字
山地	吉井町塩・吉井町多比良・吉井町大沢・吉井町東谷
	<u>吉井町神保</u> ・吉井町多胡・吉井町黒熊
段丘(上位)	吉井町高・吉井町吉井川・吉井町石神・吉井町深沢など
	<u>吉井町長根</u> ・吉井町下長根・ <u>吉井町矢田</u> ・吉井町小串など
段丘(下位)	吉井町片山・吉井町本郷・吉井町塩川・吉井町吉井・吉井町池・吉井町中島など

※ 下線は抄郷に比定される大字

桑畑に適しており、稲作に不利な環境を補ってきたのではないか（この地域の養蚕業は奈良時代に始まる）。また、東山道や利根川水系は生糸を朝廷に収める生産手段だった可能性もあり、この地には古くから養蚕業／製糸業を支える流通条件も整っていたのかもしれない。環境に適合した複数の主力作物の生産、インフラを活かした製品の流通を継続できるか否かが、千年村と呼べるかどうかの判断基準になるのではないか。

さいごに神社。段丘上の神社もまた良く管理されていた。神社は地域社会の活力を指標するのではないか。また、東西に走る段丘・尾根に立地する抄郷比定地の神社で、尾根の北斜面や段丘下方に背を向けて立地する神社（いうなれば“見下ろす神社”）が目についたが（#40, #41, #43）、集落構造上の意味が何かあるのか。調査が必要である。

(2) 群馬県高崎市吉井町神保／上野国多胡郡辛科郷比定地

吉井町神保は、大地形のレベルでは段丘と山地に跨がる大字といえるが（図5-2-2）、中地形のレベルでみると、段丘東部はかなり浸食が進んでおり、大沢川沿いには谷底平野が形成されている。大字の範囲は段丘と山地に跨がるが、集落自体は低位段丘堆積物に乗り、山地を形成する堆積岩類上には形成されていない（図5-2-3）。段丘面の標高160～180m等高線付近の小さな谷沿いに上神保の集落が、谷底平野の標高120～150m等高線付近に下神保の集落があり、両者の比高は約30～40mである（図5-2-4）。

現在、下神保の戸数のほうが多いが、迅速測図（図5-2-5）では両集落の戸数に大きな差はみられない。現在の地形図（図5-2-4）と比較すると、増えた住居は水田の宅地化や一部山林（入会地？）の開発によることがわかるが、1970年代の航空写真では水



HeyWhatsThat Path Profiler

図5-2-2 河岸段丘と吉井町神保の位置



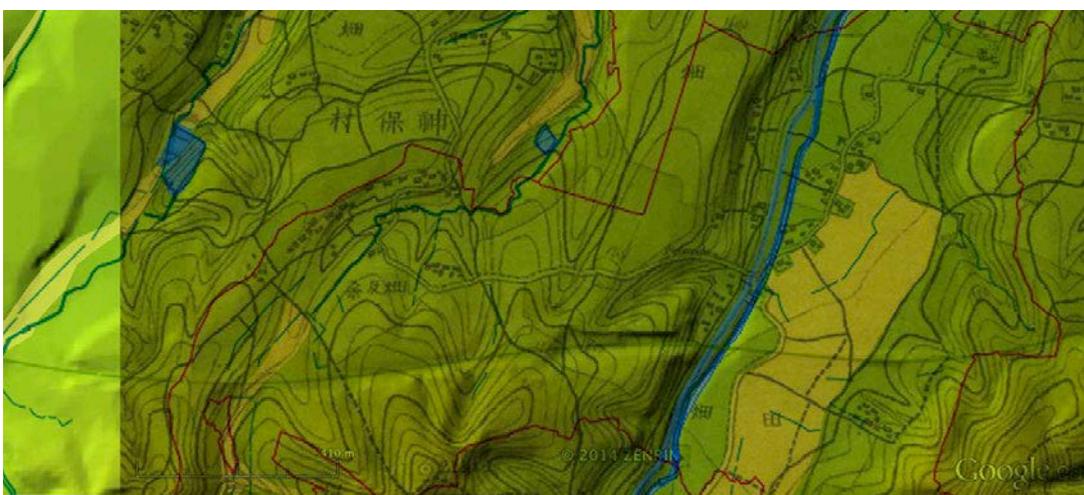
シームレス地質図(産総研)と基盤地図情報(国土地理院)を用いて作成

図 5-2-3 集落・水系+地質



地理院地図および基盤地図情報(いずれも国土地理院)を用いて作成

図 5-2-4 現在の地形+明治前期の低湿地



地理院地図および基盤地図情報(いずれも国土地理院)を用いて作成

図 5-2-5 明治前期の地形+低湿地 (水田)

田はまだ宅地化されていない(図5-2-6)。よって、水田の宅地化は1980年代以降のできごとと考えられる。一方、上神保では水田・山林(入会地?)の規模は維持されている。段丘面にある上神保の農地の多くは畑で、水田は小さな谷戸に開かれているのみである(図5-2-4)。この谷津田は天水田で小規模ゆえ、生産量は限定的と考えられるのにたいして、下神保の農地は水田が主体である。下神保の水田は河川灌漑で規模も大きく、上神保より生産量が多いだろ

うが水害の危険性がある。下神保の水田が農転される一方で、上神保の水田規模が維持されてきた理由は一考に値するだろう。

次に上神保と下神保のどちらが古い集落かということだが、古代遺跡(古墳や住居など)および辛科神社(伝創建701~701年)の存在からみて台地上の上神保の方がより古く、辛科郷の中心的集落も台地上にあったのではないだろうか(図5-2-7)。ちなみに「神保」とは辛科神社の社家の姓とのこと。しかし、そうだとすると水田が小規模に過



地理院地図および基盤地図情報(いずれも国土地理院)を用いて作成

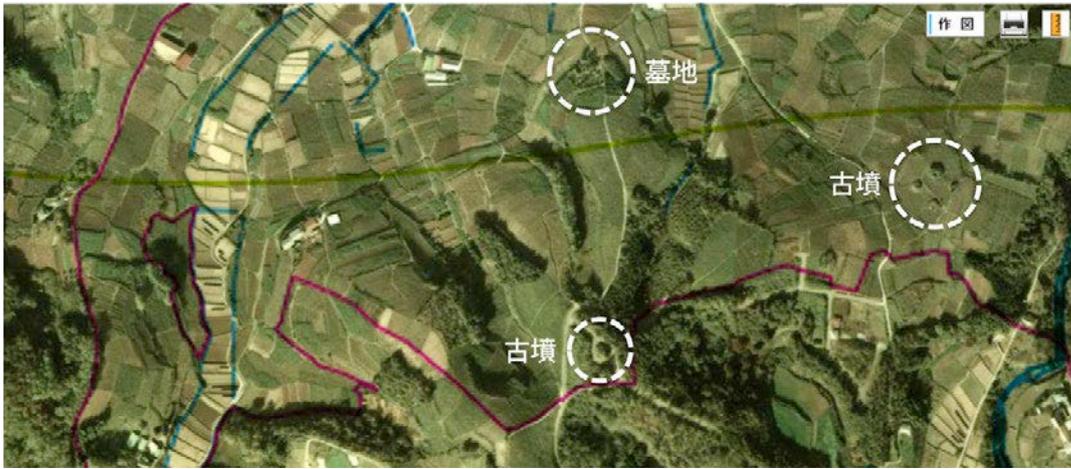
図5-2-6 1970年代の景観と明治前期の低湿地

大沢川左岸段丘上



Google Earthを用いて作成

図5-2-7 辛科神社と古代遺跡の分布



地理院地図および基盤地図情報(いずれも国土院)を用いて作成

図 5-2-8 高速道路建設前の景観 (1970年代)



Google Earthを用いて作成

図 5-2-9 高速道路付近の景観 (2014)

ざる。この不足を補うために台地下に集落  
が展開していったのではないか。また、米  
以外の作物や産業（養蚕など）が水田の不  
足を補った可能性がある。上神保では稲作  
以外に、ネギ、トマト、シイタケ、ヤマ  
イモ、ブルーベリー、キウイフルーツなど  
の栽培が確認された。いずれにせよ人口の動  
態とその人口を支えてきた生産活動が、各  
時代において自然立地とどのように折り合  
いをつけながら継続または変化してきたか  
をしっかりと検証する必要がある。

さいごに、上信越自動車道の建設が当地  
に与えた影響について考えてみたい。上信  
越道は段丘上位面が尽き、山地（入会地？）

に移行する境界部につくられており、これ  
は集落を避けた結果と考えられる。高速道  
路の建設によって集落構造や景観が大きく  
変化することはなかったが、高速道路南側  
の林相には多少の変化がみられる。1970  
年代と現在の航空写真を比べると、現在  
は竹林が優占する林相となっており、樹  
林化してしまった耕地もある（図 5-2-8、  
図 5-2-9）。竹林の優占は全国的に見ら  
れる現象だが、耕地の樹林化は耕作が長  
期にわたって放棄された結果であり、高  
速道路が耕地を分断した（耕地への地続  
きのアクセスが不可能になった）影響も  
ないとは言い切れない。

（木下剛）

### 5-3. <千年村>利根川流域疾走調査 「集落構造」の考察

#### <概要>

調査の日程は2014年8月2日～6日。福島が現地調査したのは、そのうち8月2日～4日の集落01～26である。



写真 5-3-1 千葉県海上郡海上町石井

今回の利根川流域の集落と、前回の千葉の集落(写真5-3-1)を比較してみると、今回の集落は構造の分かりにくい事例が多かった。その原因としては、半島である千葉に対して利根川流域は交通の要衝にあるため、通過交通が多く流通経済も活発であり、時代と共に街道などの都市インフラが変容し、集落構造もそれに対応して変容し

ながら継続しているであろうことがその一因と想像される。

#### <集落構造の分析方法>

利根川流域の集落は、上記の様に大きな集落構造の変容を経ているため、見える集落構造だけでなく、見えない集落構造の変容のシステムを分析することが求められる。このため、これまでの生存セット(住宅、集落、生産地)の関係を分析した見える集落構造に、都市インフラ(今回は街道)を加えて両者を一体的に考えないと、見えない集落構造の分析は難しい。今回は集落の現代の航空写真に、その地域にこれまで存在したと思われる街道とその宿場町をプロットし、その位置関係を考察することから集落構造の分析を試みた。

#### <分析の対象街道>

利根川流域に存在していたと思われる、現代に位置が特定可能な主要街道を選んだ。

- ・ A. 駅路 (古代の道路 奈良時代～)(図5-3-1)

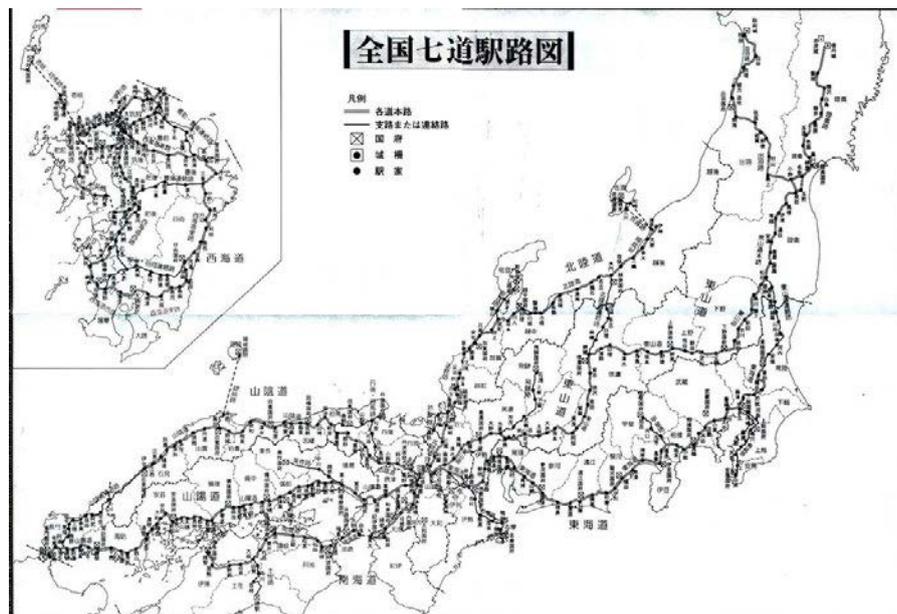


図 5-3-1 駅路 (古代の道路 奈良時代～)

- B. 鎌倉街道（中世の道路 鎌倉時代～）（図 5-3-2）
- C. 五街道+主要脇街道（近世の道路 江戸時代～）（図 5-3-3）

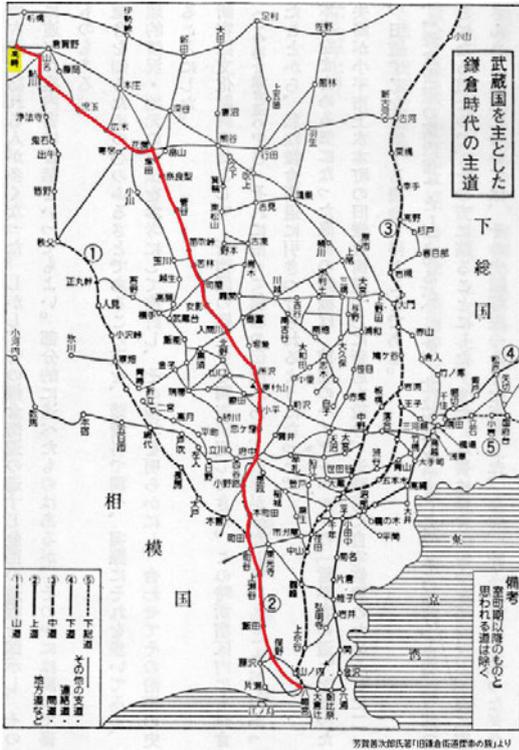


図 5-3-2 鎌倉街道（中世の道路 鎌倉時代～）

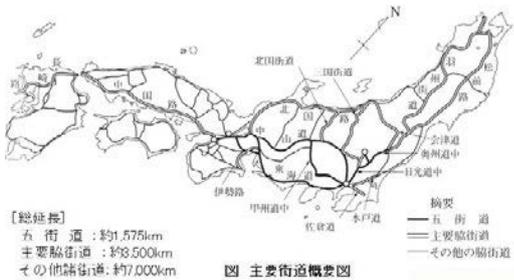


図 5-3-3 五街道+主要脇街道（近世の道路 江戸時代～）

<分析の対象集落>

福島が現地に行った 01～26 の事例のうち、今後詳細調査を行なう予定の立地条件の異なる四つの集落を選んだ。

- 1. 01 群馬県みなかみ町月夜野下津（小川島）（写真 5-3-2）（写真 5-3-3）（図 5-3-4） 台地と河川敷の境界

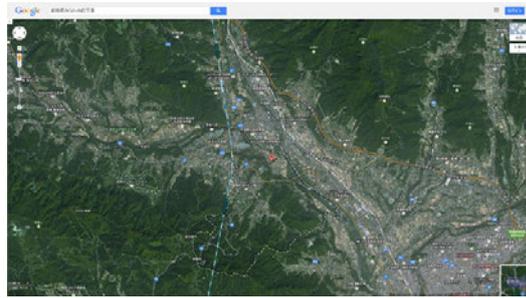


写真 5-3-2 群馬県みなかみ町月夜野下津（小川島）



図 5-3-4 群馬県みなかみ町月夜野下津（小川島）



写真 5-3-3 群馬県みなかみ町月夜野下津（小川島）

- 2. 11 群馬県高崎市山名町（写真 5-3-4）（写真 5-3-5）（図 5-3-5） 台地の上

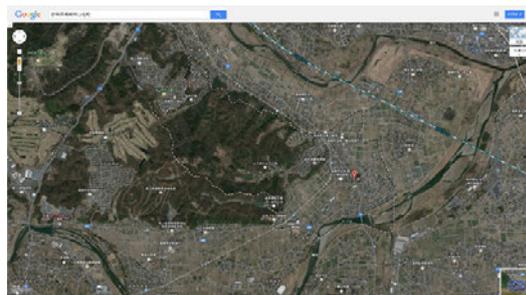


写真 5-3-4 群馬県高崎市山名町



図 5-3-5 群馬県高崎市山名町



写真 5-3-5 群馬県高崎市山名町

- 3. 15 群馬県高崎市若田町 (写真 5-3-6) (写真 5-3-7) (図 5-3-6) 微高地

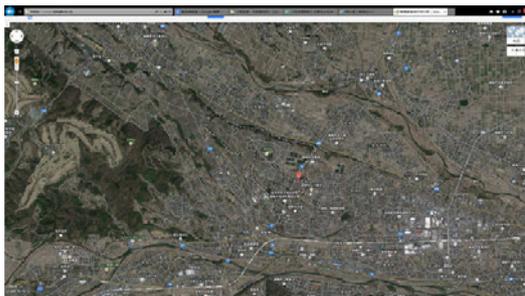


写真 5-3-6 群馬県高崎市若田町

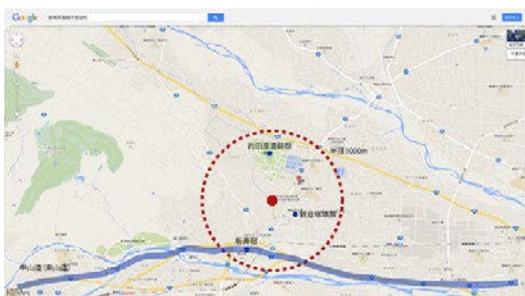


図 5-3-6 群馬県高崎市若田町



写真 5-3-7 群馬県高崎市若田町

- 4. 21 群馬県安中市松井田町坂本 (写真 5-3-8) (写真 5-3-9) (図 5-3-7) 山地と平地の境界の宿場町

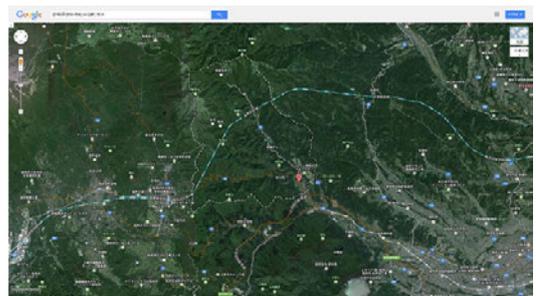


写真 5-3-8 群馬県安中市松井田町坂本

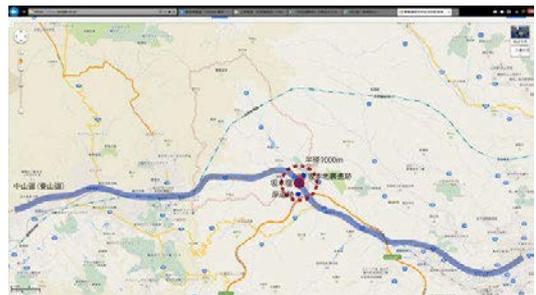


図 5-3-7 群馬県安中市松井田町坂本



写真 5-3-9 群馬県安中市松井田町坂本

<集落構造の分析>

上記の分析から、各集落の構造をダイア

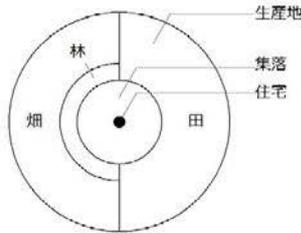
グラムにしたものと、個別の集落の考察を

図にまとめた（集落構造ダイアグラム）。

<千年村>利根川流域 集落構造ダイアグラム

0. 千葉 典型例

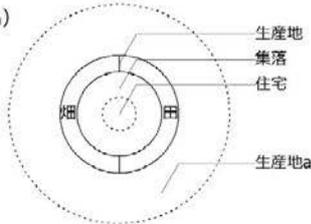
立地：台地と平地の境界  
平地の中の微高地



生産地 近くに2種類以上ある

1. 01 群馬県みなかみ町月夜野下津（小川島）

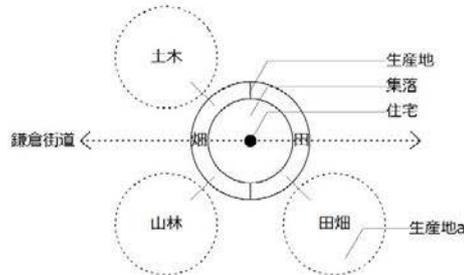
立地：台地と河川敷（平地）の境界



生産地 平地が河川敷のため小さい  
他の生産地が近くにある  
のではないかと  
山林、城、宿場町など？  
集落 歌舞伎、祭あり  
記憶と空間の共有  
住宅 倉が道に面している  
食料の共有？ 防火、防水？  
住宅と集落の境界が曖昧  
境界の維持方法が興味深い

2. 11 群馬県高崎市山名町

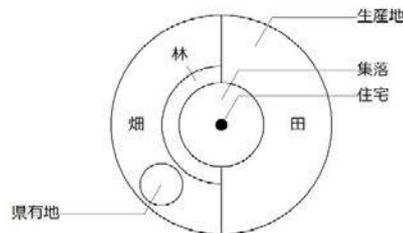
立地：台地の上の山林



かつては鎌倉街道の宿場町  
街道は大分前になくなっていて  
これまでどうやって継続的に  
暮らしてきたのか？  
生産地 山林のため小さい  
他の生産地が離れたところ  
にあるのではないかと  
田畑、山林、土木など

3. 15 群馬県高崎市若田町

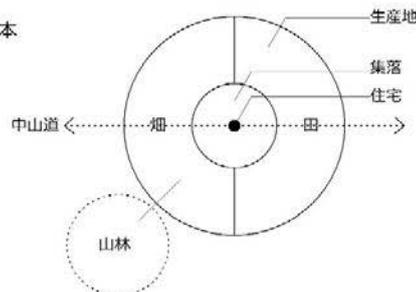
立地：台地の上の微高地



千葉型の近似タイプ  
大らかな台地の上にある  
微高地を集落構造の境界に  
生かしているようだ  
生産地 一部を県に売却している  
墓地と浄水場  
標高の高い水利の悪いところ？  
近くにある宿場町との関係？

4. 21 群馬県安中市松井田町坂本

立地 山地と平地の境界



かつては中山道の宿場町  
街道は今でもあるが  
高速道路の開通により  
通過交通は激減  
しかしきれいに維持されている  
生産地 宿場町のときから  
田畑を整備してきた？  
大字の範囲が広いので  
山林も活用しているか？

図 5-3-8 集落構造ダイアグラム

**<考察>**

疾走調査を元にする分析では、これらの四つの集落に共通する考察はあくまで仮説的にならざるを得ないため、下記に箇条書きに記すことに留める。

- 立地条件の異なる四つの集落すべてに、半径 1000m 以内に歴史的な街道と宿場町が見つかった。
- 集落周辺には、渡来人の先住伝説や古墳などの古代遺跡も多い。
- 現代でも高速道路、鉄道など交通網の発展がある。
- 交通網が発達しているため、生産地のあり方が多様であり、各時代の状況に対応するため柔軟に変化していたように思われる。この生産地の多様性と可変性は、千年村の持続方法の大きな手がかりの一つになるのではないだろうか。
- 千年村の「環境・集落構造・共同体」の三要素と、街路や水路などの都市インフラを一体的に考えることは、目に見えない集落構造の変容のシステムをあぶり出す有効な方法になるかもしれない。

上記の考察を深めるためにも、今後の詳細調査を楽しみにしている。

(福島加津也)

#### 5-4. 「農耕の解像度」—土地利用の多様性と集落の持続力に関する仮説

##### <「応用千年村工学」的視点>

今回の疾走調査においても私たちは様々な魅力的な千年村風景を目撃したが、特に興味深かったのは千年村の土地利用における、環境条件への応答の繊細さと持続性との関係だった。千年村の研究の切り口として、持続の構造を解明することはむしろ重要である。しかし、あらためて千年村が「なぜ」私たちに必要なかを考えたとき、千年村がどう有効であるか、現在の千年村の状態が、私たちにとってどのように「使えるか」という観点も、そもそもの意義として重要であるだろう。私たちは千年村について、

- ・ 1. 「千年長持ちした住みかたを、指標として今後も温存したい（長生きの秘訣を記録しておきたい）」
- ・ 2. 「私たちが前提としている都市環境が停止するような事態の際に、予備資源として助けてほしい」

と考えている。1はいわば「長く住み続けるための土地利用マニュアル」であり、2は災害時などにバックアップしてくれるシステムとしての期待である。後者については、現代のインフラがダウンした際にどう村の生活を「稼働」し続けることができるか、さらに政策や経済も含めた「環境」の変化に対する強靭さがどれほどあるか、という観点から評価することができ、そこから1のマニュアルを作ることができるだろう。

##### <土地利用の多様性と「セット」>

たとえば、ヒントのひとつとして千葉の調査で私たちが命名した、千年村の「土地利用セット」がある。多くの千年村では、

村域内に宅地、水田、畑地、林地という基本的な土地利用の種類を抱えていた。地形と水系が巧みに利用され、土地利用の妥当性を残しながら、産業・経済の変化につれて「切り捨てる」土地も持っていた。「セット」を抱えた村の強靭さは、バッテリーを内蔵したノートパソコンのようなものだ。インフラへの依存が高まるほど「停電」に弱くなり、持続力が低下する。たとえば、圃場整備した低湿地の水田は生産効率は高いが、ポンプの動力に依存しているため化石燃料や電気が落ちると水利を失う危険がある。「停電時の可動性」は持続性評価のひとつの尺度になるだろう。



図5-4-1 「土地利用セット」のダイアグラム

##### <坂本郷における「バックアップ体制」>

坂本は中山道六十九次のひとつに数えられていた宿場町であり、家々は村を抜ける道に面して線状に並んでいる。典型的な宿場町に見えるが、特徴的なのはそれぞれの家がその背後に細長い農地を従えていることだ。空撮からは、住宅、庭、菜園、水田、林地という家単位の「生存環境パッケージ」が短冊状に並んでいることがわかる。宿場町として各戸が街道に揃ってプラグインしている一方で、街道の機能がダウンしても生存可能な強度を各戸が有している。江戸期に開発された三富新田などの武蔵野の新

田集落によく見られる短冊状地割だが、千年村の現在の土地利用としてあらためて眺めると、その複数の土地利用を内包する集落のありかたがとても示唆的であると思われた。



8月3日調査 坂本：  
宿場町／短冊形地割による農地

図 5-4-2 坂本：航空写真（Google earth より）

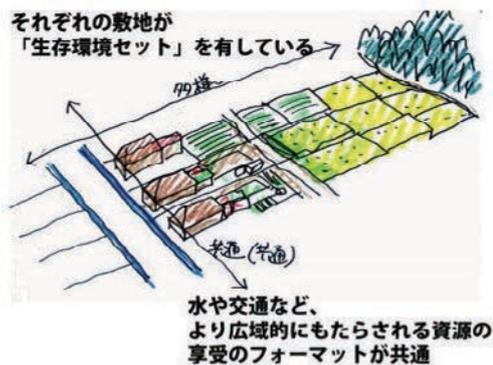


図 5-4-3 坂本：「生存環境セット」ダイアグラム

<倉賀野における「里山古墳」>

高崎市郊外の河岸段丘上に位置する千年村に、浅間山（せんげんやま）古墳と大鶴巻古墳と呼ばれる前方後円墳が残存している。この古墳の利用のされ方が印象的であった。古墳を取り巻く環濠が水田として、盛り上がった前方部は畑として、さらに高い後円部は雑木林として使われていた。古墳の「地形」を余すところなく使って伝統的農地の基本要素を揃えている。私たちはこれを「里山古墳」と呼ぶことにした。これらの古墳は現在では国の史跡に指定されているが、明治の迅速測図を見ると、近代以

前、これらが「古墳」としてではなく、単に農地の凹凸と見なされていたことがわかる。ここで興味深いのは、これらの古墳が農地として使われることによってその輪郭が長く保たれてきた、つまり「古墳であることが忘れられることで古墳地形が残存した」ということと、利用の大きさが古墳全体よりも小さいスケールである、すなわち農地利用の空間単位がより「細かい」ということだ。これらは、資源として永持ちする土地利用を考えるうえで示唆的である。



図 5-4-4 古墳の地形的特徴を余すところなく最適化した里山パッケージ



図 5-4-5 里山古墳：浅間山古墳の土地利用

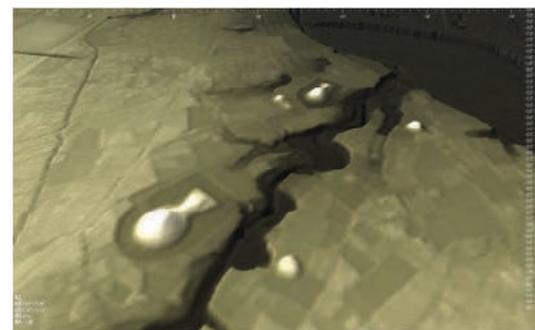


図 5-4-6 地形／古墳



迅速測図：古墳の記載がない。田の中の林/丘。  
→文化財以前に地形として発見されている

図 5-4-7 倉賀野：迅速測図

### <農耕の解像度>

房総の千年村の「土地利用セット」のコンセプトと「里山古墳」の細密な土地利用を合わせてみると、いくつかの重要な点が挙げられる。

- 土地利用の繊細さ（工作機械を使わない前近代的開発による造成単位の小ささ）

土地の人為的な利用に伴う改変には様々なスケールがあるが、最も空間単位の小さなものは人の身体と環境の応答という規模であられる。例えば、今回の疾走調査でよく見られた集落内の石積み丸石の大きさは、ひとが抱えて持ち上げることができる大きさと重さによって決まっている。改変の規模が局所的であるほど、土地利用は自然条件に対して細かく対応せざるを得ない。細かい土地利用はより広域の環境のシステム、例えば流域における水系や地域の植生や生態系を温存させる。制度よりも具体的な土地利用のほうが長命であることは、「史跡指定」の歴史と古墳農耕の歴史の時間の長さを比べてみれば明らかである。

- 農耕の解像度

特に里山古墳において、古墳を地形として発見したのが伝統的な農耕であったこと。

農耕は、その土地の自然環境を引き出すために、しばしば潜在的な特徴を顕在化する。特に大規模なインフラの建設を前提としない伝統的農耕は土地の局所的な特徴にコンシャスな利用をする。これは、農耕が自然環境に大きく依存した営みであることと、農地はしばしば時間をかけてその土地の条件に対して最適化してきた結果であることによる。

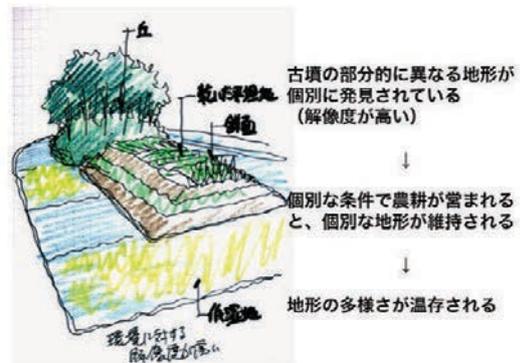


図 5-4-8 里山古墳のダイアグラム

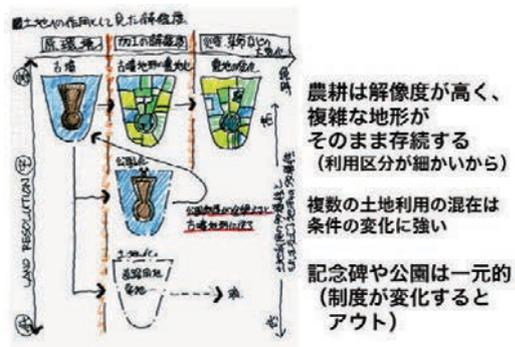


図 5-4-9 農耕の解像度

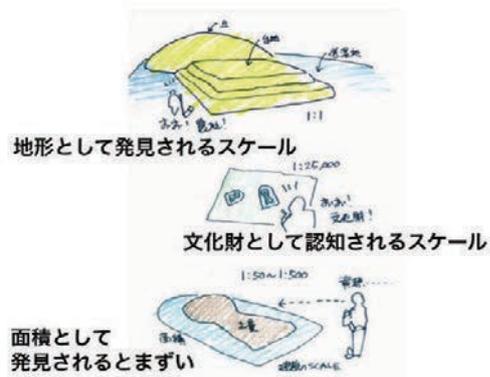


図 5-4-10 スケールによる古墳の認知

＜植生データを用いた利根川流域千年村集落の  
土地利用の多様性の比較＞

植生図（第5回調査）  
平成6～10年度（若干古め）  
→群馬県全体をカバーし、Shpデータもある

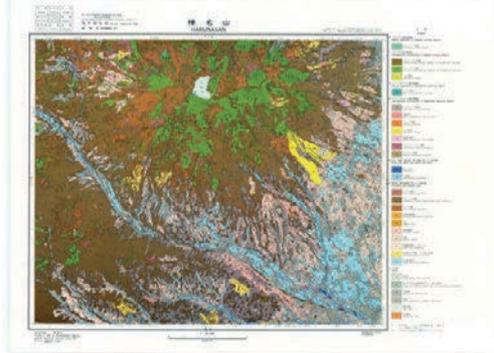


図 5-4-11 植生図

以上の考察から、それぞれの村域が含む土地利用のメニューの多様さを比較することによって、似たような傾向の集落をグルーピングしたり、より豊かで強靱な千年村性能を評価したりすることが可能なのではないかと考えた。今回は予備的な調査として、環境省によって公開されている植生調査のデータを利用し、GISソフト(ArcGIS)を使って大字単位でグラフ化して簡易的に比較した。

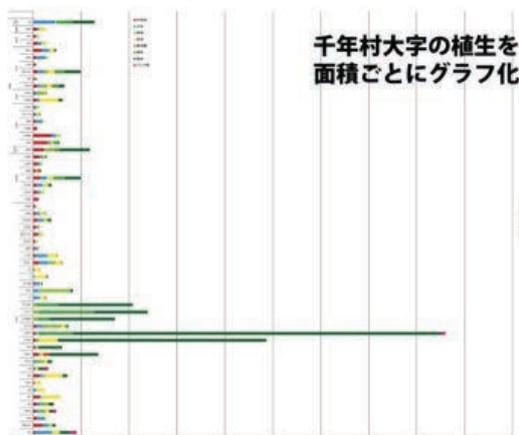


図 5-4-12 面積ごとに植生をグラフ化

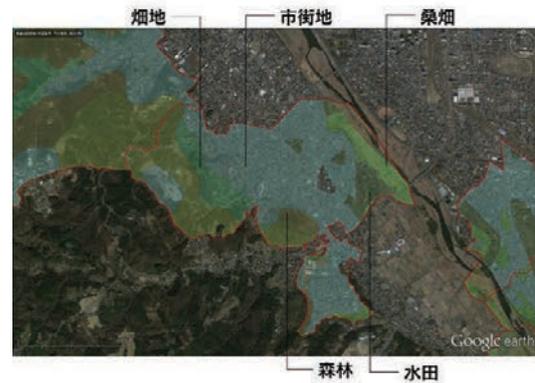


図 5-4-13 航空写真と植生図との対応



図 5-4-14 利根川流域の千年村大字  
(調査前半分)



千年村大字の土地利用を可視化  
→大字の土地利用の内訳を比べる

図 5-4-15 千年村大字の土地利用の可視化



大字の土地利用の成分と割合は、立地条件によって明らかな傾向があり、山地型、段丘型、平地型などに分けることが可能。さらにそれぞれの型の中でも個別の条件によって差が認められる。



南牧はそれぞれの要素のバランスが素晴らしい

図 5-4-23 大字北牧、南牧



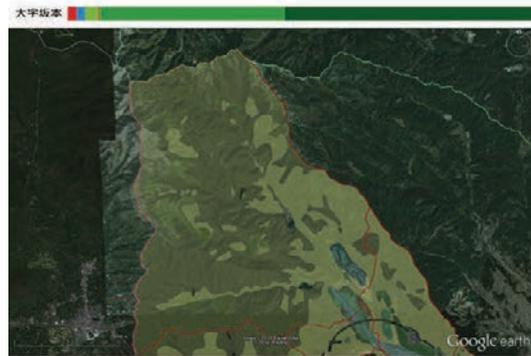
全体的にバランスがよく、入会地をゴルフ場にした点もよい

図 5-4-24 小保



山林を多く含み、全体の構成バランスがよい

図 5-4-25 大字五料



山林を多く含み、全体の構成バランスがよい

図 5-4-26 大字坂本



水田・畑作が多く、持ちそう。圃場整備されていることや、森林が少ないのが不安

図 5-4-27 境伊与久



水田・畑作が多く、持ちそう。森林が少ないのが不安

図 5-4-28 上之宮町

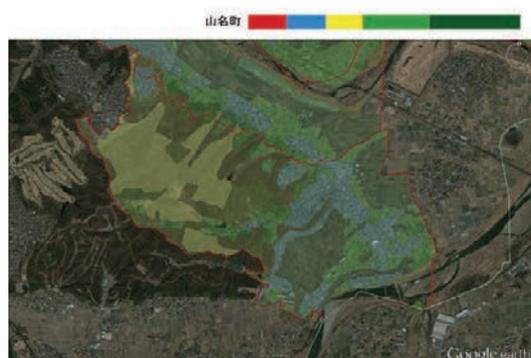


図 5-4-29 山名町



図 5-4-30 乗附町



ほとんどが市街地化している

図 5-4-31 倉賀野町



ほとんどが市街地化している（平地林漬して工業地にしたと思われる）

図 5-4-32 中豊岡町



図 5-4-33 若田町

#### <今後の課題>

- 利根川流域の千年村をひとまず網羅したい
- 土地利用の多様性とその地域の地形・地質のとの関係をより明示的に記述したい
- そこに現れる景観と土地利用の多様性との相関関係について（長持ちしそうな村の実体）
- この解析では細かく分類しなかった森林の植生の多様さも分析したい
- 土地条件図、地質図など、植生図に加えてその他のGIS情報などから、地形や地質の多様さを比較しうるか
- 詳細調査の際の土地利用の多様度を記述する方法。より緻密な「土地利用の解像度」を記録する手法を考えたい

また、今回はあまり深く考慮しなかった、農地が環境に働きかけることによって環境そのものが変わってゆく、「千年村自身が作る環境」についても考えたいと思う。これは、土地利用の規模とそれが依拠する環境のスケールを巡る問題になるだろう。利根川流域は大河川の付け替えなど、近代以前から国土スケールで環境の改変が試みされてきた地域でもあり、ダイナミックな「千年サバイバルマニュアル」が描けるのではないかと期待している。

（石川初、高橋大樹）

出典、参考文献：  
 環境省自然環境保全基礎調査、1/25,000 植生図 GIS データ  
 田村和也、中谷礼仁「都市化された古墳 一古市・百舌鳥古墳群を対象として」日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）2004年8月 pp291-292

### 5-5. 千年村評価方法について

#### <概要>

さて、2014年度においてまず目標としているのは、千年村、もしくはその候補地についてのアセスメント(評価方法)である。最後にいくつか運動体内部で検討している試論を紹介して終わりたい。

#### ・持続とは何か

持続とは、その内容にかかわらず、まず何よりも先の三位一体構造がバランスを保っていることである。この研究運動のユニークな着眼点は、その持続を「壊れた村」に代表される臨界的現象と対局の、日常の風景の中に見出そうとすることである。日常とは、内実の変化が感知されない調和的状态＝ゼロ・バランスの状態なのだという仮説である。

#### ・持続を支えるものは何か

さてこのような日常は、意識的な分析によって、その三位一体セットの固有性(キャラクター n1)がはじめて獲得されることになる。以下佐々木論文の表記法に従う。

考古的、立地的、歴史的条件を踏まえた上で、そのキャラクター n1 がなお現在も持続しているとすれば(n2)、そのキャラクター n1 が基底となったうえで、n2 には、変化を伴う内容が受け入れられ、さらに以前からのキャラクターが保持されるという、時間的システムがすでに構築されているはずである。つまり新しい変化を抽出し、これにこれまでの三位一体セットがどのように応答し、再生したのかを、具体的に検討することが必要である。

つまり持続とは変わらないことではなく、n1 の内実を変えながら三位一体セットがなおバランスとして保たれる(n2)ことである。その意味で千年村の評価は、土地

固有のシステム(キャラクター)とそこに発生した内実の継続的変容プロセスとの2つの観点から読み解いていく必要がある。

#### ・村が千年村から外れるとき

限界集落のふるまいを引き合いに出せば、村が千年村から外れるのは、その三位一体構造が、構造とは呼べないまでに弱まった時である。その闘は千年村が持続の可否の評価としても流用できる。これについては環境、集落構造、共同体の各要素に応じて示唆することが可能である。

- ・ 環境の前提(土地形質)は保持されているか
- ・ 集落構造はどのように残存、開発(縮退)されているか
- ・ 現在の共同体に過去の活動との連続性が存在しているか

これらの要素例は以下の表のように表すことができる。

表 5-5 千年村記述のための項目 ver.2 (千年村運動体 2014、佐々木担当部分を改訂)

	把握事項	記述媒体・データ
環境	自然環境	地形図・景観図 (絵図・主題図)
	立地環境	交通ネットワーク
集落構造	領域の広がり	土地利用・地名・集水域(流域)・景観図(絵図・主題図)
	領域内構造	中心の変化(生産中心・居住中心・コミュニティ中心) 境界ならびに境界部の変化(新開地、線的境界・点的境界・ランドマーク的境界) スペース・シンタックスなどの集落構造分析
共同体	政治構造・生産構造	土地所有制度・人口
	技術	環境改変技術・労働力投入システム
	祭事	祭事記録・施設
	日常集団	消防団、町組など

#### <結論 千年村基準の選定案>

これまでの試論をもとに、具体的な千年村評価の基準と策定プロセスを以下に試みに検討した。この評価が千年村のみならず、多くの地域の潜在力の評価手法となりうらと思うからである。

1. 事前文献調査などによる千年村存在の仮説の設定(千年村仮説)

- ・ 文献調査、ヒアリング、景観ならびに地形質の概観調査…疾走調査
- ・ 千年近く前より生活空間が存在してきたことの考古学的証拠の有無…文献調査
- ・ 環境のタイプ、立地に対する共同体の定住、移動の有無の確認…文献調査
- ・ 生産活動の変化の歴史的確認…文献調査

これらを行い、その地域のキャラクター n1 を把握する。

2. 千年村持続の構造の解明

次に、詳細調査によるヒアリング、集落構造の実測によって

- ・ 集落構造の変容の実際
- ・ 共同体のフォーメーションの変容の実際を確認した上で

- ・ 現状の土地利用についての妥当性 n2 を検討することによって、総合的な持続と変容の質を吟味しうるのではないだろうか。

まだ千年村プロジェクトは端緒にすぎたばかりである。既往の集落研究などを十分参考にしつつ、私たちをとりまく環境の存続を求めて、さまざまな活動を行う予定である。

千年村は人間存在についての普遍に近く近道である。

(中谷礼仁)

## 第6章 付記

### 6-1. 参加者

利根川流域疾走調査については以下の通りである。

#### ■ 教員・調査協力者

石川初（登録ランドスケープアーキテクト／東京大学空間情報科学研究所協力研究員）  
木下剛（造園・ランドスケープ／千葉大学大学院准教授）  
佐々木葉（景観・デザイン／早稲田大学教授）  
高橋大樹（ランドスケープアーキテクト）  
中谷礼仁（建築史／早稲田大学教授）  
福島加津也（建築家／福島加津也＋富永祥子建築設計事務所／東京都市大学教授）  
元永二郎（ソフトウェア技術者）

#### ■ 学生

【木下剛研究室／千葉大学】  
梶尾智美・相原雄太・橋本慧（大学院生）  
佐藤勝（学部生）

【佐々木葉研究室／早稲田大学】  
石原卓馬・落合健太（大学院生）

【中谷礼仁研究室／早稲田大学】  
Jon Alvarez（博士課程）  
小林千尋・堀井隆秀・岸本太幹・田熊隆樹・  
廣瀬翔太郎・瀬尾憲司・犬伏順一（大学院生）  
諏佐遙也・神保洋平（学部生）

【福島加津也研究室／東京都市大学】  
松本開（学部生）

### 6-2. 今後の予定

本調査では関東の自然基盤である関東平野とその周縁の山地を横断している利根川流域に位置する千年村を悉皆的に実見した。

詳細調査では帯域の千年村を適切に分類し、環境の使い方、集落構造、共同体活動がそれぞれ適用的、継続的な活動があるかを比較検討し、さらにそれらの成果を用いて千年村の一般化をねらう。

利根川流域は山地・台地・低地・山地と台地の境界域の4つに地形的分類によって把握することが可能である。この大地形4分類をふまえた上で、評価の高い千年村を複数選定した。

また、村同士の比較検討が容易であることから、同地形の村を同時期に調査を行う。

#### 【山地】

01 利根郡呉桃郷／月夜野上津  
18 碓氷郡坂本郷／安中市松井田町坂本

#### 【台地】

09 多胡郡山宇郷／高崎市山名町付近  
13 片岡郡若田郷／高崎市若田町

#### 【低地Ⅰ】

26 那波郡葦束郷／伊勢崎市葦塚  
33 甘楽郡宗伎郷／富岡市曾木

#### 【低地Ⅱ】

48 埼玉郡草原郷／羽生市須影  
49 葛飾郡新居郷／久喜市栗橋

#### 【境界域】

30 多胡郡辛科郷／高市吉井町神保  
36 甘楽郡貫前郷／富岡市一ノ宮

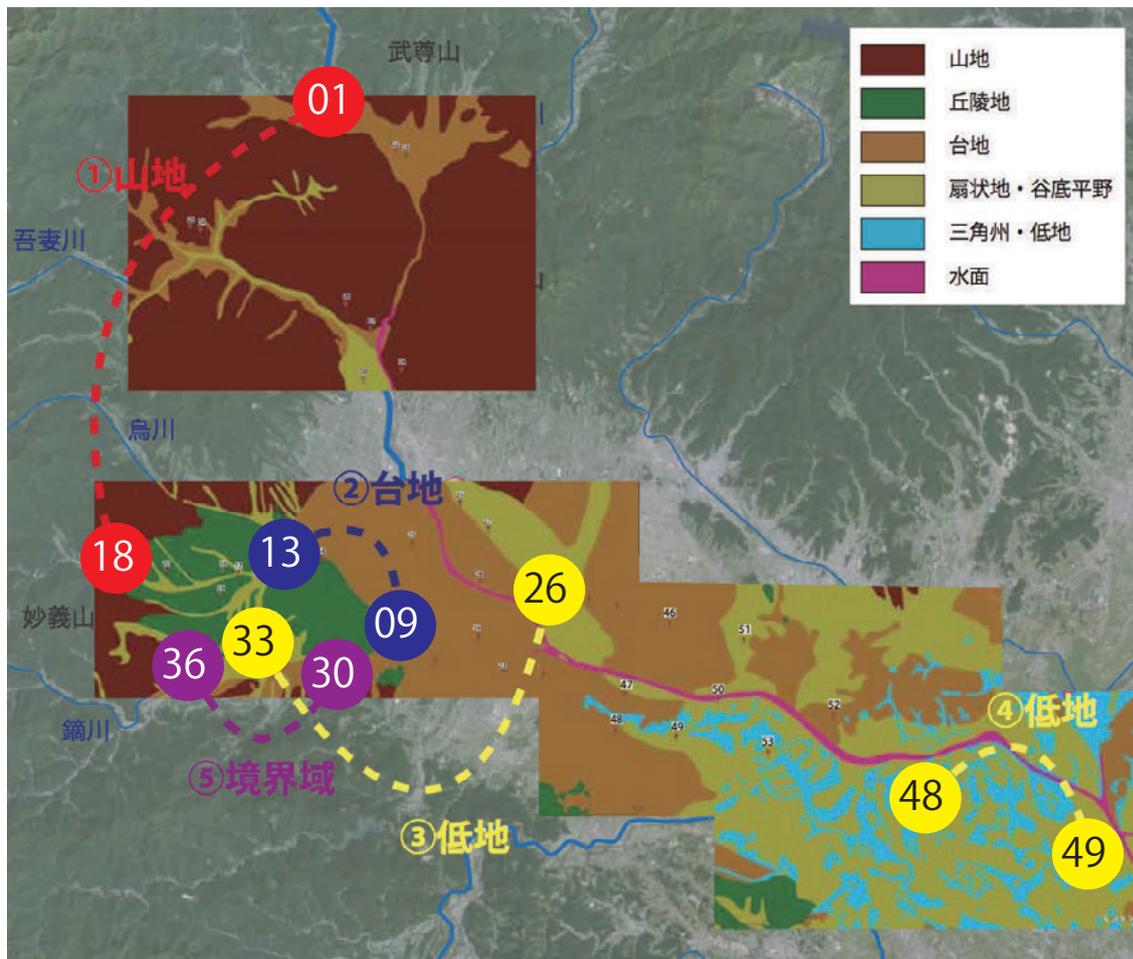


図 6-2 調査予定地

### 6-3. 謝辞

今回、利根川流域を悉皆調査するにあたり、調査対象地である 49 カ所の地域にお住まいの方々はもちろんのこと、対象地に限らず道中にお世話になった方々も数多くいらっしゃいました。まことにありがとうございました。

また、サンデングループ様には調査員 20 数名の宿泊を提供して頂いただけでなく、サンデンフォレストの見学をご用意していただきましたことを心よりお礼申し上げます。

### 6-4. 巻末資料

- 調査時利用の各種資料①～⑥
- 調査日程ごとの地形段彩図、植生図、土地分類図
- 調査時利用の野帖の凡例

(次ページより)

## 資料①：利根川の歴史

作成：岸本

### 江戸時代

#### ■新田開発 16世紀中期から17世紀中期

江戸幕府による新田開発治水事業が行われる（資料④：利根川水系変遷図参照）

#### ■天明3年（1783年）：浅間山噴火後

吾妻川合流地点から、前橋を過ぎ、高橋・前橋台地に切り込んだ利根川の自然堤防に、浅間山の噴火物で形成されたものがある。吾妻川合流地点から板東板までの利根川右岸沿いの細長い低地内はニガ土と称するアサマ土の一種で形成されている。

→浅間山の噴火による堆積物で、川床が上昇し破堤回数が文政4年（1821年）から明治3年（1870年）の50年間に集中しておこる。この洪水氾濫に対して水屋や水塚が多く作られる。

### 明治時代

#### ■利根川改修工事計画

目的 上流：大洪水における氾濫防止

下流：あくまで常習的水害防止

→上流下流における治水方針に違いが生じ、上利根川の洪水により下利根川の治水計画が破綻する。

### 大正時代

#### ■大正15年：洪水調節ダムの計画が登場

利根川治水を抜本的に変革するものではなく、補助的役割であった。

烏川：良好なダム建設地点が乏しい、吾妻川：酸性水のため技術的に難しいという合流する河川の問題もあった。

### 昭和（カスリーン台風以降）

#### ■ダム事業の本格化

利根川流域に大きな被害をもたらした1947年のカスリーン台風を受けて利根川に8つのダム（通称：利根川水系8ダム）を計画した。



図1 利根川水系変遷図



図2 水屋と水塚：樹木の中に3mほどの水塚がありその上に避難倉がある

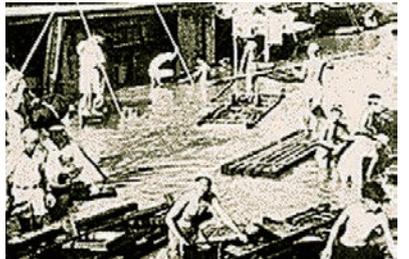


図3 カスリーン台風被害状況（東京都葛飾区）

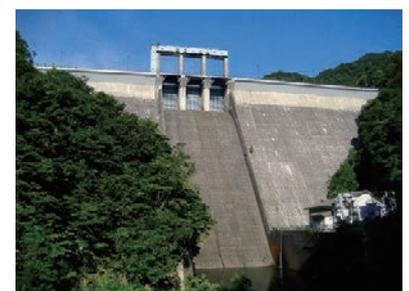


図4 藤原ダム（利根川水系8ダムのひとつ）

#### 参考資料

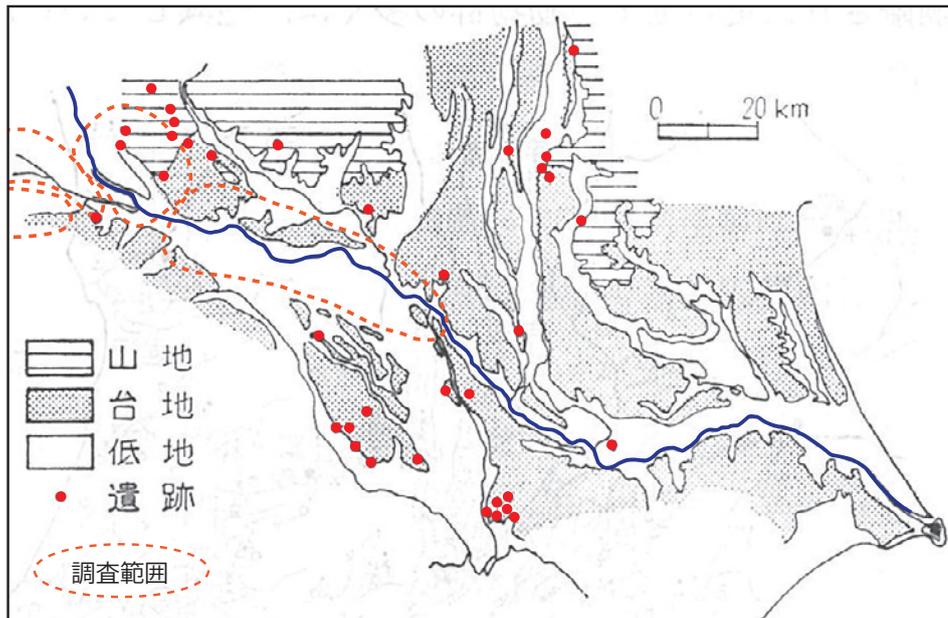
『耕地開発と景観の自然環境学』橋本直子／古今書院  
『利根川治水の変遷と水害』大熊孝／東京大学出版  
図版出典

図1 千年村プロジェクト HP（筆者加筆）

図2 『利根川治水の変遷と水害』大熊孝／東京大学出版

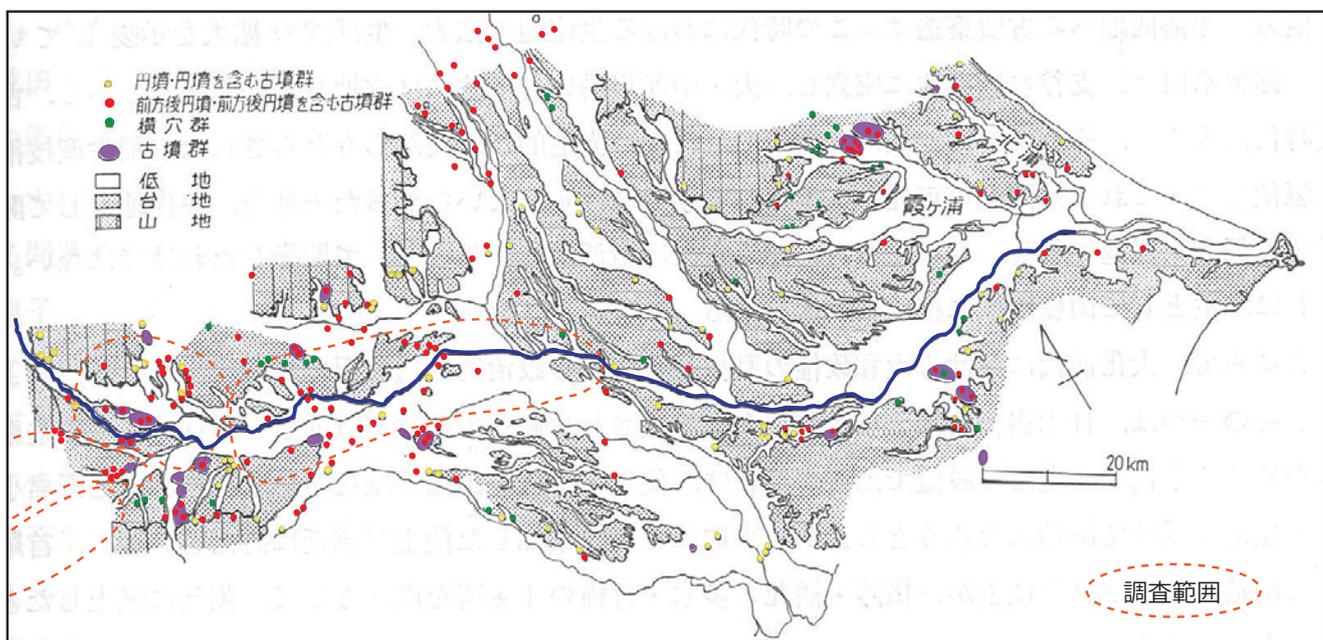
図3 国土交通省 関東地方整備局 HP

図4 利根川水系8ダム - Wikipedia



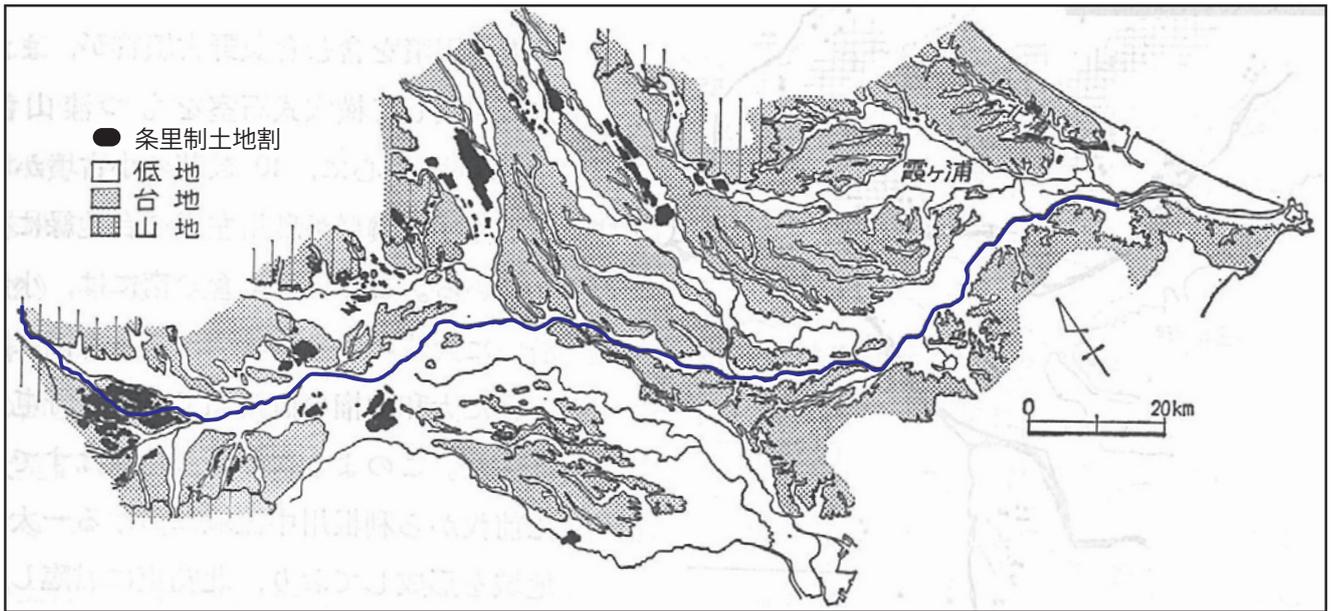
先土器時代の遺跡と地形面

先土器時代の主要な遺跡と地形面の関係を示したものである。先土器時代の遺跡分布は、赤城山を中心とする利根川中流域、東京湾岸の江戸川、荒川流域、鬼怒川中流域の3地域を中心に展開している様子がわかる。これらのうち利根川中流域は山地斜面に分布しているが、他の2地域は台地上に分布する。これは遺跡の成立時期と関係しており、利根川中流域は3立川期（3万～1万年前）のもので新しい。武蔵野期（8万～3万年前）の遺跡と比べて卓越しているのは、石器文化の発展を背景とした狩猟・採集技術が発達し、人類の生活圏が拡大していったのである。



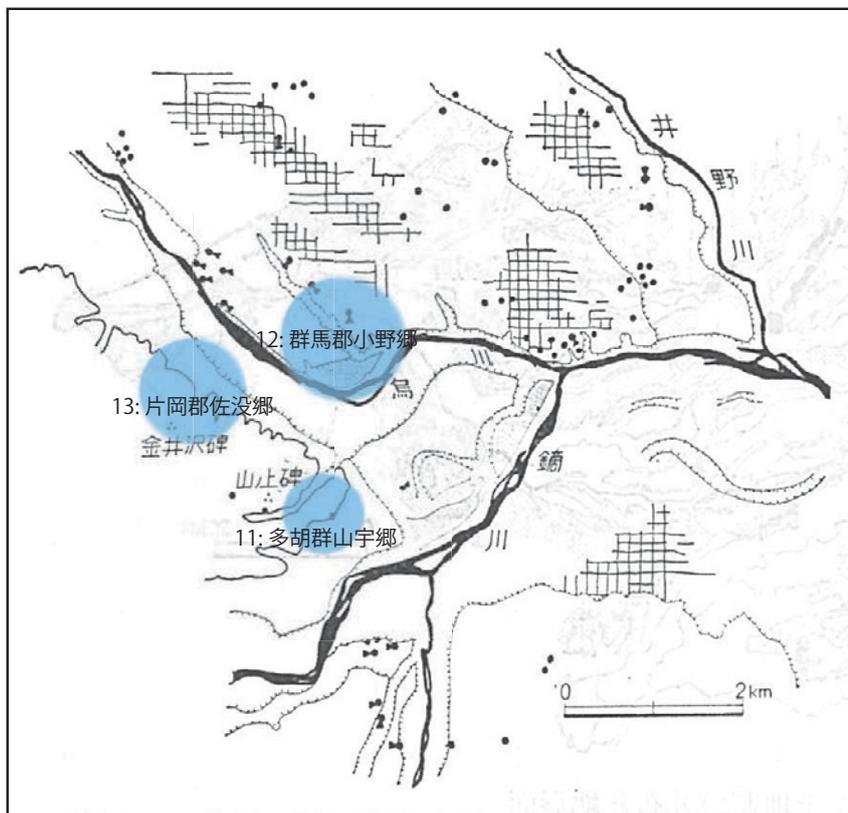
古墳の分布と地形面

- ・古墳分布の地域的偏り・・・利根川下流・霞ヶ浦沿岸地域と関東平野周辺山地の山麓地域の2地域に古墳が集中し、両地域に挟まれた中間地域の古墳分布はまばらである。これは大和政権の関東地方への浸透経路を反映している。つまり大和政権は東山道と東海道の二つの経路を経て勢力を浸透させている。
- ・沖積地層への生活範囲の進出・・・弥生時代の遺跡は台地上や台地間の狭い沖積低地を主としていたが、古墳時代の遺跡は利根川・荒川の沿岸部にも進出している。



条里制土地割と地形面

条里制土地割は利根川中流域と支流域、および利根川下流に位置する北浦の沿岸地域に偏って分布している。これは古墳時代における東山道筋と東海道筋の2様相を示す地域圏の形成と結びついているのであろう。一般に、条理型土地割の分布地域に隣接して古墳の立地がしばしば認められる。

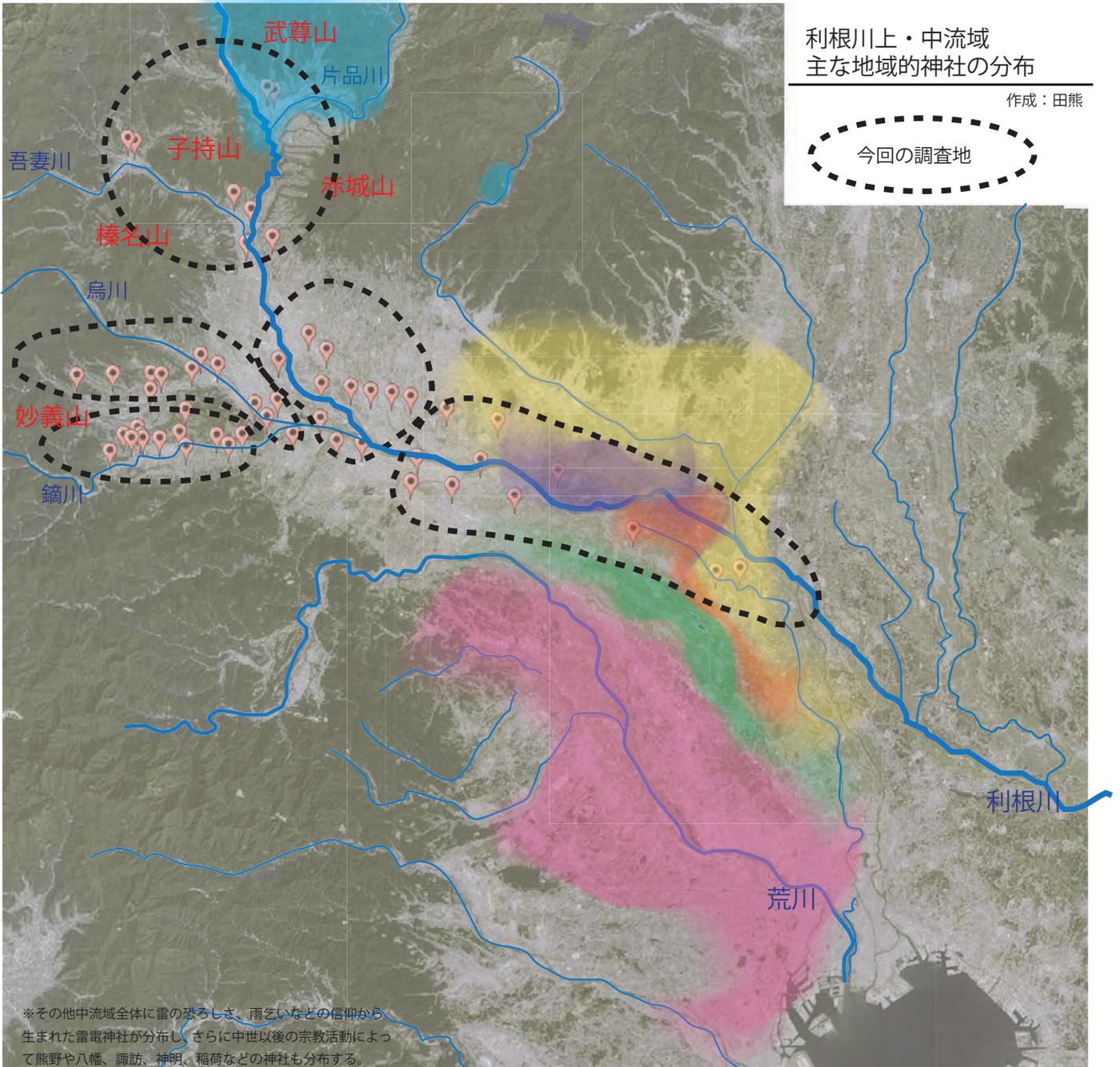


烏川・鏑川合流点付近の古墳・条里制土地割と千年村調査地

烏川・鏑川合流点付近は、北関東に君臨した上毛野氏の本拠地の一つであったのであろう。この辺りには台地状に古墳群があり、さらにそこに条里制がひかかれている。在地権力の経済的基盤は、烏川・鏑川・利根川の氾濫源より3~10m程度の比高をもった台地状に求められた。このあたりには千年村も密に存在する。

## 利根川上・中流域 主な地域的神社の分布

作成：田熊



※その他中流域全体に雷の恐ろしさ、雨乞いなどの信仰から生まれた雷電神社が分布し、さらに中世以後の宗教活動によって熊野や八幡、諏訪、神明、稲荷などの神社も分布する。

### 氷川神社

・・・荒川水系に分布。出雲族の豪族がスサノヲなどを祀った神社で、武蔵国の古い集落に氏神として祀られた。東京における台地上に鎮座し、他の神社より古い歴史をもつ。

### 香取神社

・・・利根川水系に分布。千葉県佐原市の香取神宮を本社とする。氷川神社に対して新しい開拓の地（10世紀前後か）で、低地帯の村々の氏神として祀られた。この地方は洪水多発地帯なので村落の成立も遅い。古くは中臣氏の首長が開発したという下総国に属するため、中臣氏一族の祀った神であった。

### 久伊豆神社

・・・元荒川に沿い、氷川神社と香取神社の分布域の境界に分布。このため武蔵と下総の氷川・香取神社が祭祀権を侵し合わない。香取神社と同じく新しい開拓の地で、伊豆からの移住民という説もある。中世以後祀られたと考えられる。

### 長良神社

・・・香取・鷲宮両地域の西、久伊豆の地域の北に、ごく限られた範囲に分布。利根川と渡良瀬川に挟まれた地帯、群馬県邑楽郡に限って分布する。まったく地域的なウブスナ神である。水の神としての性格が強い。

### 鷲宮神社

・・・香取・氷川両地域の中間地帯に介在する形で分布。本社は久喜市鷲宮にある古社、鷲宮神社である。利根川は洪水のたびに流れを変えたが、その1つが羽生・加須両市を流れる古利根で、鷲宮に接触して流れる。その接触点の近くに鷲宮神社が鎮座する。

### 武尊神社

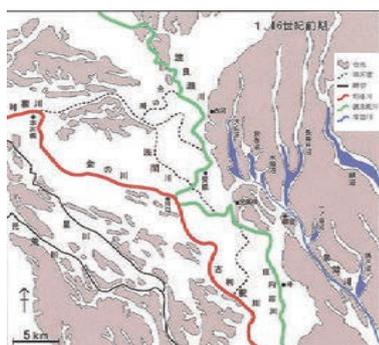
・・・ヤマトタケル神話との関係がある。利根川が片品川と合流するところ、利根郡全域に分布。武尊山を神聖視した山岳信仰と利根川源流の水の神というふたつの性格をもつ。

### 利根川水系変遷図

近世以前の利根川は、吾妻川を合流し渋川を過ぎたあたりで山間部を離れ、下流では激しい乱流・変流を行い、埼玉平野を数条にわかれて東京湾に流入していた。これを利根川の自然的与件として、江戸時代からさまざまな河川改修工事や農業用水の開発が行われることになる。以下に下流部における江戸幕府によって行われた新田開発、治水事業による河川の変遷をまとめた。

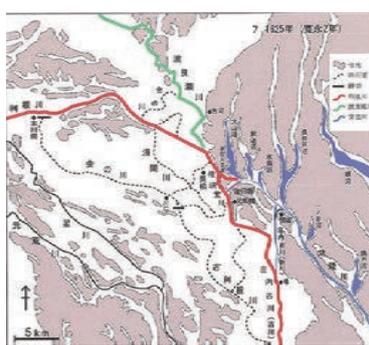


図1 江戸幕府による利根川の東遷



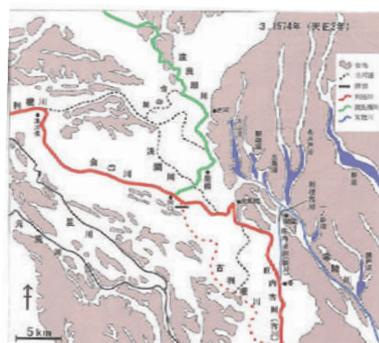
a: 16世紀前期の河道の  
改変以前の流路

図2



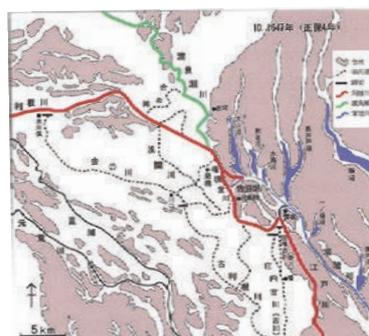
d: 1594 (文禄3) 年の  
会の川締切  
e: 1596~1600 (慶  
長元~5) 年の権現堂川  
開削  
f: 1621 (元和7) 年  
の新川通・赤堀川一番掘  
開削

図4



b: 1546 (天文15)  
年の庄内古川 (新川) 開  
削  
c: 1546 (天正2) 年  
の古利根川締切

図3



g: 1625 (寛永2) 年  
の赤堀川二番掘拡幅  
h: 1626 (寛永3) 年  
の江戸川開削開始  
i: 1635 (寛永12)  
年逆川開削時の河道図  
j: 1647 (正保4) 年  
の江戸川完全通水  
k: 1654 (承応3) 年  
の赤堀川三番掘完全通水

図5

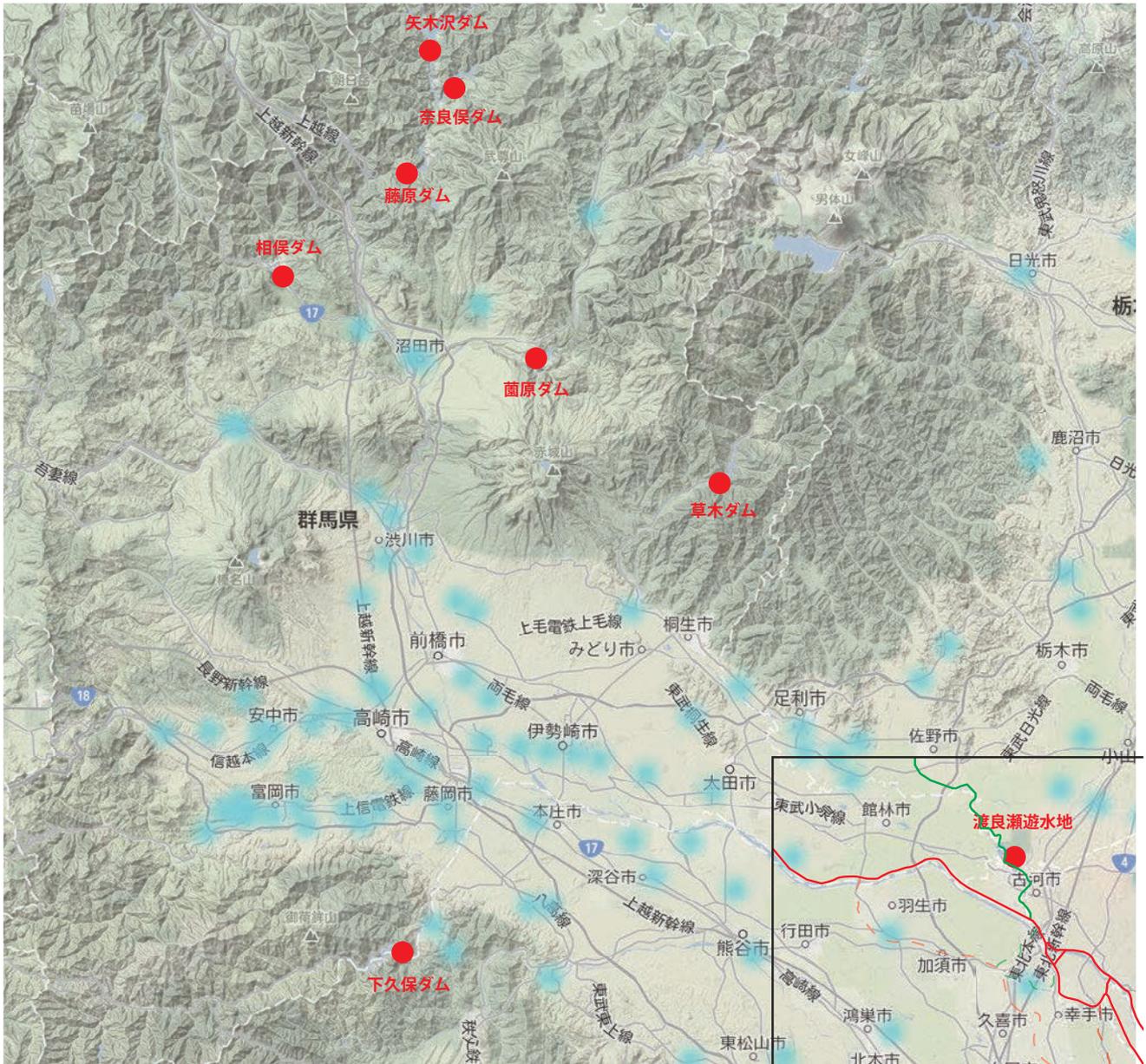


図6 ダムと千年村の立地関係  
出典：千年村プロジェクトHP（筆者加筆）

参考文献

- 『耕地開発と景観の自然環境学』橋本直子／古今書院
- 『利根川治水の変遷と水害』大熊孝／東京大学出版

図版出典

- 図1,6 千年村プロジェクトHP（筆者加筆）
- 図1,2,3,4,5 『耕地開発と景観の自然環境学』橋本直子／古今書院

■目的

水防共同体「領」と堤防との関係を知り、近代以降どう変わったのかを知る。

■利根川治水の要「中条堤」

中条堤はかつて福川と利根川の合流地点（埼玉県熊谷市）に存在した堤防であり、利根川、ひいては江戸の治水の要だった。15世紀頃に整備されたと言われており、明治43（1910）年まで機能していた。

図1のように、中条堤は洪水時に一時的に水を溜め、徐々に利根川に放流し下流側を守ることを目的とした控堤（水除囲堤）である。

■控堤と「領」

中条堤のような控堤は現在も多数存在し、それらは「領」という水防共同体によって普請・維持管理される。上流側の領では控堤で早く下流に流したいために低く作りたが、下流部では溜めておきたいため高く作りたが、（図2参照）この領間での調停が必要になるため、控堤は論所堤（口論や時には紛争の場）とも呼ばれる。

このように「領」は利害を等しくする者同士によって自然発生的に形成された。



図1 中条堤の概念図（一般財団法人 国土技術研究センターより）

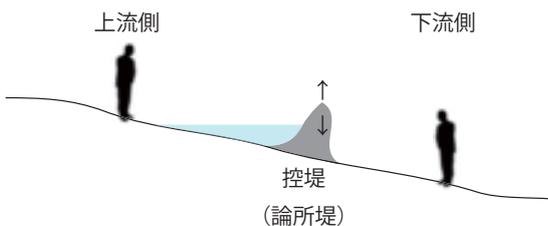


図2 論所堤のダイアグラム（筆者作成）



図3 福川の上流方向から（中条堤～領という水防共同体～より）

■明治以降の「領」

「領」は明治以降水利組合などに名称を変え、運営も合理化されたが、実質村々の関係は仲間意識の強い旧態の領であった。

先の中条堤は明治43年に中止されると、洪水被害を分担するシステムは崩壊し、河内で洪水を防ぐ近代的な治水（ダム、遊水池、調整池など）が必要になった。

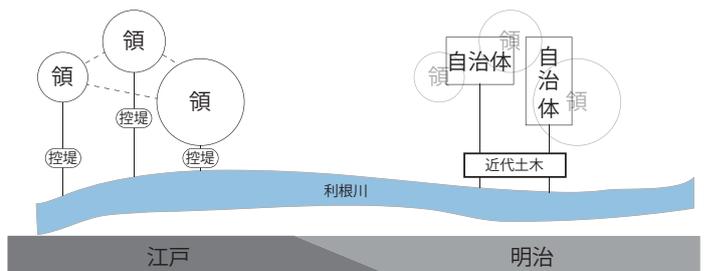


図4 治水のダイアグラム（筆者作成）

参考

- ・伊藤晴男『治水思想の風土[近世から現代へ]』（古今書院、1994）
- ・科学技術庁資源局『中川流域低湿地の地形分類と土地利用』（科学技術庁資源局、1961）
- ・「中条堤（ちゅうじょうてい）～領という水防共同体～」(http://www.geocities.jp/fukadasoft/renga/cyuujyou/index.html)
- ・「利根川の治水の要「中条堤」」(http://www.jice.or.jp/room/200811140.html)

高村弘毅・後藤真太郎編『流域環境を科学する』（古今書院、2011）  
第2章2「荒川・利根川中流域における水屋・水塚からスーパー堤防まで」

作成：犬伏

0. 著書紹介

本著は高村弘毅<sup>\*1</sup>、後藤真太郎<sup>\*2</sup>編によるものである。荒川・利根川流域の環境について、既往研究および著者らによる調査の結果、分析を踏まえて、水分子や環境情報学の観点から記述されている。第2章の2「荒川・利根川中流域における水屋・水塚からスーパー堤防まで」は、荒川・利根川流域の水屋に関して、その分布や機能の変遷をまとめている。ダムや高規格堤防（スーパー堤防）<sup>\*3</sup>が水屋にとって代わり、スーパー堤防は土地の住民にとって親水空間足りうると称賛し、本文を終えている。本レジュメは、荒川・利根川流域の特徴や発生した災害、集落における水屋の機能に注目し、右記のようにまとめた。

本レジュメ構成

- 0. 著書紹介
- 1. 本文内容
  - 1-1. 荒川・利根川流域について
  - 1-2. 近世に起きた災害について
  - 1-3. 瀬替えについて
  - 1-4. 水屋について
- 2. 疾走調査地近辺の地図資料
- 3. 参考文献・図版出店

1. 本文内容

1-1. 荒川・利根川流域について

荒川・利根川流域では、古来より氾濫による水害が頻繁に発生した。その原因は、上流域である群馬地方の盆地や山地の地形・地質、植生、水質系などの自然的特質と、夏に集中して降水量が多くなるという特徴のためである。さらに、流路が山地間を駆けめぐり、丘陵・台地から低地へと急斜面を一気に流れ、平地に出ることも影響する。

1-2. 近世に起きた災害について

頻繁に災害のおきる流域であるが、以下の3つが特にひどかった災害状況である。

- 1890年（明治23）8月22日：豪雨、8月30日：台風  
…広域にわたる水害のため、長期に被災が拡大する。
- 1910年（明治43）8月1~6日：前線性と低気圧性の豪雨、8月10日：台風による豪雨  
…荒川流域のいくつかの村の近くで、堤防が決壊するほど。水屋が大いに役立った記述が残っている。
- 1947年（昭和22）9月14,15日：カスリーン台風<sup>\*4</sup>  
…当時として県内観測史上、最大降水量を記録更新した。河川流出の増大により、県内の諸河川の破堤は50箇所にとぼる。

1-3. 瀬替えについて

荒川・利根川は、洪水のたびに分流や蛇行を自在に繰り返し、氾濫による水害は甚大であった。江戸時代、幕府は江戸や流域の水害対策として、利根川の一支流であった荒川を利根川から切り離す「瀬替え」を行った（図1はその前後の流路を示す）。この大改修は洪水頻度と水害範囲の縮小に成功し、特に江戸市街地の被害の激減、川舟運送の円滑化に効果があった。一方で、荒川中流部の水系網を複雑にして水が集まりやすくなり、かえって氾濫域が広がった（図中の「元荒川」の部分にあたる地域）ともいわれる。

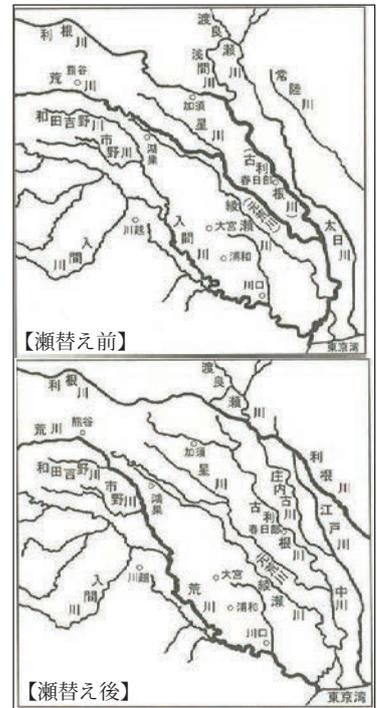


図1 荒川・利根川の瀬替え前後の図

1-4. 水塚・水屋について

江戸時代の幕府が行ってきた大規模な水害対策に対し、土地の住民は独自の機能を備えた防災施設として、水塚・水屋を作るようになったといわれる。形成初期（江戸中期～末期頃）は、洪水の氾濫や豪雨時の冠水時に一時的に、家族の生命と財産を守るための緊急避難施設であった。次第にその機能は多様化していく（明治以降）。

水塚・水屋は一般的に屋敷地内に建てられ、屋敷地自体を周辺の地形面より高いところを選ぶか土盛をするが、水塚・水屋は母屋よりさらに高い土壇上に2階建てで造られる。主に二階で避難生活を送るが、なかには水屋の軒に普段から舟を（揚げ舟）を吊るし、冠水時の物資の運搬、救助、近所への連絡に使うこともあった。非常時には、その機能は家族内にとどまらず、水屋を持たない近所の人々にも水屋は利用され、助け合いの精神に基づいた被災地域の文化も形成された。

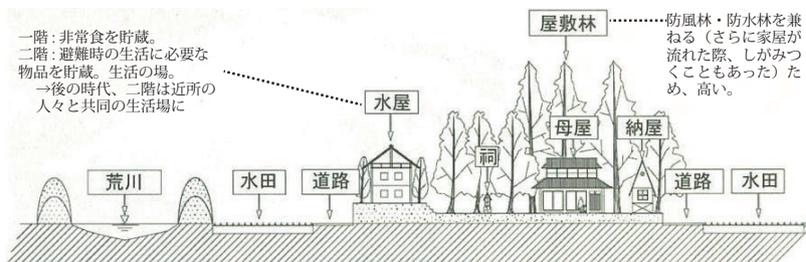


図2 水屋のある屋敷地の模式断面



図3 揚げ舟

注釈

- \*1:1937-、青森県生まれ。立正大学名誉教授。文学博士。専門は水文学・地下水環境学。
- \*2:1955-、岐阜県関市生まれ。立正大学地球環境科学部環境システム学科教授。博士（工学）東京大学。専門は環境情報学。
- \*3:明治43年の大洪水を契機に、河口（東京都江東区および江戸川区）から熊谷大橋（埼玉県熊谷市）までの長距離間に、超過洪水時にも破堤しない構造の高規格堤防（スーパー堤防）の建設が、現在江戸川区で計画されている。堤防の高さの30倍の区域の土地の高さを盛り上げて、洪水や地震の液状化現象に耐える仕組みである。著者は本文中で、環境の変化に十分対応しうる親水空間であると述べる。
- \*4:カスリーン台風（たいふう、昭和22年台風第9号、国際名：カスリーン（Kathleen））は1947年9月に発生し、関東地方や東北地方に大きな災害をもたらした台風のこと。この台風による死者は1,077名、行方不明者は853名、負傷者は1,547名。その他、住家損壊9,298棟、浸水384,743棟、耕地流失埋没12,927haなど、罹災者は40万人を超え、戦後間もない関東地方を中心に甚大な被害をもたらした。（Wikipediaより引用）

## 2. 疾走調査地近辺の地図資料



図4



図5 図4に対応する現在地図

本著から、調査地近辺の水屋の分布資料を引用する。  
 図4は1981年頃の利根川における水屋の分布を表す。著者による調査成果である(当時の水屋の状況を、消滅寸前と述べている)。ここは疾走調査予定地の56葛飾郡新居郷(8/6実見予定)から北方へ5km程の場所に位置する(図5は現在の地図で、図中の緑プロットは調査予定地)。

図6の斜線部は荒川流域における水屋の分布を表す。(図7は現在の地図で、図中の緑プロットは調査予定地、青プロットは疾走調査外の千年村)。

集落における水塚・水屋は、相互助力の現れとして、共同体の持続を示していた一つの調査資料としてみれないだろうか。

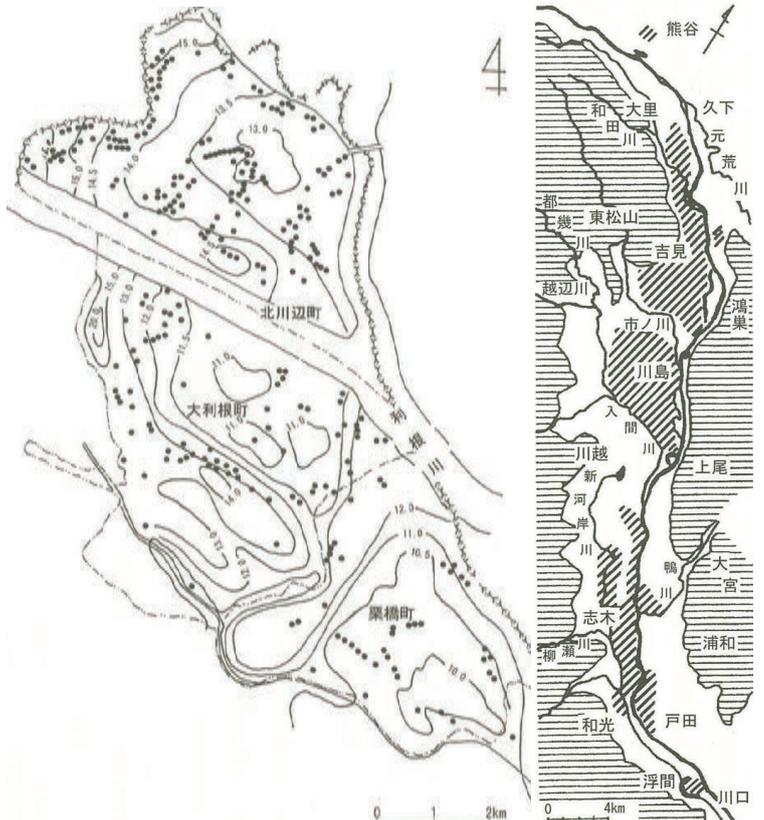


図4 利根川中流域における昭和初期の水屋の分布と地盤等高線図

図6 荒川流域の水屋の分布

## 3. 参考文献・図版出店

参考：高村弘毅・後藤真太郎編『流域環境を科学する』(古今書院、2011)

- 図1 高村弘毅・後藤真太郎編『流域環境を科学する』(古今書院、2011) p.81より引用(筆者加筆)
- 図2 同書 p.77より引用(筆者加筆)
- 図3 同書 p.78より引用
- 図4 同書 p.75より引用
- 図5 [\(2014.07.24\)](http://mille-vill.org/%E8%91%9B%E9%A3%BE%E9%83%A1%E6%96%B0%E5%B1%85%E9%83%B7%E5%9F%BC%E7%8E%89%E7%9C%8C)(筆者加筆)
- 図6 同書 p.83より引用
- 図7 [\(2014.07.24\)](http://mille-vill.org/%E5%9F%BC%E7%8E%89%E7%9C%8C)(筆者加筆)

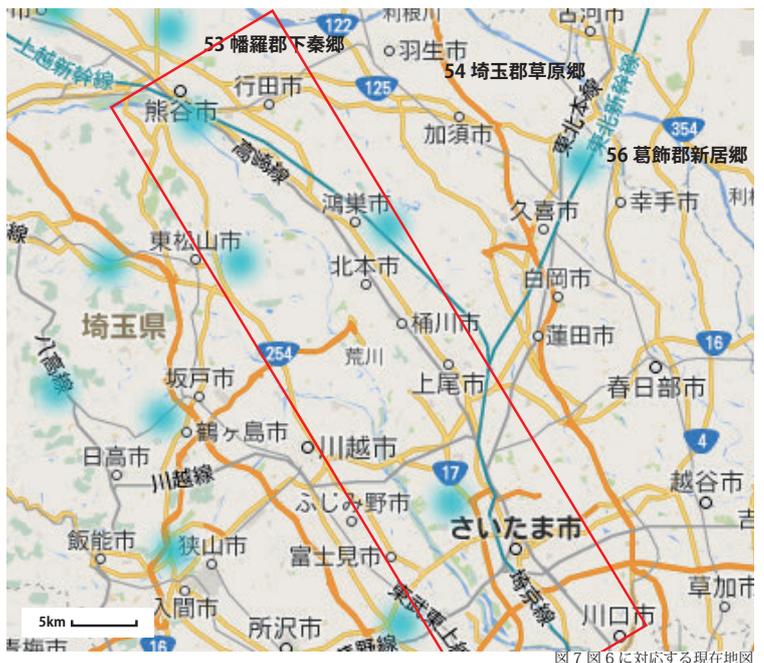
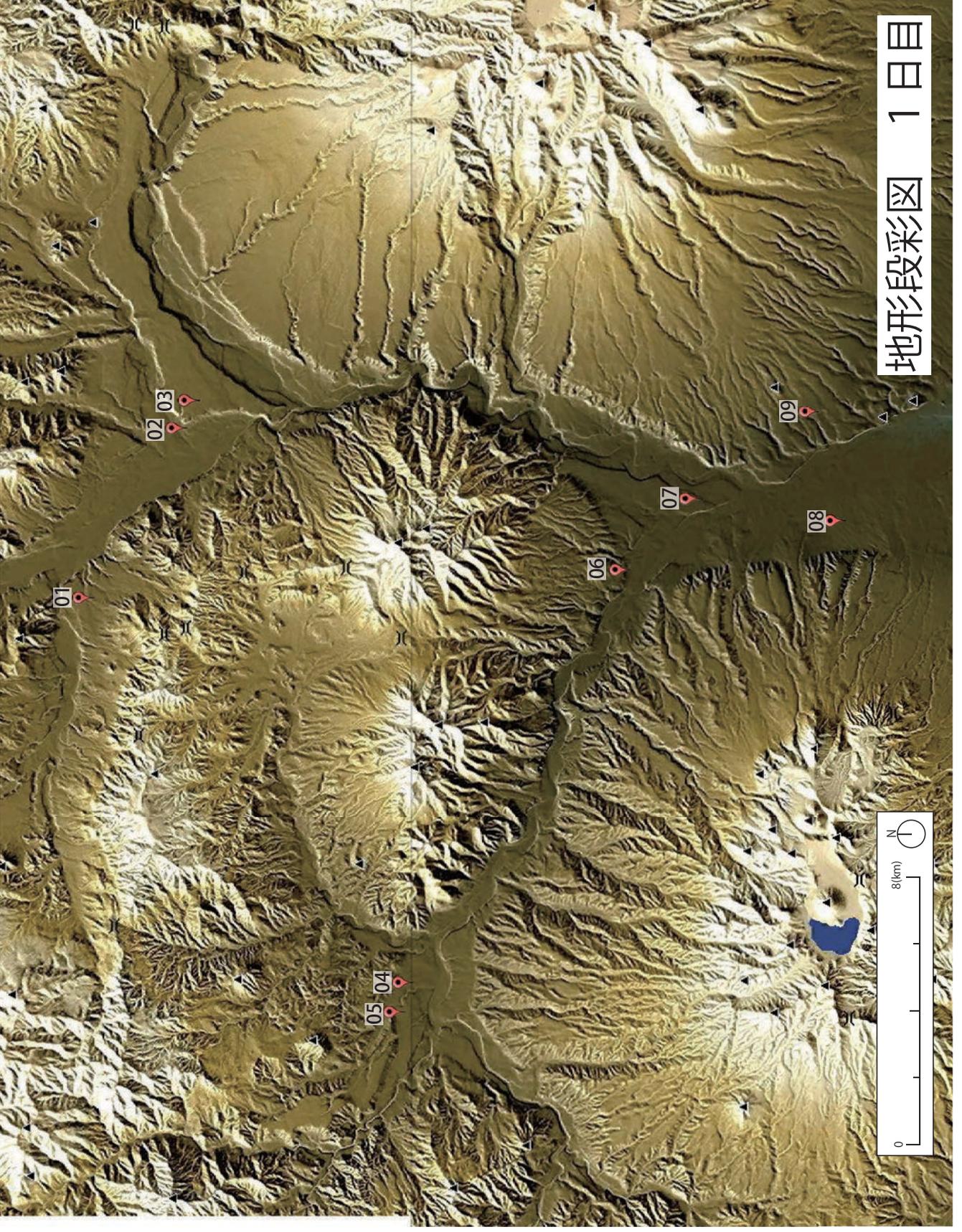
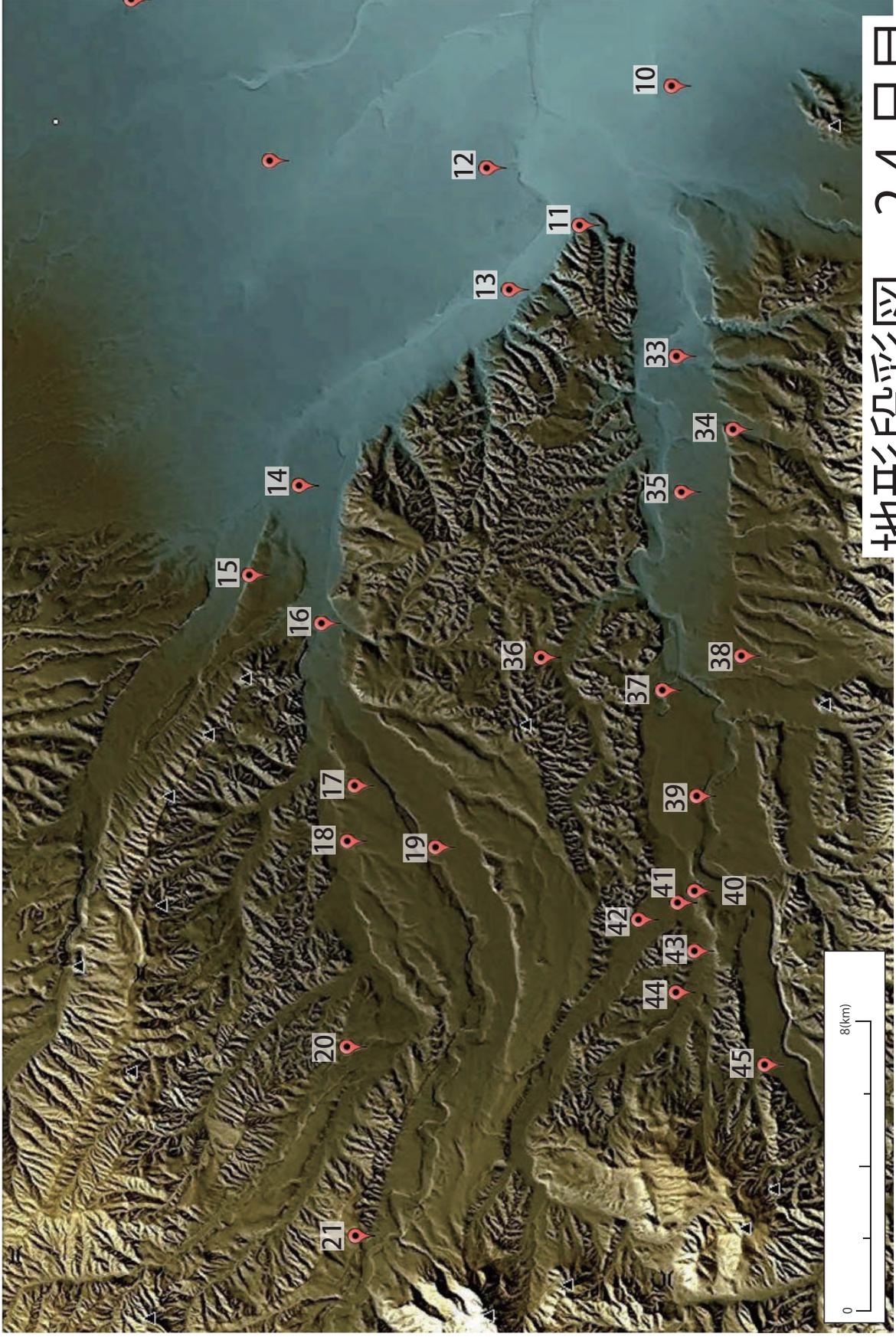


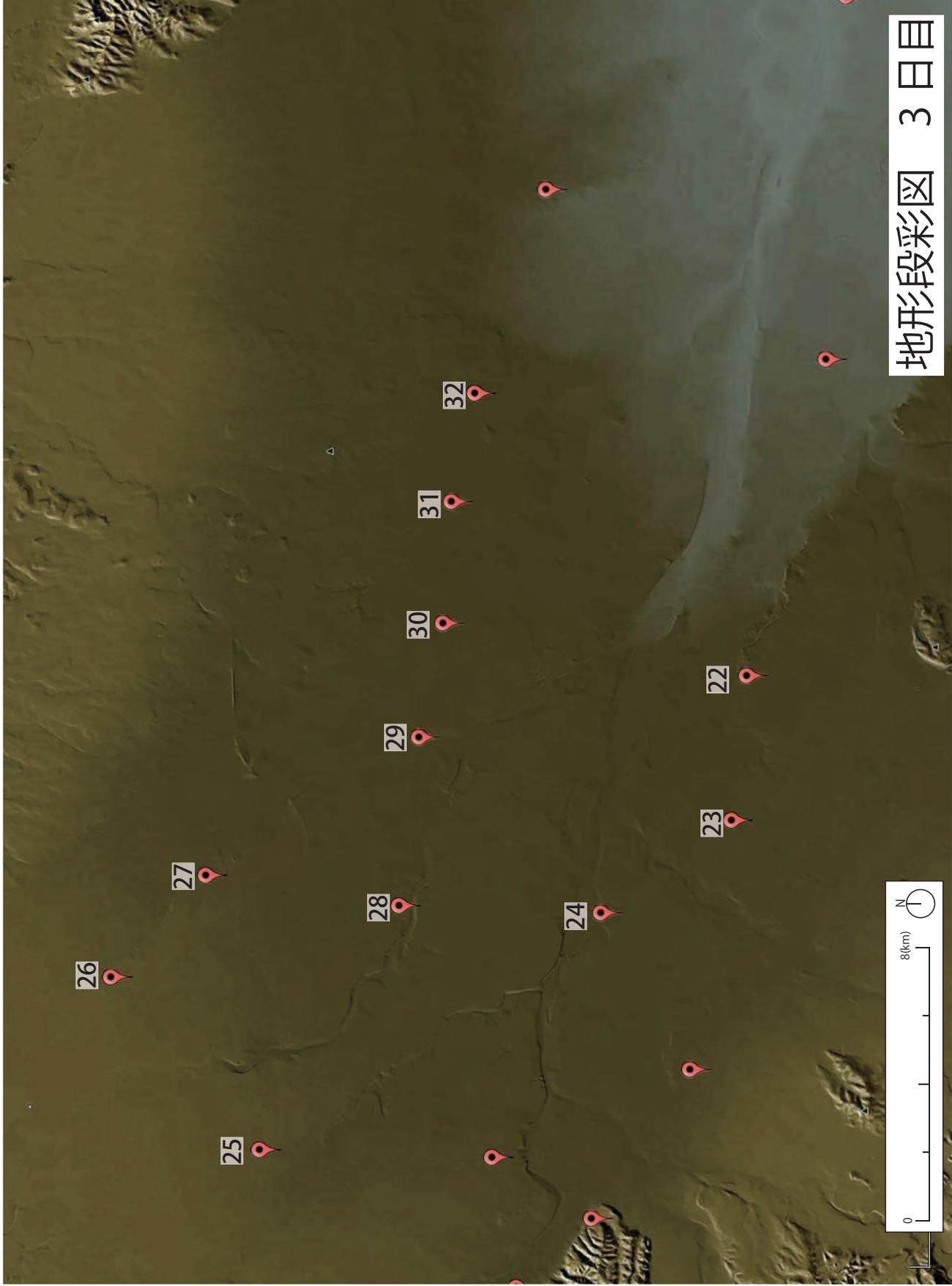
図7 図6に対応する現在地図



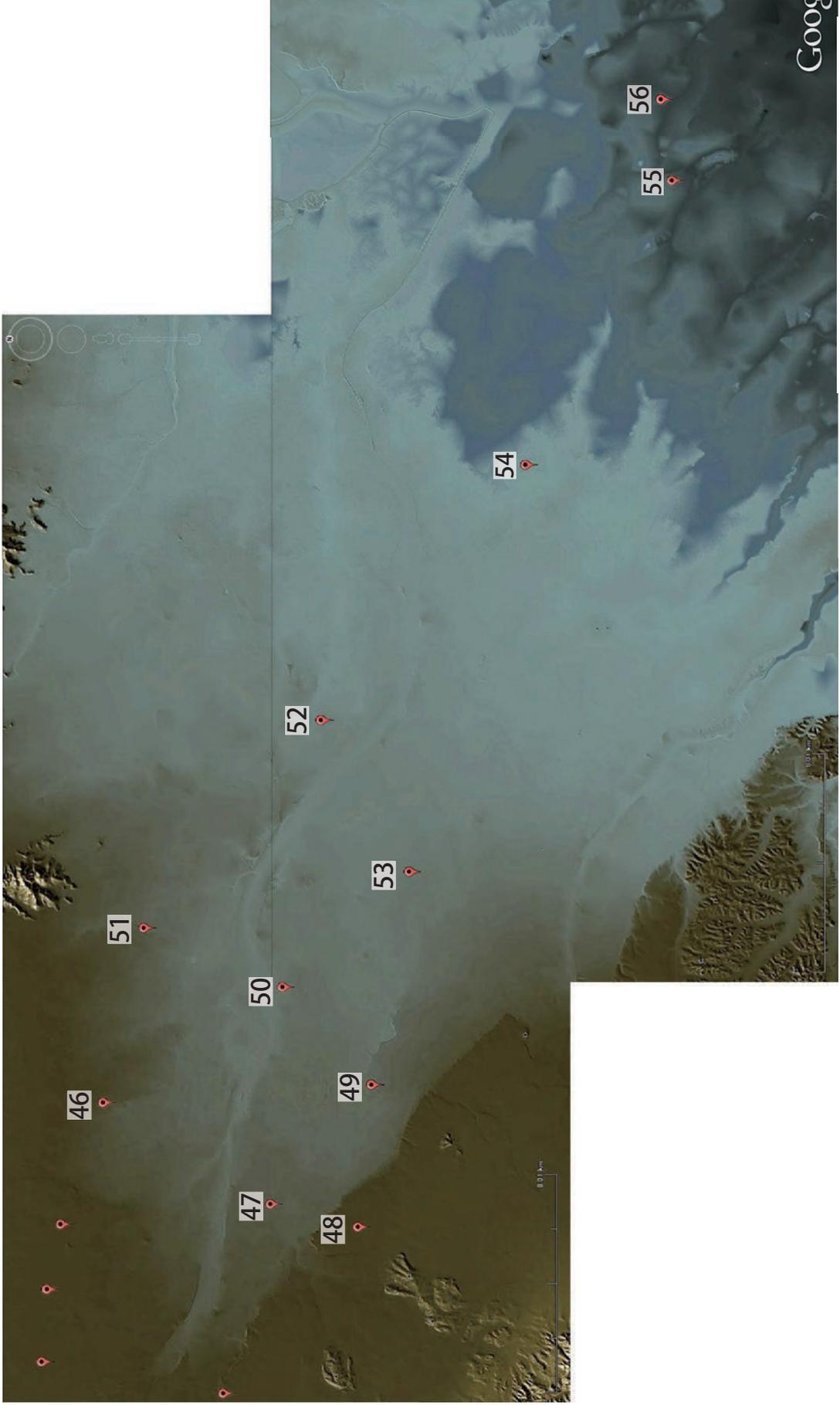
地形段彩图 1 日目



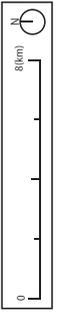
地形段彩图 2,4 日目

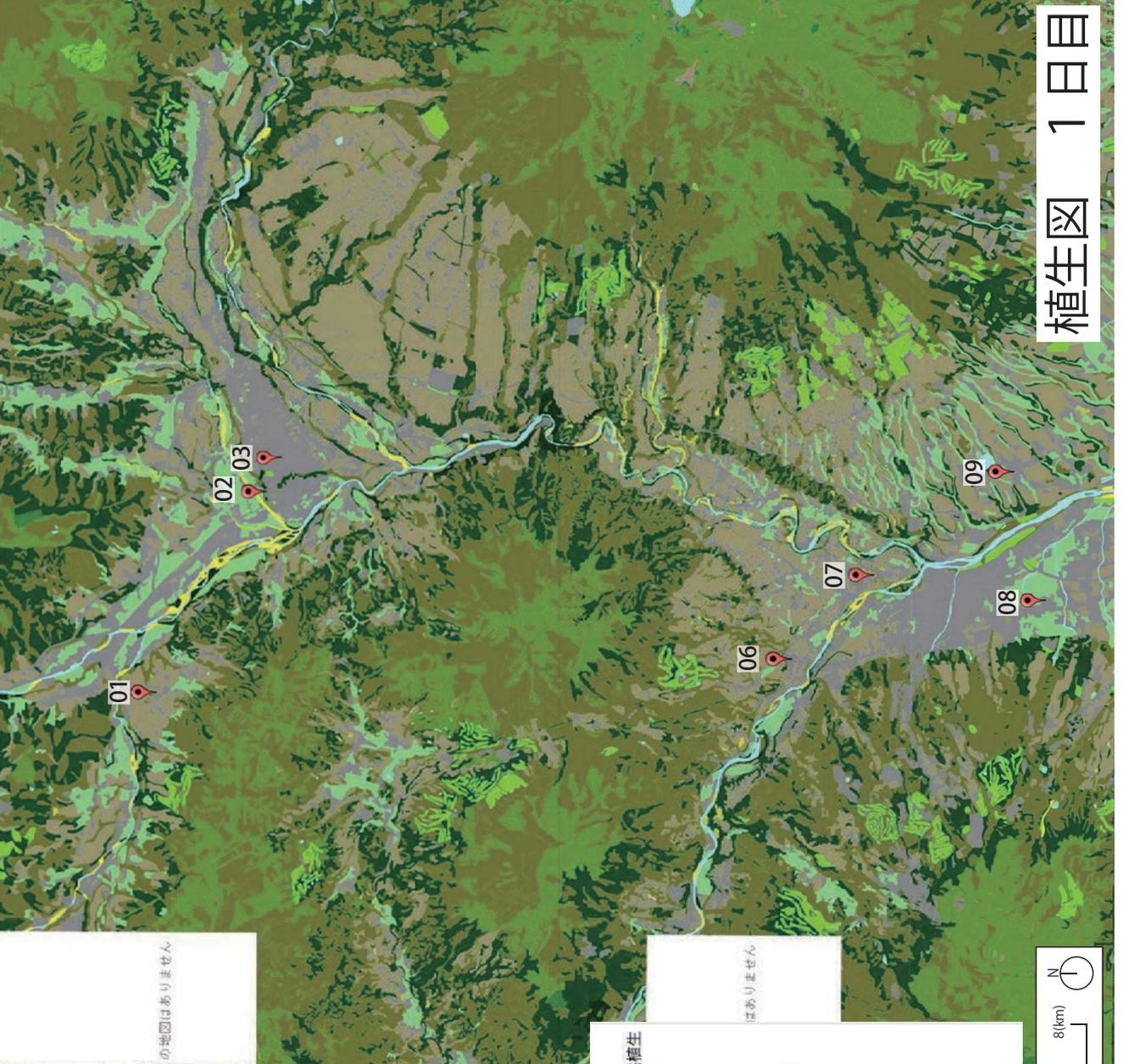


地形段彩图 3 日目



地形段彩图 5 日目

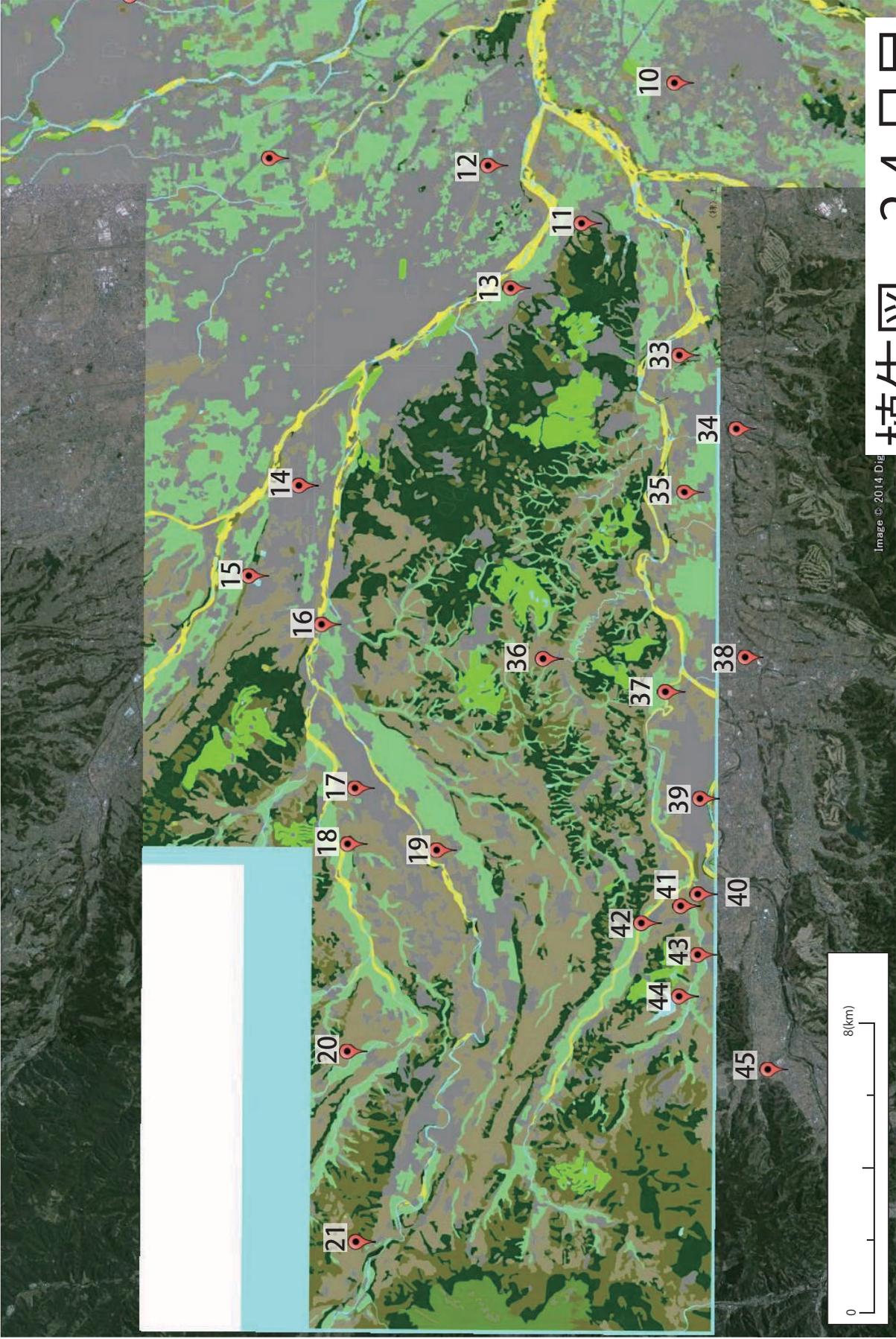




- 高山帯自然植生
- コケモートウヒクラス域 自然植生
- // 代償植生
- ブナクラス域 自然植生
- // 代償植生
- ヤブツバキクラス域 自然植生
- // 代償植生
- 河川・湿原・沼沢地・砂丘植生
- 植林地
- 耕作地
- 市街地
- 開放水域
- zoom >= 12
- 竹林
- 牧草地・ゴルフ場・芝地
- 水田以外の耕作地

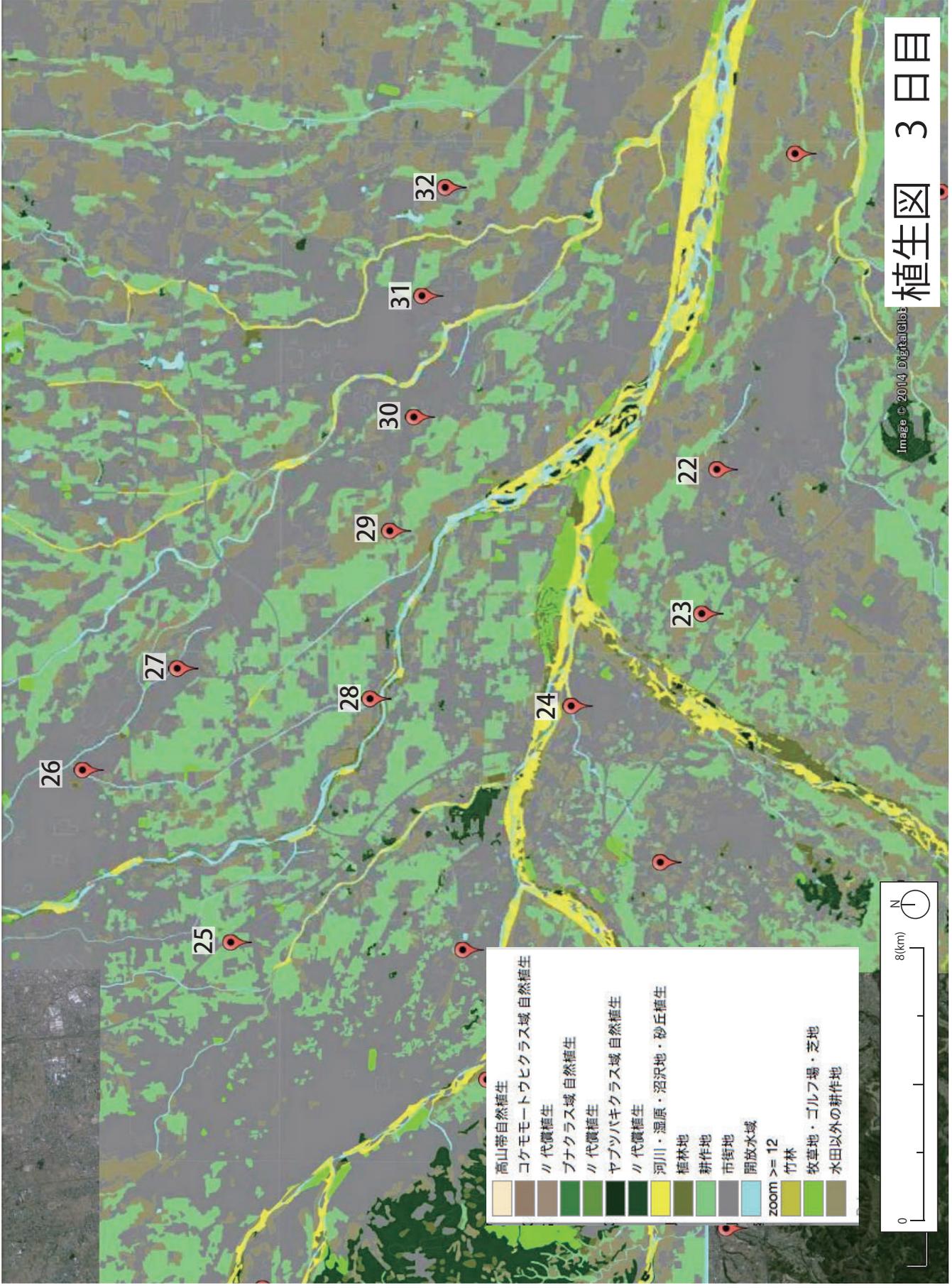


# 植生図 1日目



# 植生図 2,4 日目

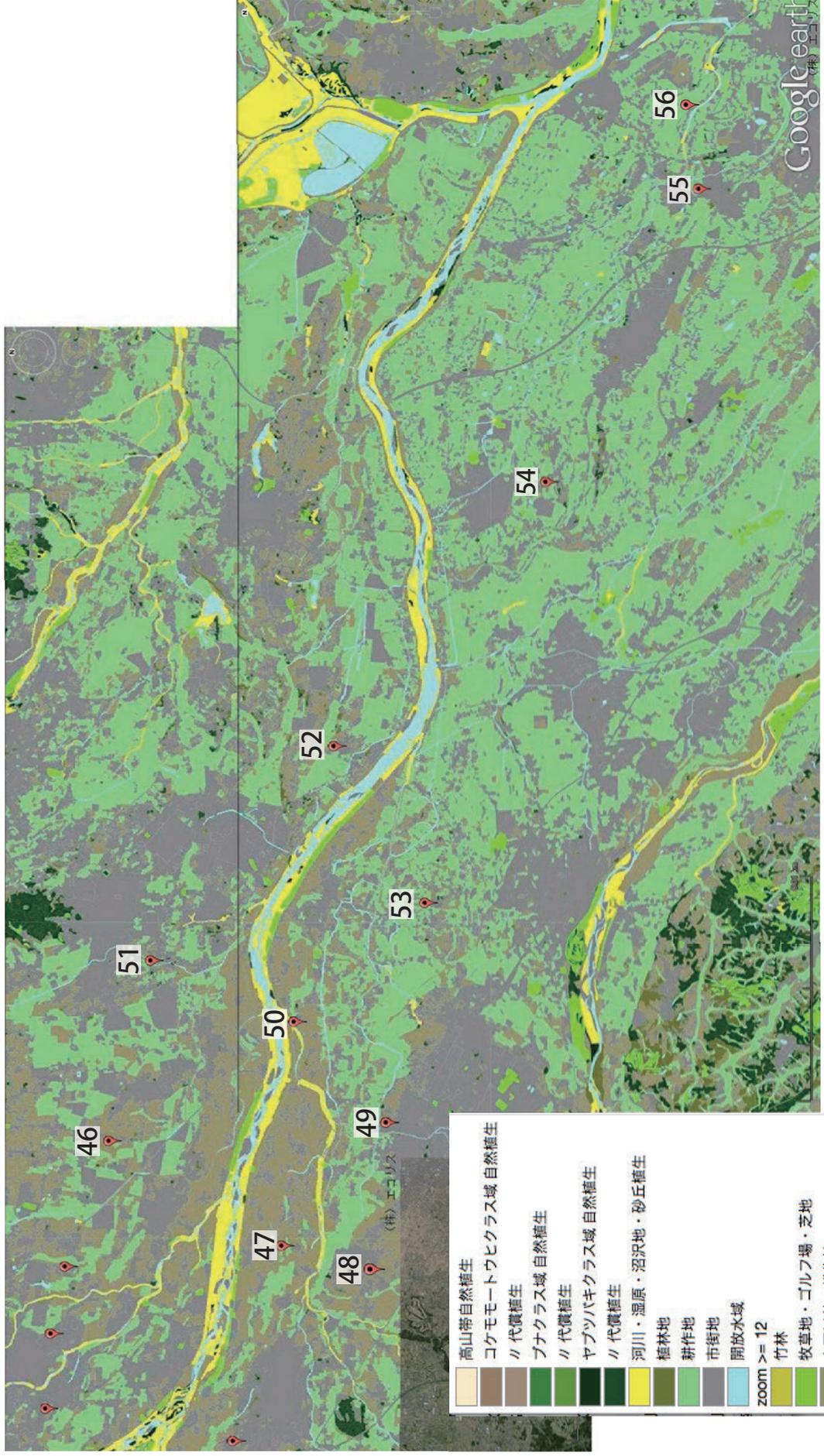
# 植生図 3 日目



- |             |                  |
|-------------|------------------|
| 高山帯自然植生     | コケモトウヒクララス域 自然植生 |
| // 代償植生     | ブナクララス域 自然植生     |
| // 代償植生     | ヤブツバキクララス域 自然植生  |
| // 代償植生     | 河川・湿原・沼沢地・砂丘植生   |
| 植林地         | 耕地               |
| 市街地         | 開放水域             |
| zoom >= 12  | 竹林               |
| 牧草地・ゴルフ場・芝地 | 水田以外の耕作地         |



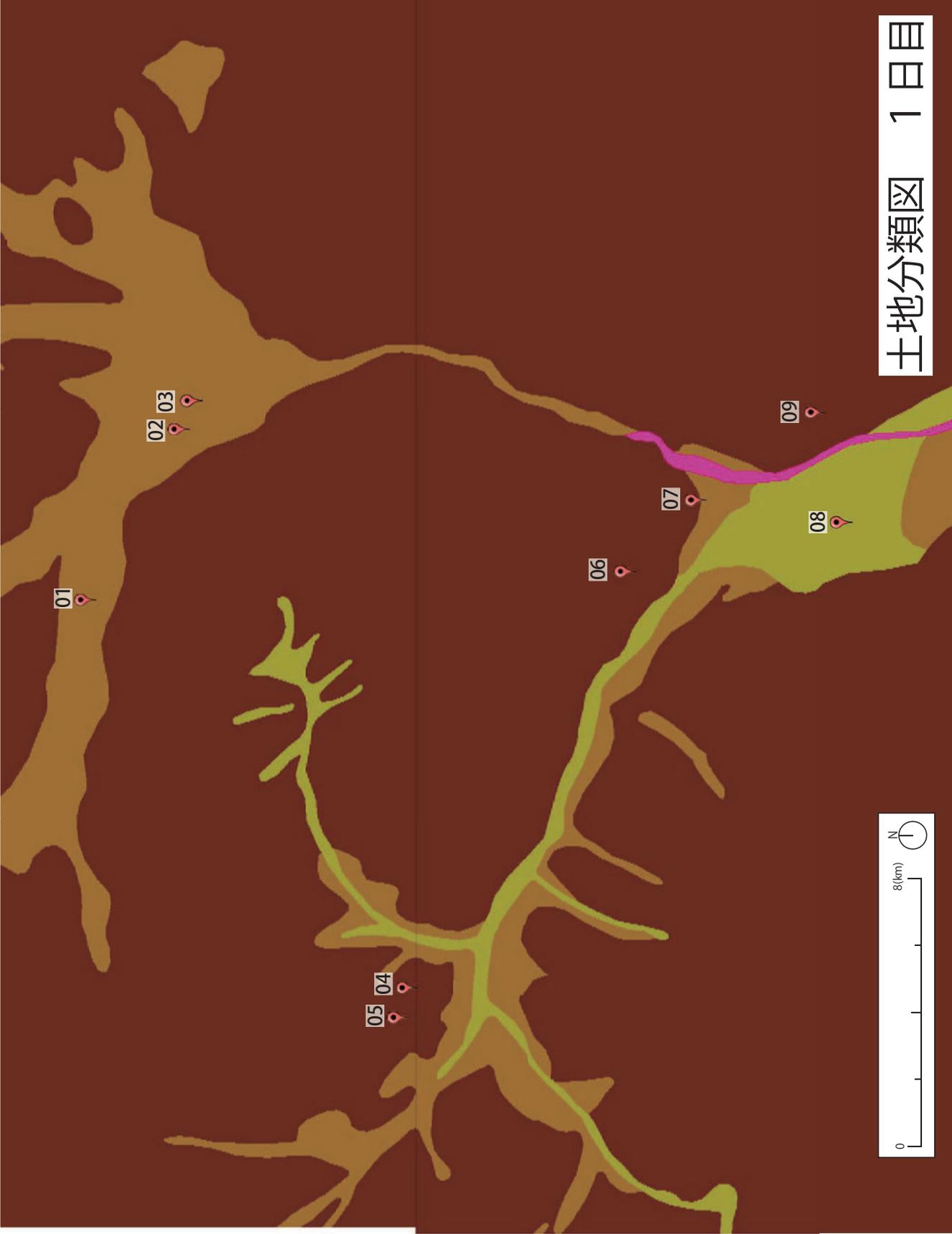
Image © 2014 DigitalGlobe



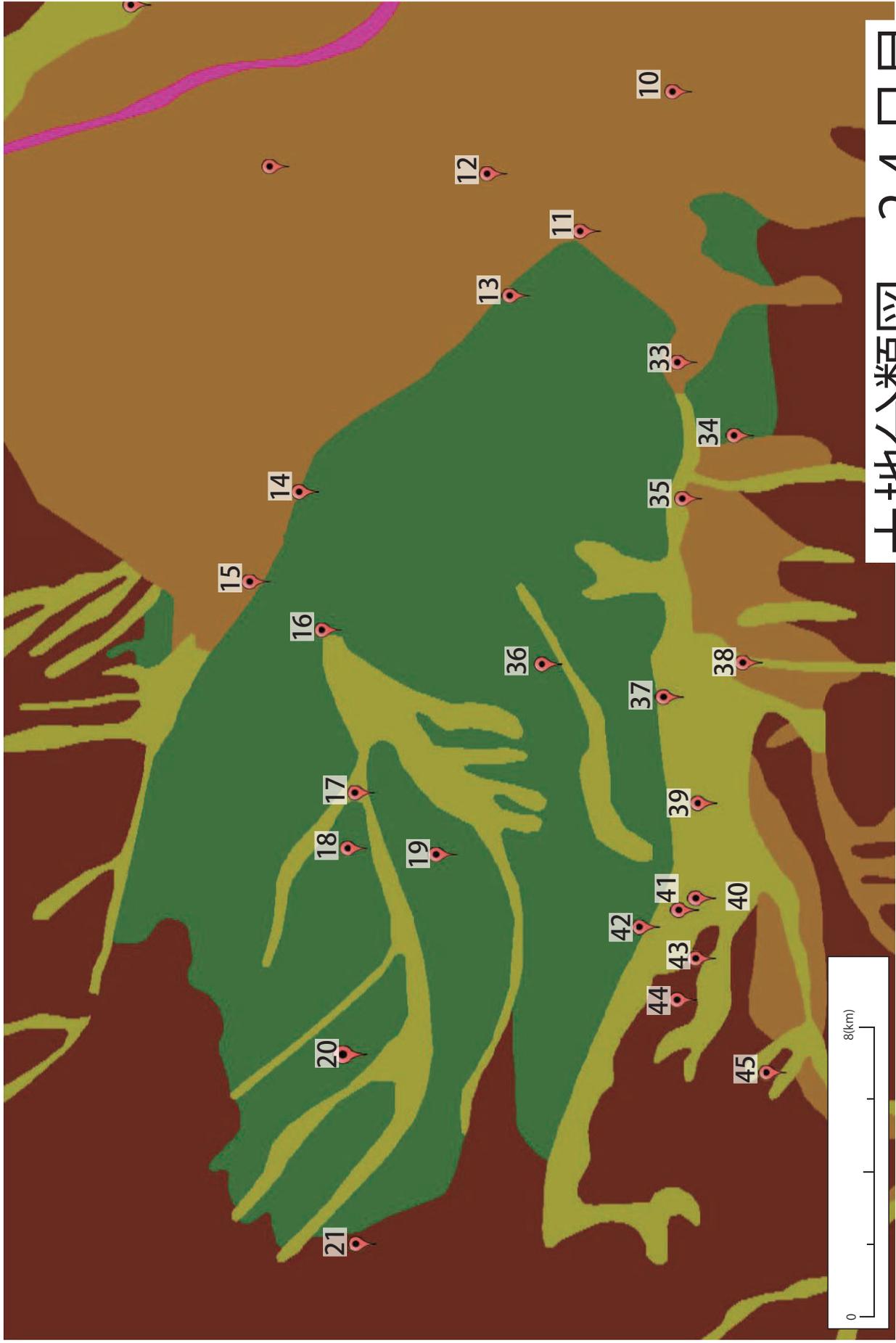
- 高山帯自然植生
- コケモートウィクラス域 自然植生
- ク 代償植生
- ブナクラス域 自然植生
- ク 代償植生
- ヤブツバキクラス域 自然植生
- ク 代償植生
- 河川・通原・沼沢地・砂丘植生
- 植林地
- 耕作地
- 市街地
- 開放水域
- zoom >= 12
- 竹林
- 牧草地・ゴルフ場・芝地
- 水田以外の耕作地



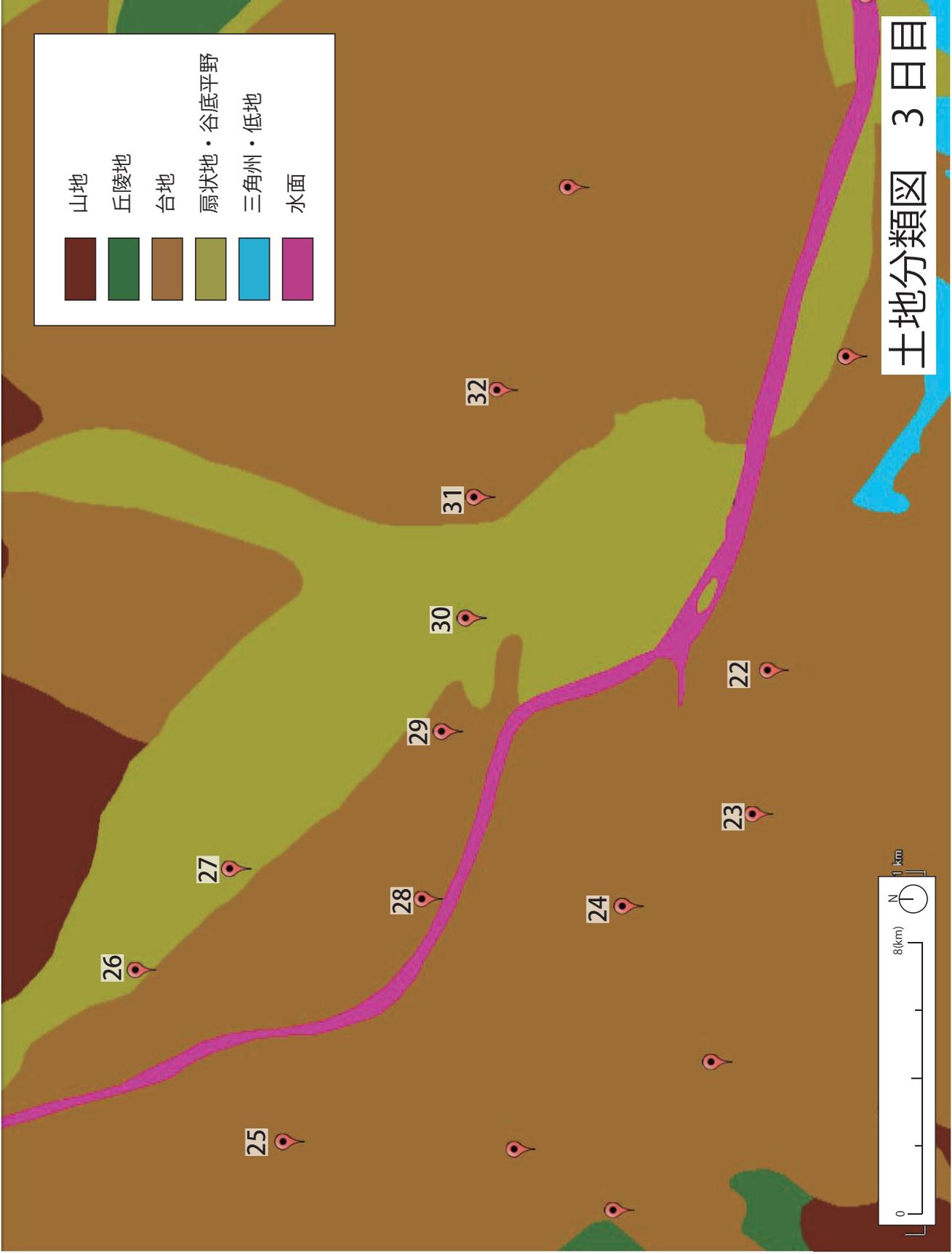
植生図 5 日目



土地分類図 1 日目



土地分類図 2,4 日目

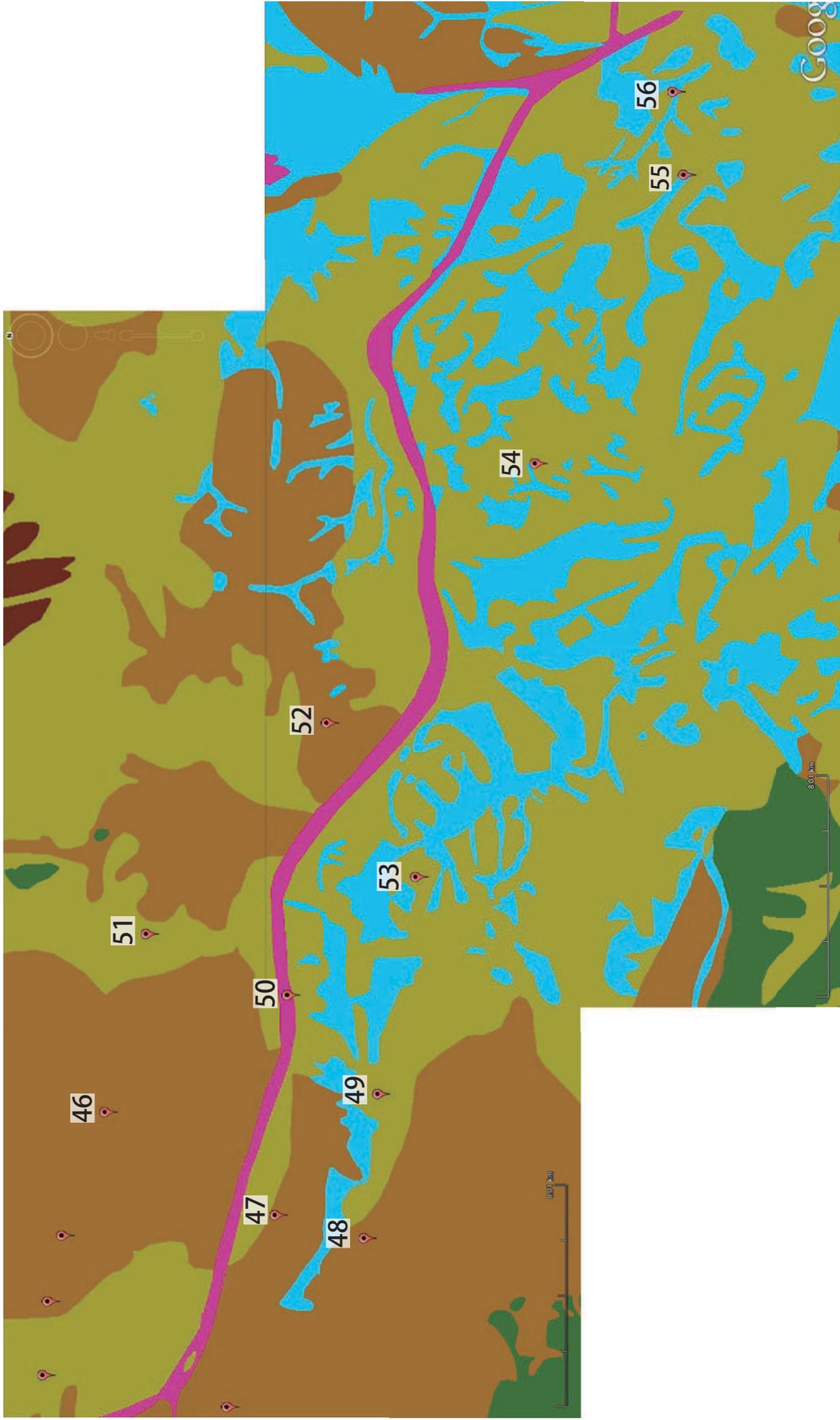


山地	丘陵地	台地	扇状地・谷底平野	三角洲・低地	水面

土地分類図 3 日目

0 8(km) 1 km

N



土地分類図 5日目



[概要]

●田後郷について(『角川日本地名大辞典』より) ●山王町について(『角川日本地名大辞典』より)  
 現在の群馬県前橋市山王町(山王町)が、田後郷の山王町(山王町)に比定されている。山王町の各一部とされており、前橋市山王町に比定。(角川地名大辞典、wikipedia 等を参考に作成)

# 古代郷、現在の市町村についての概要



**現在の航空写真**  
 (Google Map もしくは Google Earth を用いる。  
 集落および田畑を判定できるくらいの精度が必要。)

現在の航空写真

[広域地図]



他の郷との位置関係の  
 分かる広域地図

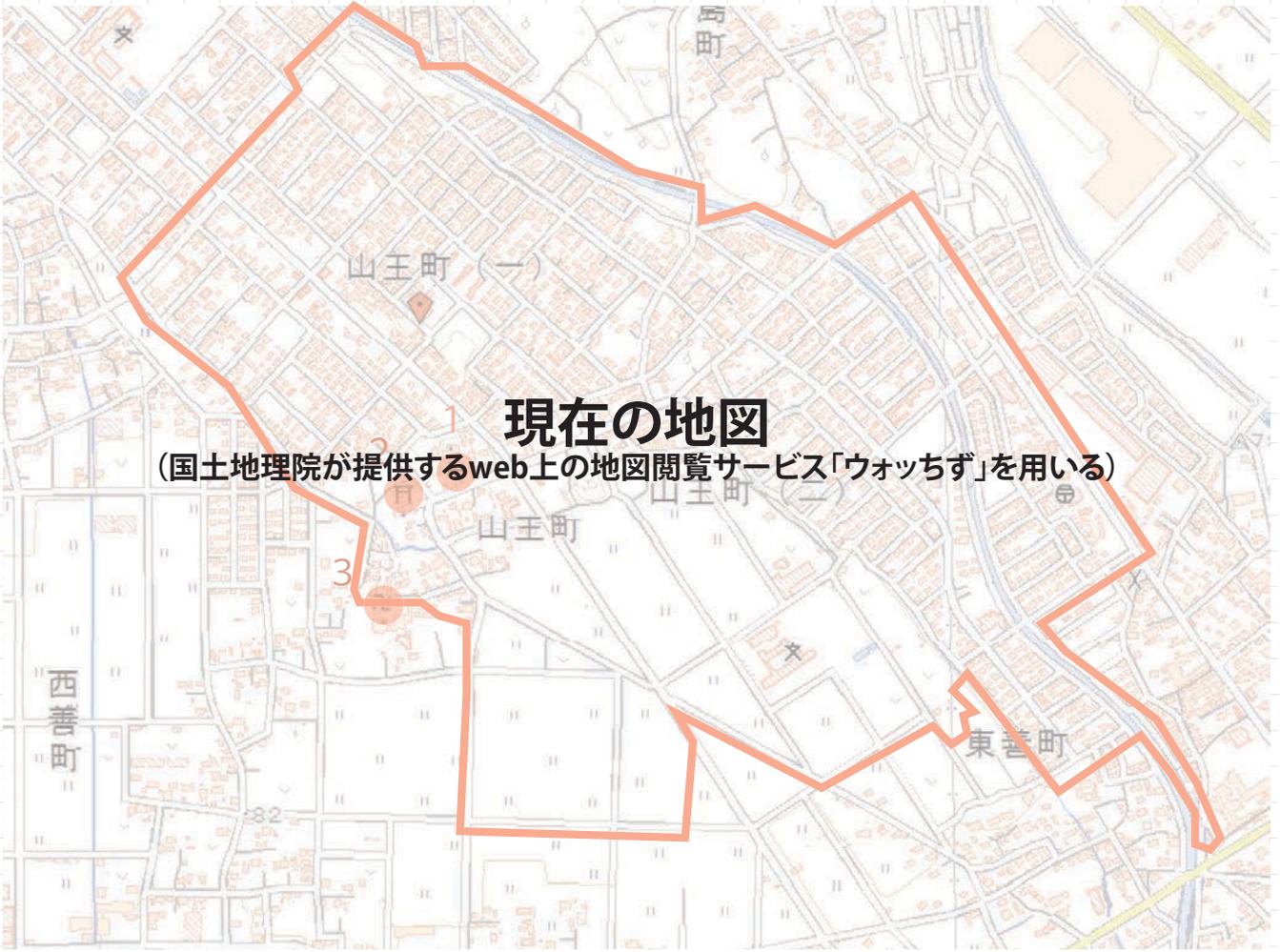
10km

[客観的情報]

- 1: 禅養寺 創建年代不明
- 2: 日枝神社 客観的情報 されている。(神社・寺院、古墳などの歴史的事物の情報)
- 3: 祝昌寺 創建年不明
- 古墳なし

[野帳作成者による見どころ]

**野帳作成者の見どころ、主観的情報**  
 ・川が1975年から1980年の間に整備され、そこから川に沿うように町が発達し



**現在の地図**  
 (国土地理院が提供するweb上の地図閲覧サービス「ウォッチず」を用いる)

現在の地図

- 地形・地質による集落・交通決定の妥当性の有無
- ・地形・地質からみた集落立地・形態の妥当性

- ・地質・地形からみた生産立地の妥当性

## 千年村としての妥当性の検討

- ・地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

- ・集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性



## 過去の航空写真

1995年の航空写真

(国土地理院が web 上で展開する航空写真画像情報所在検索・案内システムを用いて、戦後間もなくと国土開発が盛んに行なわれた1970~80年代の写真を採用する。)



1975年の航空写真



迅速測図



---

2015年2月28日 発行

## 2014年度 利根川流域疾走調査報告書

### 著作・編集

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史  
中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース  
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

早稲田大学創造理工学部 社会環境工学科 建設工学専攻  
景観・デザイン研究 佐々木葉研究室

石川初

元永二郎

高橋大樹

### 発行

〈千年村〉運動体

関東地域調査拠点

早稲田大学理工学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8-9

Tel.03-5286-2496

※本報告書は文部科学省科学研究費基盤研究(B)「国土基盤としての〈千年村〉  
の研究とその存続のための方法開発」(26289224)の研究助成により製作された。

---